銀雷の魔術師

天城　誠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀雷の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ２８４６Ｙ

【作者名】
天城　誠

【あらすじ】
転生し、珍しい＜雷＞属性を手に入れた少年は、今度こそ守りたいものを最期まで守り抜くことを願った。
処女作です。稚拙な文ですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。鈍い主人公、ご都合主義がお嫌いな方はスルーをお願いします。
自称、不定期更新です。

第一話：白き雷魔法（前書き）

序章はダルいですが、どうか気長に見てください！

第一話：白き雷魔法

―1―

ある日、学校の帰り道にそれは起こった。
歩道に、俺のいる場所に突っ込んでくるトラック。
直撃コース。

避けられたハズだ、反射神経には自信があった。
でも、俺の隣に少女がいた。
勝手に体が動いていた。

――目が覚めた。

体がほとんど動かない。
病院かと思ったが、なにか違う。

そう、これは――

俺は死んだらしい。
俺の体は赤ん坊になっていた。

―2―

『――ごめんね』

いつか誰かが、俺に言った言葉。
死んだショックからか、記憶が少し曖昧になっていた。
こっちの世界で聞いたかもしれないし、前の世界かもしれない。

死んだハズの俺は、何故か多少の記憶を持って転生していた。

天城（あまぎ）　誠司（せいじ）が俺の名前だった。

今の俺は、アルネア・フォーラスブルグ・・・
なんと、貴族である。外見も前世とは違う。
金髪で緑の眼である。
家族からはアルって呼ばれる。

仲の良い父と母、１つ上の兄のリック、そして俺と双子の妹のリリー。
リックもリリーも愛称で、本名はリベルクとリリネアである。
ちなみにリリーと俺は似てない。
双子なのに。

むしろ兄と妹のほうが似てると思う。
まあ、多分俺は祖父母にでも似たんだろう。
会ったことないけど。

何はともあれ、今、俺は5歳になった。
せっかく転生したんだから、なにかしないと損である。
まあ、生まれた頃から俺は天才ぶりを発揮していたのだが――
（何を隠そう、この世界の法則は一部除いて前世とほぼ同じ！しかも、なんと言語が日本語という、ステキ仕様だったのだ！）

そう、せっかくだから最強を目指したりとか楽しそう。

―3―

――この世界には秘儀がある――

そう、さっき言った一部の例外――魔法である。

魔法がある世界で最強を目指すなら、是非覚えたい。

「ちちうえー、まほうってなんですか！？」
俺は父さんに可愛くねだってみた。
子どもは大人より力が弱い。
これは仕方の無い事だ。
だが、幼い子どもには、可愛さという最強の武器がある――！

「よし、わかった、この父上に任せなさい！」
速攻で了承する父さん。
うん、楽勝だった。
まあ、いいよね？

「いいかい、アル。魔法を使うには魔力が必要なんだ。」
と、父さんが説明を始める。
まあ、よくあるね。
ちなみに俺の愛称がアルなだけで、べつにエセ中国人お父様では無いので悪しからず。

「ただし、魔力がなくても、魔法が使える魔法剣もあるんだ。
逆に魔力が無いと使えない魔法剣もあるんだけどね」
父さん、魔法剣くわしいな。

魔法剣・・・やばい、すごい欲しいよ。
きっと聖剣とか魔剣とかあるに違いない！

「ちちうえ、まほうけんって、めずらしいものなのですか？」
気になった俺は聞いてみた。

「そうだね・・・今はこの国に大体３００本くらいかなぁ・・・

もっとあるかもしれないけれど」

―4―

――この国というのは、ラルハイト皇国のことである。
ラルハイト皇国は最上位に皇がいて、その下に十二貴族と呼ばれる準王族。
その下に普通の貴族。その下に下級貴族。その下に平民となっている。

魔法剣というのはただの剣にあらず。
前世ではありえない効果を魔法で実現する。

有名どころで、超軽量化、超重量化や、刀身が伸びたり、光ったりするらしい。
さらに魔法剣の上に、精霊剣と呼ばれるものまであるらしい。

なんでも、剣に精霊が宿っていて、意思の疎通まで可能だとか。
この国の皇と十二貴族は、結構精霊剣を持っているのだとか。

言い忘れていたが、この父上、親バカだが、十二貴族の一人である。
まあ、十二貴族の中でも発言力はないほうらしいのだが。

精霊剣は長男のリック兄さんが受け継ぐ。
でも別に悔しくない。だって、リック兄さんはすごい良い人なのだ。

我が家のしきたりとして、5歳になったら外出がある程度自由とい

うものがある。

んで、リック兄さんは出かけるたびに、俺とリリーにお土産を持って帰ってきてくれたり、暇な俺に本を貸してくれたり、暇な俺の話し相手になってくれたり、俺の苦手なトマト――のような物体――を代わりに食べてくれたり、偉ぶらないし、他の人にも優しいしｅｔｃ・・・

そんなわけで他に精霊剣入手法について父さんに聞いてみたが、

「精霊剣には強力な精霊が必要だからそんなに本数はないんだよなぁ・・・

お、そうだ。魔法剣の基本能力として、魔力をチャージしておいて、いざという時に使える

っていうのがあるんだ。そして、魔力を一定量以上溜めた魔法剣に、

精霊が宿って精霊剣になることがあるらしい。見たことないけどね」

別にいいけど、５歳に話すには難しい話な気がする・・・

でもとりあえず、魔力がいかに大事かわかった。

「ちちうえ、ありがとうございました！」

俺はとりあえず父さんにお礼を言う。

魔法剣はある程度の良い剣に魔力を込めればできるらしい。

よって一番の課題は、俺の魔力量である。

んで、この国の貴族は一様に高い魔力を保有し、さらに十二貴族は

トップクラスである。
って本で読んだ俺の行動は既に決まっている――！

「ちちうえ、まほうをおしえてください！」
そして、俺は魔法を教えてくれるように、父さんに頼んだ。
そう、俺も十二貴族の次男なのだから、魔力もすごいに違いないのだ！

「う～ん、アルにはちょっと早い気がするんだけど・・・
まあ、母さんに相談してみるよ」
難しい顔の父さん。

「ちちうえ、まほうがつかいたいです・・・」
俺はさらに畳み掛けるが――。

父さんはとても困っている。ものすごく珍しい。（いつもすぐＯＫする）というか初めて見た。
もしかすると、早期に魔力を使うと悪影響――とかの話があるのかと思ったので一旦撤退。

―5―

俺は書斎に侵入して初心者向けの魔法に関する本を探す――

――『上級魔法大全』、違う、さすがに無理だろ。
――『火魔法応用！おいしいパンの焼き方』、魔法のイメージが庶民的に・・・。
――『モテる！魅力魔法』、・・・これ、まさか父さんは使ってないだろうな・・・
――『ダイエットの魔術！一日３０分で劇的変身！』、魔法なのか！？なんか違うだろ！

――『魔法を使う生物とその歴史』

なんか気になって手に取った。

『魔法を扱う生物、その代表格は人間、エルフ、ドワーフ、竜人、獣人等の人型種族、
そして言わずと知れた精霊、そしてドラゴンである。』

そう、この世界にはエルフやドワーフ、果てはドラゴンまでいたのだ。

さて、今回は前世の記憶が災いしたらしい。
いままで読んだ本、歴史について書いてあった本とかに、ドラゴンやエルフがたびたび
登場していたのだが、子ども向けなんだろうと思って気にしなかった。
その割りに内容が難しいなーと思っていたのだが、どうやら子ども向けじゃなく、立派な歴史書だったらしい。
つい先入観がね～・・・

『ここで大切なのが、人間は大陸の大部分に国を作り、領土を広げているが、
人間は魔術的には強い種族ではない。身体能力も同様である。
ただ数が多く、また、ほかの種族が領土を広げることに拘らない為である。
これはアイリア暦３００年のラーベルグ防衛戦以外、他種族との大規模戦闘がないことから言える』

ラーベルグ防衛戦・・・
これは御伽噺の本――だと思っていた歴史書で読んだ。

ラーベルグはこの大陸――アイリア大陸の北東に位置する国である。
ちなみに俺のいるラルハイト皇国は大陸北にあり、ラーベルグから西にある――
のだが、その間にはティルグリム山脈という超がつく難所があり、死の森とかもあるので、
ダイレクトにくるのは不可能と言っていい。

そのラーベルグに突如、＜グリディア＞という黒いドラゴンが襲来し、ものすごい被害が出たらしい。
なぜ突然襲撃されたかは謎だが、
英雄ラーベルグと、その仲間たちが＜ティルヴィンケ＞を筆頭とした精霊剣１０本で撃退したらしい。
なんでも、ドラゴンの炎で草原は一瞬で灰になり、城壁は蒸発したとか、
＜ティルヴィンケ＞が氷の壁を出して、その極悪な炎を防いだとか、
なかなかに信じがたい。
まあ、黒竜にはほとんどダメージを与えられず、黒竜が飽きたために撃退できたんだとか。

しかも、ラーベルグは死んでしまったらしいが、それでもドラゴンの撃退はすさまじい事らしい。

そのあと、本来の目的を思い出した俺は、『初めての魔法』なる本を発見した。

―6―

「う～ん、ない。まったく問題ない・・・」
俺は悩んでいた。

『初めての魔法』を読んだのだが、小さい子どもが魔法を習っても全く問題なさそう。
というか5歳くらいから教えることもけっこうあるとか。
なんで困ってるかというと、問題無いなら、あの親馬鹿父上が教えてくれないのは、
なぜかってことである。
でもまあ、手はあるんだが。

「にいさーん！」
俺はリック兄さんの部屋へ行った。

「ん？なんだ、アル。どうかしたのか？」
本を読んでいた手を止めて、こちらを見る兄さん。

「にいさん、まほうっておそわった？」
俺は、一応確認を取る。答えは知ってるが。

「ああ、すこしだけな」
兄さんの答えは予想通り！

「にいさん、ぼくにもまほうをおしえて！」
兄さん！俺の純真な目を喰らえ！（俺主観）

「なんだよ、しょうがないなぁ・・・父さんが教えてくれなかったのか？
　ま、それなら仕方ない、父さんには内緒だぜ？」
やっぱり兄さんは頼りになるぜ！

そんな訳で、俺と兄さんは庭に来ていた。
二人で周囲を確認。
庭は広く、剣術等の練習用の、木に囲まれた広場があるのでそこを使う。

「よし、オッケー。それじゃあ、魔法の使い方・初心者コースな」
兄さんの授業開始！

「よろしくおねがいします！」
挨拶は大事なので、俺は元気よく挨拶。

「まず、手のひらを前に出す。そして、手に魔力を集中する。
そして、どんなことを起こしたいのか明確にイメージして力を解放する。それだけ」

「にいさん・・・」

すごい曖昧だった！
というか呪文は!?いらないのか？

「あ、そうそう、よりイメージしやすくする為に呪文がある。
単に補助するだけだから、本当は要らないハズなんだけど、みんな使うな。あ、俺も使うぜ？」

俺が読んだ本だと、普通は呪文がないと無理って書いてあったよ、兄さん。

「へー、そうなんだ・・・」
一応、驚いておく。

「そうなのさ、んで、我が家流のファイヤーボールの呪文が・・・
『炎の弾丸よ！＜ファイヤーボール！＞』って感じだ」

兄さんの手から真紅の弾丸が４つ出てきて的用に置いてあった岩に激突。
岩が焦げた。なかなかの迫力。強火並みである。

「さすが兄さん！」
とりあえず兄さんは褒めるに限る。

「ふふー。おっと、そうだ。人によって得意な魔法属性があるらしい。
ちなみに俺は＜炎＞な」
もちろん、こんなの見たらやるっきゃない。
「よーし・・・『炎の弾丸よ！＜ファイヤーボール！＞』」
俺は、何か不思議な、水のような何がが手に集まるのを感じた。
そして、一瞬それが熱くなったような気がして、俺の手から火の弾丸が飛び出した。
それは、２つしかなく、兄さんのより速度も遅く、小さかったけど確かに火だった。
でも、不思議なことに、その火は白い色をしていた――。
なんというか、白い炎ってすごい変な感じだね・・・
あと、兄さんより明らかに火が弱いのがなんか悔しい。
「やるじゃないか、アル」
兄さんはそう言うが・・・
「むぅ・・・兄さんのほうが、火が強いし数が多いし、速いし大きいじゃんか」
当然不満な俺である。
「いや、アルは得意属性が違うかもしれないぞ？

それに白い炎ってカッコイイじゃん？」

うん、たしかにこの珍しそうな色は若干嬉しい。
でも、ポケ○ンとかだと、色違いでも能力に差はないのだ・・・
で、得意属性は読んで字の如く。得意属性なら強力になるらしい。
と、そこに思わぬ来客。

「はぁ、やはりアルがリックに魔法を習っていたか」

お父様登場である。

「あ、父さん。まずかった？」
しまったな～という感じの兄さん

「とうさんー、まほうつかえたよー！」

純真無垢に（俺としては）ごまかす俺。
あと、父上ってなんか堅苦しいから、兄さんに倣って父さんにしてみる。

「おおっ、流石アルだ、そしてリックも、もう教えられるようになったのか、すごいな！」

なんか父さんが若干ホッとしている気がする。
どうやら心配されていたようだ。

「まあ、アルはほとんど教える手間がかかりませんからね。」

6歳なのに謙遜を忘れない兄さんは大人だと俺は思った。

―7―

そんなわけで、俺の得意属性探しが始まった。

「水の弾丸！＜ウォーターボール！＞」

「切り裂く疾風の刃！＜ウインドカッター！＞」

「大地の弾丸よ！＜ロックブラスト！＞」

どれも代わり映えしない気がする・・・
兄さんみたいな迫力が無いのだ。
得意属性が無いのかなぁ、と思ったのだが、父さん曰く
「魔力がある以上、それは無い」
とのことで、3人で唸っていたのだが――

「どうしたの、3人揃って」
母さん登場。

「おお、クリス。実はアルの得意属性を探しているんだが、四大属性ではなさそうなんだ」

クリスって母さんの名前ね。ああ、そうそう。
俺の家族はみんな金髪で緑の眼をしている。
あ、父さんの名前はアルベルクね。

「そうですか、では、他のも試してみましょうか」

母さん曰く、四大属性以外の使い手はほとんどいないが、一応あるとのこと。
でも、問題がある。

「クリス、呪文はどうする？」
難しそうな顔の父さん。

曰く、四大属性は相性に関わらず一応使える（威力等はおちる）が、それ以外は相性が悪いと発動すらしないそうで、呪文が広まらないとのこと。
四大以外の属性の有名どころは、＜光＞、＜闇＞、＜氷＞、＜雷＞、＜治癒＞とのこと。
十二貴族でも稀にしか四大以外――特殊属性持ちは現れないらしい。
あと、今5歳の皇女様が＜光＞属性なんだとか。

とりあえず、呪文を考えてみることに。
（確か、明確なイメージを持てればいい。だったかな）

「アル、どうする？父さんも考えるのを手伝おうか？」

確かに手伝ってもらったほうが効率はいい。
でも、その前に――。

「とうさん、いっかいだけ、ひとりでやってみていい？」

「ふっ、アルも男の子だなぁ・・・頑張れ～応援してるぞ」

なんだか面白そうな父さん。

「アル、兄ちゃんも応援してるからな！」

相変わらずの兄さん。

「うふふっ。アル、頑張ってね」

楽しそうな母さん。

――よし、やるぞー！

一番の問題はどの属性を試すのか。

でも、なんとなく決まってる気がした。

「――空を切り裂く天の雷よ――我が手に集え！＜サンダーボルト！＞」

目の前が一瞬、真っ白になった。

すさまじい轟音が響き渡り、的だった岩は跡形もなかった。

―8―

＜サンダーボルト＞には致命的な欠陥があった。
というか、＜雷＞属性が俺にとって問題だった。
修正しようにも練習すら問題だった。
別に威力うんぬんではない。消費魔力が多すぎるのも・・・
まあ、いい。＜ファイアボール＞が軽く見積もって１０発は撃てる
と思う。
音が大きいのは原因の一つだが。

――一番の問題は・・・

「おにいちゃん、こわい・・・ぴかってひかって、すごいおおきな
おとがしたの・・・かみなり？」
妹のリリーが怖がるのだ

・・・色々意見はあると思うけど、妹は（まだ）純真無垢に育って

るんだ！
もし妹が＜サンダーボルト＞のせいで荒んだらすごい嫌だ。
というか、最悪、リリーに嫌われるかもしれん・・・

そう、＜サンダーボルト＞は手から雷を出す技であり、子どもは雷を怖がることも多い。
で、この世界に防音なんて技術はない。
そして、雷の音は相当遠くまで聞こえるのである・・・

これは困った。

が、問題はあっさり解決した。
というのも、母さんが、
「ちゃんと音を小さくってイメージすれば大丈夫なのよ？」
っておしえてくれたのだ。
実は、母さんは昔、城の騎士団の魔術隊に所属していて、『水幻の歌姫』とか呼ばれていたらしい。
父さんに出会ったのも騎士団だったとか。ちなみに父さんは『紅蓮の悪魔』だったとか。
父さんはカッコイイから、悪魔には見えないって言ったら、父さんが母さんに笑われていた。
一体何をしてたんだ、父さん・・・

兎に角、さっそく実践。
呪文なら色々思いつくし！
――あ、厨二病じゃないんだからな！そういう世界なんだ！

げふん、げふん。えーと、音は小さく。電気・・・＜ファイアボール＞みたいなのでいいか。

なら＜サンターボール＞だな。

――魔力を右手に集める。右手が薄く白い輝きを持ち――

「雷の弾丸よ！＜サンダーボール！＞」

――バシュッ

――バチバチ

（おおっ、音小さい！なんかバチバチしてるけどこれなら大丈夫だ！）

「おにいちゃん、なにしてるの？」

リリーに見つかった。

――俺は、とっさの言い訳は思いつかなかった。

「え、えっと、まじゅつのれんしゅう？」

どうすんのよ、俺！？

第一話：白き雷魔法（後書き）

――次回予告――

「そんなっ、おにいちゃんのどこにそんなちからが！？」

「負けないぞリリー！あと5分・・・あと5分だけでもッ！」

次回、銀雷の魔術師第二話：戦いの刻

第二話：戦いの刻

1

さて、落ち着こう。
俺の魔法属性は珍しい＜雷＞だった。わーい。
しかし、俺の＜サンダーボルト＞の光と音に驚いた妹・リリーが怯えてしまう。
俺はリリーに気づかれず、また、魔術の練習とバリエーション強化のためにこっそり特訓することにした。

しかし、＜サンダーボール＞を撃つところをリリーに見られてしまったのである。

「おにいちゃん、なにしてるの？」
リリーは言う。

選択肢　1、ごまかす
　　2、あやまる
　　3、にげる

ここはもちろん――

「えーと、まじゅつのとっくん・・・ごめんね、リリー。
さっきのかみなりは、おにいちゃんのまじゅつだったんだ・・・」

謝るしかないじゃないかっ！

「そう・・・だったんだ・・・」

・・・やばい？

「もぅ、おにいちゃんがかみなりで、おケガでもしたらたいへんだとおもって
しんぱいしたんだよ・・・」
妹は心が広かった！

とりあえず、謝ったらリリーは許してくれた。なんてできた妹なんだ。

ただ、「おにいちゃんだけずるいっ」

とのことでリリーも父さんから魔術を教わる。
なんと得意属性は＜治癒＞で珍しい・・・とはいっても母さんも＜治癒＞属性らしい。
同じ属性だと、なんとなく感じるとのことで、すぐ判明。
あと、得意属性は2つ以上ある場合もあるらしく、母さんとリリーは＜水＞も得意だった。

「リリーだけずるいっ」

俺も言ってみたものの、＜治癒＞は特殊属性のなかでも抜群に多いらしい。
（それでも四大属性と比べれば圧倒的に少ないのだが）

その後、リリーがいないときに、雷のほうが珍しいといわれた。
十二貴族でも雷持ちはいたようないなかったような?という感じらしい。
少なくとも、今はいないとのこと。

さて、問題はリック兄さんである。
リック兄さん不遇じゃん!
そう思ったのだが、父さん曰く

「あー、じつはリックは＜火＞じゃなくて＜炎＞だからな」

いまいち違いが分からなかったが、要は強力らしい。
さすが兄さんだ！

あと、属性は魔法を使い込むことで上級属性になったり、特異属性に変化するらしい。
で、＜火＞の上位が＜炎＞と。生まれつきは珍しいらしい。
って言いつつ、父さんも＜炎＞属性で、兄さんもリリーも思いっきり遺伝である。

俺の＜雷＞はこの家ではでたことが無いようだが・・・
転生の影響だろうか？

―2―

さて、俺は朝起きるのは得意じゃない。
今は二の月3日目、つまり2月3日。まだ寒い。布団が恋しい。

季節とか、月とか、曜日まで前世と同じ。俺の誕生日は一の月の6日目。
昨日、二の月2日目の朝は・・・

「ふはははは――我が鉄壁の布団ディフェンスを打ち破れるものなどいないっ！」
俺は、戦っていた。

「むむぅ、おにいちゃんの＜おふとんでぃふぇんす＞がやぶれないわ！」
相手はリリー。

「おおっ、アル、リリー楽しそうだなっ、俺も参加だー！」
兄さんも参加。

「むぅっ、だがたとえリック兄さんでも我が布団ディフェンスは破れまい！」
俺の布団ディフェンスは伊達じゃない！

「はっは～、このリック兄さんをなめるな！ヘイ、リリー！」
が、策のあるらしい兄さん。

「あ、わーい！」
リリーが喜ぶ声がする。なんだろう、俺の直感が危険を訴えている・・・！？

「くぅっ、布団ディフェンス中は外が見えないのが欠点か！」
俺は、布団しか見えなかった。

「「ひっさーつ！リリーばくだん！」」

本気で危険を感じ、布団の外を覗くと・・・

空中に舞うリリー・・・というか兄さんに投げられてこっちに飛んでくるリリーの姿が――

「――ぐはっ！」

兄さんによってリリーは的確に俺の腹の上に着地。

俺は悶絶するしかなかった・・・

さらにリリーが申し訳なさそうに見てきたら怒れるハズも無い・・・

「や、やるな・・・リリー、そして、兄さん・・・がくっ」

という微笑ましい？感じだったのだが、

今日、二の月3日目は・・・

「おにーちゃん、あさですよー！」

今日もリリーはやってきた。

「ふっ、リリー。真っ暗じゃないか。まだ夜だろう？」

そう、俺の周りは真っ暗だな。

「むぅ、おにいちゃんが＜おふとんでぃふぇんす＞してるからでしょ！」

うん、お兄ちゃんは布団から出たくないのさっ、リリー！

「ふはははは――この鉄壁の布団ディフェンス、破れるものなら破ってみよ！」
俺の布団を奪えるものかーーー！

「わかりましたっ、おにいちゃんでもようしゃしませんっ！」
リリーは受けてたった！

戦いの火蓋が切って落とされた――！

――布団ディフェンス――
布団に潜り込み四隅を内側に引き込み、それを体重で押さえ込むことで鉄壁の防御を実現。
弱点は、防御力は1布団ポイントしか上昇せず、外が見えないため、反撃できない。
よって、チャージ技や、高威力の攻撃に弱い。
だが、リリーは攻撃力が低いので破るのは難しい。

「えいっーーーー！」

リリーが布団を引っ張る！だが男の・・・兄の意地で負けられない！
兄のプライドを守るため、俺は全力で布団に引きこもる――ッ！

「うおおおお――――ッ俺の布団は守り抜いてみせるーーー！」

「そんなっ、おにいちゃんのどこにそんなちからが！？」
リリーの愕然とした声が聞こえる。

「負けないぞリリー！あと5分・・・あと5分だけでもッ！」
俺は惰眠を貪るんだーーーー！

「ううっ、さすがおにいちゃん・・・！
でもっ、リックお兄ちゃん、じきでんのあのわざなら・・・！」
リリーは何かする模様。

俺は直感した、あの・・・恐怖の必殺技の再来を・・・

「えいーっ！リリーばくだんっ！」

ベッドに乗り込んだリリーが足に力を溜め、空へ舞い上がる――！
このままではやられる――ッ！

「うおおおッ！なめるなぁぁぁ！」

俺は魂の咆哮をあげる！
布団の四隅をつかみ、布団を死守する布団ディフェンスでは、布団の守備を貫通し、
俺にダメージを与える＜リリー爆弾＞を防げない――！

コンマ一秒で判断した俺は賭けに出る――！

四隅が完全に内側に潜り込み、奇岩のようだった布団が一瞬で姿を変える！

「うおおおっ――！＜布団バリヤー！＞」

布団を横に引っ張り、張り詰めさせることで布団の限界を超えた防御を可能にする――！

だが、この代償は大きい

「ぐあああぁぁぁッ――！寒い！冷気がぁぁぁ！」

俺は、冬の冷たい空気で大ダメージ！

そう、寒いから布団を被っていたのに、その守りがなくなるのだ――！

「むうっ、そんな＜おふとんばりやー＞でとめられるとおもうのっ！？」

リリーが滞空しつつ話す。
よく考えたらすごい飛んでないか？

「ふんっ、この守りを破ってから言ってみせろ！」
俺は布団に全てを懸ける！

リリーが布団と激突する――！

ドガァァァン！（想像上の音です）

「そ、そんな・・・」
リリーの声が布団の向こうから聞こえた。

リリー爆弾によって布団バリヤーは、もはや原型をとどめていなかった・・・
クレーターのように中央が凹んでいる。だが・・・

ほぼ全て――推定９０％の威力の減衰に成功。
俺へのダメージはほとんどなかった。

「ふはははは・・・はっくしょん！――くっ、寒いぜ・・・だが・・・！」
俺は布団を被って再び布団ディフェンスを展開する――！

「この布団ある限り、俺は負けない！負けられないんだぁぁぁ――ッ！」
俺は、布団のために戦う！

「わたしだって・・・ぜったい、おにいちゃんをおこすんだもん！」
リリーの何かを決意したような声がする。

――奇妙な感じがする

以前の＜リリー爆弾＞の時とは、また違う。

――これは・・・魔力！？

「おおいなるみずよ、おにいちゃんをおこして！＜うぉーたーぼーる！＞」

リリーは魔法を使った！

――まずい！極限まで集中――！
思考を加速させる――！
どうすれば――！？

1、魔法で迎撃
2、布団バリヤー
3、にげる

――駄目だ！攻撃魔法しか持ってない！
＜サンダーボルト＞なんて撃ったらリリーが死んでしまう！

――布団バリヤーで＜ウォーターボール＞は防げない！
防いだら布団がびしょ濡れ―ッ！悪夢だ！
事実を言ってもリリーが俺を庇ったようにしか聞こえないだろう―！

――ならこれしかない。

「うおおおおおっ――！」

俺は必死の雄たけびをあげ、
布団ディフェンスを解除！ここまでコンマ三秒――！（俺主観）
そのまま跳ね上がるようにベッドの外へ――！

「きゃっ」
布団の向こうからリリーの声。

「――ッ！しまった！」
俺は迂闊だった。

焦っていたようだ。
最後に布団ディフェンスを使った時、リリーがいた場所は？
リリー爆弾を使った後、そのまま俺の上に乗っかっていたのだ。
重さで気づけよって俺も思ったが、リリーは軽い。俺は焦ってた。

エラー！布団ディフェンス、解除できません！

リリーが期せずして布団をホールドしているため逃げられない――

――バシャァァン

痛みは、無かった。ちゃんと弱めに撃ってたらしい。さすが我が妹。
だが、どうしていいのか分からなかった。
寝巻きと布団がびしょ濡れなのだ。
転生したといっても、周囲からすれば俺は5歳児・・・
そんな子どもの布団が朝びしょ濡れだと・・・

――うおおおおっ
どうしていいのか、分からなかった・・・

結論からいうと、俺は助かった。
あんまり遅いので、兄さんも起こしにきたのだ。
で、扉をあけると、俺が＜ウォーターボール（威力控えめ）＞を喰らったとこだった。
んで、

「炎よ、布団を乾かせ――！＜ファイヤ！＞」

兄さんが火の呪文を使う。

――ボオオオォッ

「さすが兄さん！これで大丈夫だー！」

兄さんはドライヤーから溶鉱炉まで完璧のようだ。
んで、リリーは・・・

「おにいちゃん、ごめんなさい・・・」
申し訳なさそうなリリー。

「おう、大丈夫さ！兄ちゃんも全然起きなくてごめんな」

「うん！」

リリーと仲直り完了。
よし、ご飯～♪ご飯～♪

おっと、寝巻きのままだった。

ご飯を食べたあと、父さんに体術の稽古をしてもらった。
そして――

父さんの突然の宣言。
「よし、リック、アル、リリー。みんなで村に出かけるぞ」

第二話：戦いの刻（後書き）

こんな作品を読んで下さって、ありがとうございます
描写追加しました。

第三話：銀雷の魔術師

1

フォーラフブルグ家。
この世界での俺の家である。
あんな父さんだけど（気さく、優しい、親馬鹿、新婚みたいｅｔｃ・・・）
一応、十二貴族とかいう、皇国でも皇を除けば最高に偉い貴族らしい。
でもまあ、貴族には見えないけど、間違いなく良い人ではあるな。

で、そんなフォーラスブルグ領の東端に、オル村はある。
ウチの領土は皇国の東端。その東端なので、皇国最東端の村である。
なので、村から少し東に行けばティルグリム山脈がある。
えーと、あのラーベルグ防衛戦の竜が住んでたっていう山脈である。
・・・まだ生きてたりするのかな？

話が逸れた・・・ウチの屋敷は領土の東寄りに建ってるので、村まで馬車で３０分くらいで着いた。
推定午前１０時。３時くらいになったら帰るらしい。
えーと、今回の目的は領土の視察らしい。
父さん曰く、「村の子と遊んでおいで」とのこと。

さて、村に着いた。
思ったより立派な村である。

家が1，2，3，4，5，6，7，8，9・・・
いっぱいあった。
仕方なかったんだ・・・多いんだもの！
とりあえず父さんが村長さんの屋敷で話てる間に村に子どもと遊ぶことに。

「よーし、それじゃあ、かけっこで勝負だ！」
と、村の子ども達のリーダー格であるジョンは突然言った。

「よし、受けてたつぜ！負けないよ、兄さん！」
俺は受けてたつ！

「えっ、俺もか！？」
驚く兄さんだが、兄さんはノリがいい。

「ふはははははっ！いいだろう。アル、この兄にかけっこで勝とうなど・・・１０年早い！」
やはりのってきたか。

「ルールは簡単。ケガをさせたら反則負け。他は何でもＯＫ。
あそこの目印付の木に先についた人がトップだ！」
と、ジョン。

「ジョン、兄さん、負けないよ！」
俺は準備万端。

「ほぉ、なんでもいいのか・・・」
なんかつぶやく兄さん。

「おにいちゃん、がんばれ～！」
リリーは応援している。参加しない。

そして村の少年Ａの合図で死闘は始まる。コースは直線１５０Ｍ（俺主観）

「いちについて、よーい・・・・・・ドン！」

――始まる瞬間、俺は失策を悟った。
魔力を感知したのだ。

「大地よ、壁となれ！＜ストーンウォール！＞」

「紅蓮の炎よ！貫け＜ブレイズアロー！＞」

ジョンの＜土＞魔術に、兄さんの＜炎＞魔術。

――ズガアアァン！

――地面から突然壁が現れ行く手をふさぐ！

――バシュウゥゥン！

――紅蓮の矢が兄さんの前の壁を一瞬で溶かす！
いまから詠唱してたら出遅れる！
俺は一瞬、逡巡し――。

――なら！
俺は全力で壁にダッシュ！
膝を曲げ、全力で――跳ぶ！
「うおりゃぁぁ――ッ！」
そしてそのまま、ゴツゴツした壁に手をかけて一気に登ろうと――
――あれ？

今まで、転生してから全力でジャンプしたことがなかった。
稽古も、まだ本当に全力でやったことはない。
というか、いままで一番全力だったのが、朝の布団防衛戦・・・
そんなわけで、いま気づいた。

（体が、軽い――！）

俺の体は２Ｍもの（俺主観）壁を軽々飛び越えて、前の二人に追いついた！

「うわっ！？魔法か！？」
驚くジョン。無理もない。俺もビックリだ。

「おっ、さすがアルだな！」
・・・兄さんが驚く姿が思いつかないな。

「おにいちゃんすごーい！」
ありがとう、リリー！

「まだ、勝負はこれからだ！今度は俺もいくぜ！」
俺は今度こそ魔術を使うべく、魔力を集めようとし、
そして、気づいた。前方の地面に魔力が集まっている。

――これは！

感じた。地面が陥没する。雷では対処不可。なら――！

「崩れる大地は侵入を拒む！＜グランドクラック！＞」

「紅蓮の業火は大地をも溶かし固める！＜ブレイズフレア！＞」

「風が我が身を支え、風が我を運ぶ！我は空翔る一陣の風！＜ウィング！＞」

――大地が崩れる。

炎が大地を溶かし、崩れるのを阻止しようと――

「ぅあちっちちち！？」

地面がドロドロ・・・というか溶岩になっていた。

たしかに溶けてるし、固まろうとしてるけど、渡れる温度では絶対ない。

兄さんが渡ろうとして悲鳴をあげている。

そして看破していた俺は＜ウィング＞で空に舞い上がり――

突風が吹いた。

「うあああああっーーーー！？」

俺は焦るが、どうにもならない。

『風が我が身を運ぶ』の下りは要らない模様。突風に運ばれた。

――ドカーン

「ぐはっ」
俺は左に生えてた木に激突した。
ゴールの木ではない。

結局、コースが走行不能だったので、引き分けになった。

「さすがですね、リーベルク様、アルネア様」
と、ジョン

「いや、ジョンもかなりの腕だな！あと、俺はリックと呼んでくれ！」
元気な兄さん。

「いやー、ジョンの術にはビックリしたよ！俺はアルで！」
ま、＜土＞使いはウチにはいないからなぁ。

「リックさんも、アルさんも全然余裕ありそうですけど・・・」
なんか微妙な表情のジョン。

「おにいちゃん、そらとんでたよねっ！」
リリーは楽しそうだ。

とりあえず即席呪文はよろしくない事は分かった。

空を飛ぶのは難しそうだなぁ・・・

あ、ジョンは村長さんの息子で、俺と同じ5歳（嘘だろ！？）である。

え、俺は転生者だし？まさかジョンもなのか・・・？いやでも・・・

「う～～ん」

「おにいちゃん、わたしもとびたい～」

リリーにねだられてしまった！

リリーが万一ケガでもしたら大変だ！

絶対に安全な呪文を考えねば！

「むぅ、じゃあリリー、完成したら教えるよ」

とりあえず、そう言うしかない俺であった。

「わーい！」

まあ、リリーが嬉しそうだからいいか。

さて、そんなこんなで村長の家でご飯・・・（和食。おいしい）をいただいていると・・・

「たいへんだ！村長！」

村人が駆け込んできた。

曰く、村の東、ティルグリム側から魔狼の群れが接近しているとのこと。

数、とても多い。
でもまあ、向こうにとって不運なことに、こちらには父さん（紅蓮の悪魔）がいる。
ん？なんかへんな気配がする。

村の東出口へ急行すると、魔狼と村人が戦っていた。
そして戦っていた村人の中の肉体派です！な感じの人が、こっちに気づいた。

「村長！それに領主様！よくぞ来てくださいました！」
と、肉体派の人は魔狼を丸太で吹き飛ばしつつ言った。

「カイト！大丈夫か！？今助けるぞ！」
そう言うと村長が魔力を集める！肉体派村人はカイトというらしい。

「よし、あとは私たちが引き受ける！村長の術に乗じて下がってくれ！まとめて焼く！」
どうやら父さんは魔法で焼く模様。

『大地の鉄壁、我が仲間を守護し、我らが敵を退けよ！＜グランドウォール！＞』
村長の魔法が発動。

「グルルル・・・」
「ウガァ・・・！」

魔狼たちが村人たちから離され、村人は全員退避する――

その時――

二回りも巨大な魔狼が現れた。

魔狼とは、魔法を使う狼という意味をもつ。
実際は、大きな力を持つ個体しか使えないのだが、この固体は相当強力そうだった。

俺は息を吐き、意識を集中――

――魔力を感じる。

とりあえずジョン、リリー、兄さん、村長、父さん、大魔狼（仮）の魔力を大まかに数値にする。戦力把握は戦いの基本さ！

ジョンを１０とするとリリーは１８。村長は２０。兄さん４０。父さん６０。大魔狼２５０？。
自分はよくわかんないのでパス。これは・・・

・・・魔力だけじゃ勝負は決まらないけど、大魔狼（仮）やばいね。

「そんな・・・こいつは一体！？」

と、村長

「ほう・・・」

珍しく真面目なので、誰かと思うが父さんだ。

「兄さん、アレ、強いね」
俺は兄さんの意見を聞いてみたくなった。

「ん、そうだな。だが、俺もアルも父さんもいるんだぜ」
兄さんがニヤリと笑う
いつもどおりだなぁ・・・
強いのは分かってるみたいだし、俺を不安にさせないようにしてくれてるのだろう。

「リック、全力で焼くぞ。アル、隙を見てアレを。リリー、おにいちゃんの応援な」

父さんもニヤリと笑う。

「おにいちゃん、おとうさん、がんばって～！」

リリーはこんな時でも可愛かった。怖くないのだろうか?ま、父さ

んいるしね。

父さんが腰に差した剣を抜き、炎のような魔力が戦場に吹き荒れる
――！

「いくぞ、＜ハマル＞よ！」
父さんは言った。

『ふむ、久々の戦か、ほぅ、グレーフェンリルか。なかなかだな』

「うおっ！？アル、父さん！なんか声がするぞ！」
驚いたような兄さん。貴重だ！？

吹き荒れる烈火の如き魔力の奔流。父さんの魔力が４倍以上になる！
兄さんが謎の声に慌ててるが、俺には余裕がなかった。

「これが、精霊・・・？」
俺は思わずつぶやいた。
そう、よく考えたら、十二貴族の父さんは精霊剣を持っている。

『アルベルク、お前の息子たちか。ほぅ、面白いな。』
どうやらこの声が、父さんの精霊、＜ハマル＞のようだ。

「おい、ハマル、戦いが先だぞ」
咎めるような父さん。

大魔狼――改めグレーフェンリルは突如膨れ上がった父さんの、＜ハマル＞の魔力に警戒。
距離をはかっているようだ。好機！今のうちに詠唱を――

『おろかな人間ども・・・そして＜獄炎の精霊＞か』

（グレーフェンリルがしゃべった！？）

「アル、リック。魔獣は強力な固体だと、意思の疎通ができる。住処に帰ってはもらえないかな！」
父さんは落ち着いている。

『ふん、断る。あの山にこれ以上いられないのでな。仲間の食料もたりぬ。力無きものが去るのが世界の定め』
フェンリルはどこか悲しそうに言う。

「そうか、残念だ」
父さんも若干悲しそう。

（・・・父さん、いつもこんなならカッコイイのに）
俺は思わず思ってしまった。

――フェンリルが魔力を集めだし、戦いが始まる

「＜ハマル＞！リック！一斉射撃だ！アル、時間差！」
父さんが指示を飛ばす！

――意識を集中！＜ハマル＞の魔力が濃すぎてグレーフェンリルの魔法が感知しにくい。

――空気、圧縮、風魔力――！

「『冥府の業火は全てを焼き尽くす！敵を！罪を！汝を！眠れ、我に敵対せし者よ！
　この炎、受けること叶わず！避けること叶わず！汝、生きること叶わず！
＜インフェルノ――――ッ！！＞』」

「燃やせ、滅ぼせ！烈火の炎よ！＜ヴォルケイノ！＞』

『大いなる風の力よ、集え！我に仇なすものどもを切り裂き、灰燼に帰せ！
　虚空と烈風によりて、全てを退けよ！＜オルトテンペスト・ディストラクション！＞』

――炎と風が激突し、音が消え、目の前が真っ白になった。

――ドゴォォォォン！

（――相殺した！今だ！）

「――空を切り裂く天の雷よ――我が手に集え！＜サンダーボルト！＞」

――フェンリルに詠唱する時間はなかった。
しかし、フェンリルの体表に魔力が集まるのが見え――

――ズガァァン！

煙がすごい。

『やるな、人間』
煙の中から、フェンリルの姿が現れる。

（――サンダーボルトが当たって、ほぼ無傷!?）

『ほぅ、魔力装甲か。やっかいだな?アルベルク』
全然そう思ってるように聞こえない＜ハマル＞。

「アルの電撃が効かないなんてなぁ・・・父さん、どうする?」
若干いやそうな兄さん。

「そうだな。直接＜ハマル＞で切り裂くしかないか」
父さんは＜ハマル＞を構えなおす。

「父さん、だいじょうぶなの?」
思わず俺は心配になった。
グレーフェンリルはものすごく強そうである。

「なぁに、お前たちの父さんだぞ?ただの魔狼は任せた!」
――そう言って父さんがグレーフェンリルに突っ込む!

――こちらの戦力は、俺、兄さん、父さん&精霊ハマル。
――敵はグレーフェンリルと、魔狼が１２頭。

「アル、右は任せろ！左のは任せる！」
兄さんは的確だ。

「オーケー、兄さん！」

――魔力を集める！

――魔狼６頭が、俺に向かってくる！

（――慌てるな。接近されたら不利だけど、魔力量は勝ってる！）

「乱れ飛ぶ雷の矢！＜ガトリング・サンダーアロー！＞」

――ドガガガガガガ！

「――キャウゥゥン！？」

――＜ガトリング・サンダーアロー＞――
とりあえず、接近させずに魔狼を殲滅する意図でとっさに作った雷魔法。
１秒に５発ほどの速さで雷の矢を撃ちまくる！
一発の威力は＜サンダーボール＞１．５個分。（俺主観）
消費魔力量が多い。サンダーボルトと同じくらい。
ちなみに、持続時間は約３秒で、計１５発放たれる。

――

――グレーフェンリルに向かって走りこみ、＜ハマル＞で斬りつける！

――フェンリルは躱して爪で切り裂く！

――後ろに跳んでかわし、魔力を集める！

「＜ソニック・ブレード！＞」

『＜ソニック・クロー！＞』

互いに放った真空波が激突、相殺する。

――互いに相殺された技の余波をかいくぐり、斬りつける！

「燃えろ、＜ハマル！＞」

私は＜ハマル＞に魔力を流し、業炎を生み出す。

『小癪な、＜風よ！＞』

フェンリルは爪に風を纏わせる。

――燃え盛る＜ハマル＞

――風の爪が迎撃する

――

――――――

（――よし、魔狼殲滅！兄さんも大丈夫そう。父さんに加勢する

！）

――炎が閃き、風が切り裂く。

（――――でも、とうてい割り込める状況じゃない・・・）

――なら、離れたところを仕留める。

俺は魔力を手に集めようとして――

――違和感を感じた。

――俺の体の奥に、膨大な魔力があることに、気づいた。

――フェンリルの爪を＜ハマル＞で防いだ瞬間、膨大な魔力を突如感知した。

「――ッ！？＜ハマル！＞」

私は＜ハマル＞を魔力で爆発させ、距離をとる。

『――なんだ、これは！？』

フェンリルが焦ったように言う――

「フェンリルじゃない、まさか――！？」

私には心当たりがあった。

『アルベルク、あの少年は何者だ？』

＜ハマル＞が珍しく驚く。

――膨大な魔力の中心、アルネアの眼は、いつもの緑ではなく、銀に輝いていた。

『――天をも切り裂く銀の雷――』

『――死を告げる轟音、聞くこと叶わず――』

『――汝を葬る雷、見ることも叶わない――』

『――其は天空の理。我が手に導かれ、裁きをもたらす――』

『――――＜サンダーボルト＞』

――世界が銀の閃光に包まれた。

第三話：銀雷の魔術師（後書き）

このような作品を読んで下さった方、どうもありがとうございます。

第四話：守るべきもの

『――――どうして助けたんですか』

いつか聞いた声だ・・・誰だったか思い出せない。

――コンコン

「おにいちゃーん、おきてる～？」

リリーの声。

そう、もう朝だった

「おきてるぞー」

俺は起きてるアピール。

「はいっていい？」

いや、本当は寝てるので、リリーに入って来られると困る。

「だめ」

だから拒否。

「どうして？」

リリーは慣れてるので、理由を聞いてきた。

「眠い。寝させて。」

しょうがなく、俺は正直に答えた。

――ガチャ。タッタッタッ

「えいっ！」

リリーが俺の布団をはがしにかかる！

「甘いっ！信頼と安心の布団ディフェンス！」

ギリギリ間に合った。

「むぅ、おにいちゃん！あさごはんは？」
布団を引っ張りつつ、リリーは聞く。

「食べる！けどあと5分だけっ！」
朝ごはんも大事だが惰眠も大事！

「じゃあ、5ふんたったらおきてくれる？」
リリーに聞かれる。

「・・・むりかも」
つい、正直に答える。

リリーが布団をつかみなおす。
こうして今日も、俺は戦う。

「おにいちゃん、きょうのリリーはひとあじちがうわ！」

「ほう、ならばその違いとやら、見せてみろ！」
俺が、その言葉の真偽！見極めてやろう！

「ひっさつ！＜ろーりんぐ・ふとんはぎ！＞えいーーーっ！」
――いつも単調に引っ張って来ていたリリーがひねりを加えている！
「さらにできるようになったな！リリー！　だがまだだなっ！」
俺は必死に耐える！

「くぅっ、おにいちゃんのまもりがくずせない！」
なおも諦めないリリー！

「これでも喰らえ！対リリー決戦魔法！」
俺は奥の手を出す！

「いたずら好きの風の妖精、汝を笑わせ、我も笑う！＜シルフ・トリック！＞」

「きゃっ、あはははははっ」
リリーは悶絶している。

これが俺の新技！いたずら好きのシルフをイメージ。壮絶なくすぐり攻撃である！
え、弱そう？リリーにケガさせる訳にはいかないし、これでいいんだ！
それにたかがくすぐりと侮るなかれ。本気でやれば笑い死ぬレベルまでいける。

「みずのまにょり・・・あはははははっ」

しかも詠唱妨害。集中できない。
詠唱ができないのは致命的だ！
詠唱を長くすればするほど術の威力は上がる。
まあ、あんまり長くても魔力が枯渇するだけなのだが。

――5分後

「ああうあうあ～」
リリーは床にのびている。

リリーに勝った！

「む、この魔力は・・・」

俺は魔力を感知。

「アルー？リリー？」

兄さんが　あらわれた！

「来たね・・・兄さん。」
俺はシリアスに語りかける。

「り、リリーーーー！」
リリーに駆け寄る兄さん。

「リックおにいちゃん、アルおにいちゃんを・・・おこしてあさごはんに・・・ガクッ」
リリーはそう言って目を閉じた。

「そんな・・・アル、どうして・・・どうしてリリーを！」
兄さんが俺の真意を問う。

「俺は・・・眠かった・・・あと5分、もう5分・・・」

「くそっ、今、俺がお前の目を覚まさしてやるっ！」
兄さんが魔力を集める！

「紅蓮の炎よ！布団の中を暖めろ！＜ファイヤ！＞」

布団の中が温かく――！ん、なんの問題が？

兄さんがニヤリと笑った。

「あついっ！」
俺は布団ごと飛び上がった。

布団の中が暑すぎる！しかし外は寒い！
この程度で・・・！
俺も魔力を集め、とっさに思いついた術を発動！

「安らぎを運ぶ風、布団の温度を適温に！＜エア・コンディショナー！＞」

「今だ！いくぜ、本家・リック爆弾！」

この瞬間を待っていた！とばかりに、兄さんが必殺技を発動！

嘘だろっ！？体重、パワー共にリリーを大きく上回るリックが跳ぶ！

防がねば！

俺は魔力をあつめ――

「風の防壁、我を害するものを防げ！＜エアシールド！＞」

「風よ！防壁を崩せ！＜そうくると思ったぜ的・アンチ・エアシールド！＞」

兄さんに読まれていた！？

――ッ！？

――なら！

「主を守る守護の風！＜エアバッグ！＞」

とっさに思いついたのがそれだった。

防御できて、ただの壁じゃなくて、安全なもの。壁じゃなければアンチシールドは効かない。

――ボウン！

「――ぐはぁッ！」

兄さんが吹き飛び、俺は勝利した。
エアバッグって凶器にもなるよね。

「勝利とて虚しい・・・」

とっさ使ったたけど、＜エア・コンディショナー＞に＜エアバッグ＞・・・
前世にあったはものはイメージしやすいから使いやすいのだ・・・
ん、エアコン？

「むぅ・・・」
俺はなんか閃いた。

「安らぎを運ぶ風、この部屋を適温に！＜エア・コンディショナー！＞」

「おお、あったかい」

便利だった。魔力をかなりつかうけども。

部屋が温かくなったので、布団から出る。

何の為に戦ってたんだっけ、俺・・・

「えっと、ごめんね。二人とも。」

とりあえず、俺は謝った。

「おにいちゃん・・・あしたはまけません」

「アル、今日は、お前の勝ちだ」

・・・明日が怖いな。

で、そのあと朝ごはんを食べてると・・・

ん？そういえば昨日・・・そう、昨日はグレーフェンリルと戦ったんじゃ？

なんで俺寝てたんだ？

父さんに聞いてみると。

「ああ、アルがすごい魔法を撃ったあと倒れてしまったから、とりあえずベッドに運んでおいた」

なんと、申し訳ないことをした。

「ごめんなさい、父さん・・・」

やっぱり謝っておく。

「いや、アルのおかげでグレーフェンリルを倒せたんだぞ？よくやったな、アル」

と、ほめてくれる父さん。

「そうだぞ、アル。すごかったぜーお前の魔法！兄さんも負けられん！」

燃える兄さん。

「おにいちゃんかっこよかった！」
さっきなんとか許してもらったリリーもほめてくれた。

「お母さんも見たかったな・・・」
そして、仲間はずれの母さんであった。

――ご飯を食べ終わった俺は、自分の部屋で悩んでいた。

「むぅ、フェンリルに出会っても余裕で勝てるようになりたいな」

この世界にはフェンリルや魔狼だけでなく、ゴブリンやらオーガ、果てはドラゴンまでいるというのだから、何が起きても大丈夫なようにせねば。
優しい家族を守れるようになりたい。

転生したからか、全般的に俺の能力は高いが――

とりあえず空をとべるようにはなりたいと思う。

第四話：守るべきもの（後書き）

描写追加しました。

第五話：黒と白

グレーフェンリル襲撃から約１年２ヶ月。四の月１日目。

――朝だ。

――戦いだ。

――毎日、朝は戦いである。

「おにいちゃんっ、おきてっ！」
リリーが俺・・・の入った布団をゆする。

「だが断る！あと１０分！」
もちろん、俺は拒否。

「きのうおきなかったでしょ！」
その通りだな。今日もおきないぜ？リリー。

俺は例の凶悪魔法を発動。

「いたずら好きの風の妖精！＜シルフ・トリック！＞」

毎朝使ってたので、詠唱が短くなった。

「水よ、わたしをまもりたまえっ！＜ウォーター・ベール！＞」
リリーも対抗術を母さんに教わった。

「水よ、おにいちゃんに、さわやかなおめざめを！＜フレッシュ・ウォーター！＞」

「炎よ、我が安眠のために水を蒸発させよ！＜アイム・スリーピー＆ファイヤ！＞」

イメージが大事なので術名はなんでもいい。
命がかかった戦闘は別だが。
最近はお互いに必殺技であるところの魔法が効かない。
ならどうなるか。

「うおおおおっ！＜布団ディフェンス！＞」
俺は、毎度おなじみの布団ディフェンスを発動！

「えいっ！＜おふとんがえしっ！＞」
リリーも新技を使う！

――おふとんがえし――
非力なリリーがアルの布団ディフェンスを破るために編み出した新技。
ひっくり返すことで、布団ディフェンスを無効化する――！

俺の体が少し持ち上がる――！

「――くぅっ！」

俺は必死に耐える。

「――えいっ～！」

リリーも必死だ。

力だけじゃ技には勝てない。

なら、もっと力を――！

魔力を流す――両腕、両足、腹筋！

――毎朝の魔法を取り入れた格闘戦。

ある時俺は気づいた。魔力を流すことで、パワーを上げられる――！

フェンリルの魔力装甲も若干参考にしている。

シーツにしがみつく！

「うおおおおぉぉぉ――ッ、全力、全開！」

「わたしだって――ッ！」

――リリーの腕に魔力が流れる――！

「えいやっ！」

リリーが思いっきり力と魔力を込め――。

「なんだと！？」

――俺は・・・宙を舞っていた。シーツもろとも。

慌てず、空中で姿勢制御。もう慣れた。

「むぅ、今日も負けたか・・・」

――5分以内に起きるかが勝敗のラインである。

「わーいー！かったー！これで、４５しょう３６９はいだけど5れんしょう！」

最初に俺が魔力強化を使い出したのだが・・・

リリーも魔力をなんとなく察知できるらしく、マネされてしまった。

で、体は強化できても、ベッドやシーツや布団は強化できないため、

最近負けが増えて・・・ん？なんでベッドやシーツや布団は強化で

きないんだ？

できそうだな。

というか、この身体強化も詠唱したらもっと調整できるかも・・・

「おにーちゃん、あさごはんー！」

リリーが俺の腕を引っ張る。

とりあえずご飯か。

さて、この一年2ヶ月で変わったのは三つ。まず、身体強化。

もうひとつは、＜治癒＞もどき。こっちはリリーの術をパクった。

でも、流石に特殊属性だけあって、かなり難しい。

俺のは大量の魔力で無理やり治す感じである。

――さて、突然だが、ティルグリム山脈に来た。

一人で来た。何故なら、ついに完成したから。三つ目はソレ。それと、なんか来たほうがいい気がしたから。

「我に風の翼を！風を操り、風を切り裂き、風に乗る！天翔る翼をこの背に！＜ウィング！＞」

俺はついに完成した飛行魔術を使う。
万全を期すために長めの詠唱。短い詠唱も創ってある。

なにかあったら飛んで逃げられるので、ティルグリム山脈を探索する。
あと魔力感知も得意だから。大丈夫だ、問題ない。

「空が飛べる・・・もうなにも怖くない！」
がんばって練習したかいはあった。

時速百キロ（俺主観）で山脈の空を翔ること３０分。

山の高さに感心しつつ、魔力で心肺を強化しつつ進む。空気が薄い。
山脈の下のほうは森で覆われており、かなり深い。
上のほうは高山植物があるね。

そのとき、常に鍛えるようにしてきた自慢の？魔力探知に何か引っかかった。

（これは、魔力を隠してない！戦ってるのか！？）

現場に急行すると、白い小さなドラゴンが、デカイ黒ドラゴンに襲われていた。
俺は、その上空２０ｍほどのところにいる。
一応、魔力は全力で隠蔽している。

――黒いドラゴンの魔力は、尋常ではなかった。フェンリルの5、いや、10倍はある。

――白いドラゴンは子どものようで、全身ボロボロだった。

どちらも飛んでいるが、黒のほうが速い！黒ドラゴンが爪を振るう。

（なんでドラゴンがドラゴンを襲う！？）

白いドラゴンが黒ドラの爪を避けきれず翼の端を割かれ、落下する――

（わけがわからないけど・・・）

（黙って見てるのは、性に合わないんだよなぁ・・・）

俺は、手に魔力を集め――

「――乱れ飛ぶ雷の矢！＜ガトリング・サンダーアロー！＞」

――バチバチ

――ドガガガガガ！

――黒ドラゴンの脳天に１５の雷が直撃する！

『――クハハハハ！我に挑むとはどのような者かと思ったが、とんだ羽虫だな！』
黒ドラゴンがこちらを睥睨する。

――効いてない！それに、やっぱりしゃべるのか！

「おい、そこのお前！なんでその白いのを追い掛け回してるんだ！？」
とりあえず、一応情報を集めよう。

黒ドラゴンがニヤリと笑った――気がした。

『――クハハハ！貴様、我を知らんのか。愚かな奴め！まさか先ほどの魔術も挨拶ではなく攻撃だったのか？』

『我が名は＜グリディア＞、貴様も跡形もなく葬ってやろう！』

＜グリディア＞、ラーベルグ防衛戦の黒竜。
１０の精霊剣ですら、傷すらつけられなかったという、伝説の竜。

いままでは本気ではなかったらしい、俺を絶望させるために、その魔力を解放する。

俺は、歴然とした力の差を感じた。

（――勝てない。フェンリルの１００倍はあるんじゃないか？）

俺は、全力を開放すると、気絶する危険がある。

アイツのほうが、俺より速く飛べるだろう。

――でも、見捨てる気はない。

だって、以前には無かった力を手に入れてしまったのだから。

（――魔法はイメージで無限に変化する。勝率は０ではない！）

（だって、助ければ俺の勝ちなんだから――）

――魔力を集める。

――グリディアも魔力を集める。

――最上位火属性、範囲極大、威力は、＜サンダーボルト（通常）＞二十発以上と推定。

（――さっそく後悔したくなったな！）

――先手を打たなければ死ぬ！

俺は、飛行魔術を維持しつつ、新たな魔法を使う！

「吹けよ神風！我を運べ！＜ソニック・ウィンド＞」

俺はヤツにダメージを与えられない。

俺もヤツもそれは解ってる。

――故に、ヤツは油断し隙がある！

＜ウィング＞と＜ソニック・ウインド＞の重ねがけ――

俺はヤツの顔に向けて急降下！
ヤツは俺が血迷ったと思い、笑う。

『我が竜炎は愚かな羽虫を焼き殺し、塵すら残さぬ無慈悲の炎――』

俺は、ヤツの詠唱開始を確認し、一気に加速！

『悔やめ、我に挑みし愚行を――』

――詠唱を止めても、つかった魔力は帰ってこないため、
新しい術を出すくらいなら、そのまま撃ったほうがまし。
そして、新しく下級術を使うにも、若干の時間はかかる。

『――＜ブラスト・ヘルフレア！＞』

――よって、ヤツは大規模魔術をそのまま撃つしかないのだが、
俺はヤツの腹の下を潜り、間一髪回避する！

こんな大規模魔術では、流石のグリディアも無傷ではすまない。
だから、自分に当たる場所には撃てない。

――おとなしく俺を普通に殺せるだけの威力を撃てば、今ので殺せたのに。

――しかも、この馬鹿でかい炎は、俺の役に立つ！

俺は、さらに3個目の術を発動！

「乱れ飛ぶ水の弾丸！＜ウォーターガトリング！＞」

水の弾丸が竜の炎に当たるが、一瞬で蒸発していく。

『フハハハハ、何をしているのだ？愚か者が！』

この水の弾丸は大量に魔力をこめた特別製。

一斉に蒸発し、霧になる――！

それが俺の狙いだった。

「炎に焼かれても消え去らぬ輪廻の理！集いし水の白幕は、
　敵を欺き、惑わし、我を守る！汝、霧に囚われ惑う！＜ミスト・プリズン！＞」

俺の魔術によって、一面、真っ白な霧に覆われた。

もともと、俺の魔法は白色なので、都合がいい。

（――三十六計、逃げるにしかず！）

全力で飛ぶ！目標は――！

『フハハハハ！その程度で逃げられると思うのか？』

グリディアがとんでもない魔力を集める。

コイツ、さっきのでも遊んでやがったのか！？

間に合えよ！

『貴様の屑のような魔力が隠せていないぞ！』

『燃えろ！＜ヘルフレア！＞』

――詠唱が短い！反則だろ！？

先ほどの半分程度の威力だが、それでもありえない魔力――！

竜炎が、霧の中を逃げる魔力を、焼き尽くした。

『ふん、邪魔な霧だ』

邪魔な羽虫を焼き殺したが、霧が消えていない。

おそらく、魔力を常時放出するのではなく、最初に一定量出していたのだろう。

魔力を限界まで抑えて逃げていたが、飛んでいる以上、魔力の跡は残る。逃げられるハズがなかった。

『まあ、上手く魔力は抑えていたな、人間の子どもでは有りえないレベルだが、その程度だ。あの雷使いには遠く及ばん』

『風よ、霧を吹き飛ばせ＜トルネイド＞』

霧のなくなった空には、黒い竜以外、何もなかった。

『・・・フン、羽虫のせいで本来の獲物を見失ったか。』

『まあいい、もう長くはあるまい。魔力が感じられぬし、あるいは既に死んだかもしれぬな』

黒き竜は、ものすごい速さで東へ飛び去った。

第五話：黒と白（後書き）

若干修正です。

第六話：エリシア

ティルグリム山脈。その西側にある、とある山の森に、それは倒れていた。

小さな白い竜。（まあ、人間と同じくらいの大きさはあるが）

「土、水、火、風！自然が我らの姿と魔力を隠蔽する！＜マジック・ハイド！＞」

俺は隠蔽呪文を発動し――。

『＜ヘルフレア！＞』

――ひっかかった！

竜炎が、全く関係ない方向へ飛ぶ。

たしかに、その方向に魔力は感知できるだろうが――。

やはり油断していたか。

先ほど俺は詠唱した。『水の白幕は、敵を欺き、惑わし、我を守る！』

それを聞いていればわかったハズなんだが。

今回はドラゴンからすると、俺の魔力なんて塵同然ということを利用した。

霧で感覚をかく乱しつつ、俺の魔力1割ほどを、俺と反対方向に逃がしてみた。

だって、塵の大きさなんて戦闘中に気にしないでしょ？

黒竜＜グリディア＞が飛び去ったのを確認して、俺は白ドラゴンに駆け寄る

「おいっ、大丈夫か！？」

返答がない、かなり危ない！

――死なせるもんか！

俺は手に魔力を集め、＜治癒＞もどきを発動する。

「癒しの魔力よ、この者を救いたまえ！＜ヒール！＞」

白ドラゴンの傷が治っていく。

――だが

（くそっ、傷が深すぎる！）

（これじゃあ、絶対間に合わない！）

――もう＜グリディア＞はいない。全力を出しても問題ない。

――山には危険な生物など山ほどいるぞ？

――ちゃんと姿も隠すように、さっきのハイドで指定したさ。

――助けて、逆に殺されるかもしれないぞ？

――別にいいさ！

――魔力、全開！

――この前は気づかなかったが、俺は銀の魔力を纏っていた。

『――傷つきし者を癒す聖なる力――』

『――汝、未だ輪廻転生の刻にあらず――』

『――汝、未だ冥府の門を叩く刻にあらず――』

『――蘇りて、その天寿を全うせよ――！』

『――＜リヴァイブ！＞』

銀の閃光が閃き、白ドラゴンには傷ひとつなかった。

（――――ッ！？）

一瞬、クラッと来た。一気に魔力を放出したのが原因のようだ。

（でも、この前よりましだ）

まあ、体はダルく、戦える状態ではないが、しばらくすればマシになるハズ。

何はともあれ、これで白ドラゴンは助かるハズだ。

と、白ドラゴンが目をあけた。

『たすけてくれて、ありがとうございます。』

いきなり回復したのと、俺が魔力を放ってることから、俺が回復魔術を使ったのが分かったのだろう。

「うん、どういたしまして。大丈夫？痛いところはない？」
とりあえず、ちゃんと治ってるか確認しないとな。

『はい、だいじょうぶです。』
白ドラゴンが答える。

「はぁ～、よかった」
俺も、命がけで特攻したかいがあった。

『どうして、たすけてくれたんですか？』
白いドラゴンに問いかけられる。

――いつか聞いたような言葉

――でも、違う

――何が？

――わからない。でも、

――俺の答えは、同じ。

「助けたかったから。」

白いドラゴンがこっちをみている。
擬音で表現すると、ポカーン・・・って感じだな。
まあ、こんなセリフを実際に聞くことなど皆無だろうからな。

「あ、そうだ。助けたかっただけだから、全然気にしなくてオッケーだよ？」
一応気にしないように言うが・・・

『・・・そんなことをいわれたら、よけいに気になります！』

むぅ、その通り。

なら――

「なら、名前を教えてほしいな。俺はアルネア、アルって呼んで」

『・・・なまえは、ないんです』

白いのは悲しそうに言った。
・・・なんか、複雑な事情を感じ取った。

「じゃあ、俺が名前をあげるよ」
『ほ、ほんとですか？』
声が女の子っぽいし・・・
「おう！君の名前は――エリシアだ！」
――しばらくして
「炎よ！＜ファイヤ！＞」
俺は火をつける。
「よしっ焚き火オッケー！」
とりあえずご飯食べたいのだ。
「エリシアー、生肉と焼肉どっちがいい？」
ドラゴンって生肉なのかな？
『・・・やきにくがいいです。』
そんなことはなかった。意外。

「おっけー、んじゃ、適当に棒に刺して、焼くっと」
こんなこともあろうかと、肉とか持参してあった。
魔法あるから火も起こせるし、日帰りだしね。

――数分後

「よし、上手に焼けました！はい、エリシア」
俺は、肉つきの棒を手渡す。

「ありがとうございます」
エリシアが手で受け取る

俺は空腹なので、とりあえず食べる。うまい。

――ん、手で受け取った？

ちらっと右にいるはずのエリシアを見る

白い髪で、赤い目をした女の子がお肉を食べていた。
簡素な真っ白い服――ほぼ、ただの布のままだが、かたちは普通の

服――を着ている。

「・・・えっと、エリシア？」
わけがわからないよ

「はい、なんですか？」
女の子がこっちを向いて答える。

――なんだと！？

「え～と、おいしい？」
よし、ごまかそう

「はい、おいしいです。ありがとうございます」
ぺこりと頭を下げるエリシア。

「そっか、そっか、よかった～」

とりあえず、色々考えたが、人間に変身できるようだ。
転生者だからまだ耐性があるが、実際に見ると、ほんとにビックリである。

そうこうしているうちに、二人とも食べ終わった。
とりあえず、一つだけエリシアに聞かねばなるまい。

「エリシア、一つだけ聞かせて」

「はい、なんですか？」
エリシアが小首をかしげる。
「どうして＜グリディア＞に襲われてたの？」
エリシアは少し悩んだようだったが、教えてくれた。
「わたしは、竜族でも強大な力をもって生まれたらしく、＜グリディア＞は、わたしが成長するまえに、亡き者にしようとしたみたいです。」
そう言って、恐る恐るこちらの反応をうかがうエリシア。
「そっか、グリディアひどいなぁ・・・エリシア、だいじょうぶなの？」
とりあえず、俺の中のグリディア株は未曾有の大暴落。
エリシアは上目遣いにこちらを見てくる。
「その、こわくないんですか？」
「え？なにが？」
なんのことだかさっぱり。

「わたしは、あのグリディアと同じくらい強くなるかもしれないんですよ？
今のうちになんとかしよう、とか思わないんですか？」

ふむ、それはたしかに。グリディアには到底勝てる気がしないな。
そっか、エリシアはそう思ってたのか・・・

「そうだね、じゃあ今のうちに――

エリシアと仲良くなっておこう！」

エリシアは呆然としている。そんなに変なこと言ったか？
意外と合理的だとおもうんだが？

「わ、わたしが仲のいい人も攻撃するかもしれないですよ？」

なんか自分を悪く言い出すエリシア。
俺は、とりあえず乗っかってあげることにする。

「む、なら自分の敵になるかもしれない命の恩人も始末したほうがいいんじゃない？」

「そ、そんなことできません！」
エリシアが慌てて言う。

「うん、なら何の問題もない。オールオッケー。」

よし、これにて万事解決。っと、まてよ？

「エリシア、このあたりにいると、危ないんじゃない？」

「そう、ですけど、でも・・・」

顔を俯けてしまう。やっぱりか。
グリディアに狙われる以上、ティルグリム山脈は危ない。
エリシアは魔力を大量に保有しているので、完全には隠しきれない。
まだ子どもみたいだしね？
今も、俺の感覚は十二貴族クラスの魔力を感知してる。
白い髪に、赤い目は目立つ。
行くあてもない。

「よし、エリシア。ウチにこない？」

「えっ！？」

俺の言葉に、エリシアは思わず顔を上げて驚いた。

第六話：エリシア（後書き）

こんな作品に６話も目を通してくださった方。ありがとうございます！

第七話：家族

「エリシア、ウチに来ない？」
俺は、エリシアを助けたいと思った。

「えっ！？」

エリシアは何故か顔を真っ赤にして慌てている。

「そ、その、いいんですか？」

「もちろん！エリシアは悪い人・・・じゃなくて竜じゃないし、困った時は助け合いだよ」

「・・・ありがとう、アルネアさん。よろしくおねがいします」

ぺこりと頭を下げるエリシア。
う～ん・・・

「エリシア、歳いくつ？」
俺は、年齢を聞いてみる。
女性に年齢を尋ねるのはご法度だが、年上に敬語を使われるのは何か嫌だし、
年下なら6歳未満なので平気だろう。

「えっと、6歳です」
エリシアが答える。
たしかに見た目6歳くらいだと思ったが、若いというか幼いのに礼

儀がしっかりしてるな！

「よし、俺も6歳だから、お互い敬語はなし！アルってよんで！」
同い年に敬語で話されると、なんか変だしね。

「は、はい。じゃなくて、うん？」
エリシアは戸惑っている。

「あー、そのへんは好きでいいや」
まあ、仕方ないな。

「えと、じゃあ。アル、よろしくです？」

「うん、よろしく！」

――さて、そうと決まったら帰ろう。

「あ、そうだ。エリシア、飛行魔法使える？」
一応聞いてみる。ダメなら・・・俺が運ぶか。

「飛行魔法なら使えます。でも変身したほうが速いですよ？」
お、さすがドラゴン。エリシアも使えるらしい。

「いや、一応見られても大丈夫なようにね」
ドラゴンを見られたらまずいだろ！

「あ、そうですね。でも、飛行魔法って相当難しくて、
使える人はほとんどいないって聞いたんですけど・・・」

なんかすごいものを見る目で俺を見てくるエリシア。
回復魔法といい、なんといい、信じがたいのだろう。

「え、そうなの？」

でも、飛行魔法が難しいのは初耳である。
確かに覚えるのは大変だったが。

「はい、でもたしかにドラゴンより全然いいですね」

納得したようにうなずくエリシア。

「・・・よし、行こうか」
「はい！」

「お空を自由に飛びたいな♪＜ウィング！＞」
「わたしに天を翔ける翼を！＜ウィング！＞」

――バシュッ
――バシュッ

さあ、帰ろう。俺はどこかで聞いたような呪文で飛ぶ。
エリシアは真面目な呪文だ。

――およそ４０分後（俺主観）

「よし、エリシア、着いたよ。ここが俺の家」
俺は、家を空から見下ろしつつ、エリシアに言う。

「お、おっきいですね。その、アルは貴族なんです？」
ああ、デカイ家だよな。俺も空から最初に見たとき驚いた。

「ん～？たぶん一応」
俺って貴族なんだよなぁ・・・

「見えないです・・・」
エリシア容赦ない！？

「・・・ぐはっ！」
俺は大ダメージだよ・・・

「あ、そうじゃなくて、貴族の人に良いイメージがなかったんです」
慌てて修正するエリシア。

「あー、なるほど。俺の家族はこんな感じだから大丈夫」

うん、こんな感じだよな？

「そうなんですか～」
エリシアはなんか想像してるっぽい

「よし、まあ一応エリシアがドラゴンってことも説明して大丈夫だろう！」
うん、大丈夫だろ！

「ほ、ほんとですか？」
信じられない！といった感じのエリシア。

「兄さんは論外だな。いい意味で。父さんは・・・シリアスモードじゃなきゃ平気。
リリーは・・・なんだ？やな予感がするが・・・。母さんはエリシアなら平気だな。」

「・・・いい意味で論外ってなんです？」
エリシアは何を想像したのか、びみょ～な表情だ。

「会えば分かる！」
兄さんはあんなだし。

そんなわけで、とりあえず兄さんを味方につける。

「おーい、兄さ～ん！」
俺は、部屋にいた兄さんに話しかける。

兄さんは部屋で筋トレをしていた。さすが兄さんだ！

「ふんっ・・・！アル、どうかしたのか？ふんっ・・・！」

腹筋しつつ、兄さんが聞いてくる。

俺は、一気に畳み掛ける！

「実は虐待されてたドラゴンの女の子を拾ってきたんだ！

名前はエリシア、人間に変身できる！」

「な、なんだと・・・！？」

なにやら怒りに震えるみたいな兄さん。

「えっと、アル、大丈夫なの？ほんとに？」

心配そうなエリシア。

「虐待なんてゆるせない！どこの誰だ！？」

兄さんは腹筋をやめてジャンプ！

華麗に着地しつつ怒った！

エリシアは、ドラゴンとか、人間に変身はスルーなの！？って、顔をしている。

「大丈夫だよ兄さん！俺が片付けておいたから！エリシアをウチで保護するのに賛成してくれるよね！」

「おお！もちろんさ！」

――おめでとう！リックがパーティに入ったぞ！

とりあえず、こっそりエリシアに話しかける。

「兄さんは良い人だから。いい意味で論外だったでしょ？」

「う、うん。そうかもです」

エリシアは、コメントがおもいつかないです。って顔だ。

万全を期すべく、母さんの部屋へ。

――コンコン

「お母さ～ん、いる？」

俺は、扉をノックしつつ聞く。

「アル？どうかしたの？はいっていいわよ」

母さんの声がした。

とりあえず3人で部屋に入る。

エリシアを見て若干驚いたらしい母さん。

「あら？そちらの可愛い子はどうしたの？」

「は、はじめまして。エリシアです」

若干緊張しつつ、エリシアは丁寧に頭を下げた。

それを見て、母さんは微笑む。

母さんは可愛い子は大好きだ。

「あら、丁寧にどうも。アルとリックの母のクリスです。よろしくね」

「はい、よろしくおねがいします」
もっかい頭を下げるエリシア。

――今だ！俺は一気に畳み掛ける！

「お母さん、実はエリシアはドラゴンなんだけど、大きなドラゴンにいじめられて、死に掛けてたんだ！
それで僕がケガを直してあげたんだけど、エリシアには行く場所がないんだ！
ウチで引き取ってあげてほしいんだ！」

「それは大変、うちで良かったら、いつまでもいていいわ！」
――母さんの許可を手に入れた！

「あ、ありがとうございます」
また頭を下げるエリシア。

「母さん、父さんの説得に行くんだけど、来てくれない・・・？」
俺は母さんを勧誘した。

「もちろん手伝うわ！」
――母さんが仲間になった！

「あなた、エリシアちゃんをひきとってあげたいの・・・」
母さんが上目遣いに父さんに頼む。

「わかった。オッケー！」

（――はやっ！？）
母さんの魅力に負けたのではなく、きちんと考えてると信じたい。

まあ、なにはともあれ・・・
「よかったな、エリシア」

「うん、アル、ありがとう」
エリシアは嬉しそうだった。
これにて一件落着！

だと思ってた。

問題は次の日の朝。

「う～ん、アルが起きてこないわね・・・そうだ、エリシアちゃん、起こしてきてくれる？」

「はい、わかりました」

「えっ、わたしもおにいちゃんおこすっ」

「じゃあ、二人で起こしてきてくれる？アルはなかなか起きないから」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

――タダダダダッ

――ダダダダダッ

「アルっ、あさですっ起きて下さい！」
「おにいちゃん！おきて～～～！」

「・・・・あと5分だけ」

第七話：家族（後書き）

若干修正しました

第八話：銀の剣

エリシアが家族になってから約一週間。

「アルっ、おきてください～～～～！」
「おにい～ちゃん～～～！おきて～！」

相変わらずだった。
むぅ、静かに寝させてもらえないものか・・・
え、俺が悪い？
ぐぬぅ・・・・

「だが、朝の惰眠は譲れない！守りたい布団があるんだぁぁぁ――っ！」

「いくぜ、信頼・安心・安全！＜布団ディフェンスｖｅｒ．２！＞」

――布団ディフェンスｖｅｒ２――
ただの布団ディフェンスにあらず。
魔力を込めて防御力を３００布団ポイントアップ！
こう見えても魔術である！

「お兄ちゃんはわたしが起こすんだもん！」
そういうと、リリーは手に魔力を集める！

「お兄ちゃんにさわやかな朝を！＜フレッシュ・スプラッシュ！＞」
リリーの手から水流が飛び出す――！

「甘いぞリリー！布団式魔力装甲、展開！」
俺は、布団に魔力を込めて対抗！

――バシュウウウウ

布団が白く輝き、水を弾く！

「ううっ、さすがお兄ちゃん・・・！」
リリーはノリがいいよなぁ

「アル、無理にでも起きてもらいますっ」
エリシアも参戦。

「いいだろう！受けてたつ！」
さあこいエリシア！受けて経つぜ！

「・・・布団に潜り込みながら言ってもかっこよくないです」

エリシアの言葉が布団を貫通し、俺にダメージを与える！

「――ぐはっ」

「その、せっかく普段はかっこいいんです、はやく布団からでてください」

「え、そう？」

エリシアの言葉に心が動いた。

「そ、そうです・・・」

若干恥ずかしそうなエリシア。

「だがっ！昨日の俺とは違う！二日連続で同じ手で起きたとあっては男としてのプライドが立たぬ！」

・・・昨日はこれで起きちゃったんだけどね？

「その姿のどこにプライドがあるんです・・・？」

エリシアに言われてしまう。むぅ。

「滲み出てるだろ？」

「ダメそうな何かなら・・・」

辛辣なエリシア。
やめて！俺のライフはもうゼロよ！

「男なんてみんなダメなもんさ？」
ダメじゃない男の皆様ごめんなさい・・・
つい苦し紛れに・・・

と、俺は魔力を察知。

リリーの　こうげき！

「あれくるう水流、おふとんを押し流し、お兄ちゃんをおこせ！
＜ハイドロストリーム！＞」

「防げ！＜シールド！＞」

――ズガガガガガ

アルには　きかなかった！

「お兄ちゃん、強すぎっ！」
リリーは悔しそうだが、負けてやる気は無いぜ！

「アル、もう5分たちましたよ？」
エリシアに言われるが・・・

「・・・俺の答えは決まっている。俺はぜってぇ自分の意思はまげ

ねぇ！それが俺の布団道だ！」

「しかたないですね・・・」

エリシアは、そういって魔力を集める！

「白き炎は私の意志に従う――布団を焼き尽くせ！＜ヴォルカニック・ブラスター！＞」

白き炎の極太レーザーが現れ、俺の布団を狙う！

エリシアの炎も白いのだ！白ドラゴンだからか？

「――って、布団に罪は無いだろう！？」

布団を焼こうとするエリシアに断固、抗議するぞぉぉぉ！

「アルのためなら布団を焼くのは仕方ないです」

「――――クッ、俺の相棒は守ってみせる！」

俺も魔力を集めて、対抗する。

「白き雷は我が意思に従う――炎のみを防ぎ、退けよ！荒れ狂う白雷の宴！

――――＜サンダーストーム！＞」

――ズガピシャドガーン！

白い雷と白い焔が激突、相殺する。

「お兄ちゃんを捕獲せよ！＜アクアバインド！＞」

リリーの奇襲。だが魔力で気づいてる。

「水を蒸発させよ！＜ファイヤ・ストライク！＞」

――バシュウウッ

放たれた水の鞭を、俺の炎が蒸発させる。

「布団を燃やすは白き火炎！降り注げ！＜ヴォルカニック・レイン！＞」

「雨を防ぐは風の傘！＜エア・アンブレラ！＞」

――ジュガガガガ

さらに、追撃で布団を狙うエリシアの焔の雨を、俺の風の傘が防ぐ！

「お兄ちゃんを起こすは水の爆弾目覚まし！＜ウォーターボム！＞」

「リリー――!?爆弾目覚ましの意味違うだろ!?」

「お兄ちゃんは渡さないもんっ！」

「・・・・」

無言のエリシアだが、謎の迫力がある――

「白き竜に誓いを立てし聖なる焔よ――」

――まて、魔力量がおかしい!?

「今、古の盟約の遂行を求めん――」

「エリシア!?」

「我が敵のみを焼き尽くす劫火――」

――嘘だろ、おい

「彼の布団を焼き尽くせ――！」

――俺の相棒になんの恨みが！？

「＜――エンシェント・ホーリーフレア！＞」

――ああ、もう！

「我を守るは白銀の電光――」

「天空を司り、虚空をも切り裂く――」

「万物を無に帰す至高の一撃――」

「我と、我が仲間を守れ――」

「＜――プラズマ・ボルテックス！＞」

――ドガーン！

――ゴァァァァッ！

――ズガァァァン！

――俺の布団はなんとか無事だった。

「ううっ、お兄ちゃんはわたしが起こすっ！」

「布団さん、ごめんなさい。燃えてください！」

――訂正、まだ無事だった。

とにかく、やばい！こんなときは――！

「おはよう！起きた！俺起きた！布団に罪はない！」

――ふう、これなら・・・

「・・・お兄ちゃん、わたしが起こしたよねっ？」

「アル、お布団を守るために起きたんですよね？」

「え？ああ、まあ、布団のため・・・かな？」

にっこり微笑むエリシア。可愛いんだが・・・本気で布団を焼きにきたよな？

「うう～、わたしもおふとんねらうっ」

リリーも物騒なことに！？

なぜだ！？

「えーと、二人とも、特にエリシア。布団に罪は無い。焼いたりしちゃダメ！」

「アルなら守ってくれるって、信じてますから・・・」

エリシア！？絶対何か間違ってるよな！？

「お兄ちゃんを起こしたいんだもん・・・」
と、リリー。
「お兄ちゃんは惰眠を貪りたいんだもん・・・」
そう、惰眠を貪りたいんだよ・・・俺は。
「とにかく、布団を焼くのは禁止！あと、切り裂くのもダメ！」
「・・・わかりました」
「・・・は～い」
――よかった、わかってくれたか。
「アルを焼くなんて・・・でも、アルがそう言うなら――！」
「待て待てまてーーー！焼くなよ！何も焼くな！」
エリシアの衝撃発言に、俺は若干飛び上がってしまった！
「じゃあ、起きてください」
「無理」
「じゃあ私も無理です」

「・・・」
「・・・」

「――ごめん、相棒。」

「エリシア、焼くなら布団にしてくれ。」

こうして毎朝の布団防衛戦は苛烈を極めていった――！

――で、朝食後。

「リック、アル、今日から父さんが剣術を教えるぞ！」
と、父さん。

「よしきた、父さん！アル、負けないぜ！」
リック兄さんは嬉しそう。

「なにおぅ、兄さんには負けないよっ！」
俺も乗っかっとこう。

「お父さんっ、わたしもっ！」
リリーも乱入。

「ん、リリーもか？オーケー、わかった！エリシアはどうする？」
父さんがエリシアを見て言う。

「それじゃあ、私も！」
エリシアも参加のようだ。

「うふふっ、ケガしたらお母さんが治してあげますからねっ」
母さんも何故かやる気。

――いつぞやの中庭の広場。
え～と、7話ぶり、約1年2ヶ月1週間ぶり・・・かな？

「よしっ、いいかーみんな。剣の修行に必要なものは？」

「忍耐！」
「剣！」
「努力！」
「友情！」
「勝利！」

上から、兄さん、俺、エリシア、リリー、母さん・・・？

「クリス・・・？」
父さんが母さんに若干呆れ目線。

「つい参加したくなって・・・」
バツが悪そうな母さん。

「クリスは習うまでも無いだろう？え～、ごほんっ。今回は剣を配ろうと思う！」
父さんはどこからか木の箱を取り出した。

「やるな、アル！」
「父さんは分かりやすいから」
「確かに剣は必要です」
「さすがお兄ちゃん！」
「ぐすん、お母さん仲間はずれ・・・」

「まず、リックには炎の魔法剣、＜ブレイザー＞」

リックに真紅の両手剣が渡される。
デカイ。重そう。

「おお～。ありがとう父さん！」

「アルには風の魔法剣＜アリアティル＞・・・ごめんな、雷は無かったんだ」

エメラルドグリーンの片手用の両刃長剣をもらう。

「ううん、ありがとう、父さん。すごい嬉しいよ」

「ふふっ、次にリリーには水の魔法剣＜リーシア＞」

リリーには軽そうな青い片手剣。

「お父さん、ありがとうっ！」

「エリシアにはちょうど白い炎の魔法剣があったんだ。銘は＜エルデイル＞」

俺と同じような形の白い長剣。

「その、こんなに良い物を・・・いいんですか？」

「もちろん！かわりにお父さんとよんでくれると嬉しいな」

「はい、ありがとうございます。お父さん！」

「うふふっ、私はお母さんって呼んでね」

「はいっ、お母さん！」

嬉しそうに笑うエリシア。

（微笑ましいねぇ・・・）

「アル、これも渡しておく。」

そういって父さんが渡してきたのは、白銀の長剣、＜アウロラ＞だった。

第九話：この世界で

この世界は、俺が前いた世界、前世より魔獣やらドラゴンやらがいて物騒だ。
前世の俺には、前世の記憶は無かった。
きっと、俺がここにいるのは意味がある。
せめて、みんなを守れるだけの強さを。

今度は、自分の命を犠牲にせずに誰かを守れる強さを。
あいつみたいに置き去りにされるヤツを作らないだけの強さを。

俺は、俺が一人にならないように、力が欲しかった。

でも、それは間違っていたのかもしれない。今はそう思えた。

今度は、きっと守り抜いてみせる。

番外話：登場人物紹介

登場人物紹介（序章終了時の人物のみ）

アルネア・フォーラスブルグ

１５歳。
金髪緑目。身長は一般男子平均くらい。体重はやや軽い。
愛称はアル。
得意属性は＜雷＞だが、＜風＞もよく使う。
特技は意外と料理ができることと、魔力感知。
転生者だからか、身体能力も高い。魔力量も多い。
武器は、銀の魔法剣＜アウロラ＞と、風の魔法剣＜アリアティル＞。
＜治癒＞魔法の真似事もできるが、効果は低め。
特殊体質で、魔法が白色になる。
また、全力を出すと銀色に変化。

エリシア・フォーラスブルグ

１５歳。
白髪赤瞳だが、学校に行くときに目立たないように、偽装魔法で金髪緑目にしている。
本当はドラゴンなので、本気を出せば魔力量は人間の比ではない・・・ハズだ。
ドラゴン的には、まだ赤子に等しい年齢なので、そこまで強くは無いかもしれない。

得意属性は＜焔＞で、特異体質で魔法は白い。特技は火を使う料理。
実はかなり筋力もある。
武器は白い＜焔＞の魔法剣＜エルディル＞。

リリネア・フォーラスブルグ

１５歳。
金髪緑目。金髪緑目多くないか？って感じだが家族だからだ。
全くイメージわかないが、意外と強い。
特技はお菓子を作ること（ただし甘いものに限る）
得意属性は＜治癒＞と＜水＞。
武器は水の魔法剣＜リーシア＞。

リベルク・フォーラスブルグ

通称リック兄さん。いい意味で論外。
父さんから＜ハマル＞を継承し、一年先に魔法学校へ通っている。
たしか実技の成績はトップクラスだった。
座学はお察しである。
得意属性は＜炎＞。
特技は筋トレ。ムキムキである。
背は高い。体重は筋肉で若干重め。

アルベルク・フォーラスブルグ

父さん。この父にしてリック兄さんあり。
＜炎＞属性使いだと思う。
『紅蓮の悪魔』という、なんともコメントしにくい二つ名がある。
昔は騎士だったらしい。

クリス・フォーラスブルグ

母さん。母さんもリリーと同じでお茶目である。
料理は上手。特にお菓子がおいしい。
＜水＞の系統の属性だと思う。
＜治癒＞も使う。

ジョン

１５歳。
村で出会った＜土＞属性の少年。
茶髪茶目である。
じつは平民としては破格の魔力を持つ。
大分落ち着いた性格になった。

第一話：魔獣の森

森を駆けるものの音。
空を切り裂く風の音。

俺は、獲物を追っていた。

獲物は、森の中をすさまじい勢いで逃げる。
だが、俺はそれを空から追っていた。

獲物は、木々をなぎ倒しつつ、しかし、全く速度は緩めない。
パワーだけなら兄さん並みだなぁ、と失礼なことを考えつつ、俺は追う。

そして、森が一旦途切れる場所。崖に行き着いた。
空からなら、逃げられない場所を探すのは地上からよりも、今回は容易だった。

思わず止まったソレの背後、５０メートルほどに俺は降り立つ。

獲物、ソレは巨大なイノシシだった。トラックくらいの大きさ。
名前は＜ビッグ・ボア＞。魔獣だ。
ビッグボアは、間抜けにも地上に降りてきた俺に振り返り、唸りを上げる。

「――グガァァァ！」

ビッグボアが突進しようと体に力を溜め、さらに魔力装甲を纏うが、俺は慌てない。

掌に魔力を集め、呪文を詠唱する。

「白き雷は我が意思に従う、＜サンダーブラスト！＞」

俺の掌から白い雷が飛び出し、ビッグボアを焼く。
が、それでもビッグボアは負けじと突っ込んでくる。

「うお、すごいな」

俺は呟きつつ、左手で魔法剣＜アリアティル＞を抜いた。

「切り裂け、＜疾風剣！＞」

右手で魔術を維持しつつ、左手のアリアティルに魔力を込め、振りぬく。
アリアティルから風の刃が飛び出し、ビッグボアの顔面を直撃。

だが、いまだに耐えるビッグボア。
サンダーブラストと激突しているせいで、ビッグボアの速度は落ちてるが・・・

残り、およそ１０メートル。

「むぅ、拾いに行くの大変なんだぞ・・・」
俺はぼやきつつ、アリアティルに雷を流し、帯電させる。
で、ぶん投げた。
「＜雷鳴剣っ！＞おりゃー！」
――――ズガーーーン！
「――グガァァァァ！？」
稲妻と化したアリアティルに体を貫かれたビッグボアは、
若干焦げて地面に倒れた。体の中心に風穴・・・
「おぅ、さすが魔獣。黒こげにならないとは。ラッキー！
エリシアに焼いてもらうかな！焼肉～♪やきにく～♪」
でも、父さんに貰った剣のほうが大事だな。
俺は、ビッグボアに隠蔽魔法をかけ、アリアティルを回収するため
に再び、空へ舞い上がった。
さて、俺の名前はアルネア・フォーラスブルグ。
みんなからはアルって呼ばれる。
今、俺は15歳で、皇立の魔法学校に通っている。
え、なにやってるかって？
今は、そう合宿だぜ！入学早々に。

なんか、例年なら湖に遊びに行って、親睦を深めるものらしいんだが・・・

「ふふっ、親睦を深める？ならサバイバルが一番だ！色々育める！今年の一年生は、魔獣の森サバイバル合宿だ！異論は認めん！」

学園長が今年から変わった。合宿もソレで変わった。なんでも超強い魔術師だとか。
ちなみに長い黒髪の女の人だ。２０代後半？
第一印象は、とんでもない人って感じだな。

「お、アリアティルみっけ」

崖に向かってぶん投げたから、飛んで探すはめになった。
まぁ、着弾したところが燃えてるからすぐ分かる・・・って！？

「やば、なんで空から落雷攻撃しなかったのか忘れてたぜ・・・」

一面森だから、よく燃えること燃えること。はっはー！

どうしよ？
なんとか大規模森林火災になる前に止めないとな・・・
周りの木を切って燃え広がらないようにでもしよっかなー。
とか考えてると、見知った魔力を感知。

「大いなる癒しの水、火を消し止めよ！＜ハードスコール！＞」

強烈な雨・・・スコールが火事を消し止めていく。
お～、助かった。

「お兄ちゃん！火事になったら危ないでしょ！？」

「悪い、リリー。＜雷鳴剣＞だ。」

と、言いつつ俺はアリアティルの所に着地。引っこ抜く。

肩の下くらいまでの金の髪に若干青みがかった緑の瞳。
１５歳になってすっかり女の子のリリーことリリネア。妹だ。

「お兄ちゃん？雷鳴剣なんて使ったら火事になるってわかるよね？」
おおぅ、リリーがにっこり笑ってるが目が怒ってる。

「命の危険でしかたなく」
動じずに、しれっと答える俺。

「お兄ちゃんが命の危険に見舞われるとしたら、
エリーに変態なことして、本気で怒らせた時くらいじゃないの？」

妹よ、俺はどんな人間なんだ？
そしてエリシアを怒らせると命の危険・・・あるな、間違いない。
まあ、肯定するわけにもいかないので話題を戻そう。

「リリー、ビッグボアに襲われたんだぜ？俺」

「ビ、ビッグボア？何やってたのお兄ちゃん！？
ランクＢの指定危険魔獣でしょう！？大丈夫なの！？」

あ、ランクってのは、ギルド（おなじみなので説明割愛）が決めていて。
高ければ危険ってこと。
上から、Ｚ＞ＳＳＳ＞ＳＳ＞Ｓ＞ＡＡＡ＞ＡＡ＞Ａ＞Ｂ＋＞Ｂ－＞Ｃ＋＞＞＞＞＞＞Ｇ－
って感じ。
まあ、学生が倒すにしてはＢは強い。
ちなみに、グレーフェンリルはＡランクだったりする。
よく勝てたな・・・

まあ、何はともあれ、リリーが心配してくれたのは、ちょっと嬉しい。

「むぅ！妹を心配させて喜ぶなんて酷いよ！」
リリーを怒らせてしまった。顔に出ていたか。

「いや、とりあえず討伐証明に何かとってくる～」

俺は逃げることにした。

「そ～らを自由にと～びた～いなぁ＜ウィング～＞」
若干やる気無い感じに詠唱。俺は空に舞い上がる。

「あ！？まだ話はおわってないよお兄ちゃん！」
リリーが呼び止めるが無視。リリーは空は飛べない。

にしても、広いなぁ、この森。
ラルハイト皇国の西側一帯に広がるこの魔獣の森は、やたら広い。
森の中に、村やら湖やら池やら迷宮やら洞窟やら崖やらてんこ盛りだ。

今、さりげなく入れといたが、迷宮がある。
ファンタジーには迷宮と書いてダンジョンは必須だよな？
そのへんの期待を裏切らない（俺的には）がこの世界だ。

さて、迷宮はこの森の中に幾つも発見されている。
まあ、森の浅いほうはけっこう迷宮も攻略されてるらしい。
見分け方は、基本、発見済みの迷宮には、魔法で印をつけるのが暗黙の掟だとか。
発見済みと攻略済みはほぼ同義。
全力で攻略されるらしいからな。
なんでも迷宮の中には、精霊がいるとかで、迷宮を攻略すると契約できるらしい。

精霊が自分に相応しい者を探すために創るのが迷宮なんだとか？
あ、前に父さんが言ってた方法でも精霊との契約は可能なんだけど、精霊に会える場所なんてそうそう無い。

っと、ビッグボアのとこに帰還。
よ～し、剥ぎ取るかぁ・・・
俺は、解体用ナイフを取り出した。

――さて、俺は無事にビッグボアの爪とか牙とか毛皮を剥ぎ取って、あと肉をゲットにてベースキャンプ・・・合宿本拠地に帰ってきた。
空から。

「っと、あそこにいるのは学園長か？」
このまま降りて平気なのか若干気になった。飛行魔法は超難度なのだ・・・

「げ、目があった。」
俺が見ていると、学園長は魔力を察知したのか、こっちを見て面白そうに笑った。

手招きしてる。いかないと殺られそうな気がした。なんとなく。
なんか怖いし、行きたくなかったが、観念して降りる。

「ふふっ、確かアルネアだったか？アルベルクのヤツも面白い息子を持ったな」
俺の持ってるビッグボア素材・・・デカイから背中からはみでて

見える――
を見ながら楽しそうに言う。

「えっと、学園長は父とお知り合いですか？」
気になったので聞いてみた。

「ふむ、私の戦友だな。オルト山脈会戦では同じ砦にいた」
頷きつつ言う学園長。
なんてこった。父さんもオルト会戦に参加してたとは・・・

――オルト山脈会戦――

皇国、共和国、王国の三国連合軍と、西の帝国が激しくぶつかり合った、
一番新しい戦いである。結果は痛み分けに終わったが、壮絶な戦いだったという。
俺の生まれる2年前くらいだったか？
この戦いに学園長と父さんも参加し、一番の激戦地にして、
一番大事なラーガイル砦で戦ったんだとか。
曰く、父さんが一人で精霊使いを二人奇策で撃退し、また、敵兵を焼きまくって
『紅蓮の悪魔』と呼ばれる所以になったんだとか。

「まあ、とにかく。アルネア・フォーラスブルグ、ビッグボア討伐で15点追加だな。

さらに、素材と肉を持ち帰った功績でプラス８点！ビッグボアは旨い。」

学園長に２３点貰った！

さて、一応説明すると、このサバイバル合宿は、食料調達で点がもらえる。

点は学園長が独断と偏見で決めるっぽい。まあ、この人ちゃんと考えてそうだが。

ちなみに、食料は渡しても渡さなくても自由だが、渡さないと加点されない。

魔獣を倒しても点がもらえる。こっちは大量得点のチャンス。

俺は、６人分ほど残し、（それでもまだまだある）残りを学園長に渡したのだ。

「あ、アル！おかえりなさい！」

噂のエリシアである。俺に気づいてこっちに小走りで来た。

一応、偽装魔法で髪を金に、瞳を青にしている。白髪赤目は目立つ。

背はリリーより若干低いような気がしないでもない。髪はリリーよりかなり長いが。

やっぱり１５歳だ。

戸籍上、俺の義理の妹だったりする。

実は白いドラゴンなのだが、故郷にいられなくなって、

かつ命の危機にあったのを、俺が助けて、父さんと母さんに掛け合

ってウチで引き取った。
この世界のドラゴンは人間に変身できる。すごいな。

「おう、ただいまエリシア」
俺は右手を軽く上げて挨拶。

「ふむ、仲いいな。お前たち」
なんか学園長が火種を投下しそうな予感。

燃える前に処理せねば。

「そうですか？家族なので当たり前では？」
俺は冷静に返してみた。

「ん？いや、義理なんだろう？義理なら結婚できるんじゃないか？」
ニヤリと笑う学園長。
なんで家庭の事情知ってるのー！？
俺、この人いやだー！

「・・・・」
ほら、エリシアが顔を俯けて真っ赤だよ・・・無言だよ・・・

・・・怒ってるぜ相当に！
学園長を焼いたら洒落にならないし、俺に八つ当たりされたら困る！

「そうですか！じゃあ、用事がありますのでー！ではまたー！」

俺はそう言いつつ、エリシアの手を引いて逃げる。

「・・・・アル？」
エリシアが戸惑ったように言う。
よし、少なくとも爆発する気配は無いな！

「そうだ！エリシア、ビッグボアの肉を手に入れたから焼肉しようぜ！」
とりあえず危ない話は早く忘れるに限る。

「・・・うん、そうですね」
何かを悟ったような顔で、若干残念そうなエリシア。

むぅ、俺はなにかミスったのか？
「エリシアは何してたんだ？」

「私はずっとお散歩してました・・・」
不満そうなエリシア。

そう、＜火＞系統の魔法使いは森林破壊の恐れがあるため、お留守番だった。
代わりに食事当番なのだ。火を扱うのは得意だから、料理は適任だったりする。

「アルだって、雷鳴剣とかサンダーボルトとかで森を焼き払いそうなのにズルいですっ」
と言って、出発前にエリシアは不満そうだったっけ・・・

って、俺ほんとに焼き払いかけてたじゃん。
しかも地雷踏んだ?

「アル、そういえば焼き払わなかったんです?」
エリシアが若干頬を膨らませつつ聞いてくる。

どうせ後でリリーから伝わるしなぁ・・・

「おい、エリシア。俺を誰だと思ってる?もちろん焼いたさ!」

「あ、ごめ・・・焼いたんじゃないですか!自信満々で言わないで下さい!」
上目遣いににらまれてしまった。
あれ、なんか可愛いなこの顔。
っと、いけない。俺は顔に出るから気をつけないと。

「悪い悪い。リリーが鎮火してくれたから問題ない!」
俺はそう言って問題ないのをアピールしようとした。

「・・・アル、リリーと一緒にいたんです?」

――空気が凍った。エリシアの無表情が怖い。

「いや、たまたま雷鳴剣の着弾地点で会っただけ」

とりあえず事実を述べとく。

多分、俺だけリリーと一緒だったのに怒ってるのだろう。と、俺は思った。

じと～～って視線を浴びせてくるエリシア。

「むぅ・・・アルはこういう嘘はつけないですから本当みたいですね」

「え、そうか？」

自分ではそんなイメージは無いのだが。

「そうなんです。それじゃあ、そのお肉焼いちゃいましょう？私たちの分もあるんですよね？」

手を出しつつ言うエリシア。

俺も渡しつつ答える。

「ああ、俺、エリシア、リリー、エリス、ジョンあと予備一人分だ」

第一話：魔獣の森（後書き）

誤字発見。訂正しました。

第二話：新たな仲間たち

「――――――えいっ！」

「寝袋ディフェンス！」

間一髪、寝袋ディフェンスが間に合い、俺の寝袋が剥がされるのを阻止。

合宿まで来てなにやってんだろうなぁ・・・

ついこのあいだ寝坊をやめようと決意したんだがなぁ・・・

てか、寝袋ディフェンスってなんだ？

「――――くっ、やはり起きてたのねお兄ちゃん！」

そ、犯人はリリー。

「ふっ、俺は寝ている。これは寝相が悪いだけだ！」

俺は転がって、テントを縦横無尽に跳ね回り、リリーの攻撃を防ぐ。

「なら、今日こそは5分以内に起きてもらうわっ！」

リリーも毎朝元気だよなぁ・・・俺も他人の事は言えないが。

「クハハハ！合宿の俺は一味ちがう！」

なんか、起こされるからムキになって起きない気がしてきた。

「すぐに引ん剥いてあげるから覚悟して、お兄ちゃん！＜荒波式・布団剥ぎ！＞」

――――荒波式・布団剥ぎ――――！
力において、俺に劣るリリーが編み出した必殺技！
単調に引っ張るのではなく捻りを加える＜ローリング布団剥ぎ＞強化版！

「ぐおおお～～～」
俺は荒波に揉まれる小船の如し。
揺さぶられて、寝起きの頭が気持ち悪い。
ちょっとやばいかも・・・

「くっ、早く布団を放して！お兄ちゃん！そのままじゃ貴方の体が持たない！」

「ぐあぁっ――――！いいんだ、リリー・・・俺の・・・ことはもう、いい。」

「そんな！？お兄ちゃん！寝袋を放せば今なら――――！」

「ダメなんだ・・・ぐぁっ―ッ！寝袋が、離れない・・・！」

「そんな！そんなの！お兄ちゃんの意思でどうにでもなる！」

「リリー、エリシアの・・・あいつの事は・・・頼んだ！」

「お兄ちゃん！ダメ！そんなの嫌だよ！」

「ごめんな、リリー。こんな駄目な兄貴で・・・でも、ここは俺に任せて行くんだ・・・！」

「嫌だぁっ！お兄ちゃんじゃなきゃ嫌なのっ！」

「ぐあぁっ！・・・我侭を言わないでくれ、リリー。さあ、行くんだ！」

「嫌だ、よぅ」

「お前が行かなきゃ誰がいくんだ・・・とっとと行けぇぇぇぇ！」

「お兄ちゃぁぁ――――――ん！」

「えっと、リリー、アル、なにしてるんです？」
いつの間にかエリシアが来ていた。

仕方ない、起きよう。
でも、もう寝坊は俺の中で、俺、この戦いが終わったら結婚するんだ。
って言うと死んじゃうのと同じ・・・仕方ないんだ。そういうものなんだ。

――――さて、俺は着替えて外出て、湖の水で顔を洗った。

「うおっ、冷たい！」
湖の水は冷たかった！俺に５０ダメージ！

さて、昨日も言ったが、合宿本拠地は、この湖・・・え～と、名前なんだっけな？
たぶんハルト湖？のそばにあり、テントがいっぱい。壮観だな。
テントは全部で１００ちょいある。１年生１００人に小型の一個ずつと、
あと引率の先生たち。

皇立学校だからか、一人1テントは太っ腹だと思う。

そうそう。1年生は100人いるが、5クラスあって、1クラス20人だ。

引率の先生は、学園長と、各担任と、戦闘の得意な実技の先生数名だ。

んで、今、俺が同じクラスで仲がいいのが、

エリシア、リリー、エリス、ジョンである。

さて、ジョンを覚えている方はどれほどいるだろうか・・・

ジョンはいつかの村にグレーフェンリルが来る前に、かけっこ?で遊んだジョンだ。

あれからも、たびたび会ってる俺の大事な男友達だ。

まあ、ジョンは豪快というより繊細な性格だが。

んで、エリスは色々あって、ジョンが惚れてる女の子だ(俺主観)

この国の筆頭貴族十二家(通称十二家)の娘で、身分は高いのだが、

丁寧で優しそうな感じ。ちなみに黒髪黒目でなんか懐かしい。

俺も前世は日本人だったからな。

あ、忘れてると思うので言っておくと、ジョンは茶髪(天然)に茶色の目だ。

「あ、アルさん。おはようございます」

噂をすればエリスである。アルさんって、バル○ンみたいだよな。

「おう、おはよー」

俺はもう一度自分の顔に湖の水をかけ、頭を完全に覚醒させた。

「冷たそうですね・・・大丈夫ですか?」

俺の横に立って、エリスが湖を覗き込む。

「ん、まあ。冷たいほうが目が覚めるしね」
ほんとに冷たいのが嫌なら、火魔術でお湯にできるしな。
と、エリスが何か悩んでる模様。
ふむ。

「土よ、その姿を変えよ＜アース・トランス＞」
「水よ、＜ウォーター＞」
「火よ、＜ファイヤ＞」

さて、俺の三連術で土の器ができ、水が入り、あったまってお湯になった。

「よし、できたー。エリスー、使っていいぞ～。んじゃな～」
若干呆然としてるエリスを尻目に、俺は自分のテントに歩き出す。

「あ、ありがとうございます！」
お礼を言うエリスに振り返らず手を振り、俺はそのままテントに戻った。

おお、なんか俺、珍しくカッコ良くなかったか？
・・・自分でそんなことを考える時点で終わってるか。

俺は、テントに入って、「封印」しておいた＜アウロラ＞と＜アリアティル＞を手に取った。
「封印」と言うと大仰な感じだが、要は盗難防止の結界だ。
俺が結界に使った以上の魔力を掛けないと破壊できない。

一々そんなことするぐらいなら持ち歩けよ！って普通は考えるが、

例外もある。
俺は、その例外の理由である、青い宝玉（見た目ビー球にしか見えない）を手に取る。

これは、魔法玉と呼ばれるもので、ある程度、魔法を維持できる優れものだ。
まあ、一個につき一個しか魔法を記録できず、上書き不可だし、攻撃魔法なら、基本的に一回で壊れるし、あんまり容量が必要（つまり複雑）な術は無理。
でも、結界などにはとても便利なのだ。まあ、結界を破られると壊れるし、値段が高い。
一個でノートパソコンを一台買うくらいの気分だな。
前世の俺なら無理だったなぁ・・・

さて、俺は腰に2本の剣を下げ、制服の上に黒いコート（防御魔法付加）を着た。

ラルハイト校の制服は、皇国のカラーであるところの、白地に青いラインがあしらわれたなんか騎士っぽいデザインだ。
男子はズボン。女子はスカート。

なんか、ラルハイト魔法学校は、魔法学校だが、騎士的要素もあるところらしい。
まあ、卒業生の進路の９９％が騎士団だから、当然のなりゆきか。
１８歳で卒業して、騎士団は１８歳から。
しかもラルハイト校の卒業生は若干優遇され、
騎士はこの世界的にもっとも高貴な職業とされている。子どもがなりたい職業第一位だ。

体力の無い優秀な魔法使いも、騎士団の中にある、魔法部隊に入れば全く問題無い。
まぁ、両方無いと入れない魔術騎士団より若干立場が低いが。

ちなみに俺は何も考えてない。
まあ、お金は稼がないといけないけどなー、とは思ってるが。

さて、俺は身だしなみが完璧なのを確認して朝食へ。
これでも俺は貴族であり・・・というか、父さんと母さんの顔に泥を塗るわけにはいかない。
あんなんでも、すばらしい両親なのだ。

『――アル、ごめんな。今まで黙っていたが、私たちは本当の両親じゃないんだ』

そう、俺なんかを引き取って育ててくれた。いつか恩返しをせねばなるまい。
とりあえず優秀な成績を取って安心してもらわないとなー。
今日も魔獣狩りかなー。
なんて思いつつ、朝食会場の広場へ・・・

「って、なんだよこの焦げ臭いにおいは!?」
思わず叫んでしまうくらい焦げ臭かった。

「いいか！肉焼きもできないヤツにハンターの資格はない！
しゃべれる猫に一括して焼いてもらおうとか、生焼け肉でもいいだろー。
とか思ってるヤツは自分が食ってみるがいい！」

学園長が朝食を食べたい奴全員に、自分で肉を焼かせていた。
てか、俺たちはハンターじゃないんだが・・・

さて、この国では、魔力が高い（つまり仕事ができる）人間が身分が高く、貴族になった建国時の事情がある。
昔のこの国の貴族は周辺国一、立派だったらしいが、建国７００年で、大分酷い。
なんか悪い貴族のイメージそのままだ！
いや、父さん母さんやリリーや兄さんやエリス等は立派だ。礼儀を弁えてるし。

おっと、本来の趣旨からずれた。
まず、魔力が高い人が貴族になった。
次に、長年貴族同士の結婚とか、魔力が高い平民を貴族にしたりした。
で、魔力が高い人は８割がた貴族である。
そして、この学校は学費いらずとはいえ、名門校。魔力量は大事。

あ、忘れてた。魔力量とかは遺伝がかなり強い。

んで、この学校の生徒の８割は貴族であり、自分で肉を焼いたことなど無い。

そのため、この焦げ臭い惨状である。
生焼けでなんとも言えない顔をしてる生徒もいる。

この世界は、こんがりな肉が好きな人が多いのだ。
というか、いい肉ばっか食ってる貴族には超苦行。

さて、肉は学園長が直々に手渡す模様（絶対不正を防ぐ気だ）
まあ、俺もエリシアほどじゃないが肉焼きは得意だ。
エリシアの焼いた肉は反則級に美味だ。
リリーは調味料を持たせなければ料理も上手い。（ただしお菓子は例外ですごく美味しい）

「おはようございます、学園長」
俺は一礼しつつ、挨拶した。

「きたか、アルネアよ。貴様の父の壮絶な料理を思うとかなり不安なのだが・・・平気か？」
なんか学園長に心配された！？
この人を不安にさせる料理って何！？

「む、聞きたいのか・・・アルベルクは、料理当番の日に壮絶に辛いご飯を炊いた。
そして、それで全員が悶絶している時に魔獣に襲われてな・・・」
父さん！ご飯を炊く時に何をしたのさ！？

「まあ、それは良くってだな」
いいのか!?良くないだろ学園長!

「問題は、ヤツがスープを作った時だ。何を入れたかしらんが、鍋から7色の煙が出てきて、気がつくと全員眠っていたという・・・」
学園長は、あれは酷いにおいだった・・・と、言いつつ遠い目をしている。

俺は血が繋がってないが、兄さんは平気なのだろうか・・・
いや、兄さんが料理上手なのってイメージできないし、ダメなんだろうなぁ・・・

「えー、まあ俺は料理は大丈夫ですよ」
俺はそういうが、学園長は疑わしそうな目で見てきた。

「まあいい、ほら、お前の分だ」
学園長から生肉の塊を受け取り、空いてる場所を探す。

と、嫌なヤツと目が合った。
金髪でキザそうな顔の男。やたら豪華なコートを着てる。

「おや、誰かと思えばフォーラスブルグじゃないか。
なんだそのボロいコートは?名誉ある十二家の自覚はあるのか?」

えーと、十二家のどっかの家の長男らしい。名前は忘れたが。

「――俺の名前は、ガルシア・ハイラスブルグだ！」
そうそう、ガルシアだった。
ん、俺声に出してたんだな。はっはー。

「くっ、生意気な！俺は昨日、＜ヘル・スネーク＞を狩って合計１５点獲得したんだぞ！」
と、お怒りのガルシア。
ちなみに、＜ヘル・スネーク＞は、巨大な蛇。魔力装甲を使い、獲物を絞め殺す。
毒は無いのがせめてもの救いか？ランクＣ＋。学生としては立派だな。
ま、俺は２３点だが自慢する趣味は無い。
なので――。

「そっか、肉焦げてるぞ？」
俺はそう言って、場所探しを再開。

「ば、馬鹿な――――――！？」
ガルシアの悲鳴が響き渡った。

しばらく歩くと、無表情で肉を見つめつつ焼く銀髪の女の子を発見。
なんか、焦がしそうだな。
エリシアという達人・・・達竜？の肉焼きを何度も見てるので俺も肉焼き名人なのだ。
ガルシアみたいな馬鹿はともかく、真面目に焼いてる女の子が肉を焦がすのは忍びない。

「そろそろいいんじゃない？」
声を掛けてみた。
すると、こっちを振り返る。

「・・・わたし？」
若干小首を傾げつつ、少女は言った。碧のきれいな瞳だった。

「そう、お肉こんがりいい感じ。」
俺はとりあえず状況説明。
女の子は火から肉を外し、息を吹きかけて冷ましてから、一口かじった。

「・・・おいしい。ありがとう。」
うん、女の子にお礼を言われると悪い気はしない。
いや、男相手でもお礼を言われればそれなりに嬉しいぞ？相対的にアレだが。

「おう、どういたしまして～。んじゃな～」
俺はそのまま湖側へ歩き、いい感じの場所を発見。
そこで俺も無事に肉を上手に焼けました～！

で、しばらくして学園長より召集がかかった。

「さて、お前たちは肉焼きの難しさを経験しただろう。
これは騎士になった私が、野営で肉も焼けない騎士に失望したため、考案した。

食料が尽きて、頑張って動物を狩って食べようという時に、
肉が焦げる！生焼け！しかも文句ばかり！
そんなことでは立派な騎士にはなれん！
自分の食事すら作れなくては、生き残れない時もある！

別に騎士になるつもりじゃないとか思った奴！
今年から募集要項に騎士の訓練をすると記載されてる！
確認しない奴が悪い！
あと、まだ話してなかったが、この合宿の期間は無制限だ！
私が納得するまでやる！
そして、明日になったら此処のキャンプは撤去し、サバイバルを開始する！」

・・・とんでもない人だと思っていたが、学園長は俺の予想以上だった。
期間無制限？サバイバル？

「どうなんのかなぁ」
俺は、周囲の愕然とする生徒たちを尻目に、呟いた。

第二話：新たな仲間たち（後書き）

本来の1章は色々あって封印したので、もうストック0です・・・
なので、余裕が無いので誤字・脱字などありましたらごめんなさい。

第三話：譲れないもの

俺の剣――＜アリアティル＞が碧色（みどりいろ）の軌跡を描き、
巨大な蜂――＜キラービー＞が青緑の体液を噴出しつつ、地面に落ちる。

後ろから接近する気配。５つか？
右斜め後ろから３つ。

俺は、後ろに振り返り、アリアティルに魔力を込めた。

「切り裂け！＜ソニックブレード！＞」

アリアティルから緑の真空波が飛び出し、後ろにいた４匹のキラービーを撃破。
が、キラービーの速度は速い。
４匹に接近されてしまう。

俺は慌てず、アリアティルを左手に持ち替え、右手で＜アウロラ＞を抜いた。

「はぁ、雷使えないのはきついなぁ」
俺はぼやきつつ、２本の魔法剣に魔力を込めた。

２匹のキラービーが針を突き出しつつ突進。
残り２匹は背後に回りこむようだ。

キラービーの針には毒がある。すごい危ない。
囲まれたら面倒だと判断した俺は、

2本の魔法剣の刀身を包む魔力の範囲を拡張。（刀身を伸ばしたのと同じ効果が得られる）

「いくぞ！＜風車！＞」

俺は、回転しつつ剣の魔力を風魔力に変更。
カマイタチを巻き起こして、一気に周囲の木ごとキラービーを微塵切り。

「むぅ、結局森林破壊してしまった・・・」
無残に切り取られた俺の半径5メートルの木々に心の中で謝る。

さて、そろそろ説明しておこう。
魔法は詠唱なしで使うのは困難だ。
戦闘中にブレずに、火の玉を作り出すのをイメージするのは難しい。

そこで生まれたのが、＜剣技＞だ。
剣に魔力を込めて振れば、剣が切り裂くイメージに乗っかることで真空波を放てる。
あの、＜ソニック・ブレード＞が代表的な剣技である。
魔法剣ならば、その剣の属性に応じて補助が得られる。
＜アリアティル＞は風属性。＜アウロラ＞は・・・風以外アリアティルより強いな。無属性？

まあ、剣技には剣と動きが連動する必要があるため、対人戦で動きを読まれやすいというデメリットがある。
また、魔法剣によって使える剣技の魔力量が決まっており、剣技より魔術のほうが時間はかかるが高い威力を出せる。

まあ、臨機応変に使い分けられるのが一番いいな。

昨日俺が使った＜雷鳴剣＞、＜疾風剣＞、さっきの＜風車＞は俺のオリジナルだ。

さて、かれこれ１４匹ほど倒したキラービーの針を回収。

「う～ん、一回帰るかなぁ」

そろそろ荷物が限界だ。

今日の獲物はヘルスネーク１匹に、キラービー１４匹。

あと、肉が美味しい、ジャイアント・ラビット３匹だ。

ジャイアント・ラビットは、ウサギとしてはヤバイ大きさだが、せいぜい１，５メートルくらいだ。

まあ、日頃から鍛えてる（転生してからだが）俺には軽い。

なぜか俺はムキムキにならない。一見筋肉なさそうに見えるくらいだ。謎だ。

まあ、無さそうに見えるだけで相当パワーはある。（と思う）

「アルネア、いきま～す！＜ウイング！＞」

なんかとっさに浮かんだフレーズで俺は空に舞い上がる。

「あー、風が気持ちいいな～。」

空を飛ぶのはいいよなぁ。

と、ほんわかしていた俺だが、戦闘中らしき魔力を感知。

「む、ちょっと大物魔物と誰かぶつかったのか？」

一応、見に行ってみる。もし困ってるなら助けないとなー。

で、少し飛ぶと、木々が薙ぎ倒されていくのが見えた。

なんかどっかで見た光景である。
うん、昨日見た。
さらに速度を上げて接近。

「あ～、やっぱりか」
そう、やっぱり＜ビッグ・ボア＞だった。
んで、追われてるのは・・・
えっと、昨日肉を焦がして絶叫してた・・・誰だっけな?

と、その追われてる人物は、横に飛んでビッグボアの突進を回避。
「俺は、ガルシア、ハイラス、ブルグだ!」

おお、そうそう、ガルシアだった!また声に出してたか。
息も絶え絶えだが、ビッグボアは急には止まれない。
戻ってくるまでに若干の余裕はあるだろう。

「って、フォーラスブルグ!?貴様、飛んでいるのか!?」
あ、そうだ。飛行魔法って高難度だった。ガルシアは唖然としてるが・・・

「まあな。で、戻ってくるぞ?ビッグボア。」
俺は一応警告することに。
ふむ、ビッグボアは荷が重いんじゃないか?
精霊剣じゃなくて魔法剣みたいだしな。
でも、貴族って助けられるの嫌だろうし・・・

とりあえず・・・
「なぁ、協力しないか?」

「なんだと!?ヤツは俺の、ッ獲物だ!」

横っ飛びで突進を回避しつつ言うガルシア。器用だな。

とりあえず上空3メートルくらいに滞空してる俺には余裕があるが。
お、今度はビッグボアもあんまり行き過ぎなかったな。
大体5メートル向こうで急停止。反転する。

「だけどなぁ、ビッグボアの魔力装甲はとんでもないぜ?」
そう、ビッグボアみたいな単調な突進しかしない魔獣がランクBにまでなる理由は一つ。
とにかく硬いのだ!チェーンソーでガリガリやっても効果がなさそう。
しかも、そんな硬くてデカくて、重たい物に突進されたら、ひとたまりもない。

「ぐぅっ、確かに、そうだが・・・貴様はアレを倒せるのか?」
悔しそうな顔でこちらをみるガルシア。

う~ん、そうだな・・・
「周囲への被害を考えなければ。森が燃える」
さすがに雷以外だとかなり面倒だ。

「・・・わかった。そっちは俺がなんとかしよう」
お、なんか意外と理解のあるガルシア。
と、ビッグボアが突っ込んでくる。

「はぁっ!」
華麗にガルシアが回避した。
ビッグボアはまたしても通り過ぎ、4メートルほど向こうで止まった。

俺は、＜アウロラ＞を右手で引き抜き、ダーツを投げるモーション。
「白き雷よ、我が剣に集いて虚空を切り裂く刃となれ！＜鳴雷！＞」

――――ズガァァァン！
「――――グガァァァ！？」

ちょうど振り返ろうとしていたビッグボアに＜雷鳴剣＞強化版の＜鳴雷＞が直撃。
空中から放ったので、＜アウロラ＞はビッグボアの腹を貫通し、少し先の地面に着弾。
雷を撒き散らす。

「な、＜雷＞属性だと！？」
ガルシアが驚いている。そっか、火属性かと思ったんだな。
ウチって火魔法の家系だしな。俺は森が燃えるとしか言ってない。
ん、森が燃え・・・？
「燃えてる！おい、ガルシア早く消すぞ！」

「！？わ、わかった！」

――――数分後。

「はぁ、やっと終わった・・・」

俺は、倒すことより、倒した後のほうが疲れた。
エリシアぐらいの焔使いなら、火を一箇所に集める方法で即鎮火できるのだが・・・
まぁ、それでも燃えるものは燃えるし、全力でやると焦土と化すだろうが。

「まさか、こんなに消火が大変とは・・・」
ガルシアも疲れている。

まあ、つかれたし帰るか。
「よし、じゃあ、ビッグボアは半分もらうな～」

「な、ほとんどお前が倒しただろ！？」
驚くガルシアは放っておいて、魔力装甲の消えたビッグボアを＜アウロラ＞で真っ二つ。
ひょいっと抱えて、俺は帰る。

「んじゃ、またな～。お空を自由にとびたいな～＜ウィング！＞」

「なんてヤツだ・・・」
ガルシアはしばらくその場に立ち尽くした。

さて、空から帰ってくると学園長がお出迎え。
そういえば、なんで学園長なんだ?学校長じゃないのか?

「なんだ、そんなことも知らんのか?
正式名称は、皇立ラルハイト魔術士養成魔法学園だ。
面倒なためにラルハイト魔法学校と呼ばれる。」
また声に出てたらしく、学園長が説明してくれた。

「なるほど、ありがとうございます。ところで常に学園長が帰りを待ってるんですか?」
俺はなんとなく気になって聞いてみた。

「もちろんだ。全て私が点をつけねば、採点者の違いで点が変わったら一大事だ。」
・・・この学園長は、とんでもないだけじゃなくてやる気もあるらしい。すごいな。

とりあえず獲物をみせて採点してもらう。

「ふむ、キラービーの針が14匹分・・・巣にでも突っ込んだのか?」
学園長に若干あきれられてしまった。

「いえ、ヘル・スネークを倒した時に、<ソニック・ブレード>が巣に当たりまして。」
うっかり当てた巣から一斉に小型犬サイズの蜂が出てきた。
いやー、怖かったなー。思わず走って逃げてしまった。

「まったく、とんでもない数だ。こんなのが村にでたら凄まじい被

害だぞ」
そう、学園長の言うとおりで、キラービーは人里を襲ったりするのでかなり危ない。

「いやー。肝が冷えました」
俺も、もうあんなのは御免である。

「で、またビッグボアか？」
学園長に、どんなエンカウント率だ？って目で見られた。

「今回は偶然あった人と協力しました」

「それでも凄いがな・・・合計で６０点。キラービーの群れを撃滅ボーナス。
大型魔物連続撃破ボーナス。さらに協力ボーナスが入っている。
アルネア、お前の合計点は８３点だ」
と、学園長。まさか、全員の点を覚えているのだろうか・・・

「ところで、８３点って多いんですか？」
気になったので聞いてみた。

「うむ、今のところ1位だな。現在の2位は５０点でローラ・フィリスタイン。
３位は４９点でエリシア・フォーラスブルグだな。
キラービーの巣を突いて、しかも殲滅する阿呆はいまのところお前だけだ」
と、言われてしまった。
が、あのエリシアが3位？ローラって誰だ？

っと、エリシアは森林破壊の危険があるから全力は出せないんだっ

た。

というか、どれだけエンカウントするかも大事だな。

とりあえず俺は学園長に別れを告げ、ちょっと休憩することに。

と、湖のほとりに銀色の髪が見えた。
昨日の肉焼きの時の女の子だ。

「・・・なにしてるんだろ?」
けっこう気になった俺は、そっちに歩いて行ってみた。

「なあ、何してるの?」
とりあえず話しかけてみる。

「・・・なにもしてない」
少女は振り返らずに答えた。
まあ、そっけない反応だが、これはいきなり用もないのに声をかけた俺が悪い。

「そっか、ごめんな邪魔して」
謝って別の場所へ移動することに。

「・・・じゃまじゃないけど。何か用なの?」
そう言って少女はこちらを見た。

「いや、なにしてるのか気になっただけなんだ。悪いな」
俺は、そういって立ち去ろうとした。

「・・・何もしていないけど、湖を見てたの」
少女はそう言った。

「ん、湖を見ていたのは何かをしていた中には入らないのか？」
まあ、なんか気になるよな。

「なにをするともなく、ただなんとなく見てたから」
ん～、わかるような、わからないような。

「そっか、いい景色だもんな。それじゃ、またな」
俺はそう言って立ち去った。

さて、とりあえず俺は明日以降の食料を確保するため、
今日手に入れたジャイアント・ラビットの肉を干し肉にする。魔法で。
ジャイアント・ラビットは逃げ足は速いが危険性は皆無なので、
食料としては高得点だが、魔獣討伐の点は入らない。
が、明日からサバイバルらしいので、食料を優先した。

それが終わる頃、ちょうど日が暮れ始めた。
日が暮れると危ないので、みんな帰ってきた。
そして俺は、いつものメンバーと集まっていた。

「いやー、今日は大変だったぜ・・・」
俺は、大量のキラービーを思い出して遠い目をしつつ言った。

「むぅ、アルはどうやって８３点も稼いだんです？」
エリシアが何してたんだよって目で見てきた。

「そうだよお兄ちゃん！私なんてまだ２６点だよ。私の3倍以上だよ！？」
なんて兄だ！って目で見られた。リリーの術は攻撃向きじゃないからな。

「リリー、僕なんて１２点だよ・・・」
ジョンはがっくり肩を落としている。ジョンに５０ダメージ！

「えっと、ジョンさん。大丈夫ですよ。１２点でも十分ご立派です」
落ち込むジョンを慰めるエリス。そういえばエリシアと名前似てるよな。
エリシアに名前付けたの俺だが。
ジョンは４０回復した！

「エリスさんは何点なんですか？」

おっと、エリシア。それはまずいんじゃないか？

「えっと・・・２５点です」

気まずそうに言うエリス。

ジョンに　つーこんのいちげき！　２００ダメージ！

ジョンは　たおれた。

♪～～デレレレレ～ン！

ジョンは　めのまえが　まっくらになった。

エリスも十二家だから強いんだよな。まあ、攻撃向きじゃないが。

ジョンも攻撃向きじゃないから気にしなくてもいいと思うんだがなぁ・・・

いや、ジョンはエリスに惚れてる！（多分）

「やっぱり男には譲れない何かがあるんだよな」

俺はとりあえずまとめにかかる。

「お兄ちゃんの譲れないのは寝坊でしょ」

「アルが譲れないのは寝坊です」

いや、事実だけどさ・・・

第三話：譲れないもの（後書き）

序章が長すぎることに気づきました。
・・・一章のほうが序章より短かかったら悪夢だ！

えーと、突発的・不規則・不定期更新です。
こんな作品を読んで下さった方。ありがとうございます！

第四話：拠点

俺は森の中を歩いていた。
実はかな～り丈夫な白と青の制服（長袖長ズボン）に黒いコート。
（前に軽く流したが、コートを着るのが今の皇国の流行なのだ。あと、俺は寒いのイヤ）
腰には愛剣＜アウロラ＞と＜アリアティル＞。

さて、父さんが俺を引き取ってくれたのは前に言ったが、
別に両親にすてられた訳じゃない。

父さんが領主の仕事で、ティルグリム山脈近くに行った時に、
瀕死の重傷を負った俺の母さんに会って、俺の事を引き取ってもらえないか頼まれたそうだ。

そのときに俺が成長したら＜アウロラ＞を渡して欲しいと頼まれ、
預かったらしい。
つまり、この剣は母さんの形見でもある。
ちなみに、父さんはせめてものお礼にと、
魔法剣＜エルディル＞をもらったが、エリシアに似合うから。という理由であげている。

確かに白い＜焔＞属性の剣でぴったりだが。
いい父さんだよな。
いい意味で論外だ。（論ずるまでもなく良い人という意味だ。今回は。）

さて、もう一度言うが俺は森を歩いている。

なんで飛ばないの？って感じだが、理由は簡単。

飛行魔法は魔力消費が激しいのだ！

明確な目的地があるならまだしも、あてどなく大量の魔力を消費するのは良くない。

サバイバルである以上、夜も大変なのだ・・・魔獣の森だし。

二人以上いれば交代で寝れるんだけどなぁ・・・

なんで一人なのか、その理由を説明・・・いや、少し回想をしよう。

――――さて、時刻はおよそ3時間前。午前8時頃だ。

テントは全て魔法によって撤去が完了し、俺たち生徒は学園長に集められた。

「さて、お前たちも大分肉焼きができるようになって何よりだ。

先日の宣言通り、今日からサバイバル合宿とする。

私はこの場所で採点を行う。他の先生方は巡回する。

他の先生に獲物を見せても、私が採点できる。甘い先生に見せても無駄だ！

当然、二人以上のほうが有利だが、今日の間は合流を認めん！

明日以降は偶然出会った場合は、合流しても構わんが。

お前たちは、一人でいることの危険さを今の内に知れ！

一人で何でもできるなどと甘い考えは持つな！

さてと、ここで大切なのが、先ほど配った魔法玉だ。（2話参照）
三つ配ったそれぞれが、シールド、発信機、緊急離脱の3つとなる。
シールドは一人が二つ以上持つと、互いに打ち消すから気をつけろ。
シールドの魔法玉が破壊されたら、すぐさま緊急離脱の魔法玉を発動しろ。
最寄の先生のところに転移する。

あと、シールドを過信すると死ぬ。お前たちなら平気だと思うが、絶対死ぬなよ。
死なないことが最重要なのは、どこでも同じだ。
生きていれば、及第点は間違いなくやる。それでは、健闘を祈る！」

――――という感じだった。

・・・とんでもない先生だよな。
まあ、きちんと色々配慮はされてる気はするが。
あと、＜火＞属性の生徒もサバイバルはやる。
前回行かせずに食事を作らせたのは、「食事を作ってくれる存在のありがたさを知れ！」とのこと。
あと、役割分担の大切さだったっけな？

そんなわけで、俺は魔力を温存してるのだ。
本来ならば食料探しをしなくてはならないが、昨日の干し肉に、今朝汲んだ湖の水がある。

というか、水も念のために汲んだだけで、魔法でどうにでもなる。
学園長には感心されたが。

まあ、何が起こるか分からないしな。
魔法が効きやすい場所とか、効きにくい場所とかあるらしいし。

魔法の効きやすさっていうのは、そんなに大差がでるものでは無い。
まあ、迷宮の中だと効きやすかったり、効きにくかったりが極端らしいが。
地脈と精霊と気勢と相性と気運と星の巡りがなんとかかんとか？

・・・まあ、難しかったので割愛。
つまり、魔力はプライスレス。お金じゃ買えない。大切に。

某空飛ぶアイテムも連続で飛んだらバッテリーが切れて、
大事なときに、「またバッテリー切れぇ！？」ってなるから。
魔力も温存したほうがいいのだ。

「とりあえず安全に眠れる場所があればいいんだけどなぁ・・・」
結界を張って寝る手もあるが・・・
ビッグボアに突進されたら最悪だな。

「でも、ビッグボアはそうそう会う魔獣じゃないしな・・・」
二日連続エンカウントの為、説得力は皆無だが。

と、なにかおかしな気配を感知。

「なんだ・・・？魔力の流れがおかしい」

俺は、何か漠然とした――だが、確かに異変を感じた。

「なにか隠蔽呪文がかけられてるのか？」

そう、まるで何かが隠されてるように感じたのだ。

が、次の瞬間にはその感覚は既に無かった。

「・・・天駆ける疾風の翼をこの背に！＜ウィング！＞」

俺は、とにかく安全を確保するべく、一旦空へと舞い上がった。

（・・・ない。何も無い。）

上空５０メートルほどまで一気に舞い上がり、周囲の魔力を探知するが、

遠くに人間らしき魔力をいくつか感じるのと、

小型の魔獣の気配ばかりだ。

先ほどの違和感の正体も、強力な魔獣の気配も無い。

（でも、魔獣は人間よりも上手く気配（魔力）を隠すからな・・・）

俺は、念を入れて南へ移動することにした。

――さて、南へおよそ5キロ（俺主観）移動し、

俺は魔力温存について思い出した。

俺は、森の少し開けた場所に着地。

「お、池がある」

俺は池に近づき、水質チェック。

うん、大丈夫そうだな。たぶん。

よ～し、昼ごはんにするか！

今日の昼ごはんは干し肉焼きと、湖から汲んでおいた水。

いや～、質素だが、食事があるって素晴らしいな。

「そうだ。自分で拠点を作ればいいんじゃないか」

そう、そんな立派なものじゃなくていい、ちょっとした秘密基地みたいなので・・・

魔法があるから丈夫につくれるだろう。

そんなわけで、俺は残りの時間を拠点作りに費やした。

――――新番組！「劇的？ビーフ＆アフロー！」――――

＊　この企画は、アルの脳内で行われました。よって、今いない人物も登場します。

また、突発的企画なので、しつこいのが嫌いな方はスルーして下さい。

♪～～チャラララ～ン、チャ～ラン、ラン！チャラララ～ン、チャラララン！

「えっと、なんということでしょう？　本日も始まりました。『劇的？ビーフ&アフロー！』
実況はエリシア・フォーラスブルグです？」

「解説は、私！リリネア・フォーラスブルグです！」

「えと、リリネアさん、本日はどのようなお宅なんでしょうか？」

「はい、エリシアさん。今回のお宅はこのような感じです！」

――――デデーン！

「なんということでしょう。ただ池の近くの広場に穴が掘ってあるだけですね」

「はい、そうなんです。今回のお宅はただの穴です。
このままでは風通しも悪く、カビが生えそうです。
雨も吹き込んできますし、お風呂場も台所も階段すらもありません・・・」

「なんということでしょう。魔法製、築5分だそうです」

「そうなんですね～、非常に手抜き工事ですね！
工匠はこの家をどのように変身させるのでしょうか？」

「なんということでしょう。
今回、この家を改修していただいた工匠は、アルネア・フォーラスブルグさんです」

「どうも。アルネア・フォーラスブルグです」

「ようこそいらっしゃいました。おにぃ・・・アルネアさん。
今回の改修のテーマをお教えくださいますか？」

「はい、そうですね・・・今回は防犯を重視してみました。」

「なんということでしょう。ただの穴に防犯なんてあるのでしょうか。

では、ＶＴＲを見てみましょう」

「え～、まず工匠は、内装に手をつけるようです。

さあ、この水がしみこみやすく、ゴツゴツザラザラの床をどうするのでしょうか」

「なんということでしょう、そこら辺に生えてた柔らかい草を敷き詰め始めました」

「これは、おにぃ・・・アルネアさん。どのようなものですか？」

「はい、これはそこら辺の草ですね。これで床が柔らかくなります」

「なんという手抜きでしょう。面倒なので結果を見ましょう」

♪～～チャララ～ラ～ラ～ラ～～。チャララ～ラ～ラ～ラ～。

「なんということでしょう。

ゴツゴツザラザラだった床も、工匠が敷いたただの雑草でふかふかに？」

「これで、問題だった快適さも多少改善されたのではないでしょうか？
次は、玄関をみてみましょう」

「なんということでしょう。ただの穴だった入り口に扉が付きました」

「おおっと、これは大きいですね。工匠さん、これにはどのような工夫があるのでしょうか？」

「はい、これにはバリアや強化呪文が掛けられているので、百人乗っても平気です」

「なんということでしょう。このバリヤで防犯も物置もバッチリです？」

「こうして、また一つの家的な何かが救われました！」

「なんという宣伝でしょう。当番組では、工匠に改修を依頼したい、家のようだけど家じゃない何かを募集しています？」（現在は締め切りました）

「工匠が、貴方の家のようだけど家じゃない何かをある意味劇的に？改修します」

「「「それでは皆さん、またお会いしましょう～！」」」

「えっと、この番組はフォーラスブルグ家の提供でお送りしました」

――こうして、俺の拠点は完成した。

第四話：拠点（後書き）

なんだか想像以上にたくさんの方に読んで頂いたみたいで驚いてます。
こんな更新速度しか取り柄の無い作品を読んで下さって、
本当にありがとうございます。

第五話：イレギュラー

さて、お手製の拠点で目覚めた俺は、外に出て、池で顔を洗ってご飯を食べた。

「今日のメニューは干し肉のステーキに、ただの水でございま～す♪」

あ～、サバイバル嫌だな。というか、食料を補充せねば。

俺は、魔法玉で（２話で剣に使ってたヤツ。結界は壊されなければ何度でも使える。）結界を張って、食料を探しに行くことに。

「あ、そういえば今日から仲間ＯＫだ」

そう、今日から学園長はパーティの編成を許可している。

が、とにかく仲間にすればいいわけではない。

気の合わない仲間がいても困るだけだろう。

さて、俺はいつもの飛行魔法で空から仲間ｏｒ食料を探すことに。

「はぁ、空は広いなぁ・・・」

今日も晴天。小春日和？だ。今は４月２３日だったりする。

あれ、小春日和っていつ使える言葉だっけな～とかおもいつつ・・・

『――――小春日和は、春じゃない。冬の季語。』

（――――んな！？）

俺は、いつかの、誰かの、声を聞いた気がした。

が、

（――――駄目だ！思い出せない。俺は何か忘れて・・・！？

・・・いや、もう俺には関係の無い世界のことだ。俺は、もう・・

・）

俺は、迷いを断ち切るべく、全力で飛行しようとして何かを感じた。

（――――魔力！ビッグボアじゃない！もっと荒々しい！）

俺は、かつて無く荒々しく強力な魔力を――。

（いや、＜グリディア＞ほどじゃない。アイツは底が見えなかった。

）

俺は、どうするか迷い、そして、その存在に追われてるらしい魔力を察知した。

「――――この魔力！人間が追われてるのか！？」

ならば一刻の猶予も無い。

俺は＜アウロラ＞を抜き、魔力を集める。

「我が体は稲妻！空を裂き風よりも早く進む！＜サンダー・ミグラトリィ！＞」

――――ドガァァァン！

俺の体は稲妻と化し、巨大な魔力の方向へ一気に移動し、気配の付近で急停止。

そして、その正体を見た。

赤い鱗に覆われた、５メートルもあろうかという巨体。
鋭い爪、牙。
やはり巨大な翼。
そして棘の付いた尾。
２本の細いながらも強靭そうな脚。

（――――ワイバーン！？）

Ａランクに相当する、強力な魔獣の姿がそこにあった。
ドラゴンほどでは無く、また、話も通じないらしいが、その戦闘力はＡランク最強と言われる。
だが、魔獣の森には生息していないはずだ！

が、現にいるものは仕方ない。
とにかく、追われている人を助けて逃げようと思った。

そして、追われていた気配、近づいたので二人と分かった――、のほうを向き、俺は見た。

ウチのクラスの担任である、まるで生徒みたいな先生が、一緒に逃げていた生徒に、
何かを呟き、先に逃がすのを。
その生徒が何か言って、おそらく助けを呼びに走るのを。
そして、その小さな先生が、ワイバーンに立ち向かうのを見た。
俺には訳が分からなかった。

――どうして先生は転移で逃げない？

――ワイバーンが出るのは予想外で、先生が対処できない魔物は想定外だったんだろう。

――生徒の持ってた転移の玉は？

――それを使ったから、先生といるんだろう。

――先生はワイバーンに勝てるか？

――無理だな。あの先生の専門は治癒だ。

――どうしてこうなった？

――こんな場所にワイバーンがいるはずは無かった。
そして、ビッグボア程度なら、どの引率の先生でも勝てた。
だから、転移の玉を使うと最寄の先生に移動する仕組みだった。

読みが甘いとも言えるが、イレギュラー過ぎたな。
転移して逃げたはいいものの、すぐ近くに転移。
すぐにワイバーンに補足された。
そして、先生は命がけでワイバーンを足止めする。

――俺なら、勝てるか？

――どうだろうな？

先生が、ワイバーンに無数の水球を放ち、
しかし、ワイバーンの放った熱線に全て焼き尽くされ、先生が吹き飛ばされる。

『アルちゃん！教室では先生は絶対権力なんですよっ！』

学校の初日に、先生が言ってた言葉を思い出した。
――ッ！？馬鹿か俺は。なんで悩んでるんだよ！
勝ち目が無くても諦めたら駄目だろう！

あんな意味の分からない先生、助けないわけにはいかないだろう？
あれ、なんかいい話っぽく言ってるけど、何かおかしくないか・・・？

「天をも切り裂く稲妻よ！我が敵に裁きを！＜サンダーボルト！＞」

――ドガァァァン！

晴天に雷鳴が轟き、ワイバーンの額に直撃する。
が、ワイバーンの魔力装甲で簡単に弾かれてしまった。

（・・・うわぁ、やる気なくなるなぁ）
いともたやすく弾かれてしまったが、本来の目的は果たした。

「――――グガァァァァ！」
ワイバーンが怒りの咆哮をあげ、俺を睨みつけた。

「そうだ、それでいい！お前の相手は俺だ！」
俺は、右手の＜アウロラ＞を構え、左手で＜アリアティル＞を抜いた。

――風が耳元で唸りをあげ、俺の体を叩く。

一気に加速して突っ込んだ俺に対して、ワイバーンは熱線を噴いて迎え撃つ。

俺は急上昇して回避し、2本の剣に魔力を集める。

「喰れ！＜ダブル・ソニック！＞」

二本の魔法剣から、白と碧の衝撃波が飛び出し、ワイバーンを狙う。

が、ワイバーンは横に飛んで回避。

そのまま反転、加速して、こんどは向こうから突っ込んできた。

「――――グガァァァ！」

ワイバーンの口から先ほどの数倍の大きさの熱線が放たれる。

（――――デカ過ぎだろ！？避けられない！）

とっさに判断した俺は、2本の剣をぶん投げる。

「＜霹靂！＞」

二本の剣が白い稲妻となって熱線と激突。

熱線と雷は相殺し、剣だけが残り、ワイバーンの額に若干傷をつけて、地面に落ちた。

「――――グギャァァァ！」
ものすごくワイバーンがお怒りです・・・
「・・・やば、武器無いや」
仕方がない。できる限り避けたかったのだが――――！
――――魔力全開！
『――天をも切り裂く銀の雷――』
が、ワイバーンが割り込みで熱線を吐く。
空気よめ！と叫びたいが仕方ない。
『＜サンダーボルト！＞』
詠唱簡略版で威力４割減（推定）の銀の雷と熱線が激突する。
――雷が熱線を打ち消し、そのままこっちに突っ込んでくるワイバーンにあたった。
が、その勢いは衰えな・・・
突っ込んで来てるだと！？

「乱れ飛べ！＜ガトリング・サンダーアロー！＞」

次々放たれる銀雷の矢だが、ワイバーンの魔力装甲を貫けない！

そして、ワイバーンは俺を噛み砕こうと大きく口を開け――――

「＜サンダーボルト！＞」

咄嗟に無詠唱で撃った俺の電撃を食った。

「グギャァァァ！？」

お口に召さなかった模様。アホかこいつ。助かった。

ワイバーンが悶絶してるいまがチャンス！

「其は見えざる力！鉄を引き付ける力！＜マグネティション！＞」

俺の手から、強力な指向性の磁力が飛び出し、鉄を引き付ける。

これで剣を引き寄せて――――！

が、＜アリアティル＞と大量の砂鉄は来たが、＜アウロラ＞は来ない。

――――まさか、アウロラは磁石に引き寄せられない！？

そういえば、アリアティルにしかまだ試してなかった！

使うたびに砂鉄やら金属製品が飛来するこの術は、もっとも使いたくない術なのだ！

が、戦闘中はこの砂鉄は俺の役に立つ！

『無数の鉄（くろがね）よ！銀雷によりその身を弾丸と化せ！＜微細なる四源の雷砲（ブラスト）！＞』

銀の雷がプラズマを発生させ、その膨張圧によって、一気に砂鉄が超高速で発射される！

俺が膨大な魔力を込めたそれらは銀の流星群となり、ワイバーンに激突し――――――！

――――――ズガガガガガガガガーーーン！

すさまじい轟音と共にワイバーンの体は無数の穴を空けられ、落下した。

そして、俺は撃墜を確認してから、魔力の解放を抑え――――

――――激痛に身を焼かれた。

「――がはっ、無理し過ぎた・・・かな」

俺はそのまま意識を失って、落下する直前、

誰かが俺の名前を叫ぶのを聞いた気がした。

第五話：イレギュラー（後書き）

こんな作品を読んで下さった方。
ありがとうございます！
もしかしなくても、最近面白くないなー。と思われてるかもしれません・・・。

面白い作品が書けるよう、頑張りますので、どうか生暖かく見守ってください！

閑　話：入学の日＋ボツコーナー（前書き）

え～と、担任の先生の登場が唐突すぎたので、
封印してあった本来の一章の話を改修して出してみました。
若干時間が遡ります。
また、この話の後半には【意味不明な描写】が含まれます。
苦手な方はスルーをお願いします。

閑　話：入学の日＋ボツコーナー

学園長の挨拶が体育館に響いている。
学園長は２０代後半くらいの黒髪の女の人だ。
今日は４月５日、入学式の日だ。

「入学おめでとう！各自精進するように！ケガのないようにな！以上！」

――短っ！？

「それじゃ、入学式終了！各クラスでホームルームをやるから移動！」

――しかも適当だなおい！？

みんな若干落ちつかなそうにしつつ移動。

クラスはＡＢＣＤＥの５クラス。各２０人の１学年１００人。
３年生まであるので総勢３００人・・・
この世界は、意外と魔法使いが多いな。

俺はＡクラスである。
さて、苗字じゃなく、名前順に座るのな。
俺の席は左の窓側一番前。
そして、先生が現れ、みんな慌てて着席・・・

「みなさ～ん！こ～んに～ちは～っ！」

・・・・はい？

「あれ～、みんな。先生が挨拶したらお返事してよ～」

・・・先生だと？

「先生のことは、アリス先生ってよんでくださいねっ！」

「「「「・・・は、はーい。」」」」

みんな唖然としつつ、なんとか返答。

「ようしっ、みんなの自己紹介が聞きたいなっ！」

駄目だ、ついていけない。
この先生、背が低く、生徒にしか見えない。なぜか白衣。金髪で碧眼。

「それじゃあ、名前順に起立して自己紹介どうぞっ！」

・・・俺からだな。

「えーと、アルネアといいます。アルって呼んでもらえるとうれしいです。
一年間よろしくお願いします」

よし、無難だな。

「じゃあ、アルちゃん。趣味はなんですかっ！」

・・・アルちゃんって誰？

「むぅ、アルちゃん、先生が聞いたら答えてくださいっ。先生は教室では絶対権力です！」

――なんて無茶な先生だよ！？

「しゅ、趣味！？・・・ええっと、寝坊？」

「それは趣味じゃありません！やり直しですっ！」

「・・・趣味は散歩です」

まあ、ほぼ嘘だが。

「そうですかっ！じゃあ、アルちゃん、散歩のすばらしさを皆さんに伝えてくださいっ！」

――なんだと!?分かってやってるのか?
まさか天然!?それが一番やっかいだ・・・!

「え～、お散歩は仲のいい人と一緒にすると、とても楽しいですよっ!」

これならどうだっ!

「そうですかっ!それじゃあ次の人!」

ふぅ、やっと終わった。俺の後ろの席の人が起立する。

「えっと、エリシアです。一年間よろしくお願いします」

そう、俺の後ろはエリシアである。

「エリシアちゃん、ニックネームに希望はあるっ?」

おおぅ。突然自分のニックネームをつけるのはかなりきついぞ。

「・・・ありませんけど、あんまりイメージに合わないのは困ります」

あ、予防線を張った。

「じゃあ、シアちゃん！」

「じゃあ、それで」

「うんうん、じゃあ、シアちゃんの趣味は？」

・・・そういえばエリシアの趣味ってなんだ？

「朝が駄目な、お義兄ちゃんを優しく（焼いて）起こしてあげることです」

――まさか、俺のことか！？戸籍的には確かに義理の兄だが！

てか、優しくないから！

「――なんだと！？なんてうらやましい奴がいるんだっ！」

俺の横の茶髪の男が天を仰いで絶叫。うるさい、お前も焼かれて起こされてみろ。

「それって趣味なのかな？あれ、アルちゃんと同じ苗字だ。お義兄ちゃんって、アルちゃんのこと？」

――――!?念話緊急発動!

さて、「念話」とは何か。
それを説明するには、まず「魔声」について説明しなくてはならない。

魔声っていうのは、魔力を振動させることで、魔力を感知できる人に、
声を使わずに意思を伝えられるというものだ。魔力の声で略して魔声だ。魔の声ではない。
声の出せない水中等で便利なほか、
魔声で詠唱すると、魔力の伝達効率が上がって、術の効果が上がるらしい。
「」で表記されるのが普通の声。『』が魔声である。
魔獣は人間と声帯のつくりが違うので、
意思の疎通ができる魔獣っていうのは、魔声の使える魔獣のことだ。

で、念話っていうのは、指向性を高めた<魔声>である。
相手の魔力の波長に同期し、魔力を振動させることで特定の相手のみと会話する。
「念じて魔力を振動させるだけで話ができる。わーい、便利!」略して念話である。

『やめろエリシア!他に兄がいることにしておいてくれ!』

『・・・だめ?』

『駄目!』

「先生、気のせいでした。私の趣味はお散歩です」

（――気のせいってなんだよ！？誤魔化せんのかよ！？）

「あ、気のせいかぁ・・・分かりますっ！私もよく間違えちゃうの！」

・・・この先生はただの変な人のようだ。

さて、次の人。

「はじめまして、エリス・ハーゼンシュタットです。趣味はお料理です。

一年間よろしくお願いします」

と、無難な挨拶のエリス。

「そうですかっ、それじゃあ次の人どうぞっ！」

どうやら、この先生は趣味を教えれば満足してくれるようだ。

先ほど叫んでた俺の隣席のカイルは元気なやつだった。

ジョンの趣味は読書らしい。無難だな。

あと、目立ったクラスメイトは無口な女の子のティア、頑強そうな

男のポールとか。

――――そして

「リリシアです、友達や家族からはリリーって呼ばれてるので、そう呼んでもらえると嬉しいです」

「うんうん、リリーちゃんの趣味は？」

「おにい・・・」

――俺は、何を言うか察知。殺気を送るリリーがそれを感じて、一瞬顔が引きつった。

「うん？おにい・・・？」

先生に聞き返される。

「おにぃぎりを作ることです」

俺が妨害していてアレだが、リリーよ、なんだ？おにぃぎりって。おにぎりだろ？

なんとか無事に自己紹介を終了。

自己紹介中に、ジョンがエリスをぼ～っと見てるのが気になったが。

まさか一目惚れ？

さて、その後も係り決めやら掃除の説明やら、合宿の説明やらをして・・・

さて、お昼だー！

＊ここから先はボツとして封印されていたネタです。自己満足です。暴走です。

話が足りなかったので投下しましたが、所詮は封印されていたネタです。

またしても謎のコーナーが始まります。意味不明なのが嫌いな方はスルーして下さい。

また、何この意味不明・・・と思っても、所詮は素人の書いたものだしなと、受け流して下さい。

どうか、ご協力をお願いします。

さて、選べるご飯は４つ。
日替わりで変わるらしい。

――本日の昼食――

A、チャーハン定食
B、焼き魚定食
C、スパゲッティミートソース
D、シェフの気まぐれ「鳥の鳳凰揚げ」＊最大先着二名まで

「・・・このDの鳳凰揚げって何だよ！」

「あ、お兄ちゃんでも分からないんだ」

「アル、頼んでみます？」

「この、気まぐれってのがポイントだな。オススメだろ普通？」

「あ、さすがお兄ちゃん。ってことはコレ危険？」

「でも、アルならやってくれるはずです！」

おい、何を期待してやがる。
やめろ！そんな目で俺をみるなぁぁぁ！

さて、注文をうけるカウンターの所にいく。おばちゃんがいた。

「私は、えっと、Bください！」
「私はCでおねがいします！」
「俺にシェフの気まぐれを一つ。」

「ええっ！？お兄ちゃん、さっきの話は！？」
「アル、さすがです！」

これでエリシアに、ほんとに選んじゃうの！？
みたいな反応されたらどうすればいいかと思ったぜ・・・
おばちゃんがニヤリと笑う。

「あんた、あんな話をしてたから頼まないかと思ったよ。いい根性じゃないかい」

「・・・聞かれてましたか。」

「まあね、あんた！いきのいい新入生の小僧に鳳凰揚げ一つ！」

「おうよ！任せとけ！」
シェフの人・・・親方じゃね？が返答

「それで、気まぐれ料理は注文を受けてから完成させるから、ちょっと待ってな」

おばちゃんは、そう言ってニヤリと笑った。

――――5分後。

デデーン！

そんな感じの効果音が似合うだろう鳳凰焼きが登場。

♪～チャー、チャラチャッチャチャッチャー！

――気まぐれ料理紹介コーナー！「今日のアラン料理長」――！

「さて、始まりました新コーナ！パーソナリティは、私、アルこと、アルネアと！」

「私、焼肉の天才エリシアと、」

「趣味はおにぃぎりを作ること！リリーことリリネアでお送りします！」

「さて、新コーナだな！」

「最近多くないです？」

「そうだねお兄ちゃん！これは快挙だよっ！」

「そうだな！だが、反応が芳しく無かったら流石に二度と無いかもな」

「アル、それならもうちょっとマシな称号にしてください！焼肉の天才ってなんです？」

「私なんて、趣味がおにぃぎりを作ることだよ！？どうして引っ張るの！？」

「落ち着けエリシア、リリー。仕方ないだろ？料理のコーナーなんだから。

料理の話は、エリシアと初めて会った時の焼肉と、焼肉だけだったんだ。

あと、おにぃぎりな。」

「アル、どうして私の得意料理が焼肉なんです？」

「だから、おにぃぎり引っ張らないでよお兄ちゃん！」

「エリシアの焼肉は美味いんだ仕方ない、早くたべようぜ？冷めちまう」

「うん、わかった」

「エリー、裏切ったわね！？」

「さて、鳳凰揚げとは、鳳凰の形に組んだ鶏肉を揚げたもののようだ。」

「そのまんまです」

「甘いわ、お兄ちゃん！この鳳凰揚げ、焼き加減で翼に陰影をつけているわ！」

「な、なんだと！？・・・ほんとだ！どうやって揚げてるんだよ！？」

「たぶん魔法です」

「な、なるほど！さすがエリー！　でもこれ大きくない？」

「・・・どうやら料理長は気合が入りすぎてしまったようだな」

「パーティ用ですね」

「いやー、パーティにコレがあったら笑っちゃうかも。変にリアル。」

「さて、読者の方にわかるように説明しないとな。
大きさは一般的な鶏サイズだな。次、エリシアどうぞ～？」

「えっと、・・・もぐもぐ。　隠し味は卵です？おっきいです。次はリリーどうぞ～」

「もぐもぐ・・・おいしいですがおっきいです。
あ、目がチョコチップ。次お兄ちゃんどうぞ～！」

「もぐもぐ・・・え～と、味は唐揚げだな。おっきい。次エリシアどうぞ～？」

「おっきいです。おっきいんです。すごくおっきいんです。次リリーどうぞです～」

「おっきいしか言ってないよエリー！このままじゃ打ち切りだよ！？はい、お兄ちゃん、なんかアイデアどうぞ～！」

「じゃあ、一気にリリーに食べさせて口から鳳凰が生えたリリーを実況とかどうぞ～？」

「リリー、頑張って！どうぞ～」

「嫌だよ！？誰も得しないよお兄ちゃん！？他の意見どうぞ～！」

「そうか？Ｒ１５タグが意味無いから、戦慄！口から鳳凰が生える！で、Ｒ１５はどうぞ～？」

「アルが前に変態だったのはいいんです？でも、とりあえずやってみたらです？どうぞ～」

♪～ジャジャッッ、ジャッジャジャーン！

――――「戦慄！口から鳳凰生える――――！」

「り、リリーィィィ――――――ッ！」

「そんな！？リリーの口から鳳凰です！？」

「んぐっ、こ、こんなにおっきな唐揚げ・・・んぐっ！？あぐっ、ふあっ・・・そんな・・・！？」

「なんて感じでどうだろう。エリシアどうぞ～？」

「アル、私は小説に詳しくないですが、大丈夫なんです？どうぞ～」

「そ、そうだよお兄ちゃん！いかがわしいよ！？どうぞ～！」

「なんのことかな？一気に食べて、口から鳳凰揚げが生えたみたいなだけだろ？
ちゃんと残酷描写タグ付いてるから平気だって！たぶんな。どうぞ～？」

「残酷なんです？口から鶏サイズの鳳凰・・・残酷です！鶏に。どうぞ～」

「エリーもたまに残酷だよね！？私はいいの！？」

「おっと、やばい時間だな。」

「んぐっ！？ふふぁぁ！？ん～～！おっひふひはふっ！」

「ちょとお兄ちゃん！？なんでエリーにまで口鳳凰！？」

「いや、なんとなく？もう無いコーナーだろうし暴れとこうかと」

「アル、今度は称号を変えてやってください！」

「お兄ちゃん、もうやらなくていいですっ！」

「えー、見苦しい・意味不明なコーナーをやって申し訳ありません。エリシアどうぞ～？」

「えっと、ついはしゃいじゃいました。てへっ☆　リリーどうぞ～」

「皆さんも口鳳凰にレッツ・チャレンジ！」

「「「銀雷の魔術師、ご愛読（希望的観測です）ありがとうございますっ！」」」

♪～～チャー、チャーチャラー、チャチャーラ、チャーチャラ、チャーラ～

「よし、（悪い意味で）完璧な〆だな！」

「アル、（悪い意味で）完璧ですね。てへっ☆」

「お兄ちゃん、この台本何！？口鳳凰は危ないよ！？エリーもソレ気に入ってるし！？」

「アルが、これが可愛いんだって・・・」

「あー、そうだなリリー。口鳳凰にはチャレンジしないで下さい。危険です。」

「「「それでは、もしまたご縁があれば、またお会いしましょうっ！」」」

閑　話：入学の日＋ボツコーナー（後書き）

この話が封印されてたのは、
このボツコーナーが原因です・・・
でも、これカットすると話の短さが酷いことになるし・・・
というわけで、ボツコーナー投下です。

見てしまって不快な思いをされた方、申し訳ございません！

第六話：約束

私、エリシアは巨大な魔力と、それと戦ってるらしき先生の魔力を感知して、
急いでその場所へ向かおうとした。
遠くの方で雷の音がして、私は飛行魔法を唱え、空へ舞い上がり、
そこへ急行した。

しかし、あと数十秒で到着するかという時に、先生の魔力がぶれて、
私は先生の敗北を悟った。

間に合わない。

そう思った時、ワイバーンの近くに他の魔力を感知。
そう、アルの魔力だった。

（――たしかにアルは強いけど、一人でワイバーンと戦うなんて！？）

別に、アルなら絶対助けるだろうとは思うし、止めても聞かないだろう。
でも、アルがケガをするのは嫌だ。

私は、更に急いで飛び、そして、見た。

『無数の鉄（くろがね）よ！銀雷によりその身を弾丸と化せ！＜微細なる四源の雷砲（ルブラスト）！＞（マニュートネス・サーマ）』

無数の砂鉄が銀の流星となって、ワイバーンを穴だらけにするのを。
そして、アルが墜落するのを。

「――――――アル！？」

――――――

しかし、それでもかなりの勢いで背中から地面に落ちた。

『――傷つきし者を癒す聖なる力――』

『――汝、未だ輪廻転生の刻にあらず――』

『――汝、未だ冥府の門を叩く刻にあらず――』

『――蘇りて、その天寿を全うせよ――！』

『――＜リヴァイブ！＞』

急に体の痛みが取れて、意識がはっきりした。

目を開けると、目の前に、すこし涙目で、目が真っ赤なエリシアの顔があった。

「・・・えっと、おはよう？」
うん、やっぱり挨拶って大事だよな。
が、エリシアはホッとした顔から、拗ねた顔になってしまった。
若干怒っている気がする。

「アルの馬鹿」
ちなみにエリシアの目が真っ赤なのは、元の目の色が出てるからだ。
白い髪に赤い目は目立つので、偽装魔法で金髪緑目にしてるのだが、全力を開放すると、溢れる魔力で偽装が流されてしまうのだ。

「いや、人助けの為だったし」
とりあえず人助けをアピールして、エリシアの怒りを静めよう。

「あんな短い詠唱で無理に膨大な魔力を詰めたら体にダメージが来ます・・・！」

「え、そうなの？」
そんなのは本で読んだこと無い。

「アルは、人間とは思えない魔力量を持ってます。人間の書いた本は役に立ちません」

転生した影響だろうか。とりあえず・・・

「そうか、治してくれてありがとうなエリシア」
お礼を言うが、エリシアに無言で見つめられる。

「えっと・・・、エリシア？」

「アル、他に言う事があるんじゃないです？」
そう言って無言で見つめてくるエリシア。

・・・え、なんだろう？

「もう無茶しません。すみませんでした」
そう、俺は無茶した事を謝ってなかった。

「違います」
・・・エリシアにバッサリ切られた！？
そんな！頑張って考えたのに！？
こう、「あんまり無茶しないで下さい」って流れだろう！？

「・・・アルは困ってる人がいたら無茶しないことはできないです」

・・・そんなことは・・・ない・・・とは言いきれない！？

なんか俺は自己嫌悪に陥ってしまった。
そんな俺に、エリシアは言った。

「だから、余裕でほかの人を助けられるくらい、強くなって下さい。アルならできます」

「・・・わかった」
俺は、エリシアの真剣な表情に押されて、頷いた。

「約束ですよ?」

「ああ、わかった」
俺が、そう言うと、エリシアは微笑んだ。

「じゃあ、もし約束を破ったら、なんでも一つ、私のお願いを聞いてもらいますね」

「・・・んな!?エリシア、そんなのは承諾しないぞ!」
どんな目に遭わされるのか、考えるのすら恐ろしい!

「そうですか?代わりに一年間一度も大怪我しなかったら、
私がアルの言うことを何でも一つ聞きますよ?」

そう言って天使の微笑みを浮かべるエリシア。

落ち着け俺！これは悪魔の囁きだ！

「何でも？」
思わず聞き返した。うがー！？俺の馬鹿！？

「お互いに、何でもです」
・・・勝ったら天国、負けたら地獄ということか！？

「・・・わかった」
俺は、殊勝な態度で頷いた。が、

「アル、鼻の下がのびてます」

「なんだと！？」

「・・・アルの変態」
エリシアは、じと～っとした視線を浴びせてくる。

や、やばい。話を変えねば！

「そ、そうだ！エリシア、どうしてリヴァイブ使えるんだよ！？」

「・・・話を逸らしましたね。私は、この体に受けた術を吸収、再現する能力があります」
じと～っとした目のまま説明された。

あれ、それって・・・
「強くね!?」

「だから、初めて会った時に、私は危険ですって遠まわしに言ったじゃないですか・・・」

「ははー。想像以上だった」
俺は笑ってごまかした。

が、エリシアは急に真剣な表情になった。
「・・・今からでも、まだ、遅くないですよ?」

さすがにムッときた。
「エリシア、もう一回言ったら、俺の変態技フルコースだからな」

「・・・!ごめんなさ・・・って変態技ってなんです!?」

「え、知りたいの?」

「・・・知りたいです・・・って言ったらどうするんです?」

「ええぃ、俺の負けだよ!冗談だよ!」
くそっ、何故かエリシアには勝てない・・・
まあ、重い空気は払拭できたし、いいだろう。

小さく、「アルの馬鹿」って聞こえた気がするが気のせいだろう・・

・

・・・ん？何か忘れてる？

「あ～～～！＜アウロラ＞が無い！」

「あ、ほんとです」

と、アウロラを探そうと、魔力探知を始めて・・・
周囲の魔力が乱れていた。

「――――！？これは、昨日と同じ！？」

「アル、隠蔽魔法です？」
エリシアも、同じ何かを感じたらしい。

なにか、魔力の乱れがあり、そこから＜アウロラ＞の気配がある。

「とにかく、見に行ってみよう」
「了解です」

さて、＜アウロラ＞の気配を探っていくと、見つけた。意外と簡単に。

「なんじゃこりゃ」
「なんです？コレ」

おもわず二人で顔を見合わせる。
＜アウロラ＞は、空中で見えない何かにぶっ刺さっていた。
なかなか理解し難い光景だ。

「・・・エリシア、やるか？」

「はい、そうですね」

「我が手に白き雷を！虚空を切り裂け！＜サンダーボルト！＞」
「白き焔よ我が手に！虚空をも燃やせ！＜ヴォルカディア！＞」

俺の手から白い雷が、エリシアの手から白い焔が飛び出す！

――――ガキィィィン！

「うわ、なんだこれ」
「・・・すごいです」

なんか一瞬、巨大なドームの端らしき何かが見えた。
どうやらこれは結界のようだ。

が、今の攻撃でなんともないのは結界の常識の範囲外だ。
まぁ、二人ともそんなに強い術は使ってないのだが、
普通に考えて、これは隠蔽用結界だ。

結界の主な種類は3つ、防御、隠蔽、強化だ。
防御結界ならまだしも、こうまで何かを隠蔽する結界がこの強度はおかしい。
どれか一個の効果しかもたない結界が普通だからだ。

つまり、ものすごい魔力を持つ存在が結界を張ったか、
もしくはものすごい技量の存在が結界を張ったか、
土地的な例外の三つの可能性が考えられる。
いずれにせよすごい事なのだ。

「どうする？エリシア」

「アル、顔に気になるって書いてあります」
エリシアに呆れられたが、気になるものは仕方ない。

「というか、刺さってる＜アウロラ＞でなんとかなるんじゃないか？」
やっと気づいた。なんか、アウロラが刺さって結界がバチバチ言ってる。

「そうですね・・・」
エリシアが頷いたので、俺はアウロラの柄を握って思いっきり――
――！

切り下ろす必要もなく、意外とあっさり切れた。

「・・・アル、切れ味良すぎじゃないです？」

「そういえば、磁力で引っ張れなかったんだよなぁ・・・」

ワイバーン戦を思い出しつつ、首をかしげる俺。

「磁力で引っ張れないんです？しかも結界を切り裂く・・・？」

と、結界が塞がろうとしてるのを発見。

アウロラで咄嗟にさらに大きく切り裂いた。

すると、アウロラの魔力の輝きが若干増した。

「なんだこれ？」

「それは、魔力吸収能力（ドレイン）！アル、それは魔法銀製（ミスリル）です！」

ミスリルって言うと、あの定番のアレか！えっと、強いヤツ！

「おおっそれはすごい！」

「アル、それってものすごく貴重なものですよ？国が買えるかもです」

国・・・？冗談だろ？

「・・・お父さんも、どうしてそんな物を持ってたんでしょう・・・」

う～ん、なんて言いつつ珍しく唸ってるエリシア。

そういえば、まだ話してなかったな。

「これは、俺の本当の母さんの形見なんだ」
俺は、エリシアの目を見て、切り出した。

「・・・・え？」
エリシアが固まった。珍しい。

「だから、俺の本当の母さんの形見。俺の母さんは、俺が赤ん坊の時に死んじゃったの」

「じゃあ、リックお兄さんとリリーは？」
そう聞いてくるエリシアに、リックはお兄さんなのかよ、と思いつつ俺は答えた。

「ん、あの二人は母さんの子どもだよ。」

「・・・アル、リックお兄さんとリリーは知ってるんです？」
エリシアが、聞いていいのだろうかという表情ながらも、聞いてきた。

「兄さんは知ってるけど、リリーには言ってないなぁ。機会がなかったから」

俺は正直にそう答えたが、エリシアはなんともいえない顔をした。

と、小さく「まずいかもです」って聞こえた～気が～した～

第六話：約束（後書き）

♪～～チャラッ、チャ～ラララ～

―次回予告―

「ついにエリシアに明かされた俺の過去！」

「リリーがどんな反応をするのか不安です・・・」

「さて、次回は結界の中に突入だ！」

「アル、がんばりましょうね！」

「銀雷の魔術師、第二章七話：『誰が為に』

みんな！絶対見てくれよな！」

「リリーには負けないです！」

「え、なんか勝負してるのか？」

第七話：誰が為に（前書き）

連載開始から明日で一週間・・・
読んで下さった方、本当にありがとうございます。
５０万ＰＶを記念して本日３度目の投下です！

第七話：誰が為に

さて、俺とエリシアは、結界の中に入り、そして驚いた。

「これは・・・どうみても」

「これって、まさか！？」

微妙な気分になる俺と、驚くエリシア。

結界の中に入ると、急に開けた場所に出た。

下は短い草・・・芝生のようになっており、けっこう広い。

ところどころに木の実のなっている木が生えている。

そして、小さな湖があり、そのすぐそばに――――

「迷宮かな？」

「迷宮ですね」

あきらかに迷宮入り口な建物が建っていた。

と、迷宮近くの木に、人間らしき魔力を一人分感知。

警戒しつつ近づくと・・・

「あれ、カイル？」

そう、そこにいたのは、同じクラスで、となりのカイルだった。

「あ、アル！お前も迷い込んだのか！？」

木にもたれかかってたカイルは、飛び上がりつつ質問してきた。

「いや、俺とエリシアは結界を破って入ってきた」
と、俺が言うと、カイルは驚きつつ言った。

「うそっ!?みんなで攻撃しても破れなかったのに!?」
と言ったカイルに、エリシアが怪訝そうに聞いた。

「みんな?あなた以外はいないようですけど?」

「・・・!そうだ!すぐに先生に知らせないと!」
慌てふためくカイル。

なんとか俺たちが聞きだした情報をまとめると、こうだ。

突如現れたワイバーンの攻撃から6人パーティで逃げ回っていた。
すると、熱線で結界に穴が開くのが見えた。
とっさに入ってしまった。
すると出れなくなった。
緊急脱出も使えない。

パーティのほかの5人のメンバーは、ガルシアとかの上位貴族で、
必死に止めるカイルに、「誰か来たら一応知らせとけ、俺達が此処を攻略する」
と言って迷宮に入ってしまったらしい。
また、入ってどれだけ時間がたったか分からない。

俺は、エリシアと顔を見合わせた。
すると、エリシアは、「わかってます」と言わんばかりに苦笑いした。

「カイル、俺が結界を破るから、結界のすぐ外に発信機の魔法玉を置いて、
緊急離脱の魔法玉を発動して、なんとか学園長に知らせてくれ。
たぶん、ワイバーンには学園長なら気づいてる。すぐに会えるハズだ」

俺は、そういって結界を再び破るべく、結界の端へ歩きだす。
この結界は何度でも再生するみたいだし。

「・・・アルはどうすんだよ!?」
カイルがすこし怒ったように言った。

「俺は迷宮に入って先に捜索する。事態は一刻を争う」
俺は、エリシアが適当に木の実や水を補給してるのを確認しつつ、
＜アウロラ＞を抜き放った。

「無茶だ!この迷宮は多分ものすごい難度だぞ!?こんな結界があるんだ!
どうしてそこまで・・・あいつらと特別仲がいい訳じゃないんだろ!?」

「カイル、俺は、俺が助けたいから行く。これは俺の為だよ」
俺はそう答えて、結界を切り裂いた。

「・・・アル、お前馬鹿だよ。絶対死ぬんじゃねぇぞ!」
そう言って拳を突き出すカイルに、俺も拳を合わせ、カイルは結界の外に出た。

俺は、迷宮の入り口で準備を終えて待ってるエリシアの所へ急いだ。

「アル、カッコよかった」
木の実と水の入った2つの袋を手渡しつつ、エリシアは言った。

「・・・いつもカッコイイつもりなんだけどなぁ。」
そう言って俺たちは迷宮に足を踏み入れた。

迷宮の中に入った俺は思った。
うわぁ、ダンジョンだよ。
岩で作られた床、壁、天井。
魔力でほのかに白緑色に光っている。
意外と明るいというか、蛍光灯くらいの明るさはある。
で、――――。

「一本道だな」
「一本道です」

そう、一本道だった。

しかもすぐ扉がある。
恐る恐る、その扉を開けると・・・

一瞬の閃光が閃き、俺たちは何故か草原にいた。

「・・・はぁ！？」

「アル、ワープドアです」
エリシアはあんまり動じない。
いや、ドアを通ったらいきなり別の場所だぜ！？
驚くだろ。普通。
まあいいや。

「どこだここ？」
俺は、とりあえず一番の懸念事項についての意見をエリシアに求めた。
つまり、迷宮の外か中か。
あたりは一面草原で、すこし進むと森があるようだ。
すごく広い。端とかは見えない。

「・・・たぶん迷宮の中です。あんまり遠くまで魔力探知が効きません」

「うん、確かに。それにしても・・・・」
俺は周囲のすさまじい魔力の流れを感じつつ、エリシアと顔を見合わせた。

「はい、すごい風魔力です。これじゃあ飛べないです」
エリシアは「変身するわけにもいかないですし・・・」って小声で

いいつつ悩む。

そう、空が飛べず探知もできないなら、探すのに有効な手段が無い。
さてどうしたものかと悩んでいると、
接近する魔力を感知。

――近い！

俺は気配を感じた右の方を向き・・・

「――え・・・」
「――おっきいです」

極大の緑ワイバーンらしき生き物がいた。

「――グガァァッ！」

ワイバーン？は急降下しつつ、爪で俺とエリシアを狙う！

――まずい！防がないと！

――術は間に合わない。

――なら剣技！

俺は一瞬で判断し、＜アウロラ＞と＜アリアティル＞を抜き、魔力を流し・・・

エリシアに抱きついて剣技を発動。
「――――ふぇっ！？」
「風巻け烈風！＜風車（かざぐるま）！＞」
俺を中心に、いつもより強力なカマイタチが発生。
これならエリシアも巻き込まれない。
別に抱きつく目的じゃないぞ、防御向きの剣技なんだ！
あと、
「やっぱり、風が強化されるのか！」
この迷宮は風強化の特性があるようだ！
なんとかワイバーン？の攻撃を凌ぐ。
ワイバーン？は急上昇して俺の攻撃をかわし、一旦離れていく。
どうやらヒット&アウェイ戦法のようだ。
これなら逃げることはできるが、人探しは厳しい。
というかワイバーンにしてはでか過ぎる。
「アル、あれはワイバーンよりドラゴンに近い『ユラン』です」
と、俺の腕の中からエリシアの声が・・・
「っと、悪い悪い。」
俺は慌ててエリシアを解放。
「いいです、分かってますから」
エリシアは不機嫌そうに言った。
「ユランって言うと・・・」

「ＡＡランクですね」
エリシアが俺の聞きたいことを察知して答えてくれる。
もうワイバ・・・ユランが戻ってくる。旋回するのが見える。

「意思の疎通は？」
「さっきからやってますけど、無理です」

「分かった。俺が時間を稼ぐ！」
「アル、ケガしたら約束を守ってもらいますよ」

「エリシアこそ覚悟しとけ！」『其は疾風の賛歌――！』

「アル、無理しないでくださいね――」『白き竜と聖なる焔の古の盟約――！』

ユランの口に莫大な魔力が集まる。
到底防げないことを悟った俺は――

――魔力開放！　二重詠唱（ダブルスペル）！

『疾風が全てを切り裂き奏でる歌！＜ハーケン・プレーズ！＞』
『我が手に集え、銀の雷よ！敵を滅ぼせ！＜サンダー・ブラスト！＞』

『我は汝を守り、汝は我が敵を滅ぼす――――！』
『其は開闢の焔！万物を作り変える始祖の焔――！』

二重詠唱（ダブルスペル）とは、魔声を応用した高等テクニックである。

魔声は、声帯などを使ってないので、
その気になれば、同時に二つ以上のことを話せるのだ。難しいが。
エリシアも二重詠唱（ダブルスペル）を発動。

俺の手から銀雷のレーザーと、銀の竜巻が飛び出し、
ユランの口から放たれた熱線と激突する――！

――ドガァァァン！

『今こそ盟約を果たす時！汝が誓いを此処に示せ――！』
『我と汝が敵を滅ぼす焔を此処に顕現せよ――――！』

竜巻は消えたが、レーザはユランに突き進む。

――カキィィィン！

が、案の定、魔力装甲に弾かれてしまった。

――ユランの勢いは収まらず、突っ込んで来る！
ユランの口にまたしても魔力が集う！

『始祖の業焔！＜アンセスティア・プロメティス！＞』

――エリシアの前に巨大な白い熱の塊が現れた。

俺は、あまりの熱量に、目がくらんだ
どうやらエリシアは二重詠唱（ダブルスペル）ではなく、複合魔術（ダブルマジック）
を使ったらしい。二つの詠唱を同時に行い、一つの術を発動する。
すさまじい魔力を使うが、威力はとんでもない。

とっさに全力で魔力装甲を張ったユランに始祖の業焔が激突し――
――。

――――――――――世界が白い閃光に包まれ、音が消えた。

閃光が収まると、ユランは真っ黒に炭化し、動く気配はなかった。

と、エリシアの体がふらついて――

「エリシア！？」
俺は、慌ててエリシアの軽い体を支える。
「・・・私が無理しないのは約束してないですよ？」
「・・・馬鹿、大丈夫か？」
「大丈夫で――アル、後ろ！」
とっさに俺は地面に倒れこむようにしてエリシアをかばい――
「――ぐはっ」
「アル！？大丈夫です！？」
「問題ない！浅くかすっただけだ！」
俺は、すばやくユランが倒れていた場所を確認、確かに死んでいる。
が、上空にはもう一匹のユラン・・・
突如後方から滑空攻撃をしてきた爪があたったのだ。
「くそっ、２匹いるのか倒すたびに出てくるのか・・・」
俺はすばやく立ち上がりつつ呟いた。

と、さらに2体のユランを確認。
まったく、嫌になるな。
もっといるかもしれん。

「アル・・・どうするんです？」
エリシアが憔悴しつつ不安そうな顔で聞いてきた。

「約束は守るさ、絶対やられたりしない。だから、待っててくれ、エリシア」

「我が体は稲妻！空を裂き風よりも早く進む！＜サンダー・ミグラトリィ！＞」

俺は、稲妻となって、強風の中を翔け上がった。
雷なら、こんな風など無意味だ！

第七話：誰が為に（後書き）

――――次回予告――――

♪～ドゥンドゥンドゥ～ドゥドゥンドゥンドゥ～ドゥン

『――――いいのか？あの娘、死ぬぞ』
「銀雷によりその身を弾丸と化せぇぇ――――ッ！」
「此処を、通してもらいます！」
『お前は、他人の為に命を捨てて助けようと思うか？』
「アル、上ですっ！」
『いいわけないだろぉぉぉ――――ッ！』
「俺は――――」

次回、銀雷の魔術師第八話：魂の意義

第八話：魂の意義

上空で旋回していたユランに、俺は稲妻となって突進する！
この空間には砂鉄が無いようだし。
この手はあまり好ましくないが・・・！
速攻で決めさせてもらう！

『我が疾風の剣よ！銀雷によりその身を弾丸と化せ！
＜疾風纏いし四源の雷砲（アリアティル・サーマルブラスト）！＞』

俺はぶん投げたアリアティルをプラズマ加速！
アリアティルは銀の流星となって、ユランの心臓を貫く。

「――――――グギャアァァァ！」
――――あと2体！

『我が魔法銀の剣よ！銀雷によりその身を弾丸と化せぇぇ――――ッ！
＜銀（ア）
雷纏いし四源の雷砲（ウロラ・サーマルブラスト）！＞』

今度はアウロラをぶん投げて、プラズマ加速！
アウロラはやはり銀の流星となって、ユランの頭を貫いた！

「――――――ガァァァ！？」

――――こいつら、さっきのやつより弱い！

――――あと一体！

『――――いくぞ！＜サンダーボルト！＞』

俺の手から銀の雷が飛び出し、ユランの右翼を直撃した。

「――――グガァァァッ！」

が、怒らせた以上の効果は無い。

でも、こちらに意識を集中させれば十分。

ユランはこちらに近づき、武器を失った俺を爪で引き裂こうと――――

「其は見えざる力！鉄を引き付ける力！＜マグネティション！＞」

超強力な磁力で切っ先を引っ張られ、戻ってきた＜アリアティル＞がその胴体を貫通。

俺は磁力を巧みに操り、俺の手元に戻ってきた＜アリアティル＞を掴み取った。

そして俺は激痛に苦しむユランの苦痛を終わらせるべく、剣を振り下ろした。

『アル、大丈夫です？』

エリシアの念話が聞こえた。

『・・・ダメージは受けてないけど、大技を使い過ぎた。魔力がキツイ』

そう、そろそろ限界だった。

俺は、そろそろ下に降りようと――――

『アル、上です！』

エリシアの悲鳴が聞こえた。

『＜雷鳴剣！＞』

俺は、咄嗟にアリアティルを稲妻に変換。

上に放った。

が、ソレの拳を押し返せず、吹き飛ばされた。

――――――

いたのだろう。

『アル、大丈夫です？』

大丈夫なのは分かっていたが、一応聞く。

『・・・ダメージは受けてないけど、大技を使い過ぎた。魔力がキツイ』

アルはそう言うが、私にはまだ余裕があるように見えた。

と、周囲を警戒するアルの斜め上から、ソレが降ってくるのが見えた。

そんな――――――!?

『アル、上です！』

アルは咄嗟に雷と化した剣で迎撃するが、ソレの拳に吹き飛ばされてしまった。

アルは錐揉みしながら、私から離れた方に墜落する。

私はすぐに駆け寄ろうとするが、私とアルの間にソレが着地する。

――――――――ドガァァァン！

爆音と共に、地面に巨大なクレータができる。

ソレは巨大な岩の体をしていた。

「・・・ゴーレム」

私は、その名を呟いた。

ゴーレムは術者によって強さが変わる。

あんなに強力な結界で守られた迷宮だ。さぞ強いだろう。

５メートルもの威容を誇り、ＡＡＡランクを思わせる。

だが、今は相手をするつもりは無い！

「此処を、通してもらいます！」

俺は、意識が朦朧としていた。

左腕が動かなかった。

足に力が入らなかった。

肋骨にヒビでも入ってるかもな。

アリアティルは弾き飛ばされて近くに無い。

エリシアが叫ぶのが聞こえた気がした。

全身が痛い。動きたくない。

――俺は一体何をしに来たんだ？

――助けに来たんじゃないのか？

――そう、だったな。なのにこんな様か。

――あきらめるのか？

――動けないんだよ。

――動けないのではなく、動かないのだろう。

――・・・俺は、なんでこの世界にいるんだ？

――お前は、何も分からなくとも、守ると決めたのではなかったのか？

俺は、エリシアがゴーレムをかわしてこちらに来ようとし、弾き飛ばされ、突風に吹かれたゴミのように地面を転がるのを見た。

――エリシア！？

――いいのか？あの娘、死ぬぞ。

――――いいわけないだろぉぉぉ――――ッ！

俺は、必死になって立とうとするが、立てない。右腕がかろうじて動くだけだ。
体を持ち上げることすらままならない。

――――お前は、他人の為に命を捨てて助けようと思うか？

――――思わない。

――――そうか・・・

――――命を捨ててでも誰かを救えるっていうのはすごい立派だ。
でも、それで悲しむ人もいる。
だから！

――――だから、俺は、今度こそ、全てを救ってみせるって決めたんだ！

――――ふふっ、そうか。ならば手を伸ばせ！
その手に、その心に値するだけの力を持て！
そしてお前の魂の意義を証明してみせろ！

俺は手を伸ばし、＜アウロラ＞の柄を掴んだ。

いつかの声を聞いた。

『――――えっとね、アウロラっていう曙の女神様がいたんですよ？』

――

私は、悔しかった。

私はアルに命を助けてもらったから。

アルが大好きだったから。

私には力があったから。

なのに、アルにユランが迫るのに耐えられなくて、
必要以上の魔力を込めて術を撃って、力のほとんどを使い果たした
自分が憎かった。

そのせいで本来の力を解放することもできず、私はここに倒れてい
る。

まるでゴミのよう。

仲間に追われ、命の恩人に何も返せずに死ぬ私なんてそんなものか
もしれない。

でも、私が死んでしまったら次はアルの番だ。

そんなの絶対に認められなかった。

自分の命を犠牲にしてでもアルを助けたかった。

――アルと、もっといっしょにいたかったな。

禁術を使おうと私は覚悟を決め――――

銀の閃光が閃き、魔力の暴風が切り裂かれた。

私は、不思議な確信を持って倒れたまま顔を上げた。
巨大で強大なゴーレム、その向こうに、緑と赤の不思議な光のベールが瞬くのが。

その中心に立つ、銀の雷を身に纏う魔術師が。

最早、瞳だけでなく髪まで銀に輝く、その大好きな少年が確かに見えた。

第八話：魂の意義（後書き）

――――次回予告――――

♪～ドゥンドゥンドゥ～ドゥドゥンドゥンドゥ～ドゥン

『――――邪魔を、するなぁぁ――――ッ！』
「・・・どんなギミックだよ！」
「アル・・・ごめんなさい・・・めいわくかけて」
『私は、風の精霊シルフィードです。』
『・・・そこ、どけよ。お前なんかに用はないんだ』
『アウロラ？どっかで聞いた名前のような気もするけどなぁ』
「お前が欲しい」

次回！銀雷の魔術師第九話：曙の剣

第九話：曙の剣

俺は手を伸ばし、＜アウロラ＞の柄を掴んだ。

俺は、いつかの声を聞いた。

『――――えっとね、アウロラっていう曙の女神様がいたんですよ？』

『アウロラ？どっかで聞いた名前のような気もするけどなぁ』

『オーロラの語源になった女神様です！』

俺の体は満身創痍。でも、

――――エリシアは必ず助けてみせる！

まるで俺の意思に答えるかのように、＜アウロラ＞が眩い銀の閃光を放つ。

＜アウロラ＞と俺を包むかのように、オーロラが発生する。

５メートルものゴーレムの威容が、異常を感知したのか振り返る。

――――体が、軽い。

――――今、お前を邪魔するものはあのゴーレム以外は無い。

――――そうだな。

俺は、地面を思い切り蹴って、ゴーレムに突っ込んだ。

ゴーレムは、どう考えてもありえない速度で迎撃体制をとる。

俺は、走りながら、＜アウロラ＞を振りかぶった。

――――ガキィィィン！

ゴーレムの左拳と、＜アウロラ＞が激突。

すさまじい音を立てて、ゴーレムの拳が弾き返される。

「其は見えざる力！鉄を引き付ける力！＜マグネティション！＞」

俺は、左後方に感知した＜アリアティル＞に向けて術を発動。

ゴーレムが人間なら不可能な挙動で、今度は右拳で殴りつけてくる。

人間の形をしてるくせに、人間には不可能な挙動をするのはやっかいだ。

俺は、左手で掴んだ＜アリアティル＞で迎撃、押し戻されつつも、防ぎきった。

『唸れ！＜ダブル・ソニック！＞』

二本の剣から、銀の真空波が二つ飛び出し、ゴーレムの足場を崩す。

が、なんとゴーレムが空中に浮くのを見た。

ゴーレムは構わずそのまま殴りつけてきた。

――――カキィィン！

『・・・そこ、どけよ。お前なんかに用はないんだ』

ゴーレムは言葉が分かるのか分からないのか、

まるで怒ったかのように、両拳を振り下ろした。

俺は、バックステップでかわし、ゴーレムの腕に飛び乗り、走る。

ゴーレムは腕を振り回して俺を落とそうとするが、

俺は思い切りジャンプしてゴーレムの頭を踏み台にして、飛び越えた。

が、ゴーレムは腕を１８０度回転させて攻撃してくる。

しかし俺はそれを＜アウロラ＞で防ぎつつ、その吹き飛ばされた勢

いを利用。

エリシアのところにたどり着いた。

「大丈夫か、エリシア」

「アル・・・ごめんなさい・・・めいわくかけて」

エリシアは、酷い怪我だった。

このままでは長くは無い。

「馬鹿、お互い様だろ」

俺はそういって、魔力を集める。

が、ゴーレムがこちらに向かってくる。

『――――邪魔を、するなぁぁ――――ッ！』

俺は激昂し、＜アリアティル＞を構えた。

『――傷つきし者を癒す聖なる力――』

『――創世の雷光よ、我が剣に集え――』

ゴーレムが拳を振り下ろす。

『――汝、未だ輪廻転生の刻にあらず――』

『――其は知性と創造を司る光――――！』

その拳を、俺は、＜アウロラ＞で受け止めた。

『――汝、未だ冥府の門を叩く刻にあらず――』
『我が剣よ！銀雷によりその身を弾丸と化せぇぇ――――ッ！』

ゴーレムが力をこめ、それを受け止める俺の立つ地面がひび割れた。
が、かまわず詠唱続行。

『――蘇りて、その天寿を全うせよ――！』
『＜創世（オーロラ）の極光・四源の雷砲（サーマルブラスト）！＞』

＜アリアティル＞が、銀と極光の弾丸と化し、ゴーレムの体に突き刺さる。

『――――＜リヴァイブ！＞』

エリシアの傷は、すぐに完治した。
しかし、ダメージが大き過ぎたのか、気絶しているようだった。
でも、これで命の心配は無い。

俺は、＜アリアティル＞が突き刺さってなお、動くゴーレムに向き直った。
どうやら、こいつはまだ戦うらしい。
エリシアを助け、先ほどと違って、俺の前方にはゴーレムしかいな

い。
この位置なら、エリシアを巻き込む心配をせずに術を使える。

『――創世の雷光よ、我が剣に集え――』

ゴーレムは焦ったのか、右拳を発射した。ロケットパンチだ。

「・・・どんなギミックだよ！」
俺はそう呟きつつ、＜アウロラ＞を振り上げ、
ロケットパンチは空高く舞い上がり、星になった。

『――其は知性と創造を司る光――――』

ゴーレムが目から熱線を放ってきた。
しかし＜アウロラ＞の纏うオーロラが、その魔力を吸収、消滅させる。

『我が剣よ！銀雷によりその身を弾丸と化せぇぇ――――ッ！』
『＜創世（オーロラ）の極光・四源（サーマルブラスト）の雷砲！＞』

＜アウロラ＞が、先ほどの＜アリアティル＞が直撃したことで、ひび割れていた
ゴーレムの胴体に直撃。粉々に粉砕した。

そして、ゴーレムは塵となって風に流されて消え、
＜アウロラ＞と＜アリアティル＞は、ゴーレムがいた場所に落ちた。
俺は、光が収まりだした＜アウロラ＞と、＜アリアティル＞を拾った。

「・・・アル？」
エリシアが、いつの間にか起き上がっていた。

「エリシア！大丈夫か！？」
俺は、エリシアに駆け寄り、一応、体を支えた。

「アルが治してくれたんですから、大丈夫ですよ？」
エリシアは顔を赤くしつつ、答えた。

と、＜アウロラ＞の光が完全に消えた。

「――――――んな！？」
光が消えた途端に、体の力が抜けた。

「アル！？」
エリシアが逆に俺を支える。

「・・・だめだ、痛みは無いけど力が入らない」
俺は、とりあえず痛みは無い事をエリシアに伝え――――。

♪～～パンパラッパッパッパッパ～～～！

いきなりファンファーレが聞こえた。

「はぁ？」

「え？」

思わず唖然とする俺とエリシア。

と、唐突に、黄緑色で半透明な、髪の長い女性が空中に現れた。

『風の迷宮、クリアおめでとうございます！』

「・・・はい？」

俺は思わず聞き返した。

『あ、ひょっとして、迷宮攻略したのは初めてですか？』

その女の人？にまた質問で返された。

「ええ、まあ」

『そうですか！私は、風の精霊シルフィードです。よろしくお願いします♪』

「あ、ああ、よろしく。俺はアルネア・・・アルだ」
「エリシアです・・・よろしくおねがいします」
すっかりペースを乱されつつ、俺とエリシアは答えた。

『迷宮攻略の特典として、何か好きなものを差し上げます！一人一つです！
これでも色々もってるんですよ？何がいいですか？』

と、言うシルフィードに、俺はある話を思い出した。
『――迷宮を攻略すると、そこの精霊と契約できるらしい』

（え～と、つまりここで頼めば契約できるんだな！）

『それでは、何かご希望はありますか？』

「お前が欲しい」
俺は特に何も考えずに言った。

「ア、アル！？」
何故か慌てふためくエリシア。

『そ、そんな！？でも、私・・・！？』
そして真っ赤になるシルフィード。
あれ、俺なんかミスったかな？

・・・あれ？なんか物凄い事言ってないか、俺！？

『わ、分かりました・・・では、エリシアさんは何がよろしいですか？』
しかも承諾されてしまった！？

「え、えっと、じゃあ、空を飛ぶときに便利なものとかは？」

『はい、それなら・・・』
シルフィードはどこからともなく、
エメラルド色の指輪を取り出した。
『これは、風の加護の指輪です。これをつけて魔力を流すと、
背中から羽が生えます♪』

「え、羽ですか？」
思わず聞き返すエリシア。

『はい♪使いこなせれば通常の3倍の速度で飛べます！
何でしたら、赤色にして角もサービスで・・・』

「い、いえ。それで、そのままでいいです！」

『そうですか・・・残念です。では、どうぞ！』
エリシアは指輪を受け取って右手の人差し指にはめた。
で、ためしに羽をだしてパタパタやってる。
多分、今回飛べなくて苦労したからだろう。
というか、人間に変身してる時は羽がないから不便だったのかな？

『え、えっと、それでは・・・私と契約できそうなアイテムはありますか？』
顔が赤いまま聞いてくるシルフィード。

「ん、剣じゃなくてもいいの？」
俺は気になったので聞いてみた。が、ご存知の通り、俺には剣しかないが。

『はい、私が聞いたもっとも地味なのですと髪飾り。
もっとも過激なのですと・・・直接体に・・・はぅ！？』
なにを考えたか、また赤くなるシルフィード。

「アル・・・せっかくカッコよかったのに」
エリシアにものすごく悲しそうな目で見られた。
というか若干泣きそうだ。

「・・・この＜アリアティル＞は？」
とりあえずこの空気を払拭すべく、俺は剣を出す。

『あ、風の魔法剣ですね！すごくいいです♪』

と、シルフィードの体が光って消え、
＜アリアティル＞改め、精霊剣＜シルフィード＞が誕生した。
剣が纏う魔力がケタ違いに跳ね上がり、なにもしなくとも風を纏う。

『それでは、これからよろしくお願いしますね♪』

シルフィードが　なかまになった！

「あ、そういえばこの迷宮に先に入ったヤツら知らない？」
本来の目的を思い出し、シルフィードに聞いてみた。

『あ、じつはここって普通の迷宮と違って仮想空間なんですが』

「はぁ！？」
「え！？」

『あ、やっぱりご存知無かったですね。
私を含めた、この国の四大精霊の迷宮は仮想空間となっておりまして、
中で死んでしまっても、何の心配もなく、外に出されるだけなのですが・・・
先ほどいらした5名の方は全く戦わずに隠れていらっしゃるのでどうしようかと・・・』

「・・・じゃあ、俺の怒りは無意味？」
「・・・私の想いを返してください！」

『いえ、無意味じゃないですよ！？一度失敗された方は再挑戦できません』

・・・なんだろう、このやるせない感じ。
まあ、助けに来た相手が無事でよかったというべきか・・・

「あ、そういえば学園長はどうなったんだ？」

「あ、そういえば来ないですね」

俺とエリシアは顔を見合わせた。

『あ、この迷宮は最大7人パーティでの攻略なんです・・・』
なんとなく申し訳なさそうなシルフィード。
まあ、数百人単位で来たら大変だろうからな・・・

「あれ?迷宮は全力・速攻で攻略されるって聞いたぞ?」
思わずシルフィードに聞いてみた。

『えっと、それは通常の迷宮ですね。仮想空間ではなく、ホンモノの魔物がいますので、
仮想空間よりも大量に配備でき、大人数にも対応しています』

「じゃあ、なんでこの迷宮は仮想空間にしたんだ?」

『・・・私たち四大精霊は、自分と契約するのに相応しい方を見つけたかったのです。
でも、あまり難易度を上げてしまうと被害が凄そうですし・・・
それに数の力で攻略されてはどんな方と契約するか分かりません。
ですが、仮想空間ならどんな無茶な難易度でもオッケー♪
それなら危なくないから殺人難易度に♪
でもたくさん人が来て面倒だったから全力で隠蔽結界♪
破れた人にだけ挑戦してもらえばいいよね♪』

「・・・おいコラ」
「キャラ変わってます」

とりあえず俺たちは、すこし休んでから貴族パーティを回収。
そして脱出した。

俺たち7人が、例のワープドアから出ると、学園長が絶対零度の笑顔でお出迎え♪

「何か言うことはあるか？」
学園長は俺をぶん殴りつつ言った。
殴りつつだぞ！弁明させる気ない！

「実は仮想空間だったので命の危険はありませんでした！」
でも、弁明はしておく。

「む、仮想空間！？まさか失われた四大精霊の迷宮か！？」
おお、学園長がこんなに驚くとは。

よし、今のうちに逃げよう。
と、そ～っと歩き出した俺は首根っこを掴まれた。

「アルネア、貴様そんな危険な場所に無断で行くとはいい度胸だ・・・！」
や、やばい！？学園長が噴火寸前だ！
「いえ、だから危険じゃないですって！」

「・・・四大精霊の迷宮は、失敗しても死なないことから大量に挑戦者が出たが、
失敗するとしばらく起き上がるのもままならないダメージを受けると聞いたが？」
「え、俺は聞いてないですよ！？」
『ごめんなさい、ご主人様♪　確かに失敗すると起き上がれません♪』
と、シルフィードが魔声で言った。

「え、マジ？」
というか、ご主人様じゃなく別の呼び方を希望する！

「ふっふっふ・・・その風魔力、どうやらシルフィードと契約したようだな。
その力は認めよう。だが、独断行動は騎士には厳禁！
貴様らは残りの合宿期間、私が徹底的にその心を叩きなおしてやる！」
楽しそうに笑う学園長に、俺たちは恐怖した。

第九話：曙の剣（後書き）

第一章の本編完結です！
ここまで読んで下さった方、本当にありがとうございました！

次の話は例のコーナーです。

番外話：アルの魔法教室？ｉｎ第一章

♪～チャラッ、チャ～ラララ～～！

＊この話で行われたアンケートは、現在終了しております。

特別コーナ！――――『アルの魔法教室ｉｎ第一章！』

「さ～て、感想を受け付けてないので、問答無用で再び始まりました！
パーソナリティは、銀雷の魔術師！アルこと、アルネアと？」

「最近出番がないよ！？布団剥ぎの魔術師！リリーことリリネアと？」

「鈍感なアルに断固抗議です！焔翼の魔術師！エリシアと？」

『スペシャルゲストの風の精霊シルフィードでお送りします♪』

「さて、今回も始まったな・・・この解説と謝罪のコーナーが」

「お兄ちゃん！まず私に謝って！出番少ない！称号おかしい！」

「リリーはまだ布団攻防以外やってないですから仕方ないです」

『それではご主人様、何から解説しますか♪』

「え～っと、とりあえず分かりにくそうな物の解説をしないといけないんだが・・・」

「お兄ちゃん、コーナーのときは声しかなくて読みにくいんじゃない？」

「リリー、これがアルの限界なんです。見逃してあげて下さい」

『こうしてエリシアさんに言わせることで、うまく作者の擁護をするんですね♪』

「・・・とりあえず分かりにくそうな＜サーマルブラスト＞について解説するか。

えっと、確か電気は空気中で放電すると、プラズマを発生させます。

んで、そのプラズマの膨張圧を利用して弾丸を発射するサーマルガンをモチーフにしています。

え、砂鉄でお前なにやってんの？って言われそうですが、砂鉄を魔法で弾丸にしてます。

こう、ある程度集合させて。あの時は十二発くらい作ったっけな？」

「お兄ちゃん、序章の時にレールガンとかコイルガンとかは？
ってご意見を頂いてたよね？」

「そうですよ、アル！なんでレールガンにしないんです？あっちの
方が強そうです！」

『エリシアさん、レールガンは磁力でレールをひかないといけない
そうなので、
ご主人様には無理だったんです。』

「おいコラ！別に無理じゃないぞ！俺だってその気になればゲーセ
ンのコインで・・・！」

「だ、ダメだよお兄ちゃん！レールガン自体は色々な作品に出てる
けどコインはダメ！」

「でも、この作品ってパロディ多くないです？」

『そうですね・・・初心者なので全く分からないですが平気なので
しょうか？』

「むぅ、次回予告とか、なんということでしょうとか、空を自由に～とかな。」

「そういうわけなのでお兄ちゃん！一旦感想・レビューを開きましょう！」

「リリー、アルのライフはもう0よ！」

『そういうことですので、感想を2章開始まで開きます♪』

「・・・胃が痛い」

「お兄ちゃん！まだ始まってすらないよ！？」

「アル、頑張って下さい」

『えっと、お手柔らかにお願いします♪』

「そ、そうだ！せっかく開くならこの機にアンケートでも！」

「え、お兄ちゃん何をアンケートするの！？」

「アル、人気投票とか考えてるならまだ遅くありません。
票が集まらなくて死にますから思い直してください」

『そうです！なんですかその登場したばかりのキャラクターに不利なコーナーは！』

「・・・いや、第二章についてだ」

「ま、まさかお兄ちゃん！？」

「アル、嘘ですよね？」

『何がですか？』

「え～、第二章の内容が全くありません。ストック無し。」

「お兄ちゃん!?更新速度が取り柄だって言ってたじゃない!」

「アル、それをアンケートで決めるのは批判が多いですよ?」

『そこまで追い詰められたということでしょうか・・・』

「・・・え～、第二章はどれがいいでしょうか?
1、三国魔法学校交流戦編
2、夏休みは海へ行こう編
3、まさかの前世編
の三択です」

「お兄ちゃん、まさかとは思うけど決めるの面倒くさいとか言わないよね?」

「アル、普通に自分で選べばいいじゃないですか!」

『というか、一個凄いの入ってますね♪』

「だって!1は定番だし、2は・・・俺が変態と化すかもしれん!
3は・・・うん、まあ、あれだよ」

「お兄ちゃん!いままでだって定番しかしてないでしょ!?」

「もういいです！海に行きましょう！」

『海だと私の出番がないです♪』

「と、とにかく！せっかく読者の方の意見が聞けるんだから聞いてみたかったんだ！

俺の心が打たれ弱かったばっかりに、日ごろ感想とか聞けないし・・・

これ以外の作品を書けるほど器用じゃないというか、全てを懸けてるし・・・

最初で最後のチャンスかもなんだ！」

「お兄ちゃん・・・そんなこと言って泣き寝入りするくせに！」

「アル、前の二章と三章が廃棄された惨劇を忘れたんです・・・？」

『まあ、今日だけでも試してみたらどうですか♪』

「えっと、そんなわけで感想、誤字脱字の報告等、どうかよろしくお願いします。

アンケートは・・・やってくださる方だけでもいいのでどうかお願いします！」

「また、お兄ちゃんの心はガラス製ですので感想にお返事できない場合がございます。
ああ、またハートブレイクかよ。と思って見逃してあげて下さい・・・」

「また、作品の根底に関わるご意見、ご質問にはお答えできない場合があります」

『わからないことがあったら感想で質問しちゃってください♪』

この話は質問に応じて随時更新するつもりです・・・

「さっそく誤字のご報告いただきました！ありがとうございます！」

「八話本編と、七話の次回予告でのお兄ちゃんのセリフ、「要はない」を修正しました！」

「アル、焦って更新しすぎましたね。」

『誤字は大問題ですものね♪』

「さらに、ゴーレムがゴレーム、危険はあんりません。とのご指摘

を頂きました！ありがとうございます！」

「お兄ちゃん！？急に間違い大爆発だよ！？」

「アル、なんとかならなかったんです？」

『ちょっと多いですね♪』

「そういえば、序章が終わったときに全部の話に描写追加して、全話のタイトル変わったこともあったな、今、戦闘描写を申し訳程度に補填しました！」

「お兄ちゃん、投票してもらったよ～」

「アル、よかったですね、返事があって」

「ああ！めちゃくちゃ嬉しいぜ！」

「はっ！？しまった！小説に夢中になってモン〇ター・ハンター・ト〇イGを予約してない！ちょっと行ってくる！」

「お、お兄ちゃん！？」

――5分後

「アル、アンケートをとるのはいいですけど、もうちょっと情報出したらどうです？」

『それじゃあ、次回予告みたいにやりましょう♪』

「おい！？勝手に決めるなよ！？」

「じゃ、お兄ちゃん頑張って！」

「アル、どんまいです」

『完成し次第アップします♪』

「できたっ！次章予告（仮）で出します！」

「お兄ちゃん、これでどうなるかな？」

番外話：アルの魔法教室？ｉｎ第一章（後書き）

作者はド素人ですので、感想はどうかお手柔らかにお願いします！

ご投票してくださった方！ありがとうございました！

次章予告

――次章予告――

―♪～～チャラッ、チャ～ラララ～～！

「私は皇女のフィリア・ラルハイトと申します」
「さて、もうすぐ三国交流戦の時期だ！」
「いくぞシルフ！この勝負、俺たちがもらう！」
「燃えろ＜レグルス！＞風など焼き尽くしてしまえ！」
『ふふっ、四大精霊は伊達じゃないですよ♪』
「――遅いわ。＜――ミラージュ＞」
「え、嘘でしょ・・・お兄ちゃん！？」
『悪いがこの試合、負けるわけにはいかぬのだ！』
「我らが国の威信にかけて――――！」
「これはまさか！？＜氷＞属性だと！？」
「精霊剣シリウスで・・・あなたを――倒します！」
「オーランドの神童・・・あれほどとは！？」
「ちくしょーー！美少女に起こされるなんてうらやましすぎんだよぉぉぉ！」
「はぁ、俺は別に負けてもいいんだけどなぁ・・・」

登場人物紹介（第一章終了時）

登場人物紹介（第一章終了時）

アルネア・フォーラスブルグ

１５歳。
金髪緑目。身長は一般男子平均くらい。体重はやや軽い。
愛称はアル。
得意属性は＜雷＞だが、＜風＞もよく使う。
特技は意外と料理ができることと、魔力感知。
転生者だからか、身体能力が高く、魔力量も多い。
武器は、銀の魔法剣＜アウロラ＞と、風の精霊剣＜シルフィード＞。
＜治癒＞魔法の真似事もできるが、効果は低め。
特殊体質で、魔法が白色になる。
また、全力を出すと銀色に変化。

得意魔法およびその解説。

＜サンダーボルト＞
アルが最初に使った雷魔法にして、使いやすい便利な術。
全力開放かつ全詠唱時は、威力が多分十倍くらい。

＜ウィング＞
空を自由に飛べちゃう便利な魔法。
だが、消費魔力が多く繊細な術なので、難易度は高い。

＜～～～サーマルブラスト＞
どこぞのレールガンみたいな必殺技。
空気中に放電することでプラズマを発生させ、その膨張圧で物体を高速射出する。
四源の雷砲となっているのは、物質の四態目がプラズマってとこから。
また、実は始原ともかかってたりする。
エリシアに言わせると、武器を失う致命的デメリットがあるが、威力はすごい。
ただ、ものすごく集中力と魔力を使う。

＜マグネティション＞
磁力を発生できる、すごく便利な術。
ただし、魔力装甲は透過できない。
これで無限サーマルブラスト・・・！
だが、ある方法で妨害可能。
また、魔力操作が大変であり、無限サーマルは全力開放時以外は無理。

＜サンダーブラスト＞
サンダーボルトとの違いは、サンダーボルトよりも速度を落として威力を上げていること。

エリシア・フォーラスブルグ

１５歳。
白髪赤瞳だが、学校に行くときに目立たないように、偽装魔法で金髪緑目にしている。
本当はドラゴンなので、本気を出せば魔力量は人間の比ではない・・・ハズだ。
が、ドラゴン的にはまだ赤子に等しい年齢なので、そこまで強くは無いかもしれない。
得意属性は＜焔＞で、特異体質で魔法は白い。特技は火を使う料理。
実はかなり筋力もある。
武器は白い＜焔＞の魔法剣＜エルディル＞。
自分の体に受けた魔法を習得する能力がある。
が、そんな痛いことはしたくないので使わない。
ちなみにお察しだが可愛い。

リリネア・フォーラスブルグ

１５歳。
金髪緑目。金髪緑目多くないか？って感じだが家族だからだ。
全くイメージわかないが、意外と強い。
特技はお菓子を作ること（ただし甘いものに限る）
得意属性は＜治癒＞と＜水＞。
武器は水の魔法剣＜リーシア＞。
最近、出番が無い。
アルの出生について何も聞いてない。
またまたお察しだが可愛い。

シルフィード

年齢は謎。
黄緑半透明の女性で、髪が長くお茶目?である。
愛称はシルフ。
四大精霊の中の風の精霊。
アルをご主人様と呼ぶ。
ちなみに、契約は通常、クリア特典を一個もらったあとにするものであり、
特典を選ぶ時に「お前が欲しい」と言う必要性は皆無である。

リベルク・フォーラスブルグ

通称リック兄さん。いい意味で論外。
父さんから＜ハマル＞を継承し、一年先に魔法学校へ通っている。
たしか実技の成績はトップクラスだった。
座学はお察しである。
得意属性は＜炎＞。
特技は筋トレ。ムキムキである。
背は高い。体重は筋肉で若干重め。
これはお察しではないが意外とハンサム。
残念イケメンとかいうと悲しむので黙っておいてあげてほしい。
きっと料理はダメ。

アルベルク・フォーラスブルグ

父さん。この父にしてリック兄さんあり。
＜炎＞属性使いだと思う。
『紅蓮の悪魔』という、なんともコメントしにくい二つ名がある。
昔は騎士だったらしい。
料理が壊滅的。

クリス・フォーラスブルグ

母さん。母さんもリリーと同じでお茶目である。
料理は上手。特にお菓子がおいしい。
＜水＞の系統の属性だと思う。
＜治癒＞も使う。

ジョン

１５歳。
村で出会った＜土＞属性の少年。
茶髪茶目である。
じつは平民としては破格の魔力を持つ。
大分落ち着いた性格になった。

ローラ・フィリスタイン

１５歳。
サバイバル合宿で二位の成績。
情報なし。

ガルシア・ハイラスブルグ

肉を焦がしてたやつ。
貴族のイメージそのまんまな感じ。
ビッグボアは相手が悪かっただけで、強い。
十二貴族の長男。本当に強いんだよ？
金髪碧眼。

エリス・ハーゼンシュタット

１５歳。
ほんとはもっと出番があったけど、カットされた可哀想な子。
アルと同じクラス。
黒髪黒目。普通に可愛い。
大人しめの女の子。
十二家。
＜水＞属性。
エリシアと名前が似てるって思ってたら、先ほど間違えました。
ご指摘ありがとうございます！
・・・出番カットの上、名前間違えるなんて・・・・！？
最近誤字多いしなぁ・・・

学園長

そういえば名前を知らない。
かなり高名な魔術師らしい。
多分２０代後半。黒髪ロングヘアー。
なんとなく怖い。逆らうとヤバそう。

銀髪少女

名前は知らない。
ただの銀髪緑目ロングヘアーの少女である。
が、この話の都合上、出てくるからには意味がある。

フィリア・ラルハイト

序章第一話に微妙に出てきた、＜光＞使いの皇女様である。
二章がどうなっても、どうせそのうち登場するので載せておく。
金髪碧眼。

適当に魔法解説コーナー。

この辺は裏知識です。知らなくても多分、全然平気です。
まあ、おまけコーナーですね。

Q，魔法の属性によって、相性などはありますか？

A，一応ありますが、魔力量が一番大事です。
　が、属性によって個性があります。

　＜火＞は威力に、＜水＞は技巧に、＜風＞は速度に、＜土＞は守りに秀でます。
　また、＜雷＞は威力と速度に秀でて、＜氷＞は守りと技巧に秀でます。
　更に、＜光＞は技巧と速度に秀でて、＜闇＞は威力と守りに秀でます。

　また、上位属性として、
＜火＞の上に＜炎＞。＜炎＞の上に＜焔＞。
＜水＞の上に＜滝＞。＜滝＞の上に＜海＞。
＜風＞の上に＜疾＞。＜疾＞の上に＜天＞。
＜土＞の上に＜地＞。＜地＞の上に＜陸＞です。

このへんはあまり気にする必要は無いですが、一応書いておきます。
まぁ、話には出ないですね。たぶん。

ちなみに、魔力量を表すと、現状こんな感じ。
（魔力は成長します）

ジョン≪エリス≦リリー≦ガルシア≪リック≪エリシア＝アル（通常時）＜母さん

母さん＜父さん＝学園長＝アル（全力時）＝エリシア（本気）＜ハマル（父さんの精霊）

ハマル＜シルフィード＜父さん（精霊開放時）≦アル（？？？時）

第一話：皇女の来訪

はぁ、眠い。
俺は一番前の窓際の自席にて、あくびをかみ殺した。
今は世界情勢の授業だ。
この世界では、戦争とかもあったりするので、大切な授業だ。
でも、転生前に日本人をやってた俺には実感がわかない。

「いいですかっ！現在皇国は、オーランド王国、エディメア共和国と三国同盟を結んでいるのですっ！」

アリス先生が力説している。
なんとこの学校、担任の先生が全授業を受け持つ。
・・・最初に聞いたときは、若干絶望したのを覚えている。
まあ、もう慣れたが。

はぁ、夏休みは海にでも行ってくつろぎたい・・・
ああ、海いいなぁ・・・
皇国は北は海に面しており、東はティルグリム山脈、西は魔獣の森とオルト山脈。
なかなかの要害っぷりだ。

南のエディメア共和国とは同盟関係だし、戦争は無いんじゃないか？と思うが、
南西に位置するディメール帝国とは敵対関係にある。

また、ここが攻められなくとも、三国同盟の関係で救援にいく必要がある。
ちなみに、三国同盟の残りの国、オーランド王国は、共和国の更に南にある。
つまり、帝国に接する三国が、強力な帝国に対抗するために結んだ同盟なのだ。

何の話だっけ？
そう、海に行きたいんだが・・・まだ5月だ。あと2ヶ月。
はぁ、俺に平穏は来ないのか？
まぁ、合宿も終わったし、しばらくは・・・

「というわけですので、三日後に校内選抜戦をやりますっ！」
なんか元気よく宣言してくれたアリス先生。

「・・・はぁ！？」
思わず驚いてしまった。
幸い、ちょうど廊下側にいる先生には聞こえなかった模様。

「アル、聞いてなかったんです？今度、三国魔法学校交流戦がある

んです」
エリシアが察して、後ろから解説をくれた。

「・・・なにゆえ？」
聞き返すしかできない俺。

「だから、魔術師は国の力を端的に示す象徴的なもので、
平等な同盟関係にある三国が、毎年この行事を行うことで、
（一応は）平和的にその年、どの国がリーダーシップを取るか決めるそうです」

「・・・どこが平和的？というかそんなので決めるのかよ？」
そう、普通はもっとこう・・・
・・・あれ、意外と決め方なくね？
三国は、人口、国家予算、領土の全てが同じくらいなのだ。

「アル、魔術師は国の最重要戦力ですよ？」
エリシアに、アルが寝ぼけてます！って目で見られた。
そう、この世界だと、最重要戦力は魔術師なのだ・・・
まあ、魔法がある以上当然かぁ・・・

ん？

「エリシア、校内選抜戦って何だ？」

「アル、ほんとに聞いてなかったんですね・・・
一年生からも参加者を出すので、選抜として校内戦をやるそうです」
呆れつつも説明してくれるエリシア。

で、先生の説明をまとめると、こうだ。

個人戦は、各学年５人。
チーム戦は、各学年、４人１チームが５組。
そして軍団戦とやらが、３学年から合計３０人。
ちなみにチームはいつ決めても可。
校内選抜でチーム戦のチームも選抜するとのこと。
選抜戦は三日後。チームが足りなかったら、先生が勝手に選ぶ。

・・・なんか、ムチャクチャじゃないか？

授業が終わった休み時間、俺はいつものメンバー・・・
俺、エリシア、リリー、ジョン、エリスで集まった。
とりあえず、いつものように俺が切り出す。

「・・・団体戦って、ほぼ戦争じゃねぇか！」

「お、お兄ちゃん、そんなにハッキリと・・・」
リリーが恐れおののいてるが、元日本人の俺にお上の威光など効かぬわッ！

「アル、死者が出たことは、過去１００年一度も無いそうですよ？」
エリシアがフォロー。が、顔には納得はしてないと書いてある。
エリシアは戦いが好きじゃないのだ。

まぁ、こんなことを言ってる俺だが、この大会は親善試合という意味もあることは分かってる。
帝国強いしなー。
でも、俺は面倒なのは嫌だ！

「・・・まぁ、アルの言いたいことは分かるけど、僕たちには関係・・・あるね！？」
ジョン、考えてから発言してくれ。

「アルさん、頑張ってくださいね！」
エリスに応援されるが・・・

「俺は出場する気なんか、これっぽっちも無いからな！」
なんで出場が決定事項みたいになってるのだ！
俺は出ない！

寮で寝てる！

「アル・・・あの学園長が逃がしてくれるわけないです・・・」
エリシアが諦めましたって顔で言う。

・・・くっ、確かに！
あの学園長なら縛ってでも連行するだろう。

「お兄ちゃん、ファイト！」
リリーは楽しそうだが・・・

「ねぇ、リリーも出るんじゃないの？」
ジョンの指摘が入った。

「え、そんなわけないよ！？お兄ちゃんにもエリーにも絶対勝てないよ！？」
まあ、確かにリリーの言うとおりだが・・・

「リリーさん、それはこのお二人が強過ぎるだけでは・・・・？」
そういうエリスだが、エリスも強いんだぞ？

さて、そんなこんなで盛り上がる俺たちだが、
唐突に、騒がしかった教室が静かになった。
何事だ？と思って辺りを見渡すと、
一際大きな存在感を放つ金髪碧眼の超美少女がいた。

このクラスじゃないよなー。
なにしに来たんだろー。
とか思ってたら、こっちを見て、そのまま歩いてくる。

・・・はい？

で、俺たちの前で停止。

「初めまして、私は皇女のフィリア・ラルハイトと申します」
俺たちに向かって、丁寧かつ優雅にお辞儀をなさった。

「はっ、はじめまして！リリネア・フォーラスブルグと申します！」
「は、初めまして、ジョン・オウリアと申します！」
「お初にお目にかかります、エリス・ハーゼンシュタットと申します」
恐れおののきつつ挨拶する三人に・・・

「あ～、はじめまして。アルネア・フォーラスブルグです。アルって呼ばれます」

「どうも。エリシア・フォーラスブルグです」

なんとなくいつもどーりの俺とエリシア。

「おおお、お兄ちゃん！？なんて無礼なことを！？」
慌てふためくリリー。
ジョンは顔が真っ青だ。
エリスは落ち着いてるが、冷や汗が見える。

が、フィリア皇女は落ち着いてる。むしろ微笑んでる。

「そうですか、では私もアルと呼ばせて頂いてよろしいですか？」

にっこり笑いながら尋ねられた。おお、なんか新鮮。

「どうぞ。俺はどのようにお呼びすればいいでしょうか？」

なんと呼べばいいのか分からなかったので、聞いてみた。

「ふふっ、そうですね、フィリアと呼び捨てにして下さい」

皇女・・・フィリアは楽しそうに笑った。

「おっけー。フィリア、なんか用？」

急に砕けた俺・・・もとからかなり危うかったが。

に、周囲が凍った。

「うふふっ、アル、今回はお願いがあってきました」

「ん、なに？」

「交流戦のチーム戦で、私のチームに入って頂きたいのです」

ここは真面目な顔でフィリアは言い切った。

「え〜、俺出たくないんだけど・・・」
俺は本音で返す。リリーに背中をつねられた。痛い。

「そうなのですか？アルは必ず出ることになると思いますよ？
無理にとは言わないので、考えておいてもらえますか？」

フィリアに目を見つめられる。
まさかの魅力攻撃！？
くっ、この程度では折れんぞ！

「あ〜、あの学園長だしね・・・まあ、考えるだけなら」
そういった俺に、フィリアはまた楽しそうに笑った。

「それでは、お邪魔しました。アル、またね」
ウィンクしてフィリアは去っていった。

が、空気は凍っている。

「お、お、お兄ちゃんの馬鹿――――！」
リリーが顔を真っ青にしながら激怒。

「アルさん・・・さすがに今のは・・・」
エリスの顔も青い。やばい、初めて見たかも。

「・・・・」
ジョンは真っ青で放心状態だ。

「アル、顔がニヤニヤしてました・・・」
どうやら、エリシアは違う理由で怒ってる模様。
多分、俺がだらしないのが気に食わないのだろう。

まあ、みんな多分に俺の無礼な態度を気にしてるんだろうなぁ・・・

「大丈夫だって、呼び捨ては親交の証!あれぐらい砕けたほうがいいって!」
とりあえず、そう言ったのだが・・・

「お兄ちゃん!相手は皇女様だよ!?」
と、リリー。

「・・・はっ!?アル、皇女様になんてことを!?」
と、ようやく魂の還って来たジョン。

「アルさんは予想外過ぎます・・・」
と、エリス

「アルのばか・・・」
と、なんか未だに違う理由で怒ってるエリシア。

リリー、ジョン、エリスには納得してもらえなかった。

エリシアは、俺を上目遣いに睨みつけてきていたのだが・・・
なんか可愛かったので、頭を撫でてみた。

「ア、　アル！？」
エリシアは驚きつつ、なんか若干気持ちよさそうな・・・・
あれ、なんかいいなコレ。
なんかエリシアも段々幸せそうな顔に・・・

「って！？アル！教室でなにするんです！？」
逃げられた。ちっ。

ん？
「教室じゃなきゃいいのか？」
思わず聞いた俺に、エリシアは硬直。
顔が真っ赤だ。

「はっ！？お兄ちゃん！そんなことしてないで、ちゃんとさっきの説明をしろーーー！」
リリーの跳び膝蹴りが俺に直撃し、俺への説教が始まった。

まあ、この世界だと皇女様なんて天の上の人みたいだし、これが普通なんだろう。
そんなことより、エリシアの頭を撫でたい・・・
いや、すごい気持ちいいよ？

まぁ、そんな皇女様・・・フィリアに勧誘された俺だが、今のところは、
いかに出場しないかについて考えてる。

う～ん、うまい言い訳は無いものか・・・

選抜戦でわざと負ける？
う～ん、相手がエリシアとかなら負けられそうなんだがなぁ・・・

どう足掻いても、選抜戦は三日後だ。

第二話：校内選抜戦の日（前書き）

すみません、見切り発車の弊害が出ました。
チーム戦の人数を3人から4人に変更いたしました。

第二話：校内選抜戦の日

さて時間というのは、はやいもので、
今日は校内選抜戦の日だった。
俺は、何度かチームに誘われたりしたが、断り続けた。
のだが、別に俺がチームを作るわけでもない（出る気がないから当然だ）
が、今まで色々目立っていた俺の動向は意外と注目されていたようで・・・

話してないが、入学試験などでもかなりやらかしてるし、
常に美少女・・・（エリシアとかリリーとかエリスとか）が周囲にいるし、
フィリアへの態度が無礼だったのは、瞬く間に学校を駆け巡った。
んで、因縁つけてきた貴族を軽くあしらったりもした。

しかも、フィリアもチームを結成しない始末。
サバイバルで2位の成績だった、ローラ・フィリスタインもチーム不参加。
3位のエリシアも、なるべく戦いたくないらしいし。

（サバイバルは結局一週間やったのだが、順位は大して変化しなかった。
　また、学園長も半日お説教しただけ・・・だけ?で解放してくれた）

ちなみに、サバイバル4位はフィリアである。

そんなわけで、なんとな～くチーム結成しないほうがいいのか？
というかどうなってんだ的な空気が蔓延し、1学年からは、2チームしか出なかった。
（5チーム必要である）

俺は、どうすんだろ？と思っていたのだが・・・
のだが、校庭で選抜戦をやる前に、学園長からお呼び出しを受けた。

学園長室に行くと、チーム登録してた2チームと、エリシア、リリー、フィリア、エリス、
と、何故か例の銀髪少女と、あと十二家の生徒等・・・つまり強い面子が集っていた。

あ、前に言ったとおり、貴族の血筋＝魔力が強い血筋であり、
貴族はたくさん子どもを作る。
一夫多妻も禁止されてないので、筆頭貴族の十二家の子どもはすごく多い・・・
いやだねぇ・・・
まぁ、この世界だと国力増強の基礎だったりするのだが・・・

あ、学園長室は普通の校長室っぽい部屋だった。
学園長が立派な机に肘をついて座っている。
と、学園長が重々しく口を開いた。

「・・・お前たち、何故チーム戦に参加表明しない。
三国交流戦は、互いの力を競い合うと共に、親善試合の役割もあり、
有事において連携を取りやすくするという意図のほか、
互いの戦力を見せ合うことで隠し事を無くし、下手な疑心暗鬼を無くそうという、
三国同盟締結時の三国のトップがその友情の証とした大切な行事なのだぞ・・・」

それなのに戦力を温存したなどと言われそうな事しやがって！と言外に責められた。
外交問題だバカヤロー！って言われてる気もする。

とりあえず俺たちは無言。
が、学園長が俺を凝視してくる。
おら、何とか言えや。って感じだ。正直怖い。
・・・仕方ない。

「学園長、俺にはチーム戦の経験など無く、また、対人戦の経験もほぼありません。
というか俺の術は危険です。死人がでますよ?だから無理です」

俺は釈明。

学園長は次にフィリアを見た。

「私はチームが決まらなかったので」
しれっと言うフィリア。俺の名前を出さずにいてくれたのはかなり有難い。

次に学園長はエリシアを見た。

「私はチームを率いる器ではないですし、
かといって変なリーダーに従うのは断固拒否します。
いやらしい目の変態なんて論外です」

・・・エリシアは学園長にも遠慮しない。ほんとに嫌なんだろう。

次に銀髪少女。
「・・・右におなじです」

さらに素っ気なかった!?

・・・なんか俺だけ怖がってるみたいじゃん!・・・悔しい。
で、次にリリー。

「その・・・私は実力不足かなぁ～と」
あ、リリーは遠慮してた。いや、本心か。

で、他の面子は、フィリアとか俺とかの有名所が動かないから様子

見してたとのこと。
で、学園長はしばし考え、言った。

「アルネア、お前が出ないと国際問題だ、出ろ。というか面倒なだけだろお前。
十二家かつ、トップの成績で入学したお前が出ないのは不自然だ。
三国の強力な治癒術士が集まるから負傷の心配はいらん。今までも色々あった。」

と言って、学園長は難しそうな顔をした。

「問題はお前たちか・・・フィリア、あてはないのか?
エリシアは誰ならいいんだ?いないのか?
ローラ、お前も誰かいないのか?」

と言った学園長に・・・

「じゃあ、アルをください」
と、フィリア。

「アルならいいです」
と、エリシア。

「じゃあ、この人」
と、銀髪少女が俺を指差しつついった。

え、この子がローラなの？
この、ぽわ～っとした子がサバイバル2位だと！？

と、学園長が更に難しそうな顔をした。

「あのなぁ、お前たち全員を1チームに集めると戦力が集中しすぎ・・・
　いや、アリだな。」

ええ～！？アリなのかよ！？と叫びそうになるが、こらえる。
学園長は、はっは～！今年の優勝はもらったな～などと言っている。
が、

「いや、まてよ？リーダーはどっちがなる？」

学園長は俺とフィリアを見た。
フィリアは皇女だが、エリシアとローラは俺をご指名である。困った。

が、問題はあっけなく解決。
フィリアが、
「アルのチームなら全然いいですよ？」
と言った為だ。
俺、そんなに何かしたっけ・・・？

兎にも角にも、なんかドリームチームが結成されてしまった。

学年上位を上から選んだだけというトンデモチームだ。
俺とエリシアはともかく、連携が不安だ・・・

とりあえず、選抜戦の前にミーティング・・・をする時間もない。
もう始まる。（俺が寝坊したのが原因だ）
まぁ、チーム戦の前に個人戦があるので、そこで互いの実力とかを
把握する流れとなった。

で、みんな校庭に集合。全校生徒３００人だ。
学園長の話が始まる。

「よし、今日は全力を尽くすように！手を抜いたら罰則があるので
気をつけろ！以上！」

終わった。この人、説明は長いけど挨拶は無駄が無いな。
・・・罰則って何だ？かなりヤバそうだが。

さて、そんなわけで校内戦が始まる。

前に掲げられたトーナメント表にみんな群がった。
そう、校内戦はトーナメント式なのだ。

空を飛んで確認すればすぐだが・・・それはないな。

仕方なくいくつか置かれた内、最も人がいないヤツを見に行った。

（え～と、一回戦目じゃねぇか!?相手は・・・ガルシア・ハイラスブルグ・・・誰だっけ?）

「フォーラスブルグ、人の名前が覚えられないのか・・・?」

また声に出ていたようだ。

もはや怒る気にもならない。って感じのガルシアが横にいた。

「おおっ、悪い悪い。ほら、みんな苗字が長いだろ?」

とりあえず弁明する俺。

「・・・まぁいいさ、全力を尽くす。手は抜くなよ?」

・・・あれ?

「ガルシア、なんか前よりカッコイイな?」

「んな!?お前の実力は認めてるだけだ!」

「おう、ありがとな!」

そんなことを言いつつ、一回戦なので校庭を歩いていく俺たち。

競技場クラスの校庭で、５０メートルほど距離をあけて向かい合う。
試合は学園長の号令で始まる。

「よし、構え!」

俺たちは同時に剣を――俺は＜シルフィード＞を、ガルシアは赤い剣を抜いた。
俺の周囲は魔力の突風が吹き荒れ、ガルシアの周囲は一気に温度があがる。

「ん?ガルシア、精霊剣か?」
思わず聞いてみた。

「ああ、合宿が終わって一日だけ家に帰ったときに、
親父から、お前もようやく身の程を弁えるようになったな。
と言われてな。貰った。ふん、自分の無力さを知って認められるとは妙な気分だ」

おそらく、なんだかんだで父親から認められたのがうれしいのだろう。
だから、俺も返した。

「ああ、ガルシア。前よりずっと強そうだぜ？」

「ふん、よく言う。全く本気ではないだろう？」

ガルシアは楽しそうに笑った。
俺も笑ってたと思う。

『貴公が噂のアルネア殿か、ガルシアが世話になったな。
私は爆炎の精霊レグルス。以後、見知りおきを』

「あ、どうも」
俺はなんとなく軽く礼をする。

『それでは私からも、風の精霊シルフィードです。よろしくおねがいします♪』

「あ、ああ、よろしく」
もはや緊張感ぶち壊しのシルフの声に思わず礼をするガルシア。
もはや♪マークが見えそうなのだ。緊張感などカケラも無い。

で、お互いにニヤリとしつつ、試合は始まる。

「――――始め！」

第二話：校内選抜戦の日（後書き）

――――次回予告――――

♪～チャラッ、チャ～ラララ～ラ～！

「いくぞシルフ！この勝負、俺たちがもらう！」
「燃えろ＜レグルス！＞風など焼き尽くしてしまえ！」
「――――遅いわ。＜ミラージュ＞」
「うはぁ～、そんなのアリかよ？」
『ふむ、申し訳ないが全力で行かせて頂く』
『ご主人様、サクっとやっちゃいましょう♪』
「アルは渡しません！」
「・・・なんか知らんが、仲良くな？」

「次回、『疾風と爆炎の宴』魔術王に、俺はなる！」

第三話：疾風と爆炎の宴

「――始め！」
学園長の合図で俺たちの戦いは始まった。
俺は風を巻き起こし、ガルシアは炎を巻き起こす。

――先手必勝！
俺は＜シルフィード＞に魔力を集めた。
「いくぞシルフ！この勝負、俺たちがもらう！」

『ご主人様、サクっとやっちゃいましょう♪』

「風よ逆巻け！巻き起これ烈風！＜テンペスト！＞」
俺の前に竜巻が出現し、突き進む！

「燃えろ＜レグルス！＞風など焼き尽くしてしまえ！」
そういいつつ、ガルシアも魔法を発動。

「いでよ爆炎！全てを焼き尽くせ！＜ヴォルカディア！＞」
ガルシアの手から爆炎が生まれ、竜巻と衝突。

――ズガァァン！

砂煙が舞い上がり、収まると、俺の姿は校庭には無かった。

「んな！？」

『ガルシア、上だ！』

そう、俺は上空で魔力を集めていた。

「天をも切り裂く白き雷よ！我が手に集え！＜サンダーボルト！＞」

「くっ、盟約によりて結ばれし――――」

ガルシアも咄嗟に何かを発動する――――！

――――ドガァァァン！

校庭に激しい落雷。またしても砂煙が舞い・・・

「うはぁ～、そんなのアリかよ？」

俺は思わず呟いた。

「いきなり奥の手を使うハメになるとは・・・」
ガルシアが呟く。
その隣には・・・

『ふむ、噂どおりだな。申し訳ないが全力で行かせて頂く』
実体化したレグルスがいた。
巨大な獅子の形をした炎のようだ。
大きい。普通乗用車サイズはある。

・・・どうしたもんかな?
レグルスは炎の壁を展開してるので、突破は難しい。

『ご主人様、私も出ましょうか?』

「シルフ、どうやって出るんだ?仕組みが分からん」

『そうですね・・・ご主人様ならいけます、勘でどうぞ♪』

おい、なんて適当な・・・
が、戦闘中であり、議論してる暇はない。

こっちになんかレーザーみたいなのがバシバシ飛んで来るのだ。
まぁ、魔力を風変換しつつ、召還魔法でも使えばいけるだろう。

「我と契約せし風の精霊よ!我が魔力を糧に顕現せよ!」

一瞬白い閃光が視界を塞ぎ――――

――――シルフィードが実体化した。
もはや半透明ではなく、髪は明るい緑。
肌は白く、薄緑のワンピースを着ている。
なんか、俺と同い年か少し幼いくらいに見える。

「まぁ、さすがご主人様、完全に実体化させるなんて人間とは思えないですね♪」
褒めてるんだか貶めてるんだか分からないが、シルフはご機嫌のようだ。
というか、魔声じゃなく、地声だな。
風がしゃべったら・・・こんな感じなのかな・・・

・・・はっ!?戦闘中だった!
シルフは魔力を大爆発させてノリノリである。
「ふふっ、この風・・・この肌触りこそ戦場ですね♪」

「シルフ、戦闘中なんだが・・・」

「はっ!?すみません、実体化なんてもう久しくしてなかったですから・・・」
若干申し訳なさそうなシルフ。
むぅ、そんなこと言われると怒りにくい。

「＜サンダーボルト!＞」
とりあえず、レーザーを迎撃しつつ・・・

「シルフ、レグルスと戦って勝てるか？」

「ふっ、私を誰だと思っているのだ？」

声だけはカッコよくいったシルフだが・・・顔が笑っている！

「・・・はぁ、んじゃ頼んだぞ、シルフ！＜サンダーブラスト！＞」

とりあえずお手並み拝見。向こうはデカイのを一発溜めてるようだ。

「はい、ご主人様♪　シルフィード、いっきま～す♪」

気の抜けたセリフとは裏腹に、その体に莫大な魔力が集まる。

で、向こうの術が完成。

『万物を燃やし尽くす我が爆炎よ！ここに顕現せよ！＜ブレイズ・ブラスター！＞』

直径２０メートルはありそうな極太ビームが発射される！

え～、嘘だろ～とか思いつつ現実逃避したくなった。

シルフに任せてるので迎撃の準備とかしてない。

と、シルフも魔法を発動

『其は風の旋律――ここに顕現し全てをなぎ払え！＜テンペスティア！＞』

正直信じられなかった。

こんな短い詠唱で？

俺とシルフの周りだけ無風地帯だが、すさまじい魔力の竜巻が発生し、

生徒が慌てて避難していく。

そして、魔力の炎を消し飛ばし、レグルスをも吹き飛ばし、ガルシアを弾き出した。

「――――勝者、アルネア・フォーラスブルグ！」
で、こんなときでも動じない学園長の号令で試合終了。

「なぁ、シルフ、強過ぎじゃないか？」
地上に戻りつつ、いまだ実体化中のシルフに話しかける。

「ふふっ、ご主人様との相性がいいのかもしれませんね♪」
シルフによると、相性で強さが全然違うとのこと。

「アルは渡しません！」
地上に戻ると、エリシアが駆け寄ってきて開口一番。

「大丈夫ですよ、私がご主人様のものってだけですから♪」
楽しそうなシルフ。

「ううっ・・・」
何かを苦慮するエリシア。

「・・・なんか知らんが、仲良くな？」

と、追加が来た。

「アル、さすがですね」
フィリアがにっこり笑いながら立っていた。

「ああ、フィリアの試合はいつごろ？」

「もうちょっと先ですね。うまく勝ち進めたらエリシアさんとあたって、
もし勝てたら準決勝でアルと戦えます」

う～ん、エリシア対フィリア・・・どうなるのやら。

そのあと、ガルシアと軽く話した。
「俺は精進が足りない・・・だがいつか必ず勝つ！」

「おう、受けて立つぜ！」

で、その後は悠々試合観戦。

で、ジョン、リリー共に難なく勝利し、
エリシアも一瞬で勝った。
フィリアも一瞬で勝った。

一番気になったのはローラである。

ローラの相手は大柄な男子生徒だった。
試合が始まると、ローラは凄まじい勢いで走りこんだのだ。
相手の男子生徒は慌てて火の弾で弾幕を張ったのだが・・・

「――――遅いわ。＜ミラージュ＞」

ローラはなにも持っていないように見える手を素早く動かし、すべて消滅させ、
相手の鳩尾に蹴りを入れて勝った。
なんとなく魔力が手に集まってるのは見えるのだが、よく分からない。

で、俺はエリシア、リリー、ジョン、フィリアと一緒だったので見解をうかがう。
「なぁ、ローラがなにしてるか分かるか？」

「わからないです。でも魔力は手に集中してますよね？」

「お兄ちゃんでもわからないの？」

「アル、僕はパスで」

「アル、私はアルの意見をうかがいたいです」
む、フィリアに聞き返されてしまった。

「俺かぁ？んじゃ、魔力で剣を作ってる？」

「――――正解。」
うしろからローラの声がした。

「うおっ！？ビックリするだろ！？」
心拍数急上昇だよ！

「ごめんなさい。でも、どうしてわかったの？」
相変わらずポーカーフェイス・・・いや、少し驚いてる気がする。

「ん～？接近戦といえば剣だろ？」
わざわざ近づいてから迎撃するのだから、射程は短いのだろう。

「・・・そうね」
若干苦笑いされてる気がする。

その後、みんな順調に勝ちあがった。
ジョン以外。
ドンマイ、ジョン！相手が悪かった。
ジョンはエリシアに焼かれたのだ。

で、色々あって準々決勝だ。

俺の相手は、ゲイル・アイゼンシュタットとかいう十二家。
エリシアＶＳフィリア。
リリーＶＳエリス。
ローラＶＳカイゼル・イースティアとかいう十二家だ。

ローラ以外、全員十二家ｏｒ皇族だ。

第三話：疾風と爆炎の宴（後書き）

――――次回予告――――

♪～チャラッ、チャ～ラララ～ラ～！

ついに、エリシアとフィリアの譲れない戦いが始まる・・・

「エリシアさん、負けません！」
「・・・すみませんが、本気でいきます」
「全てを無に帰す白き焔よ！」
「切り裂け閃光の刃！」
「いやー、エリシアもフィリアもすごいやる気だな～」
「お兄ちゃん・・・誰のせいだと思ってるの・・・」
「鈍いよね」
「鈍いですね」
「我が盟約の精霊よこの地に顕現せよ！」
「我が鏡面の魂よ！此処に具現し従え！」
「天をも切り裂く白き雷よ、我が手に集え！」

フィリアの実力とは！？エリシアに秘策はあるのか！？

Ｔｈｅ　ｍａｊｉｃｉａｎ　ｏｆ　ｓｉｌｖｅｒ　ｔｈｕｎｄｅｒ．
Ｎｅｘｔ　Ｅｐｉｓｏｄｅ：「Ａ　ｂｏｌｔ　ｆｒｏｍ　ｔｈｅ　ｂｌｕｅ．」

ちなみに次回のタイトルは『晴天の霹靂』です。

第四話：晴天の霹靂（前書き）

１００万ＰＶ、１２万ユニーク到達！
読んで下さってる方・・・本当にありがとうございます！

第四話：晴天の霹靂

さて、俺は校庭にて、ゲイル・アイゼンシュタットと向かい合っていた。
これから試合だ。
と、ゲイルが口を開いた。

「貴様のようなヤツは十二家には相応しくない！」
ふむ、まあ俺もそう思うが。

「ふ～ん」
信頼と安心のスルー！

「――――構え！」
学園長の号令がかかる。

ゲイルは怒ってるようだが、他にどう反応しろと？
真っ赤な顔で睨みつけてくる。仕方ない。
「・・・はぁ、なにが気に食わないんだ？」

「先ほどから貴様の試合を見ていたが、貴様は精霊任せで戦っていない！」

「はぁ、んじゃ、シルフ、今回お休みね」

『はい、承知いたしました♪』

ゲイルはなんとも言えないといった風情である。
が、それでも俺に何か言いたいらしい。
はぁ、なんで因縁つけたがるかな・・・

「貴様は皇女様に対して無礼すぎる！」

「ん、フィリアが良いって言ってるんだからいいだろ？
それともフィリアがダメって言ったらダメでも、
良いって言ったこともダメなのか？どっちが無礼だよ？」

しつこいから俺もいらいらしてきた。

「うるさい！だいたい貴様たちは――――！」

「・・・貴様たち（・・）だと？俺以外に誰が入ってるんだ？」

「お前の妹二人も！お前の兄貴もだ！」

「・・・そうかよ」

「――試合開始！」
おそらくこの会話は聞こえていないのだろう学園長の号令で試合は始まった。

「貴様に十二家のなんたるかを身を持って教えてやる！」

『・・・具現するは天の怒り』
『其れは鋼鉄を引き寄せる不可視の力！』

俺は、問答無用で魔力を解放。
ゲイルも慌てて魔力を練るが、遅い。

『雷神の鉄槌よ、此処に！』
『＜マグネティション！＞』

「くっ、疾風の刃！＜ハーケン・ソニック！＞」
ゲイルが慌てて風の刃を放つが、無駄だ。
俺の磁力で集められた砂鉄が大量に集まり、防ぐ。

『我が魔力によりて具現し、彼の者に裁きを！＜トールハンマー！＞』
『無数の鉄（くろがね）よ！銀雷によりその身を弾丸と化せ！＜微細なる四源の雷砲（ルブラスト）！＞』

――――ドガァァァァァン！
――――ズガガガガァァァン！

雷神の一撃により、ゲイルの手前に直径２０メートルほどのクレーターが完成。
更に砂鉄が銀の流星群と化し、ゲイルの手前に着弾。

二つの洒落にならない衝撃波でゲイルは１０メートル以上吹っ飛んだ。

「あ、やばい、やりすぎた」
ついカッとなって・・・
エリシアとかリリーならこれくらい平気だから、ついやりすぎた。
あ、いや、直撃させたらやばいけどね？
衝撃波くらいなら防いでくれるかな～と。

「勝者、アルネア・フォーラスブルグ！」

やばいなーやりすぎたなー。と思いつつみんなのところに戻った。
不思議そうなリリー、フィリア、ジョン、エリス。
俺がどうして大爆発したのか分からないらしい。
だが、説明もしにくい。なんか恥ずかしいし・・・

「ふふっ、アル、ありがとうございます」
エリシアがみんなを見ながら楽しそうに言った。

「・・・ひょっとして聞こえてた？」

「バッチリです」

「ええっ、エリー！お兄ちゃんに何があったの！？」
「エリシアさん、なにがあったんですか？」

聞き出そうとするリリーとフィリア。

「・・・エリシア、黙っといてくれ・・・」

「次、エリシアとフィリア！校庭に出ろ！」
いいとこで学園長からお呼び出し！

楽しそうなエリシアと不満そうなフィリアが校庭にでる。
ついにこの二人の戦いが始まる。

この国で最も強力な魔力を持つ皇族であるフィリア。
人間よりも上位の存在、ドラゴンであるエリシア。

「――――構え！」

エリシアは＜エルディル＞を抜き、
フィリアは白い剣を――――

魔力の閃光が吹き荒れた。

私は＜エルディル＞を抜き、構えた。
そして、フィリアが剣を抜いた瞬間、驚愕した。
フィリアの剣が凄まじい魔力の閃光を放っているのだ！
これでは直視するのは厳しい。

「――――精霊剣！」
思わず言った私にフィリアが返す。

「エリシアさん、私は負けません！アルとは私が戦います！」

・・・なんとなく分かっていた。
たぶん、フィリアもアルに惹かれてる。
私は戦いは好きじゃないけど・・・今回は。

「・・・すみませんが、譲るわけにはいかないです。本気でいきます！」

「――――試合、開始！」

「全てを無に帰す白き焔よ！」
「切り裂け閃光の刃！」

「＜インフェルノ！＞」
「＜ライトニング・ソニック！＞」

――ドガァァァン！

術の激突で砂が舞い上がった隙に、お互いに最強の召還をする。

召還術とは、
契約した相手の魂の一部を、魔力によって具現化する術だ。
契約を解除しなければ、契約相手に何か不足の事態があっても召還できる。
魔力を大きく消耗するが、
こうした一対一の対戦時は、数に入らない召還は大きなアドバンテージとなる。

「我が盟約の精霊よこの地に顕現せよ！＜シリウス！＞」
「我が鏡面の魂よ！此処に具現し従え！＜サモン・ドッペル！＞」

フィリアの精霊剣から、超巨大・・・トラック並みの犬・・・というか狼が顕現。

私は魔方陣から白いドラゴンを召還。
全長5メートル。私の本当の姿を具現化したものだ。
受けたダメージを私も負うし、魔力も全て私の体から出るが、
これで本来の力を多分バレずに使える。
まあ、それでもドラゴン使いなどというとんでもない噂が出回りそうなのだが、
今の私はそこまで頭が回っていなかった。

絶対に負けない。

俺は、エリシアとフィリアの壮絶な戦いを見ていた。
なんか召還されたもののレベルがおかしい。
ほぼ実体化している精霊に、ドラゴン。

（・・・あれって両方エリシアじゃんか）
ドラゴンとエリシアを見つつ思う。
仕組みが分からん。
でもまあ、
「いやー、エリシアもフィリアもすごいやる気だな～」

「お兄ちゃん・・・誰のせいだと思ってるの・・・」
呆れたようなリリー。

「鈍いよね」

「鈍いですね」
ジョンとエリスは意見が一致した模様。

と、エリシアとドラゴンが翼を広げると、凄まじい勢いで舞い上がった。
シリウスもなんと空へ駆け上がり、フィリアも魔法で飛ぶ。

「いけ！白焔の竜撃！＜ドラゴン・ブラスト！＞」
「輝け！星の煌きよ！＜ハウリング・スター！＞」

――ドガァァン！

竜と狼が交錯する。

――ガキィィン！

シリウスがドラゴンに噛み付くが、鱗で弾き、貫通はしない。
が、何故かエリシアが苦しそうだ。
ドラゴンが火を噴き、シリウスの顔を焼く。

エリシアとフィリアはその隙に上位の術を発動する。

『白き竜と聖なる焔の古の盟約――！』

『我は汝を守り、汝は我が敵を滅ぼす――――！』

『其は開闢の焔！万物を作り変える始祖の焔―！』

『今こそ盟約を果たす時！汝が誓いを此処に示せ――！』

『我と汝が敵を滅ぼす焔を此処に顕現せよ――――――！』

『始祖の業焔！＜アンセスティア・プロメティス！＞』

『聖なる光の力を此処に！』

『星の精霊シリウスの名においてこの地に具現せよ！』

『其は開闢の光！万物を生み出す始祖の光――――！』

『始祖の光！＜アンセスティア・レディアンス！＞』

同時に放たれた二つの術。

エリシアは複合魔術で威力をあげ、

フィリアは精霊の圧倒的な力をうまく制御する。

――――ズガァァァン！

二つの術は空中で激突し、圧倒的な衝撃を撒き散らす。

お互いに全力だと思われた。

だが、フィリアが更に魔力を上げる。
シリウスがドラゴンに組み付く、
エリシアは苦しそうな顔だが・・・

エリシアの魔力の質が変化した。
半分は今まで通りだが、もう半分は、まるで俺のような――

『白き竜と聖なる焔の古の盟約――！』
『我が魔法銀の剣よ！白雷によりその身を弾丸と化せ――――！』

「その術は！？」
フィリアが思わず焦った声をだす。

が、同時に魔声で詠唱を開始。

『聖なる光の力を此処に！』

『始祖の光！＜レディアンス・ブラスト！＞』

フィリアがエリシアに光のレーザーを放つが、同時にエリシアの術が完成。

『始祖の焔！＜プロメテウス！＞』
『＜白焔纏いし四源の雷砲（エルディル・サーマルブラスト）！＞』

エリシアの手から白い灼熱のエネルギー球が飛び出し、レーザーと相殺。

そして、エリシアがシリウスに向けて剣を構える。

＜エルディル＞が白い流星の如き輝きを放つ――――！

シリウスは必死にドラゴンから離れようとするが、ドラゴンは断固

として離さない。

「いけっ！」
エリシアが投げたエルディルはプラズマ加速され、
超高速でドラゴンごとシリウスを貫いた。
ドラゴンは腹を貫かれ、
その腹に噛み付いて、なんとか逃れようとしていたシリウスの頭部
に直撃した。

「うぐっ！？」
「シ、シリウスッ！？」

エリシアは腹を貫かれた痛みに苦しみ、
シリウスは頭を粉砕され、消滅。精霊剣の輝きが消える。

『天を・・も切り裂く白き雷よ・・・！我が・・手に集え！＜サンダー・・・ボルト！＞』

エリシアが放った雷が青空を白く染め、
呆然としていたフィリアを叩き落した。
そして、エリシアもそのまま落下。

「おい、すぐ救助だ！」

学園長が校庭に走る。

「シルフ！」

『はい、了解です！』

俺がシルフに声をかけ、意図を汲んだシルフは即座に風を操り、二人を軟着陸させる。

「我は稲妻！＜サンダー・ミグラトリィ！＞」

俺も稲妻と化して治療へ向かう。
普通に考えれば、サンダーボルトが直撃したフィリアのほうがダメージは大きいのだが・・・

「おい、エリシア！大丈夫か！？」

「・・・アル？私は・・・一度も攻撃を・・・受けてないですよ？」

「馬鹿か、俺が気づかないとでも！？」
『――傷つきし者を癒す聖なる力――』

「ふふっ・・・そうですね。アル・・・ごめんなさい、術・・・を借りました」

「うるさい、黙って治療されとけ！」
『――汝、未だ輪廻転生の刻にあらず――』

「アル・・・リヴァイブ・・・はやり過ぎです・・・よ？」
『――汝、未だ冥府の門を叩く刻にあらず――』

「そんなのは俺が決める！」
『――蘇りて、その天寿を全うせよ――！』

『――――＜リヴァイブ！＞』

第四話：晴天の霹靂（後書き）

――――次回予告――――

♪～チャラッ、チャ～ラララ～ラ～！

「アイム・ジェントルマーン！」
「オーライ！」
「アル、状況を説明して下さい」
「何ゆえ？」
「アル、もういいです。絶対、勝ってくださいね」

次回、銀雷の魔術師、第五話：想い

「なぁ、エリシア・・・対人戦って書くの難しいな・・・」
「アル、ファイトです！」

「お兄ちゃん、私の試合は・・・？」
「悪い、色々あってな。多分カットか、簡略版だな」

「アル、次回予告が・・・何があったんです？」
「・・・エリシア、知らないほうがいいこともある」

第五話：想い

俺は保健室にいた。
エリシアが目覚めなかった為だ。
＜リヴァイブ＞は、傷は治せるが、魔力は回復しない。
魔力が枯渇すると、意識を失ったり、ふらついたりする。
あまりに酷い場合は、死に至る場合もある。

一応、魔力を回復させる方法もあるにはあるが、普通使わない。
しばらく休めば治るからだ。

フィリアの傷は浅く、ほとんどダメージは無かった。
今は、どこか外の風をあびに行った。
保健室の先生はどこかへ行った。

だから、今は俺とエリシアしかいない。

「・・・・エリシア」

声をかけるが反応が無い。

俺は、少し苦しそうなエリシアの頭を、そっと撫でた。

「んぅ～・・・アルぅ～」

・・・あれ、なんか深刻な空気じゃなかったっけ！？
エリシアの寝言で空気が和んだ・・・

・・・なんかむかついた。
人がこんなに心配してたというのに！

よし、なんか悪戯してやる・・・覚悟しろエリシア！

・・・どうしたものか？

エリシアは何故か幸せそうな寝顔を晒している。

・・・あれ、そういえば二人きり？

これって・・・

はっ!?俺は今何を考えていた!?

落ち着け～俺は紳士だ～アイム・ジェントルマ～ン!

よしよし、パ～フェクトにジェントルマ～ン!

落ち着いた!

・・・よし、耳に息を吹きかけてみよう!（何故そうなった!?）

ふぅ～

息を吹きかけると、エリシアのからだが若干震えた。

「ひゃふんっ・・・アルぅ、らめぇ～・・・」

・・・エリシア、何の夢をみてるんだ？

と、なんかエリシアが小声で呟く。

「アル～・・・わたし・・・・・」

気になったので顔を近づけて聞き取ろうと――

エリシアがいきなり目を開けた。

至近距離で目が合った。

俺は、寝言を聞き取ろうと体を乗り出していた。
この体勢だと、覆いかぶさっているように見えなくもない・・・

あれ？やばくね？
・・・互いに無言で見つめ合う。
エリシアの顔が段々赤くなってく。

「・・・アル、状況を説明して下さい・・・」

「オーライ！」
よくわかんないテンションで返答。

「アル、どうして・・・その・・・あんな姿勢だったんです？」
真っ赤なエリシアに尋問される。

・・・どう答えるべきか？
いいや！正直に言っちゃえ！

「・・・寝言を聞き取ろうとしてました」

途端、エリシアが硬直した。

「ア・・・ル、私、何か・・・言ってましたか？」

「いや、聞き取る前に起きた」
一応事実だ。半分ほど。

「そ、そうですか・・・よかった・・・」
かなりほっとした様子。

よし、助かった。

あ、そうだ。
話を逸らすのにいい話題があった。

「エリシア、なんで俺の術が使えたんだよ？」

「あ、それはアルが昔私に使った隠蔽電流をコピーして、そこからアルの真似で発展させたんです」

そういえば、受けた術を習得できるんだっけか・・・

「くっ、なんか悔しい・・・」

「でも、アルより溜めが長いですし、磁力みたいなのは無理ですよ？」

――コンコン。

「はい？」

ドアがノックされ、エリシアが返事をする。

学園長が入ってきた。

「ああ、大丈夫そうだな」

「はい、大丈夫です」

エリシアは軽く頷いて答えた。。

「・・・さて、エリシア、準決勝だが、どうする？」

「・・・もう魔力も使い果たしましたし、これじゃあアルに気を使

わせるだけです・・・
フィリアさんはどうですか？」

「残念だが、無理そうだな。仕方ない。アルネア、不戦勝だ。
もうすぐ決勝だ、遅れるなよ。」
そう言って、学園長は背を向け、出て行った。

・・・また二人きりになってしまった。

と、エリシアが真っ直ぐに俺を見た。

「アル、すぐに来てくれて、嬉しかったです」
恥ずかしそうに微笑みながら、エリシアは言った。

「ん、ああ。・・・エリシアは無茶しすぎだぞ」

「アル・・・（もはや驚異的な鈍さですっ！）」

なんか小声で聞こえた気がする。
「エリシア、ハッキリ言ってくれないとわからんぞ？」

「もう、ハッキリ言っても伝わらない気がしてきました・・・
きっと斜め方向に勘違いされます・・・」

「なんか知らんが酷い言われようだな・・・
あ、やばい、そろそろ行かないと。」

「むぅ～～、じゃあアル、目を瞑ってください。」

「え、何ゆえ？」

「・・・目を瞑ってください」

なんだかすごい真剣なエリシアに押されて目を瞑った。

「いいと言う前に目を開けると目潰しが来ます」

「なんだと！？」

仕方なく目を瞑って大人しくしていると・・・

甘い香りがして、唇になにか、すごく柔らかいものが――――

「エ、エリシア？」

「アル、もういいです。絶対、勝ってくださいね」

目を開けると、恥ずかしそうなエリシアの顔が目の前にあった。

俺は、若干放心状態で校庭へ向かった。

「・・・アル、だいすきです」

アルが去った後、エリシアはそっと呟いた。

第五話：想い（後書き）

――次回予告――

♪～～チャラッ、チャ～ラララ～～

「これより、決勝戦を開始する！」
「・・・シルフ、さっきの見てた？いや、聞いてた？」
『頑張ってください、ご主人様♪』
「――そっちも、何か隠してる」
「――んな！？」
「これが私の全力――！」
「＜――ミラージュ＞」
「その身を弾丸と化せぇぇ――ッ！」

次回、銀雷の魔術師、第六話：黄昏の決勝戦

なんだか話が変な方向に来てしまった・・・
見切り発車恐るべし。
もはや、何が起こるか筆者にも予測不能です。

第六話：黄昏の決勝戦

俺は、校庭に向かっていた。
もうすぐ決勝戦だ。
エリシアとフィリアは棄権・・・

「ん？シルフ、精霊って実体化中にやられるとどうなるんだ？」

『はい、ご主人様。消滅させられますと、溜めていた魔力が全て消滅します。
魔力の溜まり方は精霊によって異なります。
私は風から魔力を得ますが、他の精霊は熱や空気中の水分など様々です♪』

へ～、そうなんだ・・・って、あれ・・・！？

「・・・シルフ、さっきの見てた？いや、聞いてた？」

『・・・？呼ばれた時か、実体化している時以外は寝ていますが・・・
あ、あと魔力が活性化したら起きますが・・・なにかありましたか？』

おっと、あぶないな
「いや、たいした事じゃないんだが、エリシアとフィリアは棄権したんだ」

『あ、ということは決勝戦ですね、頑張ってください、ご主人様♪』

「おう！」

と、シルフが剣の中に戻ったようで、気配が消える。

と、ついさっきのことを思い出す。

『――――アル、目を瞑って下さい』

・・・柔らかかったな。

・・・はっ！？

これから決勝戦だぞ！？何を考えてる俺！？

あれ・・・そういえば・・・

『きっと斜め方向に勘違いされます・・・』

・・・言ってたな。え、今の俺の思考が斜め勘違い？

実は単なるお礼？
いや、んなわけないだろ！？

あれは・・・あれ？キスだよな？
目を瞑ってはいたが・・・多分？

・・・前世で一度キスしたことがあるが、あの時も目を瞑ってたから分からん！

んぁ～～～・・・・・

「――――――次、決勝戦はアルネア・フォーラスブルグ対、ローラ・フィリスタイン！
両生徒は指定位置につけ！」

・・・試合が始まってしまった。
そうだ、絶対勝つように言われてたっけ・・・

俺は位置につき、ローラと向かい合った。
ローラは、今までは持っていなかった、金の柄の長剣を持っていた。

「ローラ、よろしくな」

「――本気、みせて」

「ああ、手を抜く気はないぞ？」

「――でも、本気でもない。女の子相手だと本気はムリなの？」

「む、確かにやりにくいな」

「・・・そう・・・じゃあ、本気になってもらえるように、がんばる」

「――――構え！」

学園長の声が校庭に響き、観戦する生徒の前にバリヤが張られる。

ローラがその剣を抜き――――

その黄金の刀身が露わになる。

＜シリウス＞は魔力がまるで閃光のようだったが、
それは魔力が見えない人間には見えない光だった。

だが、その剣は、確かに光っていた。
単なる太陽の反射ではない。
今はもう、日が沈みかけている。

まるで、星のように光っていた。

「これが私の魔法剣＜アストライオス＞――――」

俺は、＜アウロラ＞と、＜シルフィード＞を抜いた。

『おはようございます、ご主人様♪』

「なぁ、シルフ、別の呼び方は無理なの？」

『え～・・・このほうがなんだかしっくり来ませんか？』

「はぁ～～・・・」
俺は、重い溜息をつく。

と、ローラがポーカーフェイスから、真剣な表情になり――――

「これが私の全力――――！」

ローラの魔力が一瞬にして膨れ上がる――――！

「――――んな！？」

魔力が一気に膨れ上がったローラの瞳は、
いつもの緑ではなく、金に輝いていた。

「――――そっちも、何か隠してる」

今度はいつものポーカーフェイスで指摘するローラ。
なんで見破られてるんだ？俺ってそんなに分かりやすいか？

・・・仕方ない！

――――魔力、全開！

俺の瞳が銀に輝き、魔力が一気に増加する。

「シルフ！ローラが何か召還するまでは待機！
移動補助と、可能なら風で援護頼む！」

『了解です！』

「――――――試合、開始！」

試合開始と同時に、お互い一気に距離を詰めつつ、魔力を練る。

『銀の雷！虚空を切り裂け！＜サンダーボルト！＞』

『金の氷！全てを氷結させよ！＜ブリザード！＞』

俺の手から銀の雷が、ローラの手から金の氷弾が飛び出す――――

――――＜氷＞属性！

――――ズガァァァン！

校庭の中心で激しく激突し、周囲に氷と電撃を撒き散らす。

が、俺は気にせず突っ込む。

たとえ実体化してなくとも、この程度はシルフが防いでくれる！

砂煙を割って飛び込むと、向こう側からローラも金の剣を掲げて飛び込んでいた。

俺は、＜アウロラ＞と＜シルフィード＞で切り掛かり――――

『＜――ミラージュ＞』

ローラが右手の＜アストライオス＞と、左手で迎撃する。

――――ガキィィン！

やはり、見えない刃――――おそらく魔力の氷でできている――――が、あるようだ。

鍔迫り合いになる。

俺は力で押し込もうとするが、

ローラもどこにそんな力があるのかという力で押しとどめる。

――――――なら！

『＜サンダーブレード！＞』
『＜フリーズブレード！＞』

俺の雷と、ローラの氷が、互いに侵食せんと押し合う。

「――やるな、ローラ！」

「――このくらいなら、普通。」

「――せぃっ！」
「――はぁっ！」

同時に鍔迫り合いを解き、距離をとる。
一気に攻める！

『引き寄せる不可視の力！＜マグネティション！＞』
『万物を凍てつかせる氷結の結界を此処に！＜コキュートス！＞』

俺が砂鉄を集めるが、ローラの周囲の空気が一斉に冷気に侵食される

『ご主人様！』

シルフが俺を風で後方に運び、俺は冷気に対抗すべく、魔力を練る。

『我が風の盟約の剣よ！銀雷によりて、天翔ける雷となり――――』

『虚空を切り裂け！＜　疾風（シルフィード・サーマルブラスト）を司る四源の雷砲！＞』

ありったけの魔力を込めた＜シルフィード＞が、風と銀雷を纏い、輝く。

が、ローラも黙って見ていない。

『絶対たる氷結を、此処に――――何者も動けぬ零下の境地――――』

『凍てつく世界――――＜――絶対零度（アブソリュート・ゼロ）！＞』

＜シルフィード＞が流星と化して襲い掛かり、＜コキュートス＞を

吹き飛ばすが――――
ローラの剣から金に輝く絶対零度のレーザーが放たれ、激突する。

――――ガキィィィィィン！

＜サーマルブラスト＞と＜アブソリュート・ゼロ＞は互いに一歩も譲らず、
破壊を撒き散らす。
俺は、ついでに砂鉄も飛ばすが、防御は破れない。

校庭の地面がひび割れ、温度がみるみる下がる。

俺の＜マグネティション＞で磁場が乱れ、
さらに、プラズマが発生した校庭にオーロラが現れた。

「――――きれい。」
思わずと言った風に呟くローラ。

「・・・やっぱり、初めて見たのか？」
俺は、つい気になって、聞いた。

「――ホンモノを見たのは。」

「そうか・・・――ローラ、次が俺の最高の一撃だ」

「――わかった」

俺とローラの魔力が更に膨れ上がり、ローラの髪が金色に輝く。

『――創世の雷光よ、我が剣に集え――』
『――其は知性と創造を司る光――！』
『聖なる銀よ！銀雷と極光によりてその身を弾丸と化せぇぇ――ッ！』

『――星空を司る黄金の剣よ――』
『――星海の無慈悲な氷結を此処に――』
『絶対零度において――唯一輝くは星の光！その力を示せ――――！』

『＜創世の極光（オーロラ）・四源の雷砲（サーマルブラスト）！＞』

『＜絶対零度の星光（スターライト・ゼロ）！＞』

俺は放った＜アウロラ＞をプラズマ加速！
銀とオーロラの弾丸となって突進する。

同時にローラも＜アストライオス＞に、
空気だけでなく、魔力すらも凍らせるかのような冷気を纏い、迎え撃つ。

――――――激突した＜サーマルブラスト＞と、＜アブソリュート・ゼロ＞は
凄まじい爆発を引き起こした。

俺は＜アウロラ＞と＜シルフィード＞を投げて攻撃していたが、
ローラは手に持っていた。
必然的に、ローラの方が爆発から近くなり――――

「――――勝者、アルネア・フォーラスブルグ！」

爆発が収まると、ローラは数メートル吹き飛ばされ、
＜アストライオス＞が地面に転がっていた。

「おい、大丈夫か！？」
俺は、慌てて駆け寄り、ローラを抱き起こした。

「――――だいじょうぶ。ちょっと吹き飛ばされただけだから」
というローラだが、俺は肘が擦れて傷になっていた。

「聖なる光よ、此処に！＜ヒール！＞」
流石に擦り傷にリヴァイブはアレなので、ヒールで治す。

「ありがとう。」
ローラはにっこりと微笑んだ。

「おう。まぁ、俺のせいだが・・・」

「ううん、勝負だもの」

「おいお前たち、静かにしろ！表彰式を始めるぞ！」
この交流戦は、３位決定戦を行わず、１位に準決勝で負けた生徒が３位となり、
２位に準決勝で負けた生徒が４位となる。
まぁ、特に景品とかあるわけでもないしな。

学園長が騒ぐ生徒を静めつつ、こっちに歩いてきた。

「アルネア、ローラ、すばらしい戦いだった！
が、お前たち、強過ぎじゃないのか？」

若干呆れ顔で言われた。なんだよ、頑張ったのに。

「まぁいい、これでお前たちは個人戦に参加決定な」

「げ、忘れてた！？」
「・・・あ。」

「・・・お前たち・・・はぁ。」

その後、俺とローラは表彰され、その日の授業は終わった。

俺は、一人校舎を歩いていた。
ある部屋の前で足を止め、扉を叩いた。

「――――はい？」

俺は、扉を開け、中に入った。

「エリシア、大丈夫か？」

その部屋――、保健室に入ると、開いた窓から風が吹き込み、エリシアの髪が風にたなびいた。

「はい、大丈夫です。・・・アル、ありがとうございます」

「・・・心配するのは当然だろ？」

「家族だから。ですか・・・？」

「あ、ああ」

「むぅ～・・・先生、もう帰ってもいいですか？」

「はい。大丈夫ですよ。アルネア君、エリシアちゃんが可哀想ですよ？」

「はい！？」

なんか保健室の先生に名前を知られた上、なんか言われた。

「せ、先生！？」

エリシアが真っ赤になって慌てる。むぅ、可愛い。

「・・・エリシア、帰るか」

「・・・はい」

第六話：黄昏の決勝戦（後書き）

――次回予告――

Ｅｐｉｓｏｄｅ：Ｚｅｒｏ

『必ず、帰ってくる』

『そんなに・・・手ごわい相手なんですか？』

「・・・ありがとう」

「ヘィ！タクシー！」

「よし、今日の次回予告はこんなのでどうだろう？」

「お兄ちゃん・・・・何してるの！？」

「アル、これは詐欺です。特に前三つが。」

「え～・・・だめ？」

第一話：Ｅｎｃｏｕｎｔ

俺の名前は天城（あまぎ）　誠司（せいじ）。
ただの高校生だ。
まぁ、この状況だと若干・・・２つほどの語弊があるがな。

さて、俺の視界は真っ暗だ。
そして、心地よい温もりに包まれている。

・・・勘のいい方は、お察しだろう。

「お兄ちゃん、起きろーーーー！」
妹の理香が俺の布団を引っ張る。

「はぁ、なんで朝はやってくるんだろうな？」

「お兄ちゃん！なんでもいいから起きてッ！」

やれやれ、健気な妹だ・・・

「理香、今日は俺は病気だ。突発性・布団出たくない病だと学校に電話してくれ」

「嫌よ！？何その恥ずかしい病名！？お兄ちゃんより私が恥ずかしいよ！」

「え～、いいじゃんか～。誰もが一度はかかるだろ？」

「そんなので入学式を休むのはお兄ちゃんくらいですっ！」

そう、今日は俺と理香の入学式なのだ。
別に幼馴染に兄と呼ばせている訳じゃないぞ？
正真正銘、血の繋がった兄妹だ。
こんなんでも双子なのだが、二卵性なので似てない。

「入学式なのにこんなに寒いのが悪い！」

「ひっさ～つ！ドロップキーック！」

いきなり理香が俺にとび蹴りを放ち、俺は轟沈した

「ぐはぁぁぁぁ・・・」

「さあ、いくよお兄ちゃん！」

「ぐおおおっ、寒い～～！嫌だ～～～！」

俺は理香に引きずられてリビングへ行き、朝食をとった。

まぁ、俺も流石に入学式を休むのはまずかろうと思っていたので、ちゃんと準備を始める。

♪～～ブー！ブー！ブー！

『緊急事態発生、入学式の時間が接近！総員、第一種戦闘配備、急げ！』

『――お兄ちゃん少佐、入学式の時間が接近しています！迎撃を！』

『了解！誠司少佐、出撃準備に入ります！』

『お兄ちゃん少佐！外は冷気が激しいです！手袋の着用を！』

『こちら誠司少佐、了解だ！さらにマフラーの着用を許可してくれ！』

『そんな！？マフラーまでですか！？・・・そんなに・・・手ごわい相手なんですか？』

『ああ、だが理香、必ず帰ってくる。応援していてくれ』

『・・・分かりました。必ず・・・帰って来てくださいね』

『おう！』

『第一ゲート、オープン！進路クリア！オールグリーンです！』

『靴、セットＯＫだ！』

『戸締り、火の元、オールグリーン！』

『弁当セットＯＫ！マフラーの感度良好！』

『発進、どうぞ！』

『フルアーマー・誠司、いきま～す！』

という感じで俺は出発した。
え、伝わらない？

・・・じゃあ、重装備ってことだけ伝わればＯＫ！

さて、そんなわけで、俺と理香は学校へと歩く。
今日から俺が通う、暁ヶ丘高校は、俺達の家から歩いて約十分。
町の中にある高校で、住宅街を通っていく。
と、長い黒髪の女の子が、男三人に囲まれてるのが見えた。

「あ、理香、先行ってて」

「お兄ちゃん・・・うん、頑張ってね」

「おう！」

とりあえず、近づいて話を盗み聞く。

勘違いだと最悪だしね？

「ねぇ君～、かわいいね～。ボクらと一緒に遊ばない？」

「・・・学校があるんですけど？」

「いいじゃんか、学校くらいさぁ～」

とりあえず、女の子が嫌がってるのを確認。

さて、どうするかな・・・ま、いっか、いつもので。

「Ｏｈ～！　Ｉ　ｔｈｏｕｇｈｔ　ｗｈｅｒｅ　ａｒｅ　ｙｏｕ！　Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ！」

直訳：（お～！　どこにいるかと思ったよ！　お会いできて嬉しいです！）

俺は、発音だけ流暢に英語を話しつつ、三人の男の間をすり抜け、女の子に話しかけた。

「Ｖｅｒｙ　Ｓｏｒｒｙ！　Ｍｙ　ｆｒｉｅｄ　ｇａｖｅ　ｙｏｕ　ｔｒｏｕｂｌｅ！」

直訳：（とってもごめんなさい！俺の友人が迷惑をかけた！）

俺はそのまま、華麗に撹乱しつつ、少女の手をとって逃げようと――

「まてや、コラ！なんだてめぇ！」

「Ｈｉ！　Ｉ、ｍ　Ｊａｃｋ　Ｓｍｉｓ！　Ｏｈ　ｍｙ　ｇｏｄ！　Ｉｔ、ｓ　ｈｉｇｈ　ｔｉｍｅ　ｔｏ　ｇｏ　ｔｏ　ｓｃｈｏｏｌ…Ｇｏｏｄ　Ｌｕｃｋ！」

直訳：（やあ！ボクはジャック・スミスだよ！　おお、神よ！　もう学校にいかなくてはならない時間だ！・・・幸運を祈る！）

したのだが、不良の一人に肩を掴まれた。

「ふざけてんじゃねぇぞ！どう見ても日本人じゃねぇか！」

「ちっ、面倒な。我は汝らと関わる気ナッシングデ～ス！じゃあな！」

俺は、肩を掴んだ不良を足払いで撃沈し、少女の手をひきつつ逃げた。

「まてや、コラ！」

追ってきた。

とりあえず、角を曲がりつつ逃げる。

「どうして助けたの？」
少女が走りつつ聞いてきた。

「ん～、助けたかったから。助けないことには理由が必要だが、
助けるのに理由は要らないってのが俺の信条なんだ。
それに・・・まだ助けきれてないし・・・お、ココだココ。」

後ろから追って来る三人は、まだ追いかけてくるが、
ここまでくれば俺のもの！

「なにかあるの？」
少女が、そのただの家にしか見えないのを見つつ、言った。

「この庭にな。」
若干戸惑う少女を連れて、庭に入る。

これで諦めてくれれば良かったのだが、不良達も乗り込んでくる。

「オラオラ～！行き止まりだぜぇ～！」

はぁ、仕方ない。

「我が贄を糧に・・・顕れよ！地獄の番犬！＜ケルベロス！＞」

俺は、カッコよく呪文を唱え、懐からひき肉を取り出す。
その匂いにつられて、『暁ヶ丘のケルベロス』こと、グルちゃんが背後から現れる。

グルちゃんは、ラブラドール・レトリバー（飼い主談）の黒犬なのだが、
ラブもドールも皆無だ。通常の3倍の巨体を誇り、しかし引き締まったボディ。
太ってるのではなく、デカいのだ！ムキムキである。フサフサでもあるが。
ちなみに3倍は若干誇張である。

更に、その顔は怒っていなくとも子どもが泣き出し、
戦闘モードになると、失神すらさせる悪鬼の顔と化す！

のだが、甘えてくると意外にも普通に可愛い。
しかも、勝手に吠えることなど皆無だ。

懐いた相手の命令には絶対服従。異議など唱えない。

俺と飼い主さんにしか懐かないが、そんなことは関係ない。
グルちゃんの優しさを知る子どもには大人気だ。

なら、何故『暁ヶ丘のケルベロス』などと呼ばれるのか？

・・・全ては俺のせいだったりする。

俺は、ひき肉（軽く焼いてあります）をグルちゃんにプレゼント♪

「グルちゃん、敵&飯だ！ゴー！」

「グガァァァ！」

「「「ぎゃあああぁぁぁ」」」

閑静な住宅街に、男の悲鳴が響いた。

きっとみんな、ああ、また天城んとこの小僧だな。と思ってる。
そう、俺がグルちゃんで人助け&自己防衛（過剰だが）
をいつもするために、こんな称号が付いた。

が、グルちゃんの飼い主の大貫さんは、グルちゃんと同じくいい人で、
「人助けならバシバシやれ、気にするな」とのお墨付きを貰っている。
で、撃退完了！

「よ～し、よ～し！さすがグルちゃんだ！グッジョブ！」
俺は、グルちゃんを撫でてやりつつ、追加でソーセージをあげた。

「・・・かわいい」
少女がぽつりと呟く。

「おおっ、そうだろ！グルちゃんは可愛いんだ！君もソーセージあげてみる？」

「・・・うん」
少女がおっかなびっくりソーセージをあげ、グルちゃんがおいしそうに食べる。

グルちゃんは尻尾を振って甘えている。
おお、なんて珍しい。

「おお、グルちゃんが懐いた！おめでとう！これで呼べば助けに来てくれるぞ！」

そう、懐けば、グルちゃんは呼べば来てくれるのだ！ものすごく賢い。

だが、その駆けつける姿を子どもが見ると怖がるので、なるべく呼ばないのが好ましい。

「・・・？リードは付いてないの？」
少女が不思議そうに言う。

「平気。グルちゃんは他の犬より強く、賢く、そして優しい！信号は青を待ち、落とし物は交番へ。迷子も優しく交番へ。お年寄りの荷物を持ち、そして不良を撃退する！」

「――――すごいわ・・・！」

「そう、だから絡まれたら呼べば・・・・う～ん、この街なら大抵来てくれる」

「・・・声が届かないんじゃない？」

「まあ、そうなんだが・・・」
そう言いつつ、俺は懐から三本の笛を取り出す。

「これが、グルちゃん召還の笛だ！」
これは、お手製の犬笛・・・人には聞こえないが犬には聞こえる周波数の音を出す・・・
であり、相当遠くまで響くのだ！
近くで吹くと、犬が迷惑そうな顔をするので、やめよう。

「んで、一本あげるよ」

「・・・いいの？」

「ああ、グルちゃんが懐いたのはまだ三人目だからな」

「・・・ありがとう」

少女は、そう言って微笑んだ。

笑った少女は相当に可愛かった。絡まれるのも納得。

で、笛を一本あげて、大貫さんに軽く挨拶したのだが・・・

「おい、誠司、学校はどうした？」

大貫さんはおっしゃった。

俺は少女を見た。

少女も同じ制服だった。

登校時間は、もう、すぐ。

俺は少女を凝視。

背は低いし痩せてる。相当軽いだろう。

「ちっ、仕方ない！おやっさん！グルちゃん借りる！」

「へっ、まあ女の子の為ならしかたねぇ。グルちゃん！誠司に力ぁかしてやれ！」

「・・・どうするの？」

俺は、驚く少女を抱え上げ、グルちゃんに乗せた。

「ヘィ！タクシー！三丁目の学校まで！」

「――――アォォォォン！」

少女を意に介さず、グルちゃんは、猛スピードで街を駆け抜けた。
俺も、足の速さには自信がある。

俺と、少女を乗せたグルちゃんは、凄まじい速度で街を駆け抜け、
ギリギリ学校に着いた。

「よし！サンキュー、グルちゃん！」
俺は秘蔵のビーフジャーキーをグルちゃんにあげた。

「ありがとう、グルちゃん。」
少女がグルちゃんの頭を撫でるが、時間が惜しい。

俺は、少女の手を引いて張り出されたクラス票を見る。
俺の苗字は天城（あまぎ）だから見つけやすい！

「あった、A組か！・・・っと、そういえば君の名前は？」

「――私は天川（あまかわ）灯（あかり）です」

第一話：Ｅｎｃｏｕｎｔ（後書き）

さて、次回予告はお休みです。

えっとですね。すみませんでしたっ！

ちょっと話が複雑化しすぎましたので、かる～く前世を流します。
軽くですので、一応、前世編ではありません。
前世編はあと二人くらい欠かせない人物がいますが、出てきません。

一応、すぐに完結する予定です。

第二話：Ｌｉｂｒａｒｙ

さて、無事になんとか入学式をこなした。
席は名前順。
天川　灯は同じクラスだった。
今は俺の前に座っている。
で、後ろは理香だ。
・・・同じクラスだと紛らわしいんだが。

で、係決めとか自己紹介とかが終わり、休み時間である。

「んあ～・・・俺の平穏な春休みが終わった・・・」

「お兄ちゃん、別に学校も平穏・・・じゃないか・・・」
理香はがっくり肩を落とす。
そう、俺はおせっかいなので、何かしら引き起こすのだ。
だから、なるべく布団でぬくぬくしてたい。

と、前の席の女の子――灯がこっちを向いていた。

「あの、天城さん、先ほどはありがとうございました」

「ああ、どういたしまして」

「お兄ちゃん、その人は・・・ああ、さっきの！
私、この人の妹で理香っていいます。よろしく！」

「あ、よろしくお願いします。天川　灯です。」

「あ～、そうだ。さっきの自己紹介でも言ったけど、苗字が紛らわしいから
名前で呼んでくれると嬉しいな」

「えっと、はい。誠司さん。よろしくお願いします」

「にしても・・・昼休みかぁ。することないな」

「じゃあ、その・・・学校を見て周りませんか？」
若干恥ずかしそうに提案する灯。

「あ～、そうだな。そうするかぁ・・・理香はどうする？」
俺は振り向きつつ、理香に聞いた。

「ううん、私はいいや。お兄ちゃん、いってらっしゃい」

「お～、いってくる」
俺は、灯と二人で歩き出した。

「はぁ、私も妹じゃなかったらな～・・・」
理香は、兄の後姿を見送りつつ、言った。

俺と灯は、中庭や、校庭や、校庭などを見て周り――

「あ、図書室か。入ってみる？」

「はい！」

俺と灯は図書室に入った。

お、マンガとかラノベが置いてある。やるな。

で、灯は神話の本に目が釘付けになってる。

「灯、神話好きなの？」

「――え、えっとその・・・はい」

すごく恥ずかしそうだ。

「ふむ、まぁ俺もゲームで多少詳しいかもな？」

ゲームに出てくる単語って、意外と神話から取ってるしな。

「そ、そうなんですか！？」

・・・なんか顔が輝いてる気がする。

見た目と、物静かな感じから大人っぽいと思ってたが、意外と子どもっぽいのか？

「あ～、少しな？灯は特に好きな話とかあるのか？」

「特に・・・ですか？　星の話でしょうか・・・」

「へぇ～、星かぁ・・・綺麗だよな」

「はい、すごく綺麗です。あと・・・オーロラが好きです」

「オーロラかぁ・・・一度は見てみたいな」

「あ、本がありました！」

灯が本を抱えて持ってきた。

「・・・不思議な光だよなぁ・・・」

「・・・綺麗です」

「そういえば、オーロラソースってどこがオーロラ？」

「えっと・・・確か、マヨネーズとケチャップで作るんですけど、そのピンク色がオーロラみたいだからだから・・・だったような？」

「へぇ～・・・そういえばオーロラって色んな色があるんだったっけ・・・」

「はい。オーロラの名前の由来は、アウロラっていう女神様です」

「へ、そうなの？」

「はい、曙の女神様で、ギリシャ神話のエオースと同一視されます。」

「えおーす？」

「兄弟が太陽と月の神様の、すごい神様なんですよ？」

「ごふっ」

「せ、誠司さん！？」

「おれの脳の容量をオーバーした・・・」

「少な過ぎですよっ!?」

さて、そんなこんなで学校を巡った。

で、知り合いに出会った。

「お、誠司じゃないか。・・・どうしたの、その綺麗な子。彼女?」

訂正、出会ってしまった。

なんてことを言うんだ、コイツは。

みろ、灯が真っ赤だ。

たぶん怒ってる。

・・・話を逸らすか

「灯、コイツは俺の中学時代からの知り合いで、黒木(くろき)　亮平(りょうへい)。
スポーツ万能、文武両道の凄いヤツだ。しかも見ての通りイケメン。」

「・・・天川です。」

かなり素っ気無い灯。

「誠司、君こそボクより足が速いし体力あるし頭がいいじゃないか・

・・」

「む、そういうこともあるが、バスケもサッカーも野球もお前の方が強いだろ？
それにテストの点はお前の方が上だっただろ？」

「反射神経もキミのほうがいい。大体、いつも勉強してるのかい？」

「というか、お前の方が体力あるだろ？」

「はぁ、誠司は常にモテモテじゃないかい？」

「はぁ！？バレンタインにチョコもらいすぎで大変だったお前と一緒にするな！」

「・・・ああ、君は鈍感という欠点があったか・・・天川さん、頑張ってね」

「――――え！？」

真っ赤になる灯を残して、亮平は去っていった。

さて、授業が終わった。

まぁ、残ってた各種決め事を決めただけだが。
で、理香はなにやら用があるとのことで、俺は一人で――――
「その、誠司さん・・・一緒に帰って頂けませんかっ！」
「ん、ああ。わかった」

二人で帰ることになった。
話を聞くと、灯は引っ越してきたばかりらしい。
実は、俺の隣の隣の隣の家だった。

「んじゃ、街を案内しようか？」
「え！？でも、そんな・・・ご迷惑じゃないですか？」
「いいのいいの。グルちゃんにあげるご飯を補充しないといけないし」
別にグルちゃんは無償でも来てくれるが、すごく申し訳ない。
「それじゃあ・・・よろしくお願いしますっ！」

で、俺はいつも使ってる商店街へ。
店の人とも、みんな知り合いだ。
が、それが問題だ。

「おうおう、誠司！可愛い女の子連れてるじゃねぇか！」
「あらまぁ、誠司ちゃんにも遂に春が来たのね！」

「ええぃ！違う！ただのクラスメイトだっ！」

俺は慌てて否定しつつ、灯の顔色を伺うが――――

あれ？なんか悲しそう？

「おい誠司！女の子を泣かせるんじゃねぇ！」
「誠司ちゃん、鈍過ぎよ！」

「お、俺か！？俺が悪いのか！？」

「いえ、そんなっ、誠司さんは何も悪くないですっ！」

悲しそうな顔でそんなことを言われると、俺が悪いようにしか見えない・・・

とにかく、ビーフジャーキーを買って帰った。

第三話：Ｍｅｍｏｒｙ

此処は街の外れにある山だ。
俺は、呼ばれて頂上に向かっていた。

もう日が沈み、暗いが、今日は星が明るかった。

この山はそんなに大きくない。
ほんのすこし歩けば、頂上はすぐだ。

そして、頂上にある広場についた。

どうやら先に来ていたようだ。

風にたなびく髪が見えた。

「誠司・・・目を瞑って」

俺は、言われたとおりに目を瞑り――

俺は、前世の記憶は全部持っていると思っていた。

でも、何故か思い出せないことがある。

相手は、灯だっただろうか？

本当に？

俺は誰かを好きだっただろうか？

俺は、誰かを愛していたのだろうか？

思い出せないのは、忘れているから？

俺は――――

第一話：馬車の旅（前書き）

＊話の長さが足りなかったので、校内戦の残りは、決勝戦の中にくっつけてあります。ごめんなさい！

読んでいらっしゃらない方は、お手数ですが先にそちらをどうぞ！

第一話：馬車の旅

・・・さて、今日は三国魔法学校交流戦が開催される、エディメア共和国に出発する日だ。
ここから、共和国の首都・ディグリスまで、馬車で5日間（あくまで予定）だ。
・・・やっぱり世界って広いんだなぁ。

ちなみに、大会が始まる3日前に着くように出発する。
学校が馬車とか色々用意してくれるが、個人で行ってもいい。
まぁ、そんな面倒な事をするのは上位貴族ぐらいだが。

一応、俺の家も、そんな上位貴族の筆頭だったりするが、気にしない。
まぁ、俺とかエリシアの場合、飛んだ方が速いのだが、魔力消費がきつい。

いや、ドラゴンに変身したエリシアに乗れば・・・

まぁいいや。せっかくだし、旅行気分で楽しもう。

が、問題発生。

なにやら、貴族の女の子と先生がもめてる。

「いやです！これは全て、私の大切な荷物です！絶対に置いてゆきませんわ！」

「だからな、荷物が多過ぎて乗れない奴が出るんだよ！」

・・・どうやら荷物が多過ぎるらしい。

はぁ、面倒な。

同じ馬車の予定だった人も災難だな。

ちなみに、俺と同じ馬車なのは、荷物だ。

一応、説明しておこう。

俺は、交流戦で個人、チーム、軍団戦に参加する。全部だ。

ふざけんな！って感じだが、代わりに出場選手に対する配慮として、馬車は軽く荷物が積んであるだけ。気楽だ。

あ、御者の人はちゃんといるぞ？

で、御者の人が交代で休む馬車もある。

さすが皇立学校か。

なら、荷物用の馬車あんだろ？って感じだが、あの荷物の量はおかしい。

と、エリシアとリリーがこっちに歩いてきた。

・・・何故か荷物付きで。

「お兄ちゃん、乗せて！」

・・・何を言うのか、この妹は。

寝泊りするんだぞ？この馬車。

「・・・意味がわからん」

「だって、乗れなそうだから。知ってる人で馬車を一人で使うのは、全部出場する、お兄ちゃんとローラさんくらいだし・・・」

「ローラに頼め」

「え～!?お兄ちゃんの薄情者!嫌だよ!気詰まりしちゃうよ!」

「俺にも配慮しろ!」

「いいでしょ!兄妹なんだし!」

ああ・・・まだ言ってなかったっけか・・・・

「リリー、俺とお前は本当の兄弟じゃないんだ」

――――空気が、凍った。

「え、嘘でしょ・・・お兄ちゃん?」

「いや、ホントホント。」

「・・・軽すぎない?」

「え、そうか？まぁ、別にいいかな～と。」
で、軽く事情を説明。

「・・・リックお兄ちゃんとエリーは知ってたの？」
なんだかすごく疲れた顔で聞くリリー。

「あ～、エリシアは合宿の時。兄さんはけっこう前。」

「・・・もう！？面倒だから、お兄ちゃんって呼んでいいよね？」

「あ～、いいぞ～」
最早混乱してヤケクソなリリーに俺はあっさり許可。
まあ、これで問題あるまい。
と、思ったが、エリシアが勝手に荷物を積んで乗り込んでた。

「・・・エリシア、何のつもりだ？」

「アル・・・お願いします！アルしか・・・頼める人がいないんです・・・！」
エリシアが上目遣いのキラキラした目で見てくる。

――――やめろ！そんな目で俺を見るなぁぁぁぁ！

「って、その手には乗らないぞ！ダメだっ！」

「・・・アル、前に約束破りましたよね？」

エリシアがにっこり微笑む。可愛いが、怖い。

「・・・なんの事かな？」

俺は往生際悪く、とぼける。

「合宿の時に、他の人を余裕で助けられるようになるって約束です。

ずっと保留してましたけど、ゴーレム戦は危なかったですよね？

あと、ユランの爪で背中にケガしてました。

破ったら何でも一つ、私の言うことを聞く約束でしたよね？」

「なに言ってるんだ、余裕だっただろ？」

「アル、いいじゃないですか。馬車に一緒に乗るだけですから。」

むぅ、確かに物凄いお願いとかされるよりいいけど・・・

・・・仕方ないか。

「わかったよ！はぁ・・・」

気疲れしそうだ。すごく。

「わーい！ありがとお兄ちゃん！」

どさくさに紛れてリリーも入ってくるが、もう何を言ってもきくまい・・・

さて、こうして馬車の旅が始まった。

・・・暇だ。

すご～～～く、暇だ。

これは一人じゃなくて良かったかもしれん・・・
俺は、剣の手入れをしつつ思った。
まぁ、魔法剣と精霊剣なので、磨くくらいしかすることないが。

明日になると、なんか街につくらしいが・・・
前世で新幹線とか乗ってた身としては、暇なこと著しい。
ドナドナ～って感じには既に飽きた。

以前みたいに馬車をブーストするには、数が多過ぎる。

エリシアは本を読んでる。リリーは・・・寝てた。
すごい分厚い本だな、古そうだし。広辞苑か？

「エリシア、何読んでるんだ？」

すると、エリシアは顔を上げ、言った。
「これですか？魔道書です。」

「へぇ～・・・魔道書かぁ」
俺は、少し寝ようかと思い、横になろうと・・・

「魔道書！？」

「市場で売ってた骨董品です。ホンモノかは分からないですよ？」

「・・・俺にも見せて！」

・・・さて、この魔道書には問題があった。

「読めない！」

「暗号ですね。私も古代語の勉強はしてるのに・・・」

この魔道書は暗号で書かれていた。

実は、ただの筆記体の英語だが（この世界的には古代語）、字が汚い！

「私は全く読めないです・・・アルはどうです？」

「エリシア、これ、字が汚いだけ」

「え！？」

「ほらここ、『実態化した精霊のエネルギーによって』って書いてある」

俺は、せめて若干キレイなところを指差して教える。

「ほ、ほんとです！？」

「だろ？」

「・・・アル、読んで下さい！」

「え～・・・音読かよ」

「え～と。タイトルは・・・『伝説とされる魔法について』アトラス・リーヴェルシア著」

「・・・なんだか凄そうなタイトルです！」

「まぁ、タイトルはな？え～と、精霊憑依術について。
精霊憑依術とは、実体化した精霊が、体をマナ変換し、術者に憑依する術である」

「・・・アル、マナって何でしょう？」
エリシアでも分からないらしい。珍しい。
俺も、魔力とかと似たような不思議エネルギーってイメージしかないな。

「悪い、俺もよくわからん。というわけで・・・シルフ～！」

『よばれて飛び出てジャジャジャジャ～ン？おはようございます、ご主人様♪』
半透明のシルフが現れる。

なんか、いつも元気だよなぁ・・・

「シルフ、精霊憑依術と、マナについて知ってるか？」

『憑依ですか？ある程度以上の力の精霊がつかえる奥義ですね。
使用者の能力は短時間のみ、大幅に強化しますが、反動も大きい捨て身の技です。
マナとは、魔力を変換して作るエネルギーですね。
その方が強力なのですが、人間には不可能と言われています。』

「へぇ、どうやってやるんだ？」

『憑依は私を実体化させて頂ければ使えますが・・・
マナは魔力を圧縮する感じでしょうか？』

さっそくやってみるが・・・

無理だった。
圧縮しようとしても反発が凄い。
エリシアもできないみたいだ。

『マナはエルフの熟練魔術師ですら、できるのは稀ですから・・・
ドラゴンでも、特に強力な固体でなければ使いません。』

むぅ、悔しい。

「なぁ、シルフ。マナの利点って他に無いのか？」

『えっと、そう！高濃度魔力ですから、短い詠唱で高威力の魔法が使えます♪』

「・・・めちゃくちゃ強いじゃねぇか！？」

そのあと、俺とエリシアと、起きたリリーで、夜までマナ精製の練習をしたのだが、
全くうまくいかなかった。晩飯はちゃんと食べたが。

「おにいちゃん・・・魔力の練りすぎで頭いたい～・・・」

「・・・俺もだ」

「大丈夫です？」

エリシアは平気そうだ。さすがドラゴン。
俺は疲れた。

「んじゃ、俺寝るから。おやすみ」
俺は、布団を敷きつつ言った。

「あ、お兄ちゃんお休み～」

「おやすみなさい」

俺は、布団の周りに、荷物でバリケードを作って寝た。
理由は推して知るべし。

この日は若干寒かった。

のだが・・・

「・・・アル～・・・寒いので入れてください～」

寝ぼけたエリシアが乗り越えて来た。

「ふざけんな！帰れ！」

「アル～・・・寒いです～・・・・」

エリシアは全く話を聞いていない。
勝手に布団に潜り込んで、俺の腕に抱きついてきた。

・・・やわらかい・・・じゃなくて！

俺は、エリシアを早急に回復させるべく、肩をゆする。

「起きろ、エリシア！寝ぼけるな！寒いならリリーのとこに行け！」

「・・・アル～？女の子どうしで抱き合って寝たら変ですよ～？」

「ええい！男女のほうがまずい！お～き～ろ！」

「アル～、男の人同士を想像すれば、そのまずさが分かります。やめたほうがいいです～」

「確かに絶対アウトだな」

「ですから～、わたしはアルとねます～・・・くぅ・・・」

エリシアはそう言って、目を閉じた。

「・・・はっ!?おいコラ!起きろ!」

が、エリシアは起きない。物凄い幸せそうな顔で寝てやがる。

くっ、エリシアの体が柔らかくて気になる!

もう、なんかヤケになった俺は、エリシアを抱き枕にして寝た。

よく寝れた。意外といいかもしれん・・・

第一話：馬車の旅（後書き）

――次回予告――

♪～チャラッ、チャラララ～

「リリー！今日は起きてる！大丈夫だ！問題ない！」
「お、お兄ちゃん！？なんでそんなに強硬なの！？」
「よし、ちょっくら飛んでくる」
「あ、ずるいです！」
「・・・はぁ、やっぱりこういうのもあるのか」

次回、銀雷の魔術師、第三章・魔法学校交流戦編・前編の第二話！
『散歩は波乱を呼ぶかもしれない』

「アル、長いです！？」
「ふっ、長いほうが楽しくないか？」
「お兄ちゃん、めんどくさいよ！？」

第二話：散歩は波乱を呼ぶかもしれない

凄く、よく寝れた気がする。

いつもより頭の中がすっきりしてる気がする。

腕の中の温もりが心地良い。

・・・ん？

俺は、珍しく自主的に目を開けた。

布団を被って寝ているらしく、あたりは暗い。

が、俺は何かを抱きかかえて寝ていた。

「・・・すぅ～・・・」

・・・そうだ！エリシアを抱き枕にしたんだった！

早急に証拠隠滅せねば！

別に何もしてないし、こっそりエリシアを本来の場所に戻せばＯＫ！

俺は、エリシアを引き離そうと――――

「・・・んむぅ～～・・・アルぅ～～」

♪～～デデ～ン！この抱き枕は呪われていた。装備を解除できません♪

「なん・・・・だと」

「お兄ちゃん！起きろーーー！」

リリーが来た！？
え、なにこれ。やばくないか？
エリシアは俺に抱きついたまま寝てる。断固として離れない。

「リリー！今日は起きてる！大丈夫だ、問題ない！」

「・・・え？ほんとだ？って、布団被ったままでしょ！？」

「いや、ほんとに起きてるって！ほんと！」

「・・・なら、布団から出て」

「・・・」
無理だ。エリシアが離れない。

「せぃやーーー！」

「うおぉぉぉ――――ッ、＜布団聖域（サンクチュアリ）！＞」

布団を引っ張るリリーに対して、俺は魔力装甲全開で、布団を強化。
布団が眩い銀の光を放つ！

「お、お兄ちゃん!?なんでそんなに強硬なの!?」

「いや、ほんとに起きるから！大丈夫だから！」

「・・・揺れる水の刃は、硬きものも容易く切り裂く！＜ウォーターブレード！＞」

リリーの手から、高水圧カッターが出る。かなり危ない。

「・・・おい、リリー？」

「お兄ちゃん。何か隠してるでしょ」

「なんのことだ？」

「・・・教えてくれないのね、お兄ちゃん。なら、力ずくでも――――！」

リリーがブレードを振り下ろし、＜サンクチュアリ＞と衝突する

――――ガキィィン！

俺は、リリーの連続攻撃を必死に防ぐが――――

「・・・んぅ～～・・・」

俺の腕に、エリシアの胸があたって集中が途切れた。

「たぁぁっ！」

結界を切り裂いたリリーが熟練の技で布団を剥いだ。

で、

「・・・お兄ちゃんに・・・エリー？」

俺と、俺に抱きついて眠るエリシアを見られてしまった。

「・・・エリシアが寝ぼけて入って来た。」

「そっか・・・」

リリーは放心状態で去っていった。

助かった。

・・・まさかとは思うが、変な誤解はされてないよな？

と、エリシアが身じろぎした。

「んぅ～・・・」

エリシアは、ぼんやり目を開けた。

「・・・おはよう」

とりあえず俺は、朝の挨拶をしておいた。

「はい、おはようございます・・・アル。・・・アル？」

エリシアが急速に覚醒し、状況を確認――――
どんどん顔が真っ赤になる。

「アル・・・その・・・どうなってるんですか？」

「エリシアが寝ぼけて入って来た。」

きっと、怒られるんだろうなぁ・・・
エリシアが本気で怒るのって見たことないが、
普段温厚な人ほど怒ると怖いっていうし・・・

「・・・ごめんなさい、迷惑でしたよね・・・」
が、エリシアは非常に申し訳なさそうだった。

「・・・普通、何故か俺が怒られるところだと思うんだが？」

「アルは、こういうときは嘘はいわないです・・・」

というか、日ごろの尋常ならざる鈍さから、俺の無罪は皮肉にも証明された。
が、俺にはそんなことは分からなかったので、素直に喜んどく。

「・・・そっか。迷惑じゃなかったよ。良い抱き枕だった」

「アル、ありが・・・って抱き枕です！？」

「あ、やべ」
口が滑った。

「――――も、もういいです！朝ごはんにしましょう！」
で、エリシアは着替えてないことを思い出したらしく、
荷物の陰に隠れた。

俺も着替えて朝ごはんかな。
今、馬車は開けた草原でキャンプしている。
魔獣もいるかもだが、ちゃんと見張りもいるし、引率の先生もいるので平気だ。
合宿の時と違って、一箇所にいるしな。

引率の人の一人として来ていた、学食の料理長から朝ごはんを支給

してもらい、食べた。

再び馬車の旅が始まる。
することは魔道書の解読・・・なのだが、疲れた。

「よし、ちょっと飛んでくる」
俺は空の散歩に行くことに。
こんな馬車の大所帯なら、離れても見つけるのは容易い。
魔力もたくさんだしな。

「あ、ずるいです！」
どうやらエリシアもついてくる模様。

「・・・いいなぁ。いってらっしゃい」
いまだに魂が還ってこないリリーに見送られ、俺は御者の人に軽く説明し、出発。

「そ～らを自由に飛びたいな♪＜ウイング！＞」

「＜シルフィード・ウィング！＞」

俺はいつもの術で空へ舞い上がり、
エリシアはシルフにもらった指輪で羽を生やして、飛び立つ。

魔法の翼なので、普通の翼より強力だったりする。
まぁ、ドラゴンの翼の方がすごいらしいが。

さて、一気に上空１００メートルくらいまであがり見渡す。

「お～、少し山が多いな。」
今は、皇都からそこそこ離れ、大分田舎だ。
まぁ、大きな街道があるのだが、田舎に変わりは無い。
辺りは山が多くなり――あくまで空から見るとだが。
俺たちがいるのは、のどかな丘陵地帯だ。

「あ！アル、あっちに街が見えます！」

「お、ほんとだ」
馬車の進行方向に、ちいさく街が見えた。
今日は空気が澄み切っていて、遠くまで良く見える。
まあ、この世界は星も遠くも、前世より圧倒的に見えるのだが。

「風が気持ちいいですね・・・」
羽ばたきつつ、ご満悦のエリシア。
どうでもいいが、ホバリングできる翼ってすごくないのか？
・・・あれ、エリシアって白いワンピースをきてるけど、
下から見たら何か見えちゃうんじゃないのか？

と、思ったが、馬車から見て左の山の中に、何か小さく光るのを見つけた。

・・・魔法の光？

「エリシア、９時の方向、魔法光だ」

９時の方向は、真左のこと。魔法光は魔法発動時の光もしくは、単に魔法の光を指す。

「・・・ほんとです。どうしますか？」

「もちろん見に行く」

「ふふっ、言うと思いました」

「シルフ！」

『はい、了解です♪』

即答するシルフ。え、なに？呼ばれてないときは見てないんじゃないの？

思わず聞いてみると・・・

『ご主人様が戦闘モードになってましたので、話をうかがっておきました♪』

なるほど、なんて有能なんだ・・・

・・・ということは、＜サンクチュアリ＞を使った朝の出来事も知

ってる、と。

「まぁいいや！いくぞ、エリシア、シルフ！」

「『了解です！』」

俺たちは、シルフの風と、飛行魔法で、一気に空を翔けた。
＜サンダー・ミグラトリィ＞は、目立つからやめた。
敵か味方かも分からないときは、こっそり近づくべきだ。

「・・・はぁ、やっぱりこういうのもあるのか」

翔けつけると、商人らしき一団が盗賊に襲われ、
商人の一団の中の、フードを被った少女が無詠唱で魔法を連打することで
なんとか耐えているが、数に押されて、今にも負けそう・・・
といった感じだった。

「アル、いくんですよね？」
エリシアは、もう決定事項のように聞いてきた。

・・・まぁ、そうなんだが。

「よし、盗賊を殲滅、商人の一団を救助・・・のつもりで行こう。
ただし、状況が分からないので、真っ当な商人か。本当に盗賊か

確認する」

そう、もしかするかもしれないし。前世で一回間違えたことあるし。
まぁ、エリシアもいるから余裕だろう。

俺とエリシアは急降下。
で、とりあえず戦いを止めねば。
盗賊?が２０人くらいに、商人が7人くらいか?
おそらく、戦い始めたばかりのようだ。
どちらも重傷者はいない。

「双方、剣を引けぇぇ――ッ！
私は、十二家が一つ、フォーラスブルグ家の者だ！
貴様たち、一体何を争っている！」

商人?達は驚いて一旦さがり、盗賊?達は、イラついたような雰囲気だったが、
俺の隣のエリシアを見て下品な笑みを浮かべる。

エリシアが若干俺の後ろに隠れる。

・・・とりあえず、こいつらは締め上げよう。

「で、お前たち盗賊が、商人を襲ったということでいいのか?」
俺が問いかけると、騙せるとでも思ったのか、盗賊のリーダーらし

き人物が前に出た。

「いえいえ、とんでもございませ――――――」

「＜スタン・ブレイク！＞」

俺の手から、高電圧、低電流の雷撃が飛び出す

原理はスタンガンと同じ。死なないが、大ダメージだ。

ちなみに、スタンガンと違って、射程は５０メートルなら気絶させられる。

「――――ギャッ」

そのリーダーらしき人物は、一撃で昏倒、痙攣している。

「て、てめぇ！何しやがる！」

一気に盗賊？が殺気立つ。

が、殺気立ってるのはこちらも同じだ！

「うるさい！女の子が怖がるくらい下品な目で見るなど万死に値する！

気絶しただけだ、感謝しろ！」

一気に俺から膨れ上がった気迫――――（というか魔力）に恐れおののく盗賊。

が、

「てめぇら、たった二人増えたくらいで何びびってやがる、
貴族のガキとお嬢ちゃんも捕まえてウハウハだぜ！」

何を想像しやがったか、一気に盛り上がる盗賊。

・・・よし、手加減いらないな。１００％、こいつらは盗賊だ。

「おら、喰らえや！燃え盛る弾丸！＜ファイヤボール！＞」
盗賊の中のボロいローブが、ファイヤボールを放ち、
一気に他の盗賊も距離を詰めてくる。

俺は、＜シルフィード＞を抜き放った。

『＜ストーム・ディフェンサー＞、発動です。黄色い線の内側に下がってください♪』

俺の周囲に暴風の壁が球状に出現。
ちゃんとエリシアも中に入っている。
黄色い線などもちろん無い。
シルフの陽気な声とは裏腹に、暴風の壁は容易く＜ファイアボール＞を弾き、
前に出ていた盗賊が、巨人に平手打ちを喰らったように吹き飛ぶ。

強力な術は防げないが、雑魚相手なら余裕だ。

オマケもいっとこう。

「疾風と雷、此処に交わる！喰らえ！＜テンペスト・ディフェンサー！＞」

暴風の壁が一瞬白く発光し、怒涛の勢いで雷撃が放たれる。

――――ズガガガガガァァァン！

見事に盗賊を狙い撃ち♪
全員痙攣している。

さて、唖然としてる商人さんにも、一応話を聞くか。

「あ～、すみません。大丈夫ですか？多分平気だと思いますが、流れ弾とかは？」

俺の言葉に、商人のリーダーらしき中年の男性が仲間を確認。

「は、はい！大丈夫です。ありがとうございます！なんとお礼を言っていいか・・・」

「お気になさらず。むかついたので焼いただけですし。

あ、一応今後のために事情を伺っても構いませんか？」

そんなわけで、軽く事情を聞いた。
荷物は一応確認したが、普通に食料とか工芸品とか毛皮とか。
村から街に売りに行くところだったらしい。
で、いきなり襲われたと。
で、どんなルートか聞くことで、自然にどこの村から来たのか聞き出した。一応。

「なるほど、ご協力ありがとうございます。っと、こいつらどうしましょうか？」

俺は、のびてる盗賊・・・（商人の人たちに縛ってもらった）を見つつ言った。

「街に持って行けば賞金があるかもしれませんが・・・」

「ああ～、俺はいらないです。こんなでも貴族ですし。
貴方方が持って行って頂けると助かるのですが・・・」

「・・・すみません、ありがとうございます」

盗賊退治の賞金は意外といい額だ。こいつら２０人もいるし。
きっと村の生活の助けになるだろう。
まぁ、盗賊に襲われるなんて不幸な目にあったんだし、それくらいいいだろう。

・・・まぁ、七人しかいない商人が勝ったなんて怪しいかもしれんから、
後で街に着いたら、軽く説明して圧力でもかけとくか。
実は準皇族である十二家の権力は伊達じゃない。

まぁ、ギルドは独立した機構だから、あんまり大きな圧力は無理だし、
するつもりも無いが、今回みたいなのならいいだろう。

その後、俺とエリシアで軽く怪我人の治療をして、
恐縮する商人たちから逃げるように、俺とエリシアは馬車に帰った。

んで、夜。

エリシアがまたしても侵入してきた。

「おいこら、帰れ」

「アル・・・今日は寝ぼけてないですよ？」

「もっと帰れ！」

が、エリシアは帰らない。

「・・・こわかったんです。すごくいやだったんです。あんな目で見られるのが・・・」

エリシアは少し震えていた。

・・・あの盗賊どもめ・・・すこし生ぬるかったか・・・

俺は、あの程度?で済ませたのを若干後悔した。

「だから・・・その・・・アル、一緒にいてください」

「・・・わかったよ」

俺は、エリシアをそっと抱きしめた。

第二話：散歩は波乱を呼ぶかもしれない（後書き）

――――次回予告――――

♪～～チャラッ、チャ～ララ～

「よし、街だー！」
「お買い物です！」
「お兄ちゃん!?どこいくの!?」
「市場さ！」

次回、『市場』！

「短いッ!?お兄ちゃん、短いよ!?」
「いや、どうよ?」
「コメントしにくいです」

第三話：市場

さて、皇国の南端にある街、ティルメアに着いた。
3日目だ。
で、とりあえず馬車は御者さんと学校側に任せる。
宿の場所の説明だけ聞いた。

「よっしゃー街だー！」
俺は歓声を上げつつ、レッツゴー！

「お買い物です！」
エリシアもノリノリである。

「お兄ちゃん！？どこいくの！？」
「市場さ！」
「あ、私もいきます！」
「お兄ちゃん、私も！」

どうやらエリシアとリリーも来る模様。
さて、何買おうかなー！
俺の事前調査によると、今日は市場でバザーがある！
バザーでしか買えないモノがあるんだぁぁぁぁッ！

「あ、ギルドいくんだった」

「え、お兄ちゃん！？何で！？」

「あ、アル、リリーに話してなかったです」

で、軽く説明しつつギルドへ。

あ、こないだの商人さんたちと、なんかギルドの制服の爺さんが話してる。

と、商人の中の、フードの女の子がこっちに気づいた。

「あ！先日はありがとうございました！」

ふむ、どうやら向こうの方が速かったらしい。

ま、こっちは大所帯だしな。

「おう、どういたしまして！」

と、ギルドの爺さんがこっちを見て驚いた。

「ふむ・・・まさか本当にキミがあの盗賊団を倒したのかね・・・？」

信じられん。といった感じだな。

「まぁ、一応これでもラルハイト魔法学校の生徒なものでして」

「なるほど・・・そうか、交流戦じゃったな」

「まぁ、そんなとこです」

「・・・あの盗賊団のリーダーは魔法も使うことで恐れられておっ

たのじゃが・・・」

「ああ、不意打ちでサクっと」

「そうか・・・わしはギルド・ラルハイト南部支部長のオルディアじゃ。
まあ、気軽に爺さんとでも呼んでくれ」

「俺はアルネア・フォーラスブルグです。まぁ、気軽に呼んでください。」

「うむ、わかった。ところで、何か用かね？」

「あ～、7人の商人で盗賊撃退の信憑性に不安を覚えたので、
問題が無いか見に来ました」

「ふむ、問題ないぞい。現に盗賊は捕まっておった。その事実だけで十分じゃ。」

「それはよかった。よし、エリシア、リリー、行くか～！」

「む、もう行くのか？」

「まぁ、市場に用があるので」

「ふむ、魔法学校に通っておるといったな？」

「ええ、まあ」

「そうか、では、魔法具を売っておる緑のテントに行って、爺さんからの紹介。山を上に、空を下に。と伝えてくれ。」

そう言って、爺さんはニヤリと笑った。

俺もつられて笑う。

「爺さん、ありがとな」

「くっくっく、用があったら、また来るといい」

そうして、俺たちは今度こそ市場へ。

「お兄ちゃん、行ってみるの？」

「おうともさ！」

「あ、アル。緑色、ありました」

で、緑のテントに行くと、魔法具が割りと安く――1割引くらいで売られていた。
ふむ、確かにホンモノっぽい。魔力で分かる。
店長はお爺さんだ。すごい髭。

「あ～、すみません。爺さんからの紹介。山を上に、空を下に。」

そう言うと、髭爺さんはニヤリと笑った。

「ほぅ、確かに面白いのぉ。不思議な魔力じゃ」

「・・・お爺さんも、魔法使いみたいだね」

「まあの。というか、連れの嬢ちゃんは何者じゃ？」

「ん～？俺の妹だよ。天才なんだ」

「・・・似とらんが？まあいい。ちょっと待っとれ」
髭爺さんは、どこかへ歩いていき、すぐ戻ってきた。

「これじゃ」
爺さんがそう言って差し出したのは、謎の箱。
鍵穴が無く、開けられそうな隙間も無い。
大きさは小さなトランクくらいか？
なんだか魔力みたいなので覆われている。

「・・・なにこれ？」
俺は思わず呟く。

「・・・これを開けられないか試して欲しい。
持って行って一人でやってくれて構わん。
わしらには開けられんかった。その中のものはやる。
そのかわり、何が入ってたか教えてもらいたいんじゃ。」

髭爺さんは、急に真面目な顔で言った。
悪い条件じゃない。でも・・・

「爺さん、これはどこで手に入れたんだ？」

「昔な、迷宮で見つけたんじゃ。だが、誰にも開けられんかった。
お主も開けられんかったら・・・まぁ、返してくれればありがたいのぅ」

「はぁ、俺が返さなかったらどうするんだよ」

「ふん、わしもあの爺の眼力は信用しておるのでな」

「・・・わかったよ。やるだけやってみる」

「うむ、当然じゃが金はいらん。・・・頑張ってくれ」

俺は、箱を受け取り、エリシアとリリーを見た。

「どうする？俺はちょっと街の外に出るけど」

「私も手伝います！」

「お兄ちゃん、私も！」

俺たちは、街から離れた山の中に来た。

おそらく、あの爺さん達は、昔は相当な手だれだったはずだ。

迷宮で拾ったというのもそうだが、雰囲気が独特なのだ。

ただ者ではない感じ。だろうか？

――よっし、本気でいくか！

――魔力、全開！

「シルフ！」

『はい、お呼びですか、ご主人様♪』

俺は、＜アウロラ＞と＜シルフィード＞を抜く。

「シルフ、この箱を開けたい」

『はい？あら、魔力プロテクトですか・・・力ずくですね♪』

「おう。というわけで・・・我と契約せし風の精霊よ！我が魔力を糧に顕現せよ！」

銀の閃光が閃き、シルフィードが実体化する。

「んで、シルフ、これって開けられる？」

『え～と、・・・ううん？なんですか、コレ。魔力じゃなくてマナで構成されてますね』

「・・・つまり？」

『無理です♪』

思わずがっくり肩を落としてしまった。

「アル、どんまいです！」

「お兄ちゃん、いつかいいことあるよ！」

「ええぃ、シルフ！憑依は！？」

『憑依ですか？危ないですよ♪』

なぜ楽しそうに言うか。

「なんで？」

『魔力容量を突破しますと、体が粉砕する恐れがあります。
あ、でもエリシアさんがいるのですぐ回復できますね。痛いですけど♪』

「よし、ＧＯ！」

「あ、アル！？ダメです！断固却下です！」

「そ、そうだよお兄ちゃん！無理なら仕方ないよ！」

「いや、爺さんの夢を無下にはできん！俺はやる！こいシルフ！」

『了解です♪』

「アルの馬鹿・・・」
「お兄ちゃんはもう病気だね・・・」

んで、シルフと軽く呪文を考えて、実行。

『大いなる風の精霊の力を此処に！』

『我は盟約を結びし者！』

『生命の根源たるマナの加護によりて、我に風の力を！』

『＜精霊憑依（ユニゾン）！＞』

シルフのマナが俺の体に流れ込み――――

俺の魔力が爆発的に上昇した。

『まぁ、さすがご主人様ですね♪余裕じゃないですか♪』

『つまり、成功ってことでいいのか？』

『はい、でもあまり長くは持ちません。ざっと３０秒でしょうか？』

『短っ！？』

『はい、はやく開けましょう♪』

『・・・ああ』

『――天をも切り裂く銀の雷――』

『――死を告げる轟音、聞くこと叶わず――』

『――汝を葬る雷、見ることも叶わない――』

『――其は天空の理。我が手に導かれ、裁きをもたらす――』

『――――＜サンダーボルト！＞』

――――――ドガァァァァン！

通常より明らかに威力が高い＜サンダーボルト＞によって、

箱を覆っていたマナが消滅。
箱はそれでも残っていたが、帯電している。

『ミッションコンプリートですね♪』

『よし、中身確認だ！』
精霊憑依のまま移動し、驚く、めちゃくちゃスピードがあがってた。

「アル・・・流石です！」
「お兄ちゃんが凄すぎるよ・・・！」

とりあえず、箱を開ける。

『オープン・ザ・プライス♪』
シルフ、番組違う。

『・・・コレは！？』

『あら？』

「なんです・・・？」

「えっ、見せて！？」

箱の中には、銀の短剣と、黒い服、そして４つの指輪が入っていた。

短剣はミスリル製で、服は軽くて丈夫な謎の素材。
指輪には何か魔法がかかっているようだったが、よく分からなかった。
まぁ、呪いではなさそう。
もっとしっかり確認したかったのだが・・・

『ピンポーン！タイムアップです♪』

「ぐはっ」

「アル！？」
「お兄ちゃん！？」

俺は倒れた。

第三話：市場（後書き）

――――次回予告！――――

「う、うごけん・・・」
「アル、大丈夫です？」
「お兄ちゃん、私に任せて！」
「――アル、大丈夫？」
「私もアルを看病いたします！」

銀雷の魔術士、次回、『看病は戦いだ！』

「・・・なぁ、何と戦うんだ？」
「お兄ちゃん、敵は仲間内にあるんだよ！」
「アルにご飯を食べさせるのは私です！」

「ええぃ！自分で食える！」

・・・おかしいな？ファンタジー・バトル物だったはず・・・
次の次の話から、交流戦を開始します。
始まってしまうと、当分日常っぽいのができないので、
投売りしてみました。

第四話：看病は戦いだ！

俺は、精霊憑依による急激な魔力増加によって、ダメージを負った。
正直起き上がるのも辛い。
まぁ、痛いとかはないんだが・・・・
シルフによると、それだけでもありえないレベルらしいが。
もっとしっかり忠告してくれ。

俺は、エリシアに運ばれて馬車で寝てる。
で、もう街は出発した。

爺さん達には、エリシアに見せに行ってもらった。
すごい喜んでたそうだ。
別に返していいと言って持って行かせたのだが、受け取らなかったらしい。
若いもんが使え。とのこと。
ありがたく貰っておこうと思う。

と、誰か来た。

「――――アル、大丈夫？」

ローラが来た。
いつもどおりのポーカーフェイス・・・だと思う。

「あー、大丈夫だが、起き上がるのもままならない」
「――じゃあ、だいじょうぶね」

「マジか！？」
「・・・だいじょうぶなんでしょ？」

「むぅ、確かに言ったが」
「・・・どっち？」

「正直きつい」
「そう・・・はやく良くなってね」

「ああ、わざわざありがとな」
「・・・うん」

ローラはほんの少し微笑んで帰っていった。

と、入れ替わりに誰か来た。

「アル、大丈夫ですか？」
フィリアだった。

「・・・大丈夫だが、起き上がるのもままならない」

「それは大変です！アル、私に看病させてください！」
フィリアがなんか燃えてしまった。
失敗した。

「いや、大丈夫・・・リリーにエリシアもいるし・・・」

「私もアルを看病いたします！」

やばい・・・どうしたものか・・・

「というか、病気じゃないから休めば治るんだって！」

「そう・・・ですか？」

「そうそう！」

「・・・わかりました。でも、私も料理を作ります！」

・・・嫌な予感しかしない！？
皇女様が料理できのかよ！？
というか、リリーとかエリシアに火がつくからやめて！

「いや、それは間に合ってるぞ！？」

「そ、そんな・・・」
ものすご～～く悲しそうなフィリア。
ぐあぁぁぁぁ！？
なんだ、この罪悪感は！？

「・・・わかったよ・・・だが、もう既に用意されてる可能性が高い。量を少なくな・・・」

「はい！」

ダメだ、勝てる気がしない・・・

と、入れ替わりでリリーが来た。
・・・もう疲れたんだが。

「おに～いちゃん！大丈夫？」

「ダメだ。お見舞いの対応に疲れた。」

「・・・大変だね。で、ご飯食べる？」
リリーがおにぎりを出してきた。

「・・・ああ、一個もらう」

おにぎりをもらって、食べた。
鮭だった。何故か甘かった。突っ込んだら負けな気がした。

と、ローラが再びやってきた。

「アル、野菜スープを作ったんだけど・・・食べる？」

おお、スープは暖まるしありがたい。

「ああ、ありがと。もらうよ」

「うん」

・・・美味かった。コンソメ味？

「おお、美味い。ありがとな。」
つい近くにあったローラの頭を撫でた。
ローラはなんだか嬉しそうだった。

で、ローラは皿を持って帰っていった。
・・・いつの間にかリリーがいない。
まさか・・・

「・・・アル、大丈夫です？」
今度はエリシアが来た。

「・・・大丈夫だ。」

なんかもう、ふざけて返答してたのが悪かった気がしてきた。

「そうです？・・・アル、ご飯を作ってみました。」

「えっと・・・なんか既にリリーからおにぎり、ローラからスープ、
更にフィリアが何か作ってるみたい――――」

「・・・ぐすっ」

なんか本気で泣きそう！？

「だから、量を少なめにしてくれると嬉しいな！」

「・・・・無理しなくて、いいです」

「エリシアこそ無理するな！食べる食べる！」

きっと、せっかく作ったから食べてもらいたかったのだろう。
・・・怖くて寝れないとかも含めて、けっこう子どもだよな。

「・・・アルがものすごく失礼なことを考えてる気がします！」

「ないない。」

「むぅ～・・・」

と、フィリアが乱入してきた。

「あ、エリシアさん。エリシアさんもアルさんにご飯を作ってさしあげていたのですね」
フィリアはにっこり微笑んだ。
まぁ、一応エリシアは俺の妹ということになってるし。

「アルにご飯を食べさせるのは私です！」

「おいこら、ケンカするな。どっちも食べる」

で、先に来てたエリシアのから食べることに。
何を持ってきたかというと・・・

「おおっ!?焼肉だ!」
たびたび言ってるが、エリシアが焼いた肉は通常の三倍美味い。
正直、毎日作ってほしい。今度頼んでみるか。

『俺に毎日肉を焼いてくれ!』
新しいな。
・・・ん?これ、元ネタなんだっけ?
結婚の申し込みじゃないか!?
あぶな!?

まぁ、とりあえず食べ――――

エリシアが箸で肉を持って、俺の口の前に差し出している。

・・・はい?

「エリシア?」

「アル、あ~んです」

「ええぃ!自分で食える!」

「アル、口を開けないとあげません」

なん・・・だと!?
くっ、別にそこまでして食う気は・・・

めちゃくちゃ美味そうだった。

・・・俺は負けた。

「あ、あ~ん」

「はい、どうぞ♪」

エリシアはめちゃくちゃ嬉しそうだった。
俺はすさまじく恥ずかしかったぞ・・・フィリアいるし。

が・・・

「う、美味い!?」
なんだかいつもより更に美味いような!?

「アルのために色々頑張ったんです♪」
エリシアはとてもご機嫌だ。
シルフ並みだ。
・・・シルフはいつでもご機嫌だな。

「・・・いいなぁ」
フィリアがぽつりと呟いた気がした。
で、なんだかんだいいつつ、エリシアの焼肉は完食した。
エリシアはお皿を持って、ご機嫌で去っていった。

「アル、今度は私が作ったのを食べてください！」
フィリアが燃えていた。
「・・・お手柔らかにな？」
で、フィリアが作ったのは・・・
「・・・サンドイッチ？」
「はい、軽めにサンドイッチです！」
意外と普通だった。助かった。
で、受け取って食べた。
フィリアも、あ～んってしたそうだったが、断固却下だ。
サンドイッチで助かった。
が、

「・・・これ、フルーツ？」
具がフルーツだった！？

「はい、意外とおいしいですよ？」
にっこり笑うフィリア。
・・・フィリアもやっぱり料理はダメっぽい。
確かに意外とおいしいけどさ・・・

まぁ、フィリアも帰っていった。
ふぅ、終わったか。

が、最後に刺客が待っていた。

「お兄ちゃん、たべてっ！」

リリーが7色のスープを持ってきた。
さて、その後食うや食わんやの押し問答があったが、俺は負けた。

「ごはっ！？」

「お、お兄ちゃん！？」

舌が焼ける・・・！

辛い！激辛！甘い！苦い！しょっぱい！クドい！

・・・刻が見える・・・！

「あ、アル！？＜ヒール！＞」

駆けつけたエリシアのヒールでなんとか助かった。

「ごめんなさい・・・」

「リリー、頼むから味見してくれ・・・」

「うん・・・」

リリーは調味料が大好き・・・味見しない・・・

恐怖だ。

この娘にして、あの父あり。

で、夜。

「アル、一緒に寝ましょう♪」

「うるさい帰れ。安眠させろ。一人で寝れないのか」

「・・・アル、私も女の子なんですよ？」

「ん？ああ、悪い。女の子は夜は一人じゃ怖いものなんだな。知らなかった」

「・・・私は、アルがこんなに鈍いのは知らなかったです」

エリシアは小声で何か言ったが、聞こえなかった。

「え、悪い、聞こえなかった。」

「うぅ～～・・・！いつか気づかせてみせます・・・！」

「え、何を？普通に口で言ってくれたほうが・・・」

「いやです！」

エリシアはそのまま布団に入って来た。
帰ってはくれないらしい。

勘弁してくれないか・・・
俺の自制心がそろそろ限界なんだ。
エリシアはもうちょい自分の魅力を自覚したほうがいいよ。

「エリシア～、あんまりくっつかないで・・・」

「・・・いやです」

もっと引っ付かれた。
胸が・・・胸が当たるんだ！
が、最早何を言っても無駄だと悟った。

目指せ、明鏡止水！

第四話：看病は戦いだ！（後書き）

――――次回予告――――

♪～チャラッ、チャ～ラララ～！

「ついに来たか交流戦！」
「まずは個人戦からです」
「お兄ちゃん、エリー、頑張って！」
『ふふっ、やっと戦いですね♪』

やっとついた・・・
真面目に戦いまくろうと思います。
まぁ、個人、チーム、軍団の３つもあるので、
雑魚との戦いは巻きでいきますけど・・・

第五話：共和国の貴公子（前書き）

・・・ちょっと次回予告と変わってます。
微妙に。でもたいした違いじゃないのでお気になさらず。
もう次回予告を修正して証拠隠滅も完璧です♪

第五話：共和国の貴公子

さて、あれからは特に何も無く、無事に共和国の首都・ディグリスに到着した。
予定通り、大会の始まる3日前だ。
とりあえず、風呂にはいりたい・・・
魔法で清潔にしてるが、やっぱり風呂は大事だろ！

さて、ディグリスも皇都と外見はあまり変わらなかった。
まぁ、同時期に作られたらしいし、気候も文化もあまり変わらないらしいしな。
レンガ造りの建物が立ち並び、交流戦前だからなのか、若干賑やかだ。

選手が宿泊する宿は、国ごとに分けてあるらしく、
俺たちの宿には皇国の人間しかいなかった。
が、かなり立派で、最早、豪邸だ。
どれか一つでも交流戦に参加する生徒は全員一人部屋だ。豪華だ。
風呂も大浴場があった。
当然、ベットもフカフカだ！（これが最重要）

交流戦を観戦できるのは、三国どれかの国籍を持つ人間・・・
まぁ、ある程度の身分がないといけないのだが、学校の生徒はいっぱい来る。
3国それぞれにある、生徒３００人の王立、国立、皇立の魔法学校

から計９００人。
で、他の小規模な三国内の魔法学校からも、少しの参加者と、たくさんの観戦者がいるらしい。

今回の大会での優勝候補は、
光の皇女こと、フィリア・ラルハイトや、
オーランドの神童こと、ギニアス・オーランド。
白い雷こと、俺とか。（本気だと銀色なのは、あまり流出してなかった）
エディメアの貴公子こと、ケイネス・グノーシアとか。

他にも、色々いた。
あ、兄さんも優勝候補だ。最近会ってないな・・・

フィリアは皇女であるため、あまりにも有名だ。
皇国最強と謳われる精霊＜シリウス＞。
そして希少な＜光＞属性。
そして本人の美しさ。
現在１５歳。

オーランドの神童は、なんだか色々情報が錯綜しているが、属性は不明。
一人で盗賊団を壊滅させたとか、迷宮をクリアして精霊と契約したとか、

大量発生して街に押し寄せた魔物の群れをなぎ払ったとか言われる。
まぁ、信憑性の高い情報が足りない。
現在１５歳。

俺は・・・色々暴れまわったから。
空を飛んで皇国内を冒険した時に、キラービーの群れを空から焼いたり。
オーガを倒して攫われた女の子を助けたり、
闘技場を荒らしまわったり、あと、不良に絡まれた子を助けたり、
あ～、フェンリルと戦ったなんて噂もある。事実だが。
現在１５歳。

エディメアの貴公子は・・・
なんでも、大陸一の美形だとか、女誑しだとか、
すばらしく優しいとか、騎士の鏡だとか、男の敵とか言われる。
共和国議長の嫡男らしいが、情報が多過ぎて分からなかった。
・・・とりあえず、あんまり遭遇したくない。
現在１８歳。三年生だ。

え～と、何の話だっけ？
三国魔法学校は、全て同じようなシステムで構成されている。
細かいカリキュラムは違うが、人数とかまで一緒だ。

そんなわけで、三国校から、各学年５人×３学年×３国の４５人、

個人戦に参加。
で、その他の学校から、計１９人参加し、計６４人。
一回戦で３２人に減って、２回戦で１６、３回戦で８、４回戦で４、
５回戦で２人、
つまり、計６戦である。
あ、ちなみに学年は関係ない。
１トーナメントだけだ。
まぁ、優勝候補を見ても分かるように、年齢より才能が大事なのだ。

で、全部で４つのブロックに分けられており、
今日は各ブロックの優勝者を決め、明日で準決勝。
明後日に決勝戦をするらしい。
まぁ、要するに今日は４回勝てばいい。

ちなみに、俺はAブロック、エリシアがBブロック、フィリアがC,
ローラがDだ。

そして、貴公子がAブロック、神童がDブロックだ。
で、兄さんもDブロック。
Aブロックには、王国の隠し刀とか呼ばれる、謎の生徒もいるらし
い。
なんでも、常にフードで顔を隠しているらしい。
しかも、異常な強さらしい。

抽選らしいが、Aブロックきつくないか!?
・・・どうなるかなぁ。

さて、準備に追われて3日はあっという間に過ぎ、今日は個人戦の日だ。
この3日間の夜は流石にエリシアも来なかった。
助かったぜ・・・

さて、本日の俺の服装だが、
とりあえず制服を着る。
で、例の箱に入っていた、黒い服は部屋に置いておく。
指輪は・・・・
全部ミスリル製みたいなのだが、宝石が一つずつ嵌っていて、
その色が、赤、青、黄、緑となっている。
・・・なんか意味がありそうだが、色々思いつきすぎてよく分からない。

まぁ、とりあえず放っておこう。

で、合宿の時の黒いコートを羽織った。
腰に＜アウロラ＞と＜シルフィード＞を装着！
ついでにこないだの短剣、＜アイテール＞も腰に装着。
＜アイテール＞は、古代語で柄に銘があったため判明。
ミスリル製で、魔力を流すと、光って――――

空気がキレイになる。
いや、ホントに。
おいしいよ?なんか、疲れがとれる。
なんかもう、空気が輝いて見える。
攻撃力はたぶん無い。試してないが・・・

まぁ、状態異常回復ができそう。
同じく試してないが・・・

よし、そろそろ行くかーー！

――コンコン

「どうぞー」

ノックしたのは、リリーとエリシアだった。

「お、お兄ちゃんが起きてる!?」

「アル、おはようございます」

「ああ、おはよう・・・リリーは俺をなんだと思ってるんだ」

「起きれないお兄ちゃん？」

「アルが自分で起きたのはこれで４回目くらいでしょうか・・・」

・・・あれ？そんなに少なかったっけ？

・・・あれ？否定できない・・・

「よし、リリー、エリシア行くぞ！」

「はーい」

「逃げましたね」

で、会場のコロシアムに到着。
唐突だが、ホントにコロシアムとしか言いようが無い。
写真で見たのそのまんまだ。
円形で、でかい。

コロシアムの周りには、既にたくさんの生徒と、なんか金持ちそうな人たちがいた。

で、なんか大量の女の子に囲まれてる、
金髪で背が高くて、無駄に美形で、無駄に金持ちそうな青年がいた。

げ、目が合った。
何故かこっちに歩いてくる。
で、俺たちの前に来て、無駄に優雅に一礼した。
「どうも初めまして・・・私はケイネス・グノーシアと申します。
銀雷のアルネア殿とお見受けしました。以後お見知りおきを」
・・・どうやら、情報通にはバレてたらしい。
「・・・ああ、アルネア・フォーラスブルグだ。よろしく、ケイネス殿？」
「・・・貴公は何か隠していますね。不思議な魔力だ」
貴公ってなんだよ！と思ったが、俺も貴族の端くれ、この程度では動じぬ！
「そうですか？ケイネス殿こそ、凄まじい魔力ですね。驚きました」
そう、このケイネスとかいう男、巧く隠してるが、洒落にならない魔力だ。
フィリアより量だけなら上かもしれん。
そして、あの背中の金の大剣・・・おそらく精霊剣だ。

「ほう、この魔力に気づきますか。噂通りですね」
ケイネスはそう言って優雅に笑い、俺の隣を見た。
で、一瞬硬直し・・・

「こ、これは・・・なんと美しい！私の妻になって下さい！」

・・・はい？思わず全員硬直。

ケイネスはエリシアの手を取って、手に口付けを――――

――――バキッ

――――ドガッ、ガスッ

――――ズシャァァァ

凄まじい勢いでケイネスがぶっ飛んだ。
軽く１０メートルほど。
ドラゴンなので、咄嗟にやるとこうなるだろ。
まぁ、手加減する暇も無かったといったところか。

待てよ・・・魔力が相当こもってたし・・・本気の一撃か！？

下手すると死にそうな一撃だが、ケイネスは咄嗟に後ろに飛んで勢いを殺し――――

たりはしてなかった。
痙攣してる。
正直、死ぬな、コレ。

「「「け、ケイネス様！？」」」

取り巻きの女の子が慌てるが、治療使いはいないっぽい。

・・・はぁ、仕方ない。
俺は歩いてケイネスに近づきつつ、魔力を集めた。

「あ～、すみません、治癒使いで～す。通してくださ～い」
俺は人ごみを掻き分けて・・・

「あ、貴方の連れの方がやったのでしょう!?」
金髪美女が食って掛かってきた。

「・・・別にいいけど、アレ、致命傷だよ?死ぬよ?」
俺は、ケイネスの方を指差した。

「そ、そんな!?ケイネス様はこの程度では!?」

「・・・あの子一般人じゃないし。ドラゴンの蹴りを受身なしでモロに喰らった感じだな」
冗談めかして言ってるが、事実１００％だ。

「そ、そんな!?死んでしまいますわ!?何をモタモタしてるんですの!?」

「だから、魔力集めてるでしょうが。あと、そこどいて」

ようやく金髪美女がどく。
ケイネスは泡吹いて倒れてた。
衝撃映像だな。

「傷を癒したまえ聖なる光よ～!＜ヒール＞」

適当に破裂してそうな臓器を治癒。
うわぁ、エリシアの本気による魔力ダメージがデカイな・・・

骨とかは、その気があれば、リヴァイブですぐ治せるが、
魔力によって受けたダメージは治癒しにくい。
体にダメージを与えた魔力が体に残留するために、治癒が阻害されるためだ。

まぁ、治癒が最強じゃない最も大きな理由だな。

というか、挨拶で手にキスするヤツ初めて見たよ。
あ、未遂か。
・・・普通に逮捕でいいと思うんだが。
よし、帰ったら父さんに圧力かけてもらって、皇国では禁止にしてもらおう。

むぅ、キツイな。治らん。
『リリー、ヘルプお願いー』
俺は念話で救援を頼む。

『お兄ちゃん、エリーがすごく怖がってるから近づくの無理。頑張って』

・・・コイツ、治さなきゃダメか？
コイツ的には悪気は無いんだろうが・・・・
いや、むしろそれが大問題だ。
でも、議長の息子かー。

というか、エリシアが殺人犯になっちまうよ・・・
仕方ないか。

「大変そうだな、手伝おうか？」
と、なんか黒髪の青年が俺の横に立っていた。

「頼む、助かる。」
俺はありがたく手伝ってもらうことに。

「聖なる光！傷を癒せ！＜ヒール！＞」
青年の手が白く輝き、傷を癒す。
が・・・

「これは・・・なにがあったんだ！？」
慌てる青年。
そう、到底街中で負う傷じゃない。
ビッグボアの突進がクリティカルヒットって感じだ。

「あー。乙女の怒りを買った」
あんまり説明したくなかったので端的に。

「・・・本当に？」
青年に疑わしい目で見られた。

「本当。手に接吻しようとした。で、蹴られて、受身失敗。」

「・・・はぁ、エディメアの貴公子は女性に手を出したことは無いと聞いていたんだが・・・」

青年は、悪い噂は本当だったのか・・・失望した。とか言ってる。

「え、どんな話だったんだ?俺の方だと、女性にモテモテで、なんども結婚話がでるが、目にかなう女性がいないとか聞いたんだが」

そう、俺はそう聞いたのだ。

さっき言わなかったのは、確信が無かったから。

だって、何百人と側室がいるとかいう噂もあるんだぞ?

「ああ、ボクが聞いた話でもそうだった。

そして、共和国の学校でも一番の成績だと聞いたんだが・・・」

青年は、絶望したーって感じだ。

気が合うかもしれん・・・

「ああ、でも強そうではあったぞ。今はこんなだが」

泡吹いて白目むいてるケイネスを指差す俺。

「へぇ・・・!それは良かった。ちょっと楽しみにしてたんだ」

はぁ、ダメージが大き過ぎてきついなぁ・・・
そろそろ救護隊とか来るだろうし。
仕方ない。

「閉じろ黄泉の門。いいから起きろ馬鹿野郎。＜リヴァイブ＞」
相当にやる気ない詠唱でリヴァイブ発動。
が、ちゃんと効いた。ケイネスが目を開けた。

「ぐ、ぐぅ・・・一体何が・・・」
苦しそうに体を起こしつつケイネスは言った。

「け、ケイネス様！」
さっきの金髪美女が抱きつく。

が、
「イルシア、離してくれ。私は運命の女性に出会ったのだ・・・！」
イルシアと呼ばれた女性が硬直。

ちっ、まだ懲りてなかったのか・・・
『リリー、早急にエリシアを移動させてくれ』

『大丈夫！こんなこともあろうかと、既に控え室だよ！』

『よし、グッジョブ！』

『わ～い♪』

「あの人は何処に・・・！？」
ケイネスはきょろきょろしてる。
・・・どうするか。
よし！

「ケイネス殿、あの人には既に相手がおりますが？」
とりあえず、これで収まるだろう。

「なん・・・だと！？・・・いや、この私ほど相応しい相手などいない！」

なんてうざい！？

「アルネア殿・・・相手は誰なのですか・・・！」
いやだー！コイツ嫌だー！
前に学園長にも似たようなこと思ったけど、
全然違う！学園長は立派な先生だけど、コイツうざい！

くっ、どうするかな・・・
コイツのことだから、倒して証明とか言いそうだ。
迷惑極まりない。
・・・真面目そうだから暗殺とかはするまいが、うざそうだ。
他人に迷惑はかけられないということは・・・

「俺。」

「・・・」

ケイネスが凍った。
で、ニヤリと笑った。

「そうか・・・では決闘を申し込む！」

「だが断る！大事な交流戦の前に何言ってやがる。馬鹿か。馬鹿だろ。馬鹿だな！
三国友好の大事な大会の前に、人の恋路を邪魔して決闘を申し込む！？
ドラゴンに蹴られて地獄に落ちろ！
そんなんで議長の息子だと！？自覚が足りん！
貴様の行為は親の顔に泥を塗ってるに等しい！
そんなヤツがあの子の相手に相応しい訳ないだろうが！一回転生してやり直せ！」

有無を言わさぬマシンガントークで硬直した貴公子をほったらかしにして、
俺はコロシアム内の控え室へ向かった。

第五話：共和国の貴公子（後書き）

――次回予告！――

♪～～チャラララッ、チャラララ～～

「第一回戦の相手がケイネスだと！？」
「アル・・・勝ってくださいね」
「お兄ちゃん、叩きのめしてあげなさい！」
「アルネア殿、確かに私が間違っていた。この交流戦で貴公に勝てばいいのだ！」
「・・・いい加減にその口を閉じろ！」
「エリシアさんは私が貰う！」
「紺碧の空に瞬け！貫け銀雷！」

次回、銀雷の魔術士・第６話：『馬鹿は治癒魔法でも治せない』

第六話：馬鹿は治癒魔法でも治せない

俺たち、個人戦に出るラルハイト校の生徒は、学園長に集められていた。
A～Dブロックのどれかによって、大分時間が違うために、どのブロックかは発表されるが、誰と戦うかは直前発表という面倒なシステムのせいだ。
なんでも、対策が練りにくいように、とのこと。
ならブロックも直前に発表しろよって感じだが、
お目当ての選手の時間がしりたい貴族に、昔ねじ込まれたらしい。
やれやれだ。

「第一回戦の相手がケイネスだと!?」
俺は思わず叫んでしまった。

「ああ、そうだ。何かあったのか?」
不思議そうな学園長に事情を説明。

「・・・ちっ、グノーシアめ、なんて馬鹿息子だ。私があとで圧力をかけておく!」
が、学園長!かっこいいよ!

・・・ん?共和国議長に圧力?何者だよ!?

「学園長先生・・・おねがいします」
エリシアがなんか憔悴してた。
・・・まさか、ケイネスに絡まれたのか?

「・・・悪い奴じゃないのかもしれんが、面倒すぎる！
というかエリシア、奴に遭ったのか？」（これは誤字ではありません）

「・・・私のほうが相応しいんだとか、よく分からなかったです・・・」

・・・奴の相手は疲れるよな。

「ちっ、悪いなエリシア・・・あの程度じゃ止まらなかったか・・・」

「おい、アルネア。お前ケイネスとやらに何かしたのか？」
学園長が不穏な響きを聞きつけたのか、聞いてきた。

「まぁ、エリシアに相手がいるということにすれば止まるかなー、と。」

「・・・まさか、大丈夫だと思うが、押し付けてないよな？」
学園長、俺はそんなに無責任じゃないですよ・・・

「無難に俺が相手ということに」

「え！？」
エリシアが驚いて顔を上げた。

「いや、少しはマシになるかと思ったから、エリシアは俺のということにしてしまった。
悪いな。全く効果なかったみたいだ。」
いやー。怒られるかな？
エリシアが真っ赤だ。
怒ってるんじゃなく、恥ずかしがってることを祈っておこう。

「・・・アル、せきにんとってください」

「おう、任せとけ！必ず勝って諦めさせてみせる！」

「・・・ぐすっ」

「アルネア、お前馬鹿か？」
学園長に呆れた目で見られた。
黙って聞いてたリリーも呆れ顔だ。

何ゆえ！？ちゃんと責任とって勝つってば。
・・・完全には治癒させてないしな。
待てよ、そんだけ金持ちなら専属治癒術士とかいそうだな。

「・・まぁいい。アルネア、時間だ、そろそろ行け」

「了解です。んじゃ、エリシア、行ってくる」

「アル・・・勝ってください」

「お兄ちゃん、叩きのめしてあげなさい！」

「おう！」

「さーて、始まりました三国同盟、魔法学校交流大会！
実況・解説は、共和国立・エディメア校3年のリーザス・グレイサスです！」

コロシアムに魔法で拡声した実況が響く。

――――わぁぁぁぁっ

・・・観客はノリノリだ。
はぁ、気が重い。

「さぁぁて！Ａブロック初戦を飾りますは――――――――
共和国の貴公子！ケイネェェェス！グノォーーーシア！」

「「「ケイネス様――――――！」」」

すごい歓声だな。
ま、うらやましくも無いが。

「対するは、実力未知数！皇国筆頭十二貴族の次男にして、
ラルハイト校最強とも言われる白き雷！
アルネアーーーー！フォーーーラスブルグ！」

「「「「アルーーーー頑張れーーーー！」」」」

・・・みんなが声援をくれた。
・・・すごく嬉しかった。

「さぁーーーて！？両選手、なにかコメントはありますか！？」
実況者はそういって、俺たちに拡声魔法をかける。

――――！？なんて面倒なことを！？
案の定、ケイネスが口を開く。

「アルネア殿、確かに私が間違っていた。この交流戦で貴公に勝て

ばいいのだ！
私が勝って、エリシアさんは私が貰う！」

「「「け、ケイネス様――――！？」」」
観客の悲鳴がハンパじゃない。

「・・・いい加減にその口を閉じろ・・・エリシアの相手はエリシアが決める！
しつこいんだよ、お前は！」

「・・・確かにそうだ。だが、私の恋は止められんのだ！」

「おおっと！？まさかの色恋沙汰だぁぁぁ！？
あの貴公子が！信じられません！では、両選手、構え！」

実況が、横からせっつかれて構えの指示をようやく出した。
俺は、＜アウロラ＞と＜シルフィード＞を抜く。

ケイネスは精霊剣の大剣を両手で構えた。
一気に魔力の熱が発生する。

――――＜火＞系統か！

確かに、コイツ無駄に暑苦しいしな。

「――――――試合、開始！」

――――――魔力、全開！

『我と契約せし風の精霊よ！我が魔力を糧に顕現せよ！』

「我が麗しの運命の女神よ！我が魔力によりて顕現せよ！」

『＜シルフィード！＞』

「＜アトロポス！＞」

『シルフ！』

『はい、サクっといっちゃいましょう♪』

「いくぞアトロポス！絶対に勝つ！」

『ふふっ、すべては運命しだいですから。勝てないかもしれないですよ？』

・・・お互いに雰囲気ぶち壊しそうな精霊だった。

が、絶対に負けられないので、消耗は考えない。

シルフィードは完全に実体化し、アトロポスは８割程度。

アポトロスは黒髪に碧眼の美女だった。

・・・シルフィードは迷宮から開放されてから殆ど日数が経ってないため、

魔力の絶対量が少なく、完全に実体化していても、勝てるかは分からない。

『引き付けるは不可視の力！＜マグネティション！＞』

「紅蓮よ、大地を赤く染めよ！＜ヴォルケイティア！＞」

俺は砂鉄を集め、

ケイネスが手を振り、一気にケイネスの前から溶岩の波が飛び出す！

『＜ストーム・ディフェンサー＞、発動です。駆け込みはおやめください♪』

暴風の壁が溶岩を弾く！

俺は砂鉄を上空に集め――――

『集いし鋼鉄の欠片よ！銀雷により弾丸と化せ！＜四源の雷砲（サーマルブラスト）！＞』

銀の隕石と化して襲い掛かる！

『灼熱の運命より、汝、逃れえぬ。消滅せよ！＜ヴァニッシュフレア！＞』
アトロポスの手から凄まじい熱の塊が飛び出し、一瞬で砂鉄を溶かす！

その間に、ケイネスが突っ込んで来た。

「はぁぁぁっ！我が剣を受けろ！＜スマッシュ・ブレイク！＞」

ケイネスが剣技を発動し、高速で突っ込んでくる
俺は、＜アウロラ＞で迎え撃った。

『雷剣！＜スタンブレイカー！＞』

――――ガキィィン！

「――――――ぐぅぅっ！」
「――――――ぐぁぁっ！」

俺は、凄まじい衝撃に顔をゆがめ、
ケイネスは剣の電流に身を焼かれた。

一瞬で離れたが、今のは有効打だったはずだ。

が、ケイネスが再び打ちかかってくる
「うおおっ、＜ディスティア・スラッシュ！＞」
「風巻け烈風！＜風車！＞」
ケイネスの剣が凄まじい輝きを放つが、遅い！
俺は、その場で回転切りを放ち、それと同期してカマイタチが放たれる。
――――――ガガガガキィィィン！
咄嗟に大剣を盾にしたケイネスが弾き飛ばされ、およそ５０メートル吹っ飛び、
ステージ端の壁に激突する。
「――――がはっ！」
シルフが上空で相手の精霊を抑えてくれている。好機！
『天空の神の怒りをその身に受けよ――――！』

『我が剣よ！銀雷によりその身を弾丸と化せぇ――――ッ！』

『＜サンダーブラスター！＞』
『＜銀雷纏いし四源の雷砲（アウロラ・サーマルブラスト）！＞』

俺の左手から雷のレーザーが飛び出し、
＜アウロラ＞が流星と化して襲い掛かる！

――――――ズガァァァン！

ケイネスは煙に埋もれて見えない！

「おおっと！？なんということだ！？もう決着か！？」
実況者はそう言うが・・・まだだ！

『我が風の盟約の剣よ！銀雷によりて、天翔ける雷となり――――』

『虚空を切り裂け！＜　疾風を司る四源の雷砲（シルフィード・サーマルブラスト）！＞』

『――――ケイネスッ！』
アトロポスの悲鳴が聞こえた。

――――――ズガァァァン！

シルフの猛攻を防がず、左腕を犠牲にしたアポトロスが割って入った。

――――くそっ！？やりにくい！

『乱れ飛ぶ雷の矢！＜ガトリング・サンダーアロー！＞』

俺の手から計４８発の雷の矢が放たれ、砂煙を切り裂き、爆発させる。

「な、なんという猛攻だぁぁ！？貴公子は無事なのか！？」

『其は風の旋律――ここに顕現し全てをなぎ払え！＜テンペスティア！＞』
シルフが駄目押しで竜巻を叩き込む。

――――が、

『――――精霊憑依（ユニゾン）』

ケイネスがいた場所から金と赤の光が放たれ、
竜巻を弾き飛ばした。

――――ッ！？

ケイネスが凄まじい速度で突っ込んでくる！？
俺は、咄嗟に＜アイテール＞で迎撃する――――。

――――ガキィィン！キィィン！カァァン！

凄まじい勢いで連続攻撃を放つケイネス。
魔力装甲が凄まじい光を放つ――――。

――――ダメだ！？コレじゃあ攻撃が通らない！？
いくらなんでもおかしい！力と魔力が強過ぎる！
それに・・・斬撃が単調すぎる！？

『ご主人様！その人と精霊は暴走しています！』

『暴走だと！？』

『体のダメージを無視して憑依し続けます！死ぬまで止まりません！』

――――馬鹿野郎！？くそっ、なんて危ないことしやがる！

『止める方法は！？』

『気絶させるか、契約具の破壊、もしくは浄化です！』

こんな剣を破壊するのは無理だ！
つまり気絶！くそっ、無茶振りだ！

『こっちも憑依するか！？』

『ダメです！マナの暴走に巻き込まれます！』

――――――ガキィィィン！

凄まじい一撃が襲い、なんとか防ぐが、骨が折れそうだ！

シルフが詠唱を始める。

俺は、無詠唱マグネティションで＜シルフィード＞を引き寄せ――――

――――ギィィィィン！

――――やはり貫けない！？

背後から当てるが、効かない。

『グガァァァ！』

――――ドガッ

「がはっ！？」

――――ズガァァァン！

俺は、ケイネスの蹴りで弾き飛ばされ、咄嗟に後ろに跳んだが、壁にあたった。
ケイネスが追い討ちをかけようと――――――

『破滅の風！＜イリフィーディア！＞』

詠唱していたシルフの術が発動。
上空から超高密度圧縮をかけられた風の砲弾がケイネスに――――

――――――ドガァァァァァァン！

客席の前に張られたバリアが歪むほどの衝撃が発生した。

――――――だが、

『グガァァァ！』

ケイネスはまだ立っていた。

『そんな！？このままでは・・・！』

――――――くそっ！

俺は、あることを思い出した。

――――――空気がキレイになる。状態異常回復ができそうだな。

――――くそっ！一か八かだ！

俺は、＜アイテール＞に魔力を込める！

『紺碧の空に瞬け銀光！貫け銀雷！清浄なる大気の輝きによりて、邪悪を祓え！

＜アイティール・サーマルブラスト！＞』

雷を流すと、＜アイテール＞は一気に刀身が魔力――――――

いや、マナで包まれ、さらにそのマナが拡張することで光線剣のようになる！

刀身は伸びていないが、マナがダメージを与えるため、これなら長い刀身と同じ――――。

「うぉぉぉおっ！」

＜アイテール＞は銀の閃光となってケイネスに突き進む。

――――――ガキィィィン！

『グガァァァァ！』

『そんな!?受け止めるのですか!?』

ケイネスは、なんと魔力を纏った手で受け止めていた。

『だが・・・想定内だ！』

俺は、＜アイテール＞の能力を信じた。

『あの剣！まさかマナを浄化している!?』

ケイネスを包む、荒れ狂うマナが収まっていく。

『グアァァァ――――あぁぁぁ――――――』

そして、完全にマナは浄化され、ケイネスは倒れ、
役目を果たした＜アイテール＞はそのまま落下した。
はぁ、疲れた。

「な、なんという戦いだぁぁぁぁッ！激闘を制したのは、アルネア・
フォーラスブルグだ！」

『ご主人様、流石です、かっこよかったです♪』

「おう、危なかったけどな・・・」
俺は、魔力をおさめつつ言った。

『はい、どうぞ♪』

「お、ありがと」
シルフが剣を3本回収してくれた。

ケイネスは治療部隊に運ばれていった。
どうやら、介入寸前だったらしく、共和国の騎士団の姿が見えた。

精霊憑依の暴走か・・・

第六話：馬鹿は治癒魔法でも治せない（後書き）

――次回予告！――

♪～～チャラララッ、チャラララ～～

「・・・フードの中ってどうなってるんだろうな？」
「お兄ちゃんだし、中は可愛い女の子じゃないの？」
「アル・・・」
「私は――――――」
「お前は――――――！？」
『あらあら♪』
「うわぁ・・・やばいかも？」

銀雷の魔術士、第七話：『顔を隠した魔術士』

第七話：顔を隠した魔術士

さて、ケイネスの憑依暴走という、壮絶な幕開けとなった交流戦だが、
それは、ただの始まりに過ぎなかった。
観客も、選手も、大会を管理する先生も思った。
今年の一年生は半端じゃない。

俺が優勝候補だったケイネスを撃破したことに加え、
同じAブロックで、実は一年生だった謎のフードの魔術士も全試合圧勝。

Bブロックでは、エリシアが圧倒的な魔力とスピードで無双。
（エリシアの例の翼は半端じゃなかった。マジで3倍速いかもしれない）

Cブロックでは、フィリアと＜シリウス＞が常識外の魔力で無双。
（もう魔力が回復したらしい。恐ろしい精霊剣だ）

Dブロックでは、ローラと神童が無双してるらしい。
（他の試合は見れないのだ。まぁ、他の人に色々聞くのは可能だが）

俺はもう3回戦まで勝利し、次はブロックの決勝だ。
相手は、謎のフード魔術士。

で、今、俺の控え室には客人が来ていた。
まぁ、控え室といっても、イスと机があるくらいなのだが。

「よう、アル。ちょっとデカくなったんじゃないか!?」

「兄さん!兄さんは更に筋肉が増えたね・・・」
そう、リック兄さんが来ていた。
服の上からでも、『俺、鍛えてるゼ?』な感じだ。
だが!兄さんは意外とハンサム!モテモテだったりするのだ!
優しいし、気配りできるし、面白いし。(色々な意味で)

「ふっ、そうか?まぁ、鍛えてるからな。で、何故アルはひょろいんだ?」

「・・・いや、体質?俺だって見かけよりパワーはあるぞ!」

「ははっ、たしかに昔からそうだったな!ところで・・・」

「・・・?どうしたの、兄さん?」

「俺、負けちまったぜ」

「んな・・・!?」

リック兄さんは、こんな人だが・・・こんな人だが・・・こんな人だけど強いのに!?
精霊剣＜ハマル＞の魔力量に加え、卓越した兄さんの魔力制御。
火を使う魔法に関しては、同学年最強と謳われ、
さらにその筋肉は、「ヤツは脳まで筋肉に違いない」と尊敬されるほどなのに!?

「相手は、例の神童だ。見たことのない属性だった。」

に、兄さんが真面目な顔で話すなんて!?
これは驚天動地の重要案件だ・・・!

「見たこともない属性!?＜氷＞とかじゃなく?」

「ああ、違う。が、心当たりはある。おそらく＜闇＞だ」

＜闇＞属性・・・＜光＞の対となる属性か。

「そんなに・・・強かったの?」

「ああ。ヤツの術は速度は無いが、防ぐのも貫くのも至難の技だ」

確かに恐ろしい。だが――――

「ありがとう、兄さん。でもどうしてわざわざ?」

俺がそう聞くと、兄さんは呆れた顔で溜息をついた。

「はぁ・・・、最近会ってねぇから会いに来たんだよ!
アル、お前は鈍過ぎる!俺以上だっ!そのうち女の子を泣かせるぞ!」

「そ、そんな!?兄さんより鈍いなんて・・・」

「うぉっ!?言いやがったな!?」

「だって兄さん、告白されるまで気づかなかったなんてザラだろ!?」

「お前の場合、告白されたことにすら気づいてないんじゃないのか!?」

「んな!?毎週告白される兄さん流の嫌味か!?」

「あれは4月だけだ！というか、アル！お前リリーとエリシアにちゃんと言ったのか！？」

「え？ああ、父さんと母さんに引き取ってもらった事なら言ったけど？」

「そうか、ならいい。で、リリーはなんか言ってなかったのか？」

「へ、なんか伝言？届いてないけど」

「・・・そうか。リリーもエリシアも大変だな。」

「・・・兄さん、ハッキリ言わないと伝わらないこともあるんだよ？」

「・・・言えないこともあるんだよ！ええぇ、まあいい。頑張れよ、アル！」

そういって兄さんは去っていった。

・・・なんか分からないが、そろそろ試合だ。準備しよう。

俺は、剣を腰につけ、試合を待った。

「さぁぁぁて！Ａブロックもいよいよ大詰め！
これに勝ったほうが、明日の個人戦準決勝に進出だぁぁぁ！」

「「「わぁぁぁぁぁ！」」」

「そしてここまで勝ち上がった選手をご紹介しよう！
まずは、白い雷使いと評判でしたが、第１戦では銀の雷で会場を驚かせました！
２戦目、３戦目では確かに白い雷でしたが・・・さて、あれは見間違いだったのか、
それとも・・・！？
投げる剣は流星と化し、砂鉄を自在に操る、風の精霊使い！
銀雷の魔術士・・・！アルネア――ッ、フォ――ラスブルグゥ――ッ！」

俺は、名前を呼ばれて入場した。どうでもいいが、格闘技の試合み

たいだな。
そして、大歓声に包まれた。

「「「わぁぁぁぁぁぁ！」」」

「お兄ちゃーーーん！頑張れーーー！」
「アルーーー頑張れーーー！」
「アルさーーーん、頑張ってください！」
「アル、負けんなよ！」

リリーにジョン、エリスに兄さんの声が確かに聞こえた。
聞こえた方に軽く手を振っておく。
俺が手を振ったときに黄色い歓声が聞こえた気がするが、気のせいだろう。

「さぁぁぁて、対するはフードを被った王国出身の生徒！
フードを被った謎の人物！
ここまでの試合は全て魔法を使わず、剣だけで倒してしまったまさかの剣士！
魔法は使わないのか使えないのか？
ノエルゥゥゥ――――、アルヴェリシア――――ッ！」

反対側から、体格も隠すフード付きローブを被った、小柄な人物が入場。

再び歓声が轟いた。
・・・名前的に女の子なのか？

「さぁて！このフードの魔術士の本気が遂に見られるのか！？両選手、構え！」

俺は、＜アウロラ＞と＜シルフィード＞を抜き放ち、構えた。
今初めて聞いたが、剣だけで勝ち上がるなど並大抵ではない。
というか、普通の剣なら無理だ。

俺は、フードの少女？ノエルが青い長剣を抜くのを見て、直感が正しかったのを悟った。
剣の周りに魔力を纏っている。

――――精霊剣！

魔力の感じから、恐らくは水系統の属性！

「――――――試合、開始っ！」

試合開始の合図を聞き、俺は目を疑った。
ノエルが地面を蹴り、凄まじい勢いで突っ込んでくる！
凄まじい魔力装甲を纏っている。
彼女は剣を振り上げ――――

――――――ガキィィィン！

――――ズサァァァ

凄まじい威力の剣に、俺の腕がしびれ、後ろに吹き飛ばされる。

――――これは、エリシアと同じレベルのパワー！

人間の斬撃の威力とは思えない！
考えられるのは三つ。
魔力を体に流すことで身体能力を強化する達人か、
身体能力を強化する特殊な魔術の使い手、
もしくは・・・人間ではない。

ノエルは、その斬撃を防いだ俺に驚いて攻撃の手を休めたりはして

くれなかった。
再び地面を蹴り、その長剣で突きを放ってくる――――！

――――ガキィィン！

俺は、＜アウロラ＞で突きを振り払い、＜シルフィード＞で横なぎに斬撃を放つ。

が、ノエルは華麗に後ろに跳んで、難なく回避した。

「うわぁ・・・やばいかも？なんて身体能力だよ・・・」

『ご主人様、巧く撹乱されてます。人間かどうかは不明です』
先ほどから黙っていたシルフだが、どうやら調べてくれていたらしい。
まったく気が利くやつだよ。

「そうか、シルフ、風であのフードをなんとか出来ないのか？」

『あらあら、お顔が気になるのですか♪』

「・・・すごく語弊のある言い方だな。隠すのに意味があると思うだけだ・・・っと！？」

再びノエルが突っ込んでくる。
が、今度は、高く掲げた剣が輝き――――

『＜グランドスマッシュ！＞』

「くっ！？＜疾風迅雷！＞」

ノエルの長剣が青い光と共に、ありえない勢いで振り下ろされる！
俺も剣技を発動し、二本の剣を同時に左下から右上に超高速で振り上げ、迎撃――――

――――――ガキャァッァン！

俺は、ノエルの剣の腹を超高速で打ち抜き、俺から見て右に逸らさせることに成功。

・・・ノエルの剣があたった地面がひび割れ、大変な感じになっている。

「あぶな！？死ぬぞ！」

俺は袈裟切りに剣を振り下ろして反撃しつつ、思わず文句を言った。

『・・・これくらいなら防ぐと思いました』

ノエルは、再び後ろに跳んでかわしつつ、言った。

・・・鈴が鳴るような声だった。

まぁ、魔声だけど、魔声と地声って、何故か似るんだよ?

「お褒めにあずかり光栄だが、君は強過ぎないか?」

『貴方もでしょう。全く本気に感じられないですし』

・・・確かにそうだが、俺って一応、実力は隠してるつもりなんだぞ?

「剣の威力がおかしい上に、本気じゃない君には言われたくないんだが・・・」

そう、ノエルは全く本気じゃない。

ひしひしと伝わってくる。

『そうでしょうか?その剣を防ぐ貴方も底が知れませんが?』

「受け流してるだけさ。腕がしびれて痛いんだぞ？」

『冗談を言う余裕まであるではないですか。それにその精霊剣・・・何者です？』

ノエルは、恐らく＜シルフィード＞を見て言った。
まぁ、確かにシルフはなんだか不思議な雰囲気を纏っている。
が、俺もわかんないので説明しようがない。

「・・・シルフは自称、風の精霊だよ」

『まぁ、自称って付くと急に怪しい存在感ですね♪』
シルフは楽しそうに言った。

『・・・そのシルフさんもそうですが、貴方は何者なのですか？』

「俺か？・・・・そうだな、ただのアルネア・フォーラスブルグだよ」

『・・・ふふっ、そういえば私が先に名乗るべきでしたでしょうか。私は――――――』

そう言って、ノエルはフードを取った。

「お前は――――――!?」

ノエルは大人びた顔――――
正直、絶世の美女だ――――
白い肌に、輝くような金髪に、透き通った碧の瞳。
だが、最も目を引くのは、露わになった、その長い耳だった。

第七話：顔を隠した魔術士（後書き）

――次回予告！――

♪～～チャラララッ、チャラララ～～

「改めて名乗りましょう、私は碧のエルフ族、ノエル・アルヴェリシア！」

「・・・本当の親は知らない。だが、俺は、皇国十二家の、アルネア・フォーラスブルグだ！」

「貴方は確かに強い。ですが！私の剣についてこられますか！？」

「くそっ、シルフ！」

『私も、本気でいきましょうか♪』

「出でよ、我が盟約の精霊！」

「碧き斬撃は全てを切り裂く――――！」

「その身を銀雷と化し、貫け――――！」

次回、銀雷の魔術士、第八話『碧の斬撃』

第八話：碧の斬撃

ノエルは大人びた顔――――
正直、絶世の美女だ――――
白い肌に、輝くような金髪に、透き通った碧の瞳。
だが、最も目を引くのは、露わになった、その長い耳だった。

「お前は――――エルフなのか!?」

「そうですね。失望しましたか？」
ノエルは、自嘲するように、薄く笑った。

「・・・？何の事だ、驚いただけだが？」

「・・・異種族には排他的なのが人間だと聞きましたが？」

なるほど。
確かに、自分たちよりはるかに強力な個体能力をもつ異種族を恐れる人間も多い。
でも、俺の周りってあんな感じだしなぁ・・・

「そうなのか？俺は人間が嫌われてるのかと思ってたが」

「なるほど、そういう見方もあります。どちらが先だったのでしょうね？」

人間が自分より強力な異種族に怖れを抱いたのが先か、
それとも、脆弱な人間が見下されたのが先か・・・？

「う～ん、深遠なテーマだな。だけど、君を見てると人間の方が悪かったかな？」

「貴方を見ていると、こちらの方に非がある気がいたしますが？」

「あ、これはどうも」

「いえいえ」

「・・・あれ、俺たち何してたんだっけ？」

「ああ、試合でしたね。それでは、
改めて名乗りましょう。私は碧のエルフ族、ノエル・リーヴェルシア！」

む、これって名乗り返さないといけないんじゃないか？
どう名乗ったものかな？何者かってさっき聞かれたし・・・

「俺は、本当の親を知らない。だが俺は、皇国十二家の、アルネア・フォーラスブルグだ！」

「・・・すみません、失礼なことを聞きました」
ノエルは若干気まずそう。

「いや、気にしなくていいよ。父さんも母さんもすごいいい人だし」

「そうですか？それじゃあいきますよ？」

「オッケー！」
なんだか気の抜けた問答だが、ノエルの魔力は尋常ではない。
確かに人間なんて目じゃないだろうな。

「貴方は確かに強い。しかし！
私の精霊剣＜エウノミア＞についてこられますか？」

「買い被られても困るんだが・・・全力は尽くす！」

――――ノエルの魔力が一気に高まり、瞳の碧がいっそう輝く。

もう、出し惜しみはできないな。

――魔力、全開！

この距離なら剣で――――
お、アタックチャーンス！
ノエルが驚いた声をあげる。
「――――銀の瞳！？」

『いくぞ、＜疾風剣！＞』

俺が振りぬいた＜シルフィード＞から風の刃――――
以前にビックボアに弾かれたヤツだが、シルフと契約したことで、
刃が大きくなり、威力も上がり、速度も上昇している。

ノエルが＜エウノミア＞で切り上げ、上に逸らすが、隙が大きくなる。
ここだ――――！

『＜疾風迅雷！＞』

俺は、一気に距離を詰めて、風と雷の双剣を、猛烈な勢いで左右から振り下ろす。

――――が、ノエルはすばらしい動きで体勢を整え、受け止めて――――

――――ガキィィン！

――――バチバチバチッ！

「――――くううっ！？」

「――――うおおおおっ！」

俺は、渾身の魔力で電撃を流し、魔力装甲を透過してダメージを与える。

が、ノエルも流石の魔力操作で、ダメージを最小限に抑え――――

「――――せいっ！」

「――――ちぃっ！」

その凄まじい筋力で、俺は宙に浮いたまま後方に弾きとばされ――
――

ノエルがその碧い剣を振りかぶる。

「今度は私の番です！＜ソニック・レイン！＞」

「――――――んなっ！？」

ノエルが振った＜エウノミア＞から、雨の如く無数の碧い斬撃が放たれる――――！
一つ一つが細い針のようになり、無数にあるそれらの迎撃は至難の技――――！

「くそっ、＜風車！＞」

俺は、空中で回転切りを放ち、連動するカマイタチで迎撃し――――――

――――キキキィィィン！

「――――がはっ！？」

俺のカマイタチは全て貫通され、しかし流石に剣は貫通されなかったので、
咄嗟に剣の軌道を修正して致命傷は避けたが、
俺の右足が二箇所、左足が一箇所、わき腹を一箇所貫かれた。

――――ズサァァァ

なんとか軟着陸すると、間髪いれずに――――

『――――ご主人様！』
シルフの焦った声が聞こえる。
ノエルが俺の隙を見逃さずに切り込んできたのだ。

「――――＜マグネティション！＞」

俺は、砂鉄を集め、壁を作る。

「甘いですよ！＜メイルシュトローム！＞」

ノエルが剣を一閃させ、その軌跡をなぞるように碧い斬撃が現れる。
その碧い斬撃は、まるで砂鉄の壁など存在しないかのように、切り

裂く。

『ご主人様！あれは＜シルフィード＞の耐久では防げません！破壊されます！』

「――――んな！？＜ウイング！＞」

咄嗟に俺は上空に飛び上がって回避。
碧い斬撃は、そのまま壁に向かって行き――――

――――ドガァァァン！

コロシアムの壁は、先生たちが張った魔力壁でガードされていたにも関わらず、
壁が一部抉り取られた。

「・・・・嘘だろおい。」
俺は思わず嘆息した。勝てるのかよ？

「飛行魔法とは・・・さすがですね。」

ノエルがこちらを見上げつつ言った。
ちなみに、コロシアムの上空は、ある程度いくとバリヤで塞がれているので、
高高度から一方的な攻撃等はできない。

「・・・シルフ、あいつと戦って勝てるか？」

『微妙ですね。あちらも精霊がいるようですし』

「・・・頼まれてくれるか？」

『ふふっ、もちろんです。私も、本気でいきましょうか♪』

『奏でるは疾風の唄、顕現せよ風の精霊！＜シルフィード！＞』

俺は、常以上に魔力を込めてシルフィードを召還。
それと同時に、ノエルも召還を開始していた。

『出でよ、我が盟約の精霊！秩序を司る者よ！＜エウノミア！＞』

俺の前に、シルフィードが実体化し、
ノエルの前に、水色の髪、青い花を手にした女神が実体化する。

「・・・貴方は本当に底が知れないですね。精霊を完全に実体化させるなんて・・・」

「いや、ノエルも完全に実体化させてるだろ？」

「・・・そうですね。失礼な事を・・・なんとおわびしてよいか・・・」

「あ、いやいや。そんなに気にしなくても！」

「・・・そうですか？ありがとうございます」

・・・なんか空気が独特だよな。
エルフの特性なのかノエルの性格なのか・・・

まぁ、無詠唱リヴァイブで治癒してる俺としては大いに助かる。
大分傷も塞がった。・・・すさまじい魔力攻撃だったので、痛みが酷いが。

『ふふっ、ラッキーですね♪』

「そうだなー」

「・・・はっ!?私たちは試合中ではなかったでしょうか?」

「おお~!そうだったな~!」

『白々しいですね♪』

「それでは、エウノミア、行きますよ!」
ノエルが一気に駆け出して距離を詰めようと――――――

『ノエル?争いはダメですよ?』
エウノミアに窘められて、こけた。

――――ズサァァァ

見事なヘッドスライディング。
まぁ、その気持ちは分かる。

・・・なんか、深刻な試合のはずだったんだけどなー。

と、ノエルが立ち上がり、砂を払ってから気を取り直して説得にむかう。

「・・・エウノミア、これは争いではなく、互いの力を競い合うものなのです」

『競い合っても何物も生まれません。競い合うより愛し合うべきです』

「・・・友好のための試合なのですが？」

『ダメです。戦いは秩序を守る為にするべきです。却下します』

そう言ってエウノミアは消えた。

「・・・」

ノエルの背中が悲しそうだった。
精霊って、気難しいんだな・・・
俺は、シルフっていいやつだと再確認した。

「ノエル、俺が悪かった！一対一でやろう、正々堂々と！」

「・・・私は自分が情けなくて涙が出そうなのですが」

『まぁまぁ、一対一のほうが案外いいかもしれませんよ？』

「・・・わかりました。ですがこの恩はいつか返させていただきます」

「・・・まぁ、いいけど」

『それではご主人様、頑張ってください♪』

シルフはにっこり笑って消えた。

よし、こう、気を取り直していこう。

「え～、ゴホン。いくぞノエル！こいつを受けきれるか――――！？」

「――――私の斬撃に切り裂けぬ物などありません！」

俺は、さっきの＜マグネティション＞で集めてあった砂鉄を再び引き寄せる。

ノエルは、圧倒的な魔力をその剣に込める。

『その身を銀雷と化し、貫け――――！＜微細なる四源の雷砲（マニュートネス・サーマルブラスト）＞！』

『碧き斬撃は全てを切り裂く――――！＜メイルシュトローム！＞』

俺は、目も眩むばかりの銀の流星群を生み出して攻撃し、
ノエルは左から右へ凄まじい勢いで剣を振り、碧い斬撃を生み出す。

――――ギギギギィィィィン！

碧い斬撃は銀の流星をも容易く切り裂いた。

――――だが、俺の狙いはそこじゃない。

「――――そんな！？」

俺は、銀の流星群で、視覚と魔力の探知を狂わせ、一気に急降下してから、
地上すれすれを飛び、ノエルに肉薄していた。

『うおぉぉぉぉ！＜疾風迅雷！＞』

『――――まだです！』

読みが甘かった。

メイルシュトロームの意味は渦巻き。
ノエルは体勢を崩しつつも、振りぬいた剣の勢いそのままに回転し、
俺の＜風車＞と同じように、碧い斬撃が全方位に放たれ――――

――――――キィィィン！

「・・・そんな・・・」

「・・・あぶね」

俺の＜シルフィード＞がノエルの首に突きつけられ、
碧い斬撃は辛うじて＜アウロラ＞が受け止めていた。
右腕の骨が折れたかもしれん・・・
ノエルの体勢が崩れてなかったら、真っ二つにされてたな。

「――――――試合終了！勝者、アルネア・フォーラスブルグ！」

シルフは、＜シルフィード＞だと破壊されるとは言ったが、
別に＜アウロラ＞がダメとは言ってない。
一か八か、ミスリル製に賭けてみた。
まぁ、一回転して攻撃してくるのは完全に予想外で、死に物狂いだったが。

「・・・私の負けですね。剣ごと斬るつもりだったのですが・・・」

ノエルは、信じられないといった風情だ。
おそらく、今まで切れなかった物などなかったのだろう。

「あ～、これミスリル製らしいから」

「ミ、ミスリル！？」

エルフのノエルすら驚くとは。
この世界だとミスリルってレアなのかな？
いや、人間が持ってるからか？

「まぁ、ノエル。いい勝負だった。またいつか勝負しような」

「・・・アルネアさん、チーム戦も軍団戦もありますよ」

「・・・あ」

「次は負けませんよ」

「なら、次こそは武器の性能じゃなく、技で勝ってやる！」

「なら私は今度こそ、その剣ごと切り裂いてみせます」

「ふふっ、楽しみにしてるよ！じゃあなノエル！」

「ええ、ではまた」

アルネアが去った後、ノエルは一人、呟いた。

「ただのミスリルなら、あの斬撃を防げるはずがない・・・あの剣は一体・・・？」

第八話：碧の斬撃（後書き）

「よーし、ノエルに勝ったぞー！」
「お兄ちゃん、随分あっけなくなかった？」
「リリー、最後が武器だよりだったから、そう見えるだけです。すごい戦いだったんですよ？」

「武器だより言うな！おっと、次回予告しないと！」

――次回予告！――

♪～～チャラララッ、チャラララ～～

「・・・はぁ、エリシアと戦うことになるとは」
「アル、本気でいきます――」
「＜スタンブレイク！＞」
「手を抜いてるんじゃなく、やりにくいんだよ！」
「アルなら防ぐって信じてますから、容赦なんてしません！」
「「白き雷よ、虚空を切り裂け！＜サンダーボルト！＞」」

次回、銀雷の魔術士第九話『焔翼と銀雷』？

第九話：決別の夜

俺は、ノエルに勝利し、Aブロックで優勝した。
Bブロックの優勝者はエリシア。
Cブロックはフィリア。
Dブロックは神童こと、ギニアス・オーランドがローラに勝った。

「そっか、ローラ、ケガとかは大丈夫か？」

俺は、夕方、宿の庭でローラに会った。

「・・・うん、平気。アルも、戦うことがあったら気をつけて」

「ああ、大丈夫だよ。俺は強いぞ？」

「ふふっ、そうね」
ほんのり笑ったローラは、とても可愛かった。

「なぁ、ローラ。笑ってたほうが可愛いよ」

「・・・そう？」

「そうそう」

「・・・がんばってみる」

「自然に笑えるのがいいんだけどな・・・でも、笑いに慣れるのも大切か・・・」

「・・・あ、リリーに呼ばれてたんだった」

「あ、そうなのか？じゃ、またな」

「うん、またね」

そう言うと、ローラはぎこちなく笑って扉の方へ去っていった。

「アルはやさしいですよね」

「そうか？エリシアの方が優しい気がするけど」

俺は、いつの間にか右に立っていたエリシアに振り返りつつ言った。

と、何故かエリシアは、本来の白髪に赤瞳だった。

「アルは自分の評価が低いです」

「・・・そうか？まぁ、過大評価はしないことにしてるが」

エリシアは、すごく難しそうな顔をしている。
むぅ、せっかくの可愛い顔が・・・

「へい、スマーイル！笑った方が可愛いぞ！」
そういいつつ、エリシアのほっぺを軽く引っ張る。
・・・やばい、やみつきになるかもしれん。

「・・・あふ～、いはひへふ～」

エリシアが何か言ったが、聞き取れない。
仕方ない、離すか。

「・・・・アル、痛いです」

「・・・ごめん」
調子に乗り過ぎた・・・

「とにかく、アルは自分を過小評価です。・・・その、アルはかっこいいんですよ？」

エリシアは、顔を赤くしつつも、俺と目をあわせて言った。

「・・・こんな性格でもか？」

「そうです。むしろアルは楽しいと思います」

「そっか」

俺は、適当にごまかそうと思ったが、エリシアの瞳は、俺の目をとらえて離してさない。
透き通った瞳は、何もかも見通すような気がした。

「アル、何を隠してるんです？」

エリシアが一歩、俺に詰め寄る。俺は、思わず一歩下がった。

「え、まさかエリシアのお菓子を盗み食いしたのがバレた？」

「そんなのとっくに知ってます」

「・・・まじで？」

「・・・アルは、自分がすごく弱くてどうしようもないと思ってないです？」

エリシアが更に一歩詰め寄る。俺は一歩下がるが、背中が壁にあたった。

「・・・実際、俺は何もできてないからな」

俺は、あの時、自分の命を犠牲にしなければ、彼女を守れなかったし、

あの後どうなったのか知りもしない。

知りたいと思ってすらいないんだ。

俺は、そんな情けないヤツなんだよ。

「アルは・・・アルは二回も私を助けてくれました」

「一回目はまぐれだし、二回目は俺が無茶したのがそもそもの原因だよ。

それに、どっちもエリシアは酷い目にあってる」

「・・・やっぱり、そういうふうに思ってたんですね」
エリシアは悲しそうに目を伏せた。

「・・・何かを守れない力に意味があるとは思えないんだ」

「アルは、強いです。今、私は生きています。
私は、アルに守ってもらいました。
確かに、今ここにある事実です。
それでも、自分を認められないんですか・・・？」

エリシアが更に一歩前に出て、俺の顔を至近距離で見上げた。

「・・・ごめんな」

俺は、肯定も否定も出来なかった。

そんな俺に、エリシアは決然とした表情で――――

『・・・アルネア・フォーラスブルグ。

故郷を失った身ですが、私は貴方に決闘を申し込みます。
私は白の竜族皇女、エルシフィア・ハイラルディア・・・
私の魂とこの全てを懸けて戦うことをここに盟約いたします』

そう言って、エリシアは俺にそっとキスした。

「・・・エリ・・・シア？」

『決闘において手を抜くような事は、私の魂に対する侮辱です。
アルネア・フォーラスブルグ、私が勝ったら私は貴方の前から去ります』

『自分すら救えぬ人間などに、他人が救えるなどというのは、単なる幻想です。
それを私が証明します。今の貴方に私は倒せません』

『・・・きっとこれが最期です。今までありがとう。さようなら、アル』

エリシアは、その白い焔でできたような翼を広げ、一瞬で飛び去った。

「――――エリシア！？」

俺には、何も出来なかった。

俺は、間違えたのだろうか？

また？

エリシアは本気だ。

俺に、勝てるのか？

負けてまた失うのか？

もう何も失いたくなかった。

俺は、自分の為じゃなく、誰かの為だけに力が欲しいと、この世界で思った。

俺は、逃げてたのかな？

大切なものほど、失うのは怖いから。

きっと、前世のアイツもすごく悲しんだから。

今度こそ、全て守る力が欲しいと願った。

でもそれは、俺にその力が無いと知っていたから願ったんだ。

誰かが死んで悲しむのも、悲しませるのも、もう嫌だったんだ。

「ちくしょう、何で、俺は・・・」

俺の目から、透明な雫が一粒落ちた。

第九話：決別の夜（後書き）

次回、銀雷の魔術士、第十話『決闘』

第十話：決闘

結局、エリシアはどこかに行ったまま、朝になっても帰らなかった。
恐らく、俺に会わないためだろう。

・・・もうすぐ試合だ。

俺は、＜アウロラ＞、＜シルフィード＞、＜アイテール＞を装備し、
広いとは言えない控え室の天井を見上げ、立ち上がった。

何の為に戦うのが正しいのか？

結局、答えは見つからなかった。

「さぁて！交流戦、個人戦部門もついに準決勝！

なんと！両者皇国出身にして、兄妹対決！

まずは、貴公子とエルフを退けた銀の雷！

アルネア――ッ、フォ――ラスブルグゥ――ッ！」

俺が入場し、会場に歓声が轟く。

だが、俺は反対側の入り口を見据えた。

「ここまでの試合は全て瞬殺！焔翼の魔術士！

エリシアァァ――――、フォ――ラスブルグゥ――ッ！」

白い髪に赤い瞳のエリシアが入場した。

ある程度の距離をとり、フィールドの真ん中で向かい合った。

・・・話しかけたかったが、おそらくは無駄なことなのだろう。

エリシアの何も浮かべてはいない瞳と目を合わせ、開始の合図を待った。

「両者、構え！」

俺は、＜アウロラ＞と＜シルフィード＞抜き、構えた。
・・・あ、シルフに何も言ってないじゃん・・・

『シルフ、ちょっといいか？』

『・・・大丈夫ですよ、聞いていました』

『・・・なにゆえ？』

『エリシアさんは魔声を使っていましたから。魔力の刺激で起きました。
ご存知でしょうが、決闘に召還は違反ですからね』

『・・・ああ』

『・・・私は何も言えませんが、勝てばいいんじゃないですか？』

『・・・そうだな』

「――――試合、開始！」

――――魔力全開。

『＜サンダーボルト！＞』

『撹乱結界、＜蜃気楼＞』

俺の手から銀の雷が放たれるが、エリシアの姿がゆがみ、消えた。

――――んな！？

俺は、咄嗟に魔力探知と視覚の両方でエリシアを探すが――――

――――バキッ

「――――ガハッ！？」

――――ガキィィィン！

突如、目の前に現れたエリシアに腹を思い切り蹴飛ばされ、
一気に端まで吹き飛ばされ、結界に弾かれ、落ちた。

『・・・そんなものですか？死にますよ？』

剣すら抜いていないエリシアが冷たく言い放つ。

速い・・・ノエルよりも。

無詠唱リヴァイブで一気に治癒しつつ、俺は立ち上がった。

『まだだ・・・地を駆けろ雷！＜アース・サンダークラッシュ！＞』

俺は＜アウロラ＞を地面に突き刺し、そこから一気に銀の雷が会場中の地面を駆ける。

『燃えろ、＜ヴォルケイン！＞』

エリシアが手を振ると、一気に白い溶岩が噴出し、雷を飲み込む。

・・・白い溶岩って何だよ。

溶岩の勢いは一向に衰えず、一気にこちらに押し寄せる。

『風巻け疾風、奏でるは破壊の唄！＜ハリケーン！＞』

竜巻が溶岩を巻き込みつつ、一気に――――

――――ガキィィン！

再び、エリシアが気配を消して、今度は右から接近し、
今度は＜エルディル＞で突きを放ってきていた。
俺は、なんとか察知し、＜アウロラ＞で切り払った。
そして、＜シルフィード＞で反撃――――

――――エリシアに斬り付けるのか？

――――手を抜けば死ぬぞ。竜族が魂を賭けて挑んだ決闘を侮辱するのは許されない。

――――それでも、俺は――――ッ！

俺は、シルフィードの腹で打撃を放った。

が、エリシアは魔力を纏った拳で迎撃する。

――――――ガキィィン！

「――――――ぐっ！？」

俺の左手が痺れ、＜シルフィード＞は、壁際まで弾き飛ばされる。

『アルネア・フォーラスブルグ・・・！
貴方は私如きに本気を出す気はないと？
私にそんな価値などないと言うのですか・・・！？』

『うるさい馬鹿！本気で戦えると思ったほうが馬鹿にしてるな！
勝てばいいんだろ！勝手にやらせろ！』

『・・・そうですか、なら本気でなくば、今度こそ死にますよ』

『全く本気じゃないエリシアには言われたくないな！』

『・・・＜エナジーブラスト！＞』

『――――！？＜サンダーブラスト！＞』

エリシアの手が白く輝き、純粋な魔力の塊が放たれた。

俺のサンダーブラストを一瞬で飲み込み――――

――――ドガァァァン！

「――――うぐっ！？」

俺の腹に直撃し、俺は、再び結界まで吹き飛ばされた。

「――――ガハッ」

内臓がやられたのか、口から血が飛び出した。

俺は、なんとか無詠唱リヴァイブで回復を図るが、
エリシアが膨大な魔力を集めていた。

『全てを滅し、全てを生み出す始祖の焔、此処に顕現せよ！＜イクリプス！＞』

エリシアの前に、ありえない魔力の塊が出現し、こちらに物凄い勢いで向かってきた。
あんなのが直撃すれば、跡形も無く消し飛ぶだろう。

『我が盟約の剣よ！銀雷によりて、天翔ける雷となり――――』

『虚空を切り裂け！＜　四源の雷砲（サーマルブラスト）！＞』

俺は、咄嗟に＜アイテール＞も抜き、一気に三つの＜サーマルブラスト＞を発動させた。

『＜ヴォルカニック・アロー！＞』

――――――ドガァァァン！

俺は、再び壁に叩きつけられた。
息が詰まる。
・・・腹が熱い。
左手の感覚が無かった。

術同士の激突で押し負けて吹き飛ばされ、
エリシアが時間差で放った、焔の矢を防げず、俺の腹に風穴が開いていた。

だが、まだ・・・まだ、まだ戦える・・・

試合を止められては敵わない、見かけだけ完全に傷を治癒する。
立ち上がるのもままならないが、絶対に諦めたくなかった。

が、エリシアが再び魔力を集めていた。
このままだと、これの繰り返しで負ける・・・

幸い、剣は3つとも俺のすぐ近くに落ちていた。
辛うじて動くまでに回復した左手も使って、集めた。

『――――――ッ、＜イクリプスッ！＞』

どこか苦しそうなエリシアの声が聞こえた。

眩い白い焔が見えた。

こんな左腕じゃあ、＜サーマルブラスト＞は使えない。
なにか、手はないか・・・

――――ない。このままだと死ぬ。

――――なんだ？全てを守るのではなかったのか？

――――・・・俺が間違ってたよ。結局、俺は自分のことしか考えてなかった。
自分が傷つきたくなかったんだ。

――――そうか、ならどうするのだ?諦めるのか?

――――俺は・・・すぐには無理かもしれないけど、きっと俺自身も・・・

――――なら、この決闘は負けられないな?
私が力を貸しても微妙だろうが、特別サービスだ。
貴様の魂とあの者の魂。どちらが強固なものか見せてみろ・・・!

コロシアムに極光が煌き、俺は、再び立ち上がった。

第十一話：決着

俺は、再び立ち上がった。
俺の周囲にオーロラが生まれ、俺の傷が一気に治癒する。
・・・だが、この状態が長く続くと、反動で体にダメージがある。

一瞬、先にエリシアに謝ろうかと思ったが、諦めた。
竜族の誓いは、破られることは決してないと言われる。

だから、エリシアは――――

俺は、勝たないといけない。

でも、俺は先ほど言ったことを撤回する気などない。

俺は、こちらに迫る＜イクリプス＞を見やり――――

オーロラを纏う＜アウロラ＞を軽く振って、消し飛ばした。

俺は、エリシアにむかって駆け出した。

エリシアは、油断無く剣を構え、魔力を集める。

『＜エンシェント・ホーリーフレア！＞』

『サンダー・ハリケーン！』

エリシアの手から、さっきまでとはケタ違いの威力の焔が放たれ、俺は、自分の周囲に雷の竜巻をおこして、なんとか防ぐ。が、すこし反動で後ろに戻され、砂煙で視界が悪くなる。

剣を振って、砂煙を吹き飛ばした俺は、再び接近しようと――――

エリシアの魔力が一気に輝きを増した。

――――来る、エリシアの全力が。

俺も、魔力を集め、迎撃する。

『天と空の境界より出でよ！煌け極光の障壁！＜オーロラフィールド！＞』

『天空にて輝くは創造の焔！ここに顕現せよ！＜イミテーション・ノヴァ！＞』

――

私は、アルが好きだったから。

あれだけ痛めつけておいて、勝手な話だ。

アルは自分を過小評価しすぎてる。

まるで、自分が好かれるような人間じゃないと思ってるみたいだった。

何か、自分の弱さを悔いている？

アルは強いのに。

だから、私は誓約で自分を縛り、本気で戦う。

こんな私でも、竜の端くれなのだから、
私に勝ったら、アルも少しは自信を・・・・

・・・無理そうな気がするけど、
でも、このまま自分を認めないままだと、アルは幸せにはなれないかもしれない。

アルは頭もいいし、私のことも、家族として大切に思ってくれてるとは思う。
・・・たぶん。

もし私がいなくなって、アルが悲しんだら申し訳ないけれど・・・
アルなら、きっと同じ間違いはしない。

自分を救えなければ他人も救えないという言葉の意味も、きっと分かってくれる。

・・・アルが幸せになれる可能性があるなら、どんな可能性でも賭けるべきだと思った。

でも、今は少し後悔してる。

誓った以上は、私が勝ったらアルの前から去らないといけない。

それに、こんな恩知らずな私なんて、嫌われてしまうだろう。

アルがアル自身を認められないのが、すごく悲しくて。

思わず誓ってしまった。

・・・アルのことになると、私は間違いばかりだ。

『天と空の境界より出でよ！煌け極光の障壁！＜オーロラフィールド！＞』

『天空にて輝くは創造の焔！ここに顕現せよ！＜イミテーション・ノヴァ！＞』

俺の周囲に、オーロラが出現し、
エリシアの手から、今までで最大の白き焔の球が放たれ――――

俺は、その中に無理やり突っ込んだ。

――――――――ドガァァァァァン！

――――――カキィィィン！

俺の接近をエリシアが感知し、＜エルディル＞で迎撃したが、
俺は、＜アウロラ＞で受け止め、
＜アイテール＞をエリシアの首筋に触れそうで触れない感じに突きつけた。

「・・・私の負けです。負けた以上は勝者に従います。
好きに処分してください」

エリシアは、無表情で言った。
が、何かを恐れてるようにも見えた。

まぁ、俺が何を言うかは決まってるんだが。

「ごめんなエリシア。心配かけて。」

「・・・ア・・ル？」

「エリシアの言うとおりだよ。自分も救えないやつに他人は救えない。
ごめんな、辛い思いをさせて。
だからさ、もし良かったら、やり直しのチャンスをくれないかな？」

「・・・いいん・・・ですか？」

「ん？」

「私なんかが・・・アルと一緒にいてもいいんですか？」

「当たり前というか、こっちのセリフなんだが」

「――――――アルっ！」

「うおっとっと！？」

エリシアに抱きつかれて泣かれてしまった。

・・・ホントに悪いことをした。

多分、エリシアが俺を殺す気だったら、とっくに死んでた。
まぁ、本気ではあったから、かなり痛かったが・・・

「・・・というか、やけに静かだが・・・実況とかしてなかったか？」

俺の素朴な疑問に、ようやく泣き止んだエリシアが答えた。

「撹乱結界を張っているので、外からは私たちが睨み合ってるように見えます」

「・・・じゃあ試合どうする？」

「そうですね・・・じゃあ、合図で結界を解くので、適当に私の剣を弾いて下さい」

「おーけー」

「せーのっ」

――――――カキィィィン！

「な、なんということだーーー！？一瞬で決着がついたぞーーー！？全く見えませんでした！が、勝者、アルネア・フォーラスブルグ！」

こうして、俺は個人戦、決勝に進出した。

・・・のだが。

「・・・・う、動けん」

俺は、宿屋の自室のベッドに横たわっていた。

オーロラ状態　（仮）の反動が洒落にならなかったのが原因だ。

エリシアの最後の術も半端じゃなかったし。

アレは、実は防ぎきれなかった。無理やり突っ切ったし。

正直、精霊憑依よりキツイかも・・・

今回は何度もダメージ受けて、無理やり回復したし・・・

・・・3日は起き上がれる気がしない。

個人戦が終わった後に、3日休息を入れるチーム戦はまだしも、

明日の個人戦決勝には絶対間に合わない。

「・・・どうしたものか」

――――――コンコン

・・・寝たふりをしておこう。

――――――ガチャ

「おい、俺は寝てるんだぞ！？」

「寝ているなら返事はないです」

エリシアが勝手に入って来た。

むぅ、エリシアに気を使わせるのもアレだし、動けないのは黙っておこう。

「・・・アル、ちょっとお邪魔します」

「おい！？」

エリシアが勝手に俺のベッドに侵入し、俺の上に乗っかってきた。

が、俺は動けないので、どかせない。

「・・・やっぱり動けないんですね」

エリシアは申し訳なさそうな顔で俺を見てきた。

「・・・まぁ、明日には治ると思うぞ？」

「嘘です。アルは嘘をつくと魔力が揺らぎます」

「なん・・・だと・・・・!?」

「ごめんなさい、嘘です」

「・・・・」

「冗談はさておき、アル。竜族はその色によって性質と能力が異なります。
知っていますか?」

そう、竜の色は、その個性を表すのだ。ちゃんと意味がある。

「・・・赤が攻撃、緑が防御、黄が毒、青が速度だったか?」

「基本はそうです。では、白や黒の竜はどうなるか、わかりますか?」

「・・・最強?」

「違います。白は創造と再生、黒は破壊と呪いに特化します」

「へぇ～」

「そして、私は白竜です」

「・・・ひょっとして？」

「一応、治癒魔法では治せない、魔力やマナのダメージも治癒できます」

「・・・めちゃくちゃ強くない？」

「体内のマナを調整することで、怪我の治療を促進する方法なので、基本的に自分以外にその効果を適用するのは困難です」

全然わからないのだが。

「・・・つまり？」

「裏技を使えば可能です。でも、アルが気絶してないとできません」

「・・・なにゆえ？」

「恥ず・・・気絶してないと、魔力が勝手に動いて面倒だからです」

「なるほど」

「・・・どうします？」

まぁ、回復してくれるのはすごくありがたい。
受けといたほうがいいだろう。

「じゃあ、お願いするよ」

「わかりました。でも、アル以外にするつもりは無いので、宣伝しないで下さいね？」

「・・・？ああ」
ケガがすごい治るなら便利だと思うんだが。

と、エリシアが何かに気づいた。

「・・・アル、くさいです」

「あ～、試合終わってそのままダウンしたからな・・・

くさいとまずいの？」

「あたりま・・・臭いのは人としてアウトです。お風呂にいってください」

「・・・動けないんだが」

「背に腹は代えられません・・・」

「おい！？」

俺は、エリシアに風呂に連行された・・・

何があったかは語るまい。

で、そのあと魔法で気絶させられた。

第十一話：決着（後書き）

色々おっしゃりたい事はあると思いますが、
アルの対応が甘い理由なんかも、そのうちやります。
あと、エリシア調子のんなとのご意見もいただきましたが、
人間じゃないエリシアに人間の価値基準はあてはまりません。
懐かしい＜グリディア＞を覚えてる方もいらっしゃると思いますが、
アレがドラゴン的な普通です。

展開がつまらないとのご意見もいただきましたが、これが現状の限界です。
見逃してください！

次回『王国の神童』

第十二話：王国の神童

朝だ。
・・・今日は決勝戦か。
俺は、起き上がろうと・・・
何故かエリシアも一緒に寝ていた。

と、エリシアは目を開けて、若干疲れた顔でこちらを見た。

「・・・アル、体調はどうです？」

言われてみると、完全に回復して・・・
というか、前より体調がいいんだが。

「ああ、すごくいいよ。ありがとな」
言いつつ、エリシアの頭を撫でる。
むぅ、髪がサラサラで気持ちいい。

「・・・もともと私のせいですし・・・あと、ちょっとアルのマナをブーストさせました」

「・・・ブースト？」

「体内のマナ量を増やしたので、魔力、治癒力、筋力も上昇しているはずです」

「・・・途方も無く便利な気がするんだが・・・多用しないのはやっぱり訳があるのか？」

「そうですね。（ほんとは私のマナを譲渡しただけですし・・・）」

「そっか。じゃあ、俺はそろそろ行かないと・・・って、着替えてない」

早く着替えないと時間がまずい気がするのだが・・・

「私は疲れたので寝ます」
エリシアはそういって、目を閉じた。
ほんとに寝てるんだろうな・・・？

俺は、風呂場・・・という名の浴槽しかない部屋でわざわざ着替えた。
この世界の人間は大なり小なり魔法は使えるので、お湯はどうとでもなる。

が、問題発生。
・・・俺のいつもの黒いコートが、昨日の試合で消し炭になっていた。
むぅ、けっこう長い付き合いだったんだが・・・

――――コンコン

と、風呂場のドアがノックされた。

「アル？もう着替えましたか？」

「・・・もう寝たんじゃなかったのか？」

「そのつもりだったんですが、大事なことを忘れてました」

「・・・？」

エリシアが扉を開けて入ってきた。
なにやら、黒い布を持っていた。

「・・・なにそれ？」

「・・・弁償です」
エリシアはそれだけ言って去っていった。

と、言うことは・・・

その布を広げると、案の定コートだった。
基本黒だが、よ～く見ると左胸のところに銀で何か刺繍が入ってる。

（・・・ドラゴンかな？）

超ミニマムサイズで銀の竜の刺繍が入っていた。

しかも何か魔法がかかってるっぽい。
巧く隠蔽してあるが、洒落にならない魔力が編みこんである。

（・・・どこで買ったんだよ、こんな高そうなもの）

この軽くて丈夫そうな黒い布地が何で出来てるのか、
知識の無い俺には全く分からないのだが、シルクっぽい肌触り？

というか、やたら精巧な銀の刺繍が高そうな感じをかもし出している。
まぁ、俺にはオシャレのセンスがないのでよく分からないのだが。
なんとなく騎士団の旗印とかになりそうな感じだ。

とりあえず、制服の上に羽織る。
軽かった。
丈もぴったりだし、ちゃんと地味だ。
俺は地味なほうがいいから。
まぁ、多少のアクセントはあったほうがいいと思うが。

で、腰に剣をいつもどおり装備。
武器は装備しないと意味ないよ！

ちょっとベットの方を見ると、エリシアが枕に抱きついて寝てた。
寝てると、いつもより幼く見えるんだよなぁ・・・

俺は、起こさないように、静かに部屋をでて、会場に向かった。

―――――――――――――――――――――

「さぁぁて！個人戦もいよいよ大詰め！決勝戦だぁぁぁぁぁ！」

「「「「「　ワァァァァァァッ！　」」」」」

会場に、三国の魔法学校の生徒たちの歓声が轟き、
俺は、一応身だしなみを再確認。

『ご主人様、頑張ってくださいね♪』

「こんなときでもシルフは緊張しないのか？」

『召還されなければ戦わないですし、傍観者です♪』

「・・・今回は決闘じゃなく、ただの試合だから召還するかもしれないぞ？
それでも緊張しないのか？」

『ワクワクしてますよっ♪』

・・・実は戦闘狂だったりするのか？

「さぁぁて、まずはラルハイト魔法学校より、
銀雷の魔術士、アルネア・フォーラスブルグ！」

俺は、その声とともに、フィールドに出る。
大歓声の会場を見渡す。
応援する仲間たちの姿が見えた。

「対するは、オーランド魔法学校より、
王国の神童、ギニアス・オーランド！」

その声と共に、反対側から現れたのは――――
ケイネスの治療を手伝ってくれた、黒髪の青年だった。

「やぁ、キミが噂のアルネア殿とは」
「そっちこそ噂の神童とは思わなかったよ」
「・・・その呼び方はあまり好きじゃないんだ。ギニアスと呼んでくれないかな？」
「じゃ、俺はアルで頼むよ、ギニアス」
「オーケー、アル。いい勝負をしよう」
ギニアスは爽やかに微笑んだ。
「構え！」
審判の合図で、俺は＜アウロラ＞と＜シルフィード＞を抜いた。
ギニアスは黒い双剣を引き抜く。
その剣の周囲の光が飲み込まれるかのような、圧倒的魔力。
「・・・精霊剣か」
「そうだね。そしてキミの剣も二本とも・・・違う剣を二本使って

いるのか」

「ギニアスのは元から二本だったのか？」

「ああ、ボクが手に入れた時からそうだね」

「――――試合、開始！」

ローラや兄さんに勝つほどとなると、尋常ではない。
最初から全力でいく！

――――魔力、全開！

ギニアスがその剣を振り上げ――――

「唸れ、エレボス！＜三日月！＞」

ギニアスの剣から、黒い三日月形の衝撃波が二つ放たれる――――

――――速い！？

一般的な衝撃波よりも、速く、大きい！

『＜サンダーボルト！＞』

俺の手から、銀の雷が放たれ、黒い三日月と激突する。

――――バシュッ

「――――んな！？」

雷が闇に飲み込まれ、衝撃波が更に大きくなる。

吸収された！？

俺は、咄嗟に＜アウロラ＞と＜シルフィード＞を交差させてガードし――――

――――――――キィィィィン！

＜アウロラ＞と黒い三日月が反発し、三日月は空高く飛んでいった。
・・・いままでに無い感覚だった。

「これで、この攻撃を凌いだのはキミと、キミの学校の銀髪の女の子の二人だね。
はぁ、いままでは防がれたことは無かったのになぁ」

「・・・こんなとんでもない攻撃は初めて見たよ。
まさか術を吸収するとは思わなかった」

『ご主人様、アレは術ではなく、魔力を吸収しています。
＜シルフィード＞を＜アイテール＞に換えてください。
私が身包み剥がされてしまいます♪』

「・・・それは洒落にならないな」

俺は、左手の武器を＜アイテール＞に変更。
光線剣よろしく、魔力の刃が現れる。

それを見て、ギニアスが呆れたように言う。

「一体キミは幾つ精霊剣を持ってるんだい？」

「いや、コレに精霊はいないぞ？ただの謎の剣だ」

「・・・そんな意味不明なギミックがあるのに？」

「え～、男の浪漫だろ？」

「・・・そんなよく分からない武器と戦うボクの気持ちにもなってよ」

まぁ、たしかにこの魔力ブレードを受け止められるのかは、はなはだ疑問だ。

「まぁいいだろ？いくぞギニアス！」

「いいだろう、来い！」

こんどはこちらから行く！

俺は、＜アウロラ＞を大地に突き刺した。

『大地を駆けろ、銀の雷！＜アース・サンダーボルト！＞』

『漆黒の雨よ！＜五月雨！＞』

＜アウロラ＞から銀の雷が放たれ、地面を割りつつ、ギニアスに襲い掛かる。
同時に、ギニアスの双剣から黒い雨のような衝撃波が放たれる。

（――――ノエルのと同じか！？）

エルフであるノエルより、術の発動速度も、術自体の速度も遅いが、こちらには魔力吸収という、やっかい極まりない能力がある。

二つの術は、交錯せず、互いに素通りする。

咄嗟に双剣で迎え撃とうとした俺だが、あることに気づいた。
＜アウロラ＞にも魔力吸収能力があるから、お互いに反発するのは分かる。
だが、＜アイテール＞の刀身の拡張部分は魔力じゃないのか？

もし魔力なら、吸収される・・・！
が、もう余裕がなかった。

俺は、二本の剣に魔力を集めた。

『＜旋風風車！＞』

俺は、風魔法を使って＜アウロラ＞、＜アイテール＞を俺の前で扇風機よろしく
超高速回転させ、傘代わりに――――――！

――――――バチバチバチッ！

「――――――げっ！？」

なんとか黒い雨を凌いだが、＜アイテール＞が、めちゃくちゃバチバチいってた。
慌てて拾うが、刃は拡張したままだ。
どうやら、なんらかのプロテクトがかかっているか、魔力じゃないようだ。
ギニアスもそれに気づいたらしい。
ギニアスは、剣を引っこ抜きつつ、言った。

「はぁ、キミはほんとに色々持ってるね」

どうやら地面に剣を刺して雷を受け止めさせたようだ。

「3つだけだぞ?」

ギニアスは、一瞬、何か悩んだ顔をし、
次の瞬間、その魔力が膨れ上がった。

「・・・仕方ない!なら、コレはどうかな!?
出でよ、地下の暗黒を司りし者よ!その力の一部を此処に!<エレボス!>」

ギニアスの精霊剣が更に輝き、
黒ずくめの鎧を着た、黒髪、黒目の威風堂々たる男が召還された。
その体に濃密な闇を纏い、黒い大剣を持っている。

『フフフッ、我が名はエレボス。貴様の実力、見せてもらおうか』

その男は、心底楽しそうに微笑んだ。

第十二話：王国の神童（後書き）

次回、『暗黒の精霊』
金曜夜八時より配信予定です～

第十三話：暗黒の精霊

「・・・ならコレならどうかな!?
出でよ、地下の暗黒を司りし者よ!その力の一部を此処に!＜エレボス!＞」

ギニアスの精霊剣が更に輝き、
黒ずくめの鎧を着た、黒髪、黒目の威風堂々たる男が召還された。
その体に濃密な闇を纏い、黒い大剣を持っている。

『フフフッ、我が名はエレボス。貴様の実力、見せてもらおうか』

その男は、心底楽しそうに微笑んだ。

俺は、背筋に悪寒が走った。
コイツは危険だ。
強過ぎる。
＜グリディア＞を見たときにも感じた、圧倒的な力。

「シルフ、アイツに勝てるか?」

『無理です。勝機があるとすれば、直接術者を叩く以外にありません』

シルフが真面目に話すなんて・・・
これはかなりやばい。

『フフ、どうした少年、怯えているのか？かかってこないのか？』
エレボスが挑発してくるが、乗るわけにはいかない。
こいつはキレたエリシア並みに危険だ。
仕方ない、使いたくなかったんだが・・・

「いくぞ、シルフ！」

『了解です』

「『＜精霊憑依（ユニゾン）！＞』」

俺の体が一瞬、銀と緑に輝き、魔力が爆発的に増加する。
俺は、＜シルフィード＞に魔力を流し、帯電させる。

『＜サーマルブラスト！＞』

通常より更に激しい光を放ち、＜シルフィード＞が銀の流星と化す。
ついでにその辺の砂鉄も巻き込ませ、一気に放った。

――――――ドギャァァァン！

凄まじい音と共に、一気にギニアスを狙うが、
エレボスが軽く手を振る。

『＜奈落＞』

エレボスの前の空間に暗い穴が現れる。

――――――なんだ！？

『＜マグネティション！＞』

銀の流星群を囮にしつつ、左から回り込もうとしていた俺は、
言いようのない不安を感じ、
超磁力で＜シルフィード＞を引き寄せ、穴を回避させる。

が、一部の砂鉄はそのまま突っ込ませて――――――

――――――バシュッ

すべて飲み込まれ、穴が消えると何も残らなかった。

嘘だろ！？

魔力だけじゃなく、物質も吸収するのか！？

『クックック、貴様、なかなか個性的な攻撃法だな』

エレボスは、そう言って右手を振り上げ、下ろす

『黒雨』

数え切れないほどの黒い弾丸が出現し、凄まじい勢いで放たれた。

――――――嘘だろっ！？

『ご主人様、ここは私が！』

『任せる！』

『風のマナよ！集え！＜ルインズ・ハリケーン！＞』

――――――ドギャァァァン！

銀の竜巻が現れ、黒い雨を向かい撃つ。
洒落にならない衝撃波で、客席前の障壁が一気に歪む。

「障壁の上を開けろ！魔力を外に出すんだ！破裂するぞ！」

学園長が叫ぶのが聞こえた。
俺も、凄まじい衝撃波で、憑依状態なのに立っているのも辛い。
ギニアスは、＜奈落＞で守られている。

『ご主人様、今が好機です。おそらく、＜奈落＞を破るのは無理だと思われてます』

『＜アウロラ＞か？』

『いいえ、＜アイテール＞です』

『・・・なにゆえ？』

『＜アウロラ＞は飲み込まれないとは思いますが、突破は厳しいと思われます。
＜アイテール＞の闇魔力との反発なら、何か起こるかもしれません』

『わかった。いくぞ！』

俺は、＜アイテール＞に魔力を込め、銀に輝き、
シルフがそこにマナを注ぎ込む。

『紺碧の空に瞬け銀光！貫け銀雷！清浄なる大気の輝きによりて、
邪悪を祓え！
＜アイティール・サーマル
ブラスト！＞』

銀の光が、透明な輝きに変わり、凄まじい勢いで＜アイテール＞が放たれた。

――――――――バシュゥゥゥゥン！

――――――ガキィィィン！

『――――――なんだと！？』

エレボスが焦った声をだす。

「・・・やるね」

＜アイテール＞は、＜奈落＞を貫通し、しかし、ギニアスが剣で防ぎ、

＜アイテール＞は空高く舞い上がったが、シルフが風を操作し、俺の手に帰ってくる。

『我が奈落を突き破る？人間とは思えんヤツだな。フハハハッ！』

「はぁ、エレボス、真面目に戦ってくれないかい？」

『いいだろう、人間ごときの相手などつまらんと思ったが、どうしてか愉快だ』

エレボスの魔力が一気に膨れ上がる。

化け物かよ！？
最早、キレたエリシアが可愛く思える。いや、実際可愛いんだが。

『＜黒曜！＞』

エレボスが剣を抜き、凄まじい勢いで振りぬき、
黒く輝く衝撃波が放たれた。

――――速い！？

回避は無理だ！
俺は、二刀で迎え撃つ。

『＜白夜剣！＞』

二刀が白銀の光に包まれ、
両手を思い切り後ろに振り絞り、黒い衝撃波を打ち抜く――――

――――ドギャァァァン！

「――――――ガハッ」

『ご主人様！』

俺は、黒い衝撃波の凄まじい威力を受けきれず、
弾き飛ばされ、そのままフィールド端の壁に叩きつけられた。
叩きつけられた背中のダメージはさほどでもないが、両腕がやられた。

『＜リヴァイブ！＞』

シルフがリヴァイブを発動、一瞬で治癒するが――――――

『・・・遅いぞ！』
エレボスが一気に切り掛かってきた。

『＜冥斬剣！＞』

エレボスの剣が光を飲み込みつつ、振り下ろされる。

『＜サンダーミグラトリィ！＞』

――――――ドガァァァン！

「――――――グハッ」

先ほどまで俺の立っていた地面が大きく抉れていた。

そして俺は――――――

――――――壁に激突していた。

サンダーミグラトリィは制御が難しく、戦闘中やると、どっちに移動するかランダムにならざるを得ない。

しかも、移動速度が雷の速度なので、洒落にならない。

が、あの攻撃を受けるよりマシだと判断した。

位置を確認。

どうやら俺は右斜め前に移動したようだ。

エレボスからの距離と、ギニアスからの距離がほぼ同じ。

俺は、一気にギニアスに接近しようと――――――

『クハハハ！巧く避けたな？これならどうだ？』

『＜黒鬼夜行！＞』

「「「「グガァァァァァ！」」」」

フィールド中に、黒い鬼――――
黒い肌に、大きな角、体長が３メートルほどもあり、額に第三の目があり、
いずれも黒い装備に身を固めている――――
が、総勢２０も現れた。

「――――んな！？」

『ご主人様、来ます！』

エレボスが手を振り下ろした。

『＜黒鬼砲＞放て！』

黒鬼の第三の目から、いっせいにビームが放たれた――――

「・・・目からビーム・・・だと・・・・」

『ご、ご主人様！早く！』

『やべっ！？＜風車！＞』

――――――ドカァァァン！

「・・・痛い」

俺は、なんとか立っていた。

防ぎきれずに、弾き飛ばされた。

意識があるのが奇跡のような気がする。

黒鬼の戦闘力は馬鹿にならない。

今のビームも、それぞれが、全力の＜サンダーボルト＞一発分はある。

『ハハハ！よく耐える人間だ！』

エレボスは愉快そうに笑い、そしてその剣を振り上げた。

『＜黒曜冥斬波！＞』

その剣から、さらに強力な黒い斬撃が放たれた。

・・・やばい、死ぬかもな。

俺は、せめて剣で受けようとして――――――

――――声が、聞こえた。

『魂の盟約を此処に！我が魂は汝と共に！＜自動召霊（オートサモン）――！＞』

――――ガキィィィン！

一瞬、視界が白く染まり、

黒い斬撃を、白いドラゴンが結界で弾き飛ばした。

「――――エ、エリシア？」

『・・・一応召還術なので、反則じゃないですよ？』

「いや、それより・・・」

『・・・』

エリシアも分かってるらしい。黙ってる。

「・・・小さい」

ミニマムサイズでエリシア（ドラゴン形態）が召還された・・・

およそ３０センチ・・・

第十三話：暗黒の精霊（後書き）

次回、『黒き精霊と白き竜』

第十四話：黒き精霊と白き竜

「・・・小さい」

ミニマムサイズでエリシア（ドラゴン形態）が召還された・・・
およそ３０センチ・・・

『色々足りなかったんです・・・』
エリシアはテンション低めだ。

『ドラゴンだと？なんと愉快な人間だ！最強種族と名高いその力、見せてみろ！』
正反対に、エレボスはテンション高い。

『＜無限黒曜！＞』

エレボスが剣を振り回し、視界を覆いつくす黒い斬撃が放たれ――
――

エリシアが白い光に包まれた。

『＜サンクチュアリ！＞』

――――――――キキキキィィィィン！

黒い衝撃波は、まるで弾かれたかのように四方八方へ飛び散る。

『アル、＜光＞属性と＜闇＞は互いに反発するので、簡単に防げます』

「知らなかった・・・」

『＜光＞と＜闇＞は両方とも希少なので、激突する機会がないんです。
私が雑魚とあの精霊を引き付けます。アルは術者を！』

「んな！？それじゃあエリシアが――――」

『アルが早く片付ければ大丈夫です』

「・・・わかった。ケガするなよ？」

『・・・はい』

俺は、ギニアスを倒すべく、魔力を練る。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

アルのマントに仕込んでおいた、召還補助術式で、私は戦いに割って入った。
こうして客観的に見ると、この前の自分の行動を死ぬほど後悔する。
でも、あの黒い精霊への怒りも込み上げてくる。
悪いけど、私自身への怒りも、八つ当たりさせてもらいます・・・！

『我は暗黒の精霊エレボス！我にその力を見せてみろ、ドラゴンよ！』

『私は精霊ごときに名乗るつもりはありません』

『我がただの精霊かどうか、その身に思い知らせてやろう！』
エレボスと黒鬼に、魔力が集う。
エレボスはその剣を振り上げ――――

『＜黒曜冥月波！＞』

その剣から黒い斬撃が放たれるのと同時に、
黒鬼たちが一斉に様々な属性の攻撃を放つ。
たしかに、コレを防ぐのは難しい。

でも――――――

『天と空の境界より出でよ！煌け極光の障壁！＜オーロラフィールド！＞』

――――――ガキィィィン！

私は、習得していたアルの術で防御。
この術は攻撃力がなく、アルがこれを使ったまま私に接近したのでもらっておいた。

この術は、魔力ではなくマナで発動する特殊な術だ。
消費マナが大きいが、この程度の攻撃なら防げる。
それに、肝心の精霊の攻撃は、＜闇＞属性。
このオーロラは＜光＞属性に近い属性のようで、激突する前に方向転換し、壁に当たった。
言うなれば＜極光＞属性だろうか？そのままだけど。

私は、面倒な黒鬼を殲滅すべく、術を発動した。

『殲滅の彗星よ、この地に降り注げ！＜ディザスター・コメット！＞』

私が手を振り下ろし、爆音と共に、天から彗星――――

ただの魔力の塊だけど――――

が、降り注ぐ。

それらは私の感覚とリンクしており、自由自在に動かせる。

事実上のホーミング弾だ。

黒鬼たちはすばらしい反応速度で避けようとしたが、すべて爆散した。

そして、その間にエレボスが私に接近して来た。

予定通り。

エレボスは黒鬼２０体とは比較にもならない強さだけど、

この私は魂の一部でしかない。

死んでしまっても、私自身には何の影響もない。

俺は、エリシアの彗星が落ちるのを横目に、一気にギニアスに接近した。
ギニアスは、双剣で迎え撃つ。

「悪いが、すぐに決めさせてもらう！」

「そう簡単にはやられないよ・・・！」

俺は、速攻で決めるべく、魔力を集めた。

『＜疾風迅雷！＞』

「＜三日月！＞」

――――――キィィィン！

俺は、放たれた三日月を、属性の反発を利用して弾き返し、

更に二刀で追撃する――――

「――――なに！？」

ギニアスが驚く。

まぁ、いきなり自分の術が跳ね返されたら驚くよな。

ギニアスは自分の放った衝撃波を剣で受けるが、

受けきれずに体勢が崩れた。

そこに、俺の＜疾風迅雷＞が入る。

ギニアスはなんとか剣でガードするが――――

「だが、ダメージは受けてもらうぜ！」

「――――ぐあぁぁぁっ！」

俺の雷が流れ込み、一気にギニアスの体力を削る――――！

ギニアスは後ろに跳んで離れるが・・・

まだだっ！

『＜白夜！＞』

俺は、二刀を思い切り後ろに引き絞り、打ち抜く！

二刀は白銀の雷撃を纏い、空気を切り裂いてギニアスを襲う！

「くっ、＜五月雨！＞」

ギニアスの剣から無数の黒い斬撃が無数に放たれるが、
精霊を食い止める、ミニマムなエリシアを待たせるわけにはいかない！
俺は一気に勝負をかけようと、致命傷だけさけて、
攻撃を食らってでも攻撃しようと――――

――――ドギャァァァン！

黒い斬撃は、俺のコートを貫けなかった。
打撃を受けたようなダメージはあったが、それだけだ。

逆に、俺の＜白夜＞は見事に決まり、
ギニアスは剣で防いだが、＜疾風迅雷＞の倍近い電圧に感電している。

「――――試合終了！勝者、アルネア・フォーラスブルグ！」
審判の宣言が響き、
一瞬遅れて、会場を歓声が包んだ。

「おおっと！？遂に決着だぁぁぁっ！勝ったのは、アルネア・フォーラスブルグ！」

俺は、剣を鞘に収め、エリシアを見やった。
エレボスは消えていくところだった。

『・・・くっ、次に戦うときはこうはいかんぞ・・・！』

見事な捨てゼリフだった。
もう戦わな・・・チーム戦あるじゃん！？

と、ギニアスが起き上がった。

「はぁ、負けちゃったか。今度は負けないよ」

「・・・ああ、受けて立つよ」

俺は、ギニアスが差し出した手を握った。

その後、俺は表彰され、賞品として魔法剣＜アルザス＞をもらった。
・・・どうしろと？
まぁ、ぶん投げ用にありがたくもらっておく。

＜アルザス＞の色は銅色。形は片手剣で両刃だ。
長さは若干短め。
材質は多分鋼。

それにしても疲れた・・・
ああそうだ、エリシアにコートと救援のお礼を言わないとな。

まぁでも眠いので、俺は宿屋の自分の部屋に戻り、
ベットに潜り込もうと――――

・・・エリシアがまだ寝てた。

男の部屋で寝こけるとは、
乙女にあるまじき行為だぞエリシア・・・

「お～い、起きろエリシア～！」
肩をゆすりつつ、呼びかける。

「・・・アル？」
エリシアはぼんやりと目を開けた。

「起きろー！俺のベットだぞー！自分の部屋で寝ろー！」

呼びかけるが、エリシアの反応が芳しくない。
あれ、なんかエリシアの顔が青白いんだが・・・

「おい、エリシア！？大丈夫か！？」

「・・・ちょっとマナが欠乏しただけです・・・」

さて、マナっていうのは生命の源になるとても大切なものです。
酸素と同じくらい大事だといえば通じるだろうか？

大丈夫じゃねぇ！？

「おいエリシア！どうやったら回復するんだ！？」

「・・・寝ればよくなりますよ？」

「悪い、好きなだけ寝てくれ」

「はい・・・」

エリシアはそう言って目を閉じた。

「はっ！？俺は何処で寝ればいいんだ！？」

「・・・アル、いっしょに寝ますか？」

・・・え、なにこの展開。
性質の悪いジョーク？
俺の頭がオーバーヒートし、思いついたのは――――

「あ、風呂入ってないや」

「・・・私もです・・・アル、いっしょに入りますか？」

・・・俺はからかわれてるのだと思い当たった。
いいだろう、乗っかってやろう！

「そうだな、入るか」

「・・・はい」

そんなわけで、一緒に風呂に入って、一緒に寝た。
・・・冗談じゃないと気づいた時には引き下がれなかった。

番外話：設定集？（第三章終了時）

相変わらずやりたい放題の番外話なので、
下手な先入観で物語が楽しめないのはいやだ！
という方はスルーをお願いします！
ただ、今回は会話は入ってませんが。
まぁ、おさらいとネタバレと世界設定と作者の自己満足で構成されてます。

まずは登場人物紹介からです。

そんなわけで、能力値をアルファベットで表してみることにしました。
参考程度というか、作者の趣味ですので、見逃してください！

ちなみに、
S＝超強い
A＝とても強い
B＝強い
C＝若干強い
D＝普通
E＝若干弱い
F＝弱い
G＝とても弱い

普通の基準は、三国魔法学校の全生徒の平均です。
よって、みんな基本的に強いです。

アルネア・フォーラスブルグ（１５）

転生前の名前は天城　誠司。
これは考えるのが面倒だったから。
属性は、＜雷＞、＜風＞、＜極光＞。
転生前に色々あったので、強くなりたかった。
でも、自分を責めるのはやめた。
でも、鈍いのはそれとは別なので鈍いまま。
困ってる人は助ける主義。
転生したからか、やたらと身体能力が高い。
剣を４本も持ってる。どうしろと？

装備品

＜アウロラ＞　創造と極光の剣。ミスリル製？魔力吸収能力付。
＜シルフィード＞　風の四大精霊と契約した剣。鋼鉄製。
＜アイテール＞　ミスリル製。実は魔力吸収能力持ち。空気清浄剣。
＜アルザス＞　銅色の片手剣。鋼鉄製
黒いコート　エリシアにもらったコート。実はエリシアのハンドメイド。
　光属性の防御魔法と、召還補助術式等が入っている。
ミスリル糸製。

筋力　Ｓ
体力　Ｓ

魔力　S
学力　A
料理　A
底力　S

エリシア・フォーラスブルグ（１５）

属性は、＜焔＞、＜雷＞、＜極光＞。
寝ぼけると・・・
実は白竜の皇女だったりした。
追放された経緯は不明。
アルの事になると、何をしでかすか分からない。
何回かアルと一緒に寝てるが、特にやましいことはありません。
抱き枕にされたりしてるくらい。
当初の構想にはなく、なんとなく登場したキャラクター。

筋力　S
体力　S
魔力　S
学力　A
料理　S
底力　B

装備品

＜エルディル＞　アルのお母さんの形見の一つだったりする。多分ミスリル製。

シルフの指輪　シルフにもらった指輪。魔法の羽が生やせる。

リリネア・フォーラスブルグ（１５）

一体最後に登場したのはいつだったか・・・
父親の遺伝により、料理が壊滅的。
属性は＜水＞、＜治癒＞。
義理の妹ですが、どうなるかなぁ・・・
きっとアルが寝坊すれば出番はある。
もしくは日常編。

筋力　Ｄ
体力　Ｃ
魔力　Ａ
学力　Ｃ
料理　Ｆ
底力　Ａ

リック兄さん（１７）

もう本名が面倒なのでリック兄さん。
筋肉がすごい。なかなかのイケメン。
だが鈍い。何か呪われてるのか？
精霊剣＜ハマル＞を持っている。
＜炎＞使い。同学年最強と言われる。
父さんと同レベルの料理スキル。要するに食物兵器。
食べ物は粗末にしないようにしましょう。

筋力　S
体力　S
魔力　A
学力　B
料理　G
底力　A

ローラ・フィリスタイン（15）

＜氷＞属性を持つ。
ギニアスに負けたのは、魔法剣＜アストライオス＞しか持っていなかったため。
精霊剣なら勝てた。
本気になると目が金色。
いくつか伏線を張ってあるので、そのうち出番があるはず。
オーロラに何か思うところがある模様。
笑えば、いいと思うよ？

筋力　A
体力　A
魔力　S
学力　S
料理　A
底力　S

フィリア・ラルハイト（15）

皇女様です。おしとやか？
身分を気にしないで気さくに接するアルに惹かれてるかもしれない。
皇国最強と言われる精霊剣＜シリウス＞を持つ。
料理は奇抜。でもまずくはない。
まだまだ本気はこれから。

筋力　C
体力　C
魔力　S
学力　S
料理　D
底力　D

シルフィード

年齢不詳の風の精霊。
常に元気である。
空気も読める便利な精霊。
正直、今まで出てきた精霊の中で一番優秀かもしれない。

筋力　S
体力　S
魔力　S
学力　A
料理　A
底力　A

ジョン（15）

最早懐かしいジョン。＜土＞使い。
出番あるのか？
大人しい性格。平民としてはかなり強い。

筋力　C
体力　D
魔力　B
学力　B
料理　D
底力　E

エリス（15）

＜水＞使い。
書きにくいので出番はあまりないと思う。
十二家の一人。

筋力　D
体力　D
魔力　A
学力　S
料理　A

底力　D

父さん（３６）

最近出てこない父さん。
でもジョンと違って必ずそのうち出る。

筋力　S
体力　S
魔力　S
学力　B
料理　G
底力　S

母さん（３６）

父さんと同じく。
そのうち出ます。

筋力　C
体力　C
魔力　A
学力　A
料理　S
底力　B

ガルシア（１５）

そのうち覚醒して登場する予定。
お楽しみに？

筋力　Ｂ
体力　Ｂ
魔力　Ａ
学力　Ｂ
料理　Ｂ
底力　Ｂ

ケイネス・グノーシア（１８）

エリシアに一目ぼれした。
恋は盲目なるや？
貴公子なんて呼ばれる。強い。
＜炎＞使い。実際、人間としては相当強い。
よし、うざいキャラを出そう。ということでなんとなく書かれたキャラ。

筋力　A
体力　A
魔力　A
学力　A
料理　A
底力　B

ノエル・アルヴェリシア（15）？

凛々しいキャラです。
あんなはずじゃなかった・・・
エルフなので強い。
碧のエルフ族。碧い斬撃は大抵のものを切り裂く。
属性は＜碧＞、該当なしの特殊属性。
エルフを出しておきたかったので、なんとなく登場。

筋力　S
体力　A
魔力　S
学力　S
料理　C
底力　C

ギニアス・オーランド（15）

王国の王子。
苗字が国の名前なのが伏線でした。
なんか神童って強そうですが、基礎能力ならノエルのほうが強い。
闇属性が強過ぎた。

筋力　B
体力　B
魔力　A
学力　A
料理　C
底力　D

色々解説コーナー！

さて、ここまでご覧下さった方はお気づきかもですが、
ギニアスが意外と弱いです。
逆に、ノエルなんかは強いです。
種族の能力差ですかね・・・
まぁ、最後あっけなかったのはそのせいですね。

この作品では、異種族が強いです。
ちなみに、登場しそうな種族は
エルフ、ドワーフ、獣人、妖精、ドラゴン、水人、魔人・・・ｅｔｃ

って感じです。
身体能力の強さとしましては、
ドラゴン≧魔人＞＞＞獣人＞ドワーフ＞エルフ＞水人＞妖精＞人間

魔力の強さは、
ドラゴン≧魔人＞＞エルフ＞妖精＞水人＞＞ドワーフ＞獣人＞人間

って感じです。
基本的に、この世界の人型の異種族は
人型の形態に変身できるほどの力がある魔獣と人間の子孫という設定です。
その中で、獣の魔獣との子どもが獣人という感じです。
まぁ、ドラゴンは基本は人型じゃないので特殊です。
一部の強い個体だけが人型になれます。

人間は弱いです。
ノエルやエリシアの能力のSはただのカンストです。
底が見えたら悲しいですしね？

ちなみに、１００人のジョンがキレたエリシアを止めようとしても、3分で全滅します。
・・・なんて格差社会だ。

ちなみに、戦争をするときは、基本的に人間だけでやります。
ただ、一部の変わり者の異種族は参戦する場合もあります。
獣人の中には、その身体能力を生かして傭兵をやる人も多いです。

種族紹介ｂｙアルのレポート

人間

アイリア大陸・・・この大陸の名前だが、実に４６話ぶりくらいの登場。
において、最も広く領土を持つ種族。
とにかく数が多い。
魔力も少ないとはいえあるので、数の力と連携は馬鹿にできない。
前世の人間と、魔力以外はほぼ変わらないように思う。
この世界の都市における平均寿命は８０くらい。治癒魔法のおかげだ。

ドラゴン

エリシアが過去を殆ど語ろうとしない為、謎だらけの種族。
噂の限りだと、力が全てで、決闘で大体のことを決めるらしい。
最強種族と名高い。
その魔力は底が見えないと言われる。
一番有名なドラゴンは、黒竜＜グリディア＞。
住処は謎で、人間の前には出てこない。
が、ティルグリムの奥地には確実に住んでいる個体がいるはず。
エリシアによると、自然死はほぼしないらしい。

エルフ

人間嫌いで有名な種族。
違う大陸から来たという噂もある。
耳が尖っており、美しいといわれる。
身体能力がドワーフと獣人より下にしてあるが、それは純粋なパワーの違いで、
その瞬発力や柔軟性、豊富なマナによる生命力の高さは凄まじい。
が、人間嫌いなので、深い森の中に隠れ住んでいるらしい。
寿命は不明。ただ、すさまじく長いらしい。

ドワーフ

鉱山大好き！おなじみの背が低くてガッシリの種族。
その単純なパワーは純粋人型の中では最強。
素手で鉄を曲げるとも言われる。
鍛冶屋や鉱石採掘で、かなり人間に馴染んでる種族。
が、頑固親父気質のドワーフが多いので、戦争には参加しないことが多い。
ただ、皇国の重鎮の一人がドワーフだったりする。
つまり、国に愛着を持ったドワーフは戦力になる。
寿命は平均３００歳。

獣人

人間に、それぞれの魔獣の特徴が出た種族。
犬っぽい耳とか、色々。
傭兵としてとても有名。
エルフと互角の物理戦闘能力と、凄まじい自己回復能力を持つ。
ただ、魔力は人間に次いで弱い。それでも人間より強いんだが・・・
悪い話も目立つが、人間ともうまくやっている。
ただ、人によって激しく憎んだり、激しく愛したりで色々大変らしい。
寿命は個体によって全く違う。が、平均１２０歳くらい。

妖精

大人になっても子どもの人間にしか見えない種族。
羽があり、魔力は豊富。
らしいのだが、情報が少ない。
羽も隠せるとの噂もあり、ひょっとすると人間に紛れているかもしれない。
やはり寿命は不明。

水人

水辺に住む種族。
水陸どちらでも生活できるが、水が大好き。
エラとかあるらしく、息継ぎいらず。
人間とは、港で貿易をしてたりもする。
港の人間とは親しいようだ。

平均寿命は２００歳くらいとのこと。

魔人

特に強力な魔獣と人間の間の子ども。らしい。
他の種族との境目は曖昧。
すべての個体が基本的に人型をとり、しかし、魔獣に変身できる。らしい。
特に強力な個体はドラゴンに匹敵する。らしい。
平均寿命は個体によって全く異なる。らしい。

身長比較コーナー！

兄さん＞ケイネス＞学園長＞アル＝ギニアス＝ノエル＞フィリア
フィリア＞ジョン＞ローラ＞シルフ＞リリー＞エリシア

あれ？エリシアちっさ！？
まだ成長期・・・なのか？ドラゴンなのでよく分からん。
そして異彩を放つ学園長。
というか、俺もシルフが意外に小さいのに今気づいた！
よし、数値化してみよう。

アルの目測身長コーナー！

ついでに体重も目測！
体重はアルの目測もとい妄想なので、多分間違ってます。
アルが身長と、筋肉量と、まぁ色々計算しました。

アル　身長１６５ｃｍ　体重５５ｋｇ
エリシア　身長１５１ｃｍ　体重４０ｋｇ
リリー　身長１５４ｃｍ　体重４２ｋｇ
兄さん　身長１８００ｍｍ　体重８００００ｇ

フィリア　身長１６２ｃｍ　体重４９ｋｇ
ローラ　身長１５８ｃｍ　体重４５ｋｇ
ジョン　身長１６１ｃｍ　体重５２ｋｇ
シルフ　身長１５５ｃｍ　体重４４ｋｇ

ノエル　身長１６５ｃｍ　体重５０ｋｇ
学園長　身長１６６ｃｍ　体重５１ｋｇ
ケイネス　身長１７５ｃｍ　体重６５ｋｇ
ギニアス　身長１６５ｃｍ　体重５７ｋｇ

体重は間違ってるだろうから置いておくとして、
エリシアちっさ・・・
でも背の高いエリシアは残念ながら想像できなかった。
でも、シルフはもうちょっと背が高いかと思った・・・
数字にして初めて見えるものがありますね。
エリシアちっさ・・・
徐々に身長伸ばそうかな・・・

とまぁ、こんな感じでしょうか？
まだまだキャラクターは増えますよ～、多分。
これからも多重伏線と、ベタ過ぎて面白くないストーリーで進んでいくつもりです。
これにて第三章も終了です。
第四章はチーム戦編です。

第一話：休息日

朝って、どうして来るんだろうな？
今日は交流戦の休息日だ。
・・・え、休みなら起きればいいじゃないか？
休みなんだから寝ててもいいじゃないか・・・

・・・何故かエリシアを抱き枕にして寝てたが、もう慣れたぞ。驚かない。
というか、付き合ってもないのにコレはどうなんだ？

やっぱり、もっとちゃんとした方がいいな。
・・・ん！？
俺は何をどうやって、ちゃんとするつもりなんだ！？

落ち着け、羊を数えるんだ！

羊が一匹、羊が2匹・・・執事が3匹・・・やべ、変換間違えた。
まぁいいや。

執事が４匹、執事が５匹・・・

どんな感じだ？

「「「「「お坊ちゃま、朝ごはんは何にいたしますか？」」」」」

・・・ないな。
コレはない。

よし、メイドにしてみよう。
メイドといえば・・・

『おかえりなさいませ、ご主人様♪』

シルフじゃん！？

・・・よし、落ち着いた。
俺は、とにもかくにもエリシアを起こさずに離脱しようとしたが、離れない。
仕方ないので起こそう。

「おーい、エリシア～、朝だぞ～！」

エリシアがぼんやり目を開け・・・
「・・・んぅ・・・おはようございま・・・アル！？」
一気に真っ赤になった。

「馬車の時も俺のところで寝てただろうが・・・」

「あのときは同じ馬車にリリーもいました！」

あ～、そういえば二人きりで寝たのは初めてか・・・
エリシアは離脱しようとして、服装が乱れてる事に気づき、慌てて布団を被った。

「・・・アル、昨日の夜って何かしましたっけ・・・？」

「ん？一緒に風呂に入ったくらいだな」

「い、一緒にです！？」
エリシアの顔から湯気が見えそうな気がする。
俺も相当恥ずかしいんだが、なんか覚えてないみたいだし、
エリシアが慌てふためくのを見てたら微笑ましくなってきた。

「というか、覚えてないのか？」

「・・・マナが欠乏すると酔っ払いと同じです・・・」
とのこと。正常な判断ができなくなるらしい。
なるほど、納得。

「そっか、まあ何もなかったから安心していいぞ」

「・・・それはそれで悲しいです」
ものすごく複雑そうな顔のエリシア。

「いや、大丈夫だぞー、エリシアは十分魅力的だぞ～！」
俺はとりあえず励ますことに決定。

「・・・どのあたりがです？」

「ん～、可愛い？」

「ぎ、疑問系です・・・それに、私だって１５歳です！」

「いや、その丁寧語が可愛いかもしれないぞ？」

「私はもう１５ですよ？子ども扱いは止めていただきましょうか」

「お、新しい」

いつかのような、高貴な感じ？

「どっちがいいです？」

「他には？」

俺はちょっと悪乗りしてみることにした。

エリシアは、少し考え――――

「それでは、このような感じでいかがでしょうか。ご主人様？」

「いや、顔は可愛いが、俺にそういう趣味はない！シルフの趣味だっ！」

にっこり笑って小首をかしげるのは可愛い。
だが、ほんとにそんな趣味はないんだぞ!?

「そうですか？いいと思ったんですけど・・・」

「なら俺がお題を出す！本日のお題は『凛々しい』だ！」

そんな訳で、しばらくエリシア的な凛々しい口調で話してもらう。

「あ、そうだエリシア。このコートありがとな。すごくよかったよ！」

「ありがとうございます。貴方にそう言って頂けるのが私の喜びです」

・・・これは、凛々しいのか？謎だ。
まぁいいや。このままいこう。

「よし、ご飯食べに行こう！」

「はい、そういたしましょう」

部屋を出て食堂に行くと、既にたくさん人がいた。

とりあえず、知り合いがいるテーブルか、誰もいないところがいいな。

「アル、あそこにリリーとローラとフィリアがいましたよ」

「あ、ほんとだ。んじゃ、あそこに行くか」

で、俺とエリシアはご飯配ってるとこで受け取って、そこへ向かった。

チーム戦の打ち合わせについても話したほうがいいかもな。

チーム戦は、コロシアムだと狭いということで、
近年から街のすぐ外の草原で結界を張ってやるようになった。

ルールは簡単。チームリーダーを倒すか、降参させるかで勝ち。
殺すのはダメ。以上。

チーム戦に参加するチーム数と、個人戦に参加した人数は同じであり、
よって、試合数とかも同じである。
８人の魔法が一度に交錯する場合もあり、洒落にならないらしい。

まあ、とりあえず飯だ、飯～！

「おはよ～、リリー、ローラ、フィリア」

俺は適当に挨拶しつつ、席に座った。

「おはよう、お兄ちゃん、よく起きれたね」

「・・・おはよう」

「おはようございます」

それぞれ挨拶する三人にエリシアは・・・

「おはようございます。こちらの席、失礼してもよろしいでしょうか？」

いつもより凛々しくははあるんだが、

背が小さいから、子どもが遊んでるみたいにみえるんだよ・・・

「すまん、エリシア。いつも通りで頼む」

「・・・全然ダメでしたか？」

「いや、やっぱりいつもの方が落ち着く」

「・・・そうです？」

そんなこんなで朝ごはんを食べてから話し合いのため、俺の部屋に集合した。

とりあえず、俺が口を開く。

「リリー、何故ここにいる」

チームメンバーじゃないリリーがいた。

「お兄ちゃん、私は暇なんだよ！？いいでしょ、ちょっとくらい！」

「くっ、子どもかよ！」

「まだ子どもだもん！」

「・・・エリシアと真逆だな」

「ア、　アル！？」

俺がうっかり口を滑らせ、エリシアが慌てる。

「ま、まさか、『私はもう子どもじゃないです』とか！？」

リリーもパニックになっている。

「全然違います！」

エリシアが慌てて否定するが――――――

「え、そんな感じじゃなかったか？」

俺が空気を読まずに爆弾投下。

「な、何をしてたんですか・・・」

フィリアも何故かパニック。

「・・・？」
ローラは俺と同じく分からない模様。

そんなこんなで、鎮火に手間取った。
とりあえず、俺とエリシアの間には（今のところ）何もないのを理解してもらった。

で、ようやく作戦会議。
例によって、ブロックとチームメンバーのみ公開されている。

俺たちはAブロック。
メンバーは一応確認すると、
俺、エリシア、ローラ、フィリアだ。
一応、連携技なんかも特訓してある。
あと合同詠唱・・・略して合唱の練習もしてある。

合唱は、協力して詠唱することで威力が上がる。
あと、属性が簡単に混ぜられる。

前に俺が使った、雷の竜巻なんかは＜雷＞＋＜風＞の術だったりするが、
出すのが面倒で、精神力が削られる。
同時に二つの魔力を練るのは難しいのだ。

まぁ、とりあえず一番の強敵は王国のチームだろうか？
メンバーが、ギニアス、ノエル、あと知らないヤツ二人だ。
こっちも他人のことは言えないが、酷い面子だ。
あと、またやっかいな事に、ケイネスがＡブロックだ。狙ってるのか！？
俺は、戦うことになったら、即、ケイネスを袋叩きにする作戦を提案。
「アル・・・！」
なんだか若干うれしそうなエリシア。
「・・・お兄ちゃん、エリーの事なんだかんだ大好きだよね」
「・・・そうですね、私、諦めたほうがいいでしょうか？」
「・・・？」
なんかコソコソ話してる三人は気になるが・・・
まぁいい――――――
「大丈夫だよフィリア！お兄ちゃんは最強の鈍感だから！」
「・・・そうですね！」
「・・・アルは鈍感？」
「おいこら、本人の前で貶めるような発言をするなよ！？」

まったく、なんて酷いやつらだ・・・

「なら、お兄ちゃんのことを異性として好きな女の子が何人いるか当ててみて！」

「おいリリー、それは俺に鈍い男とナルシストのどちらがいいか聞いているのか？」

「・・・えー、分からないの？」

リリーに半目で睨まれた。

・・・なんか悔しい。

「・・・一人？」

「やっぱり鈍いわお兄ちゃん！？というかその一人って誰！？」

お兄ちゃんに気づかせるなんてどんな手を使ったんだという心の声もダダ漏れである。

「そんなの分かる方がおかしいだろ！？」

俺は、必死に反論するが・・・

「お兄ちゃん、それより誰がお兄ちゃんを好きだと思うかの方が大事！」

「そんなことより、何故俺の発言が鈍いことになるのか謎だっ！」

「お兄ちゃん、昔から人助けの旅をよくしてるでしょ？
私は、あれで１００人は惚れさせてると思う！」

「そんな簡単に惚れるか！？」

「女心が分かってないわ、お兄ちゃん！
大体、お兄ちゃんの助け方がいちいちカッコイイのっ！」

「えー、普通だろ？」

ガラの悪い傭兵に絡まれて怯えていた女の子に優しく声をかけつつ、
傭兵を風魔法で吹き飛ばしたりしただけだ。

「そもそも人助けが普通じゃない・・・ってそれより、
お兄ちゃんを好きな人って誰のこと？」

「言えるわけないだろ！？外れてたら最悪だぞ！？」

何故かやたらと食いつくリリーが落ち着くまで、けっこう時間がかかった。
ほんとになんでそんなに気にするんだか・・・

何はともあれ、作戦会議は終了し、各自自由行動となった。

第一話：休息日（後書き）

戦闘の執筆に疲れたので、ちょっと気の向くままに書きます。

第二話：悩んだら動こう

さて、俺は市場に来ていた。
この世界の娯楽といえば買い物さっ！
俺は、色々な店を冷やかしてまわった。

しばらくして、人ごみの中に銀の髪が見えた。
俺は、近づいて声をかけた。

「よっ、なんかいいものあったか？」

「・・・アル？」
ローラが振り向く。ローラは装飾品の店を見ていた。意外だ。
俺が隣に立つと、ローラは再び商品に目を落とした。

「ん、それか？」
ローラの目の先には、シンプルな？金色のヘアピンがあった。
・・・何ゆえ金色？
ローラみたいな髪ならともかく、金髪が多いこの世界的にどうなんだ？
いや、黒とか茶も多いし、緑とかも異種族ならいるが。

「・・・高いわ」
ローラは微妙に渋そうな顔だ。

うん、確かに高い。

安いヘアピンの１０００倍はするな。いや、ヘアピンの相場は知らんが。
およそ２０万円だ。誰が買うんだよ！
無駄に金キラだし！

と、店員が話しかけてきた。
「いや、それはどっかの貴族が売ったんだがな、材料がよく分からないんだよ」

「鉄とかじゃないんですか？」
「そのようなんだが・・・ヘアピンだしな、関係ないだろ？
売れないんだよ。半額でいいから買わないかい？」

店員も困ってるようだ。
ローラも財布を出してお金を数えてるが、足りるか微妙と見た。

まぁ、ローラが装飾品に興味を持つなんて意外だし――――

「よし、俺が買うよ」
俺も一応貴族なので、お金には余裕がある。
半額なら、まあいいだろう。
いや、正直高すぎると思うが・・・・

「――――ありがとう」

まぁいいや。ローラの綺麗な笑顔が見られたからよしとしよう。
というか、何が琴線に触れたんだ？
買ってすぐに髪につけている。

「・・・似合う？」

「ああ、可愛いよ」

そういうと、ローラはまた嬉しそうに笑った。

・・・いつも無表情なローラが笑うと凄まじい破壊力だな。

その後、俺はご機嫌のローラと分かれ、買い物続行。

エリシアにコートのお返しをせねば。

弁償だって言ってたが、

昨日の夜にマナ欠乏中のエリシアが言ってたが、なんと手作りらしい。

日本人としてはお返しをせねば。

魔法で作ったらしいが、それでも大変だ。

そうだ、俺も何か作るか。

魔法なら大抵のものは作れる。

と思ったが、鍛え抜かれた俺の厄介事センサーが発動。

まぁ、魔力の乱れを感知しただけだが。

とりあえず急行すると、フィリアが男3人に絡まれていた。

「いいじゃねぇか、俺たちとイイコトしようぜ～！」

「黙りなさい。今ならまだ見逃します」

「はっはー！威勢のいい嬢ちゃんだ！俺たちは名の通った傭兵だぜ？
＜スレイドギア＞って聞いたことねぇのか？」

＜スレイドギア＞は戦争で名を上げた傭兵チームの名だ。
・・・それじゃあ権力で押さえつけて恨まれると面倒だな。
名前は出さないで介入するか。
まぁ、どうせ下っ端だろうが、リーダーがどんな性格か分からない。

俺は、魔力を無駄に放って威嚇しつつ割って入った。

「この人は私の連れです、失礼しました。・・・行こう」
俺は、フィリアの手を引いてそのまま行こうとしたが、
3人傭兵のなかで一番デカイヤツに肩を掴まれた。

「おいガキ、邪魔すんじゃねぇよ」

ちっ、面倒な。魔力で実力差も感じ取れないのかよ。
デカイのが、俺の肩を握りつぶさんばかりに力を込めてきた。
が、俺にそんなものは効かない。
涼しい顔で笑ってやる。

「そっちこそ邪魔するなよ。ちゃんと謝ってるだろ？」

「テ、テメェ・・・！？」

俺は魔力を解放。

俺の瞳が妖しく銀に煌く。
前に気づいたが、コレって威嚇でやるとなかなか不気味だ。
ついでに、膨大な魔力は殺気のような感じを相手に与える。
怯える傭兵を尻目に、俺はフィリアを連れてその場を離れた。

「フィリア、大丈夫か？」

俺がそう聞くと、フィリアは少し楽しそうに笑った。

「助けてくれて、ありがとうございます。
確かにコレは惚れてしまうかもしれませんね」

「おお、俺カッコ良かった？」

「はい、もっと好きになってしまいました」
フィリアはそう言って、俺の頬にキスをした。

「――――んな！？」

「私も、アルの事、好きですよ。
アルはどうせ気づいてなかったでしょうし、返事は待ってあげます」

フィリアはそのまま逃げるように去ってしまった。

・・・え、なにこれ？
ドッキリ？

俺は、しばらく硬直していたが、
フィリアがいなくなったので、なんとか思考再開。

急展開すぎないか？
俺は正直ついていけないんだが・・・・

しかも、もっと好きにってことは前から？
特に用も無いし、クラス違うのにいつもいるなー。
とか思ってたんだが・・・
ひょっとして俺に会いに来てた？

・・・俺、鈍いのか・・・！？

というか待てよ・・・昨日の夜から振り返ってみよう。

昨日の夜、エリシアと風呂に入って、
（ただ、俺は必要以上に風呂場に湯気を出しといたので、お互いに何も見えてない）
一緒に寝た。
（ただし、何もしてないぞ！抱き枕にしただけだ！）

で、今日はローラに装飾品をプレゼントし、
フィリアを助けて頬にキスされた。

・・・俺って人としてかなり駄目じゃないか！？

女誑し？尻軽男？人間失格？というかヘタレ？

このままじゃ駄目だ！
ちゃんと誰が好きなのか考えないと・・・

・・・

・・・

・・・

駄目だ。さっぱり分からん。
恋って、なんだろう？

こんな時は・・・何か作業で気分を変えよう！
よし！エリシアにお返し作るぞー！

何がいいだろうか？

候補は、剣、服、盾、装飾かな・・・
よし、剣にしよう。ハンドメイドで。

まずは鉱石だな。
適当に山に出かけて魔法で掘るかっ！

なんだかよく分からないテンションの俺は、そのまま出かけた。

「我が体は雷！風よりも速く天を翔ける！＜サンダーミグラトリィ！＞」

共和国の首都、ディグリスの北東にずっと行くと、ティルグリム山脈がある。
ドラゴンが住んでると思われるだけあって、魔力が濃い。
よって、ミスリル等の魔法鉱石が出やすい。
魔獣も多いが。

十分ほどで到着した。

山の中でも岩盤が露出している場所・・・谷を選んだ。
なんか魔力が微妙に漏れてる気がするし。
俺の後ろは切り立った崖になっており、岩がゴロゴロしている。
にしてもでかい山脈だ。
ヒマラヤ山脈くらいありそうだ。いや、見たことないけど。

さて、どうやって掘るか。

あんまり音を出すと周囲の魔獣を刺激するし・・・
よし、決めた。

俺は、＜アウロラ＞を引き抜き、魔力を通す。
シルフの力を借りた方が楽だが、プレゼントだしな。

『切り裂け！＜疾風剣！＞』

――――――ガキィィィン！

谷間に轟音が響いた。
若干岩が欠けたが、それだけだった。
どうやら、ただの岩すら硬いらしい。

「・・・俺の邪魔をするのか？なら、押し通る！」

俺は、よく分からないテンションだったので、岩をなんとしても突き破ることに決定。

『食らえ！＜白夜！＞』

俺は、左手で＜アイテール＞を引き抜きつつ、

魔力を込め、二刀が白銀に輝く。

「どりゃぁぁぁっ！」

俺は、両手を大きく後ろ引き絞り、放った。

――――――ドギャァァァン！

岩盤が激震し、３０センチほど削れた。

が、それだけだ。

・・・なんか悔しいんだが。

――――魔力、全開！

『＜極夜！＞』

「うおぉぉぉぉぉっ！」

俺の両手が目にもとまらぬ速度で閃き、空中に銀の軌跡が煌く。

――――――ギャギャギャギャキィィィィン！

一息に１４回斬り付け、再び岩盤が激震する。

が、３０センチほどしか削れない。

・・・こっちのほうが疲れるな。

よし、コスト低めで・・・

『＜疾風迅雷！＞』

俺は、二刀を左後ろに合わせて持ち、力を溜めて一気に放つ――――！

――――――ドギャァァァン！

今度は２０センチしか削れなかった。

＜白夜＞が一番いいのか？

いや、最強技で岩盤崩し。ロマンじゃないか？
全力でいこう。

『我が魔法銀の剣よ！銀雷によりその身を弾丸と化せ！＜銀雷纏い（アウロラ・サーマルブラスト）し四源の雷砲！＞』

――――――バギャアアアアアン！

――――――ドガァァァン！

「・・・なんじゃこりゃ」

＜アウロラ＞は見事に貫通し、その向こうに洞窟が見えた。
その洞窟は、濃密な魔力が立ち込めていた。

第三話：己を写す水晶

さて、洞窟を見つけて、自分以外に周囲に人がいなかったら、どうすべきだろう？

もちろん、探検さっ！

俺は、＜アウロラ＞を拾ってから、洞窟の奥・・・
どっちが奥だ？
なんか通路の壁を突き破ったようだ。
右か左に行ける。
通路は天井の高さ2メートルほど。
幅は3メートルほどだろうか？
壁が魔力を纏った石でできてるらしく、薄く光っている。

ちょっと気になって調べたが、脆かった。
むぅ、光る剣とかいいと思ったんだが。

一応、背負って来ていたリュックに少し入れておく。

え～と、左から魔力が流れてきてるな。
・・・魔法鉱床は魔力を出すって本で読んだが、
もしかすると魔獣の可能性もあるんだよな。

＜キメラワーム＞とか出たらやだなぁ・・・

＜キメラワーム＞はＳ級モンスターで、小さくても１００メートル以上の巨体。
好戦的で、いきなり地面の下から襲ってくるとのこと。
しかも、魔力装甲はビッグボアの比ではないらしい。

鉱山などによく生息し、出現すると鉱山は即閉鎖されるらしい。
もしかすると、この洞窟もそういう類かもしれないと思った。

歩き続けて３０分ほど経っただろうか？
大きな広間のような場所に出た。

・・・俺の想像は大きく裏切られた。

『貴様、何故我が眠りを妨げるか・・・！』

洞窟に、年を取り、しかし凄まじい威厳を感じさせる魔声が轟いた。

広間には、巨大なドラゴンがうずくまっていたのだ。

ドラゴンの色は深紅。

大きい。少なくとも全長５０メートル以上ありそうだ。

「・・・申し訳ない。探し物をしていたら迷い込んでしまったのです」

怒らせるべきではない。

俺はとにかく謝罪の意を表し、頭を下げた。

『・・・何を探していたのだ？』

「この貰ったコートに助けられたので、これに見合うだけの剣でも作り、

お礼に贈ろうかと思い、剣の材料を探してました」

『コートだと？たかがそれだけのために、

この＜ディグリス＞の眠りを妨げたと？

それだけのために我が聖域に足を踏み入れたと？』

ドラゴンの体から、魔力が溢れ出し、一気に空気が張り詰める。

確実に怒っている。だが、それはこちらとて同じこと。

「・・・たかがそれだけだと？コイツはただのコートじゃない。訂正してもらおうか」

俺は、魔力を開放し、＜アウロラ＞と＜アイテール＞を抜いた。

ドラゴンのすさまじいプレッシャーを押し返し、銀の瞳で睨み返す。

『・・・銀の瞳だと？面白い。どのようなコートだか興味がわいたぞ・・・！』

＜ディグリス＞が魔力を放つと、それに反応して周囲の鉱石が輝き、広間が明るい光に包まれた。

『――――――馬鹿な！？』

「なんじゃこりゃ！？」

ディグリスと俺は、思わず驚きの声を上げた。
竜の刺繍がある以外無地だった俺の黒いコートは、
一面、銀の幾何学模様に包まれ、竜の刺繍も銀に煌いていた。

正直、洒落にならない魔力量だ。
サーマルブラストでも一撃では貫けない気がする。

『――――封魂術式に月竜の紋章だと！？貴様、どこでそれを手に入れた！？』

・・・ディグリスの慌てぶりは半端じゃない。
素直に答えたほうがいい気もするが、エリシアは追放された身である。
どうすべきか・・・
俺は一瞬考え、言った。

「・・・名も無き竜から貰った」

昨日、エリシアに、なぜ最初に会ったときに名前が無いと言ったのか聞き、
竜族では、追放の際に名前を剥奪されると聞いた。

だが、決闘を挑む際には名前を名乗らなくてはならない。
仕方ないので、さっくり規則を破ったらしい。
確か本名は・・・エルシフィアだっけな?奇遇にもエリシアに似てる。

まぁ、これならエリシアだと特定できまいと思ったのだが――――

『――――まさか、エルシフィア様か!?』

・・・速攻バレた。

「・・・まぁ、そうだけど」
仕方ないので、俺は開き直ることにした。
様付けだし、意外と平気かもしれん。

『・・・エルシフィア様はグリディアのヤツに殺されてしまったと聞いたが？』

「・・・俺が助けたけど？」

『・・・確かにその紋章はエルシフィア様のものだが・・・お前は人間か？』

あ、貴様からお前にクラスアップ？した。

「・・・そうだが？」

『・・・人間とは思えん奇妙な魔力だが・・・
なるほど、確かにそのコートの返礼ならば普通の品物では釣り合うまい。
失礼なことを言ったな。すまぬ』

・・・急に謝られると怖いんだが。

「いや、こちらこそ眠りを妨げて申し訳ない」

『・・・我としたことが、エルシフィア様の魔力に気づかず、
侮辱するような言葉を吐いてしまうとは・・・』

「・・・あの子と、どういう関係だったんですか？」

俺は、その言葉に様々な思いを感じ、思わず聞いていた。

『我は、エルシフィア様のご両親に仕えておった。
エルフィア様が追放され、お二人がお亡くなりになる日までな。
我にとっては、孫のような存在であった』

「・・・何故、追放されたんです？」

『・・・グリディアのヤツが竜族をその力で牛耳っておるのは知っているか？』

「・・・予想はしていましたが、詳しいことは知りません」

『エルシフィア様は、始祖竜様の力を引き継いで生まれ、
成長すれば間違いなく竜族最強であった。

だが、グリディアはそれをよしとせず、エルシフィア様を自分のものにしようと考えた』

『しかし、エルシフィア様とご両親はそれを拒否し、
グリディアはエルシフィア様の追放を賭けてご両親に決闘を挑んだ。
エルシフィア様はまだ決闘が受けられる年齢ではなかったのでな』

『竜同士の決闘以外の殺し合いはご法度だが、追放された竜は別だ。
・・・自分のものにならないのなら、殺してしまおうと考えたのだ』

『結果、お二人は殺され、エルシフィア様は行方知れず。
この件でグリディアに逆らおうとする者はいなくなってしまった。
私も含めてな』

予想通りといえばそうだが、実際に聞くと何とも言えない気分になった。

『我はエルシフィア様に会うわけにはいかぬが、
エルシフィア様をよろしく頼む・・・』

「・・・ああ」
きっと、追放された竜には会えないという掟があるのだろう。

竜は掟と盟約を至高とする。破るわけにはいかないのだ。

『そうか、ならば右奥の部屋に保存してあるルーンクリスタルを持っていけ。
そのコートがあれば蓋が開くだろう』

「・・・ルーンクリスタル？」

『・・・知らんのか？竜族においてもっとも尊い宝石であり、絶対に壊れることはない。希少すぎるために、皇族の儀式にくらいしか使われんが』

「なるほど・・・でもそれって加工できないんじゃ？」

『初めて魔力を流された時に、その者の想像によって武器が創造される。
同じものを二本作って片方を相手に贈るのだ』

「なるほど、もう片方は？」

『・・・自分で使え』

「ほう、何でですか？」

『貴様、馬鹿か？』

「なんで！？」

竜のお爺さんにまで馬鹿にされた！？

『我は、エルシフィア様をよろしく頼むといったのだが？』

「え、はい。頼まれました」

『・・・そのコートの紋様と刺繍の意味は知っておるか？』

「知らないです」

『はぁ、先が思いやられるな・・・エルシフィア様の手を握ったことはあるか？』

「え！？まぁ、ありますが・・・」

『・・・そうか、ならいい。クリスタルを取ってこい』

「・・・？」

俺は、わけが分からないまま、右奥に歩いて行き、通路を少し歩くと、扉があった。

とてつもなく頑丈そうだが、ディグリスの魔力が閃き、勝手に開いた。

中はかなり広い部屋だった。体育館のようだ。

そこには、いくつもとてつもなく頑丈そうな箱がおいてあった。

箱は一つ一つが大きく、棺桶のようだ。

が、ほぼすべて空だ。

一番奥の、一番端に唯一蓋の閉まった箱があった。

その蓋には、古代語で『エルシフィア』と刻んであった。

・・・もともとエリシア用？

ディグリスから離れてから、黒い無地に戻っていたコートが一瞬煌き、蓋が勝手に開いた。

「・・・なにこの超技術」

正直、科学技術よりすごそうなんだが・・・

箱の中には、でかい水晶がふたつ入っていた。

・・・これがただの水晶でも凄まじい値がつきそうだ。

が、持ち上げると軽い。

見た目、数十キロはありそうなんだが。

と、どうするべきか悩んでいると、魔声が聞こえた。

『聞こえるか？少年よ』

お、少年にまでクラスアップ！

『はい。今蓋が開いたところです』

『そうか、ではどのような武器にするかは決まったか？』

『なんとなくは』

『そうか。お前の心に応じた形になるが、何も考えなかった場合、我が知る最悪の事例では、針になったり棍棒になったりしている。それが最後のクリスタルだ。気をつけろよ』

それは酷いな・・・針って、どうやって戦うんだよ。

『了解です』

『では、頑張れよ』

俺は、二つの水晶に手を置き、渾身の魔力を流し込んだ。

――――――リィィィィン

鈴が鳴るような音が響き、銀の閃光が閃いた。

現れたのは、銀の刀だった。
白銀色で、半透明だ。
手にジャストフィットし、魔力の伝導率が異様に良い。

二本のうち一本は、若干握りが小さい。
こっちがエリシア用ってことなのか？
だから手を握ったことがあるか聞かれたのだろうか。

あと、鞘もあり、こちらは白色で、半透明ではなかった。

・・・どんな便利水晶だよ。

魔力で俺の望んだ姿になってるということか？

なにはともあれ、俺はディグリスのところに戻った。

「ありがとうございました。無事に完成しました」

俺は、ディグリスに頭を下げた。

なんだかんだでけっこう助けてもらったし。

『もともとソレはエルシフィア様のための物だ。気にするな。迷惑をかけたな。

・・・エルシフィア様に、幸せになってくれと伝えてくれないか？』

「分かりました」

『それと、勝手に銘がつくはずだが、何となっている？』

「・・・＜天照（アマテラス）＞」

二本の刀の銘は、両方とも＜天照＞だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2846y/

銀雷の魔術師

2011年11月27日01時48分発行